
仮面の環 ring of masked rider

馬耳東風

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

仮面の環 ring of masked rider

【Nコード】

N5724V

【作者名】

馬耳東風

【あらすじ】

すべての仮面ライダーは現実中存在し、現実が虚構に侵食される。

今、新たに誕生する究極の仮面ライダー。幾多の魂との出会い、社会の裏側に息づく悪、崩壊寸前の現実の箍。ライダー達は、今もこの社会の隙間で戦い続ける。そして新たに戦いに身を投じる戦士達。宇宙より撒かれた未来の可能性への種子。その名はメテオ、そして彼の意志を受け継ぐスターシード、ミーティア。

*仮面ライダーフォーゼに登場する「仮面ライダーメテオ」とは一切関係なく、彼の二次でもありません。掲載日を見てもこちらの方が先なのと、名前を変えるとすべてのストーリーが破たんしかねないので、訂正はしませんので、どうかお間違えのないように……。

ブローグ

建物や農地など、人の気配が全くない、どこかの採石場の様な所に、謎の黒づくめの集団がひっそりと動き回っている。集団で移動していったもの、その場で何かの機械をいじっている者、そして、一人だけ強い存在感を放つ、頭に白いものが混じり始めた壮年の男が、光沢を消した仕上りの無線機を携えて、耳にあてて聞き耳を立てていた。

「部長、準備完了しました」

無線通信機に、緊張感漂う声が流れる。その声を聞いた男は、表情変えることなく無線機に指示を送る。

「わかった。全員すぐに撤退しろ。2分だ、それ以上は待てん」

「了解」

通信が終わると、無線機はその無音になった。部長と呼ばれた男は、黒づくめの格好に身を包み、同じような服装している人間たちの輪に入っていた。そこでは様々な機材が並び、いくつかのモニターには映像が映し出されていた。機材を調整する人間達は、無言で手だけを動かし、全く止まることなく動き続ける。部長は、その真ん中にある椅子にどっかりと座って陣取ると、モニターを注視し続ける。

「部長、脱出が始まりました」

「見ればわかる。残り時間はどれくらいだ」

「30秒切りました。時間どおりです」

「まったく。我々は、予算も時間も、いつもギリギリしか与えられないな。起爆スイッチを」

オペレートしている一人が部長に小さな機械を渡した。それを受け取り、部長は胸ポケットから鍵を取り出すと、機械の下部に差し込んでまわした。機械に明かりが灯り、鍵を差し込んだ側と反対の部分にボタンが露出された。その上に親指を置き、じっと時を待つ。

「カウントダウン、入ります。10、9、8、……」

部長はこういう場合は慣れているかのように、緊張して息を張り詰めることもなくモニターをただ凝視している。

「4、3、2、1、」

「0」

最後のカウントを部長も一緒に数えると同時に、手元のスイッチが押された。爆風が吹いたり、爆音が上がる様なことはなく、足元に微弱な振動が感じられた程度だった。爆破は、地下の奥深いところで行われたらしい。

「爆破自体はうまくいったな。暗視カメラや赤外線カメラの方はどうだ」

「変化なし。完全に殲滅に成功した模様」

「フン、そうだろうな。衰退した秘密結社が、わびしい出資金で集まったに過ぎない組織の基地だ。これで制圧できなければ、税金泥棒になるぞ。さあ、次は後始末だ。とりかかれ」

「了解」

先程、破壊工作を終えて脱出して来たばかりの舞台が、命令に従って再び破壊した地下に存在する施設に向かっていく。部長は、再びモニター前をにらみながら、状況を把握できる体制にあった。待機組が本格的に作業に入るのはこの後だ。それまでの間、少しだけリラックスできる時間になる。そんな空気が手伝ったのか、一際若い作業員が部長に話しかけてきた。

「あの、部長。今、よろしいですか」

「構わないが、動かすのは口だけにしとけ。目や耳は仕事に集中しているなら、話していい」

「わかりました。あの、今度の作戦は第二段階までであるということ、私も目を通したのですが。最後の項目は本当でしょうか」

「ガセではない。このネタは、然るべきルートから流され、裏を取っている。今夜の爆破にかかるまで費やした予算や時間は、それだけの価値を示している」

「それはわかります。ですが、本当にあの中にあれがいるんでしょうか」

あれという言葉に、部長の口元が少し変化した。普段、部下に対して見せることのない類の笑みがこぼれた、そんな風に思える口の緩みだった。

「いるさ。だから、今回は俺も現場に出てきた。老いぼれが現場で仕切るとろくなことがないのはわかってはいるが、今回だけはこの目で現場を見ておきたい」

「部長の経歴なら当然です。自分も少し興奮しています。私は、彼らとはまだ接触したことはありません。ここに転属されて間もない

もので。この部署のファイルを見て初めて、その存在を知ったんです」

「そうか、そうだろうな。そうなる様に、色々手を打ってきた。そして、戦ってきた」

どこか、遠くを見るような眼でもモニター見続ける部長の表情は、作戦途中なのに不思議と穏やかだ。その時、無線機に連絡が入り、部長は無線機を取ると、報告を待った。

「どうした」

「部長、情報通りです。例のものを発見しました。直ちに回収作業に入ります」

部長の目は大きく見開き、口調も興奮があらわになり、それでも努めて冷静に、

「迅速にやれ。後始末は徹底的にな」

と、付け加えた。それでも感情は抑えられないのか、イスから立ち上がるとその辺りを行ったり来たりしていた。若い作業員はそんな部長の見て、事が大きく動き出しているのを知った。

「遂に発見したんですね、あれを。あと少しで会えるのか、興奮してきたな」

部長は、その様子を見ると、自分も同じだと言わんばかりに声を張り上げて言った。

「ああそうだ。もうすぐ会えるぞ。いよいよ、ご対面の時だ。新たな仮面ライダーとのな」

起動？

内部に突入した部隊は、地下十階に当たる部分で目当てのものを探していた。慎重に時間をかけ、最適の場所に爆弾を仕掛け始めたのは約一カ月前。それだけの長い時間をかけないと、敵に破壊工作が悟られる恐れがあった。その恐れを部長が何よりも避けたがり、これだけの大作戦になったのだった。衰退した秘密組織ゆえ、警戒は甘く、破壊工作は順調に進み、爆破は成功した。

しかし、いつもならこれで任務は終了なのだが、今回はここからが主題であった。何しろ、この施設に仮面ライダーがいると言うのだ。隊員たちは、その意味を考えうると身震いするほどの高揚感を抱いていた。もうすぐ、あの幻の存在に会えるのだ。

その中で一人落ち着いて行動する隊長は、バイザーに展開される施設の構造を確認しながら、ある個所に部隊を導いていた。映像には一カ所赤色で点滅する個所があり、歩を進めることにその個所が近づいてきて、とうとう部隊は目的に到着した。目の前には、爆破のショックで半ば崩れかかりなら、ひしゃげた形で残っていたドアがあった。目指すべきものはあの先にある、隊長は部下に、

「あのドアを吹き飛ばすぞ。すでに施設は崩れかかっている。慎重に爆薬を調整しろ。直ちにかかれ」

と、命令した。数人の隊員は、無言で作業に取り掛かり、迅速にドアの数カ所に低容量のプラスチックの爆弾を仕掛けていった。少しだけ衝撃を与えれば容易に開きそうなのと、それ以上の衝撃は自分たちを生き埋めにしかねないからだ。セッティング終わり、ドアから離れ起爆の態勢に入る。

「いけ」

隊長の言葉に従い、隊員が起爆スイッチを押すと、小さな衝撃が

伝わり、ドアが抵抗をなく開きかかった。すぐさま、ドアをこじ開けに数人がとりかかり、残りの隊員達は生き残った敵に備えて銃を構える。そしてドアがこじ開けられると、部屋の中は無人で赤い非常灯が灯っていた。警戒を怠ることなく部屋に入る彼らの目に、非常灯とは違う光が灯った大きなカプセル状の機材が飛び込んできた。二名が入り口を固めると、彼らはの機材を囲んだ。機材の上部はガラス張りだったが、中の温度が低いのか水滴が付着して曇っている。隊長はわずかに緊張した面持ちで、手でその曇りをぬぐった。カプセルの中身があらわになり、隊員たちの間にもざわめきが起こった。

「原隊長、彼で間違いないんですね」

「そうだ。彼が仮面ライダーだ」

原隊長をはじめとする一同が見つめるカプセルの中には、何かの液体の中に浸されている、屈強な体つきの若者だった。呼吸用にマスクを少着させられ、手足や胸部には電極を接続されている。その測定値がモニターに映し出されているが、どうやら安定した様子のようにだ。

「容器は安定しているな。溶液を排水して彼をカプセルから出せ。部長には、標的を発見、脱出に移ると伝える。彼に関する資料や機材は、どんどん運び出せ。残りの者は、施設内に爆薬を設置して消去にかかるぞ」

「了解」

全員が一斉に作業に取り掛かる。もつとも手間がかかる爆破作業は、原も加わって迅速に行われていく。確実にこの施設の痕跡を地中に埋めるために、TNT火薬を使って徹底的に施設を破壊するのだ。カプセルからは中の溶液が排水され、男に簡易の服としてジャケットを簡単に着せ、施設から連れ出す準備が整う。爆破準備も終

わり、彼らは合流すると脱出を開始した。しかし、半壊した価値説を歩き回り、その上気を失っている男一人も運ぶとなると、この仕事も難儀なものとなる。急ぎつつも足が進まない一団。その時、彼らの耳に大きな物音が聞こえてきた。ここより下層部からだ。

「隊長、まさか誰か下に」

「まずいな。爆弾の誤爆にしては音が小さい。奴らの生き残りか。この男がまだ使い物にならない以上、戦闘は避けなければならん。急ぐぞ。部長、アクシデントです。恐らく奴らです。入口の守りを固めて下さい。こちらなんとか彼を外に出すことを最優先に急ぎます」

外で待機する部長に連絡を入れると、原隊長並びに以下のメンバーは、さらにペースを上げて外を目指す。地下からの音は次第に大きくなり、自分達に接近してくるのがわかる。あの爆破に耐え、半壊した建物中をこのペースで来るとなると、敵は人ではなくモンスターである可能性が高い。メンバー全員には敵に関する知識は、そう言った想像を容易にさせる。隊長も、最悪自分たちを追う者に追い付かれることを覚悟し始めたようだ。

「みんな、安全装置は外してあるな。緒方、お前は彼を連れて出口を目指せ」

「隊長、まさか」

「このままだと、まず間違いなく追いつかれる。だが、彼さえ外に出せば俺達の勝ちだ。先行する資材を持ちだした奴らと一緒にここを脱出しろ。命令だ。後の判断は、部長に任せる」

「わかりました。でも、出口で隊長達をみんな待ってますよ」

緒方隊員は、背中に男一人を背負いながら、ハイペースで走り始めた。とにかく、仮面ライダーさえ自分たちの手で外に出せれば、この作戦は成功を修める、隊長達はそう固く信じて、後方に銃を構えながらじりじりと交代を続け、出口を目指す。もしもの覚悟はあってもそれを前提に行動はしない。生き残りへの渴望が力になることもある。

次第に近づく音は、振動も加わってどんどん大きくなり、原達に近づいて来る。きた、と思った瞬間、床を突き破って巨大な影が姿を現した。大きな頭部と腹部を備え、そこから八本の長い足を備えたそれは、ゆうに体長5メートル近い蜘蛛だった。蜘蛛は、原達を補足するとじりじりと近寄ってくる。

「でかいな。恐らく施設内の番犬用の素体だろう。知性はないが、手加減はしてくれないぞ」

「やりますか、隊長」

「これだと、まったく勝ち目がないな。かといって、あっさり通せば緒方に追い付く。やられないようにしながら、奴の足止めをするしかない」

「じゃあ、始めますか。生き延びられる様に頑張りましょう」

「ああ。撃てっ」

地下施設内で、謎の武装集団と巨大な蜘蛛という、不可思議な構図の戦いが始まった。

地上では、施設への入口の前で厳重な警備が敷かれ、部長もそこ

まで出てきていた。かすかにだが銃声が聞こえ、地下で戦闘が始まったことがその場にいる者たちにも察することができる。

「原、何とか出てこい。お前たちでは、怪物は倒せん。それなら、奴を生き埋めにするしかない。成果がない戦いに命をかけるな」

部長の言う通りであった。命をかけて成果が得られるなら苦渋の決断をする覚悟は彼にはある。だが、現状では恐らく怪物を倒すのは不可能だ。そんな戦いに命をかけることなど馬鹿げていると判断する合理性は彼にはあるし、部下の生還を常に望んでいる。それだけに、何とか原達が合理性ある判断をしてくれることを強く望んでいた。

部長が歯ぎしりしながら入口で待っていると、人影が見えてきた。資材を先に運び出してきた隊員たちだ。さすがに量が多かったか、皆疲労困憊しているが、かなりの収穫だった。運び出された資材を待ち受けていた他のものがすぐにトラックに運び込んでいく。その様子を見ながら、部長は待ち望むものを待ち続けている。

「うわあああ」

大きな悲鳴をあげながら、緒方隊員が文字通り吹き飛ばされた様に飛び出してきた。辺りは騒然となり、緒方の元に駆けつける。部長が、倒れている緒方を抱き起こすと、何があったの説明する様に質問を浴びせた。

「緒方、どうした。何があった」

「それが、突然彼が目を覚まして、俺を吹き飛ばしていった」

「何、覚醒しただと。まさか。それで彼はどこに」

「下層部に向かいました。尋常じゃないですよ、あの様子は。隊長達、大丈夫でしょうか」

「どちらにしても、原達だけじゃ危険な状況だ。少し早いが、起動実験に入る。データを採集するぞ。原達に伝えろ、仮面ライダーが向かったと」

「ライダーの戦いが始まるんですね。正直、この目で見てみたいですよ、滝部長」

起動？

原達は、携行している自動小銃を発砲し、巨大蜘蛛に向かって弾丸を次々に浴びせかけるが、標的の体は弾丸を通さず、弾は虚しく床に転がっていく。原達も無限に弾があるわけではない。弾が尽きれば自分達はあっさりとなぶり殺され、この怪物を地上に送ることになる。何とか、仮面ライダーを地上に出した上で起爆しないと、作戦の成功はない。生き残りつつ相手を足止めする、非常に厄介な注文だった。原は、じりじりと蜘蛛が近づいてくるのを見て、

「これ以上は限界だ。フロアを上がっていくぞ」

と命令し、部隊は非常階段を駆け上がって上のフロアに行く。地上に近い。しかし、部長から作戦成功の合図が来るまでは、この施設内に蜘蛛を釘づけにする必要がある。その時、轟音とともに蜘蛛が床を突き破って追いついてきた。さらに原達を見つけると、口から粘着性が強く、弾力性があって切断が難しい糸を吐きかけてきた。糸は進路をふさいただけでなく原達の行動も封じ込め、彼らは完全に捕獲された格好になった。この状態では銃も撃てず、為す術がない。

「ちっ、ここまでか。悪いなお前ら。無能な隊長の下についたせいで、こんな最期を迎える羽目になって」

原が皮肉交じりにぼやいていると、無線機から雑音の中に混じって、部長の声が聞こえてきた。

「原、原、聞こえるか。奴が覚醒してそっちに向かった。作戦変更、お前たちの救助に向かう。聞こえるか、原……」

通信を聞いた部隊の面々は、信じられない面持ちで顔を見合わせた。あの男が起動した、仮面ライダーが向かっている。テレビの中

の出来事ではなく、今この自分たちも存在する現実の中での出来事として、現在進行で起こっている。あまりのことに、蜘蛛が近づいてきているのも忘れていたその瞬間、今度は天井が崩れ落ちてきた。崩壊寸前の建物で派手な行動は命取りになってしまうのだが、目の前の光景は隊員達にそんな心配を思わせるゆとりを与えなかった。

崩れ落ちた瓦礫は蜘蛛の背に降りかかり、その巨体の半分を埋めてしまった。そしてその瓦礫の中から立ち上がったシルエットに隊員達は釘づけになった。

光沢感を消し去った全身を覆うスーツ、胴体部分を保護するように装着されるプロテクター、まるで宝石の様な形と装飾が目を引きバックル、腕や足に装着されたブレスレットとアンクレット、背中に装着された翼上の装備、そして紫の輝きを持つ二つのバイザーを備えたヘルメット。そこにいるのは、まぎれもなくイメージの中に存在する仮面ライダーそのものだった。

「本当に仮面ライダーが、俺達の目の前に……」

絶句する原の頭上に叫び声が響いた。滝部長の声だった。

「原、生きているな。よくここまで持ちこたえた、上出来だ。まずは救助するぞ」

上から数本のロープが降ろされ、緒方や数人の隊員たちが原達の元に下りてきて、携帯型のバーナーで蜘蛛の巣を焼き払っていく。次第に体の自由を取り戻し、隊員達は蜘蛛の巣から解放された。非常階段が潰されてしまったため、ロープを使って自力で登らなければいかず、原は部下達から先に脱出させていく。

「部長、あれが仮面ライダーなんですね。実物を見るのは初めてなんで、度肝を抜かれましたよ」

「だろうな。だが、今はあまり大きな声を立てるなよ。何をやらすすかわからん」

「どういうことです」

「あいつは起動したが、オツムの方が眠ったままだ。蜘蛛の存在を感知して、本能的に脅威とみなして体だけを起動させて、ああいう真似をしたただけ。変な刺激を与えると、矛先がこっちに向かってきかねない」

滝部長の言うとおり、ライダーは姿を現わしてからずっとその場に立ち尽くし、何をやるでもなくボーっとしていて、時々こちらに視線を移す程度だ。その様子が、少し不気味にも見える。

「確かに妙な雰囲気ですね。また寝てくれるといいんですが」

「まったくだ。寝た子を起こすもんじゃないな」

救助は順調に進み、原も引き上げられて順調に事が進んだ。部長の隣に原がつき、何も動きを見せない仮面ライダーを見下ろしている。

「どうします、部長。爆破はいつでもできますが、あいつをどうやって保護するんですか」

「まあ、そうだな。ガス抜きが必要かもしれんな、この様子だと」

「ガス抜きって」

「蜘蛛は生きている。動くぞ」

そう言うのとほぼ同時に、瓦礫に埋まって絶命したと思われた蜘蛛が、コンクリートの破片を吹き飛ばしながら息を吹き返した。

「ガス抜き、ですか。つまり、あいつを戦わせて、少し消耗しても

らうと言うことですか。ですが、反対にやられると言うことはありませんか」

「あの程度の敵にやられるようでは、仮面ライダーとしてはもの足りんな。この先、生きてはいけん。これはあいつの誕生の儀式であり、試練だ」

足元をすくわれたライダーは、転倒して蜘蛛の正面に転がってきた。相変わらずボーっとして、心ここにあらずと言った感じだ。しかし、バイザーが相手の姿を捉えると雰囲気さがらりと変わり、蜘蛛に対して正対し、相手の動きに神経を集中させる。バイザーにうつすらと、相手の映像から得られる幾多の情報が内部で映し出されているのが見える。

先に動いたのは蜘蛛だった。顎をこそごと動かしたかと思うと、肉眼では視認できない速度で何かが吐き出された。上で様子で見守っていた部長達にも、その出来事は見えなかった。見えたのはライダーの身。何かを払うように右手を動かすと、その手には長く鋭い針が握られていた。高速で発射された毒針を、その速度に関係なくライダーがつかみ取ったのだ。蜘蛛はさらに針を発射してくるが、一発たりと目的に当たらない。針の軌道を見切り最小限の動きで避けているからだ。その動きは高速で、人間である部長達の目で追うことができず、彼らにはライダーが動いていることすらわからない。飛び道具が通用しないと理解すると、蜘蛛はその体の大きさを攻めてきた。しかし、ライダーは全く臆することなく地を蹴って肉薄すると、華麗な身のこなしで翻弄し、手刀を入れて蜘蛛の足をへし折っていく。痛みと怒りでさらに凶暴化する蜘蛛だが、まるで小馬鹿にするような動きで背中に飛び乗ったライダーは、力任せに拳を叩き込み、その腕は相手の体に突き刺さってしまった。のたうちまわって何とかライダーを地面に落した蜘蛛だったが、立っているのもつらそうになってきている。そんな蜘蛛にお構いなしに、ライダー

「は追い打ちをかけようと静かに歩みよってくる。

「なんて強さだ。でも、やりすぎですよ。俺らの知ってる仮面ライダーはこんなものじゃない」

「その通りだ。奴はオツムが眠っている。今はただの兵器に過ぎない。ライダーがただの兵器や戦士ではないと言うのは、今の彼が図らずも証明している。お前たちも、よく見ておくことだ。だが、あいつのスペックを図るには十分な戦いだ」

静かに蜘蛛に近寄るライダー。だが、蜘蛛は突然息を吹き返すと、大量の糸を相手に吹きかけてきた。至近距離からの不意打ちだったためライダーも避け切ることができず、全身を縛りつけられ壁面に拘束されてしまった。超人的な力で糸を振り切ろうとするが、粘着力や伸縮性が強く脱出は不可能だった。相手の自由を奪った蜘蛛は、その巨体で踏み潰そうと迫ってきた。上で様子を見守っていた部長達もまずいと感じた。誰もがライダーの敗北が頭によぎった。たった一人を除いて。

迫りくる蜘蛛から視線をそらさず、攻撃ポイントを探るライダー。そして、行動が始まる。手を動かし、指先がかるうじてバツクルに届くと、指先でバツクルを回転させる。するとバツクルが美しい輝きを放ち、「FREEZE」という電子音が流れてきた。その瞬間ライダーの体を拘束していた糸は、がっちり凍りつき、彼のわずかな体の動きでガラスが割れるように砕け散った。ライダーの足元からは、超低温を思わせる白い冷気が立ち上っている。何事もなかったかのように落ち着きを払いながら跳躍すると、計算し尽くされた完璧な攻撃ポイントにライダーのキックが炸裂した。蜘蛛は、その衝撃で押しつぶされてしまったがそれだけでは終わらなかった。ライダーの足から発生する冷気は、蜘蛛の巨体をあつという間に凍結させ、その衝撃で文字通り木っ端みじんに粉碎してしまった。

恐るべき仮面ライダーの技に、そしてその体に秘められた戦闘力

に、皆啞然としていた。ただ一人、滝部長だけはライダーに頼もしそうな表情を浮かべていた。

「なかなかやるじゃないか。スペックは申し分ない。後は、彼が仮面ライダー足りえるか、これは我々次第だな。どうだ、緒方。これが仮面ライダーだ」

「自分の目を疑います。仮面ライダーが本当に存在して、あんな滅茶苦茶な力を持っているなんて」

「自分もです。正直、戦慄しました。瞬間的に相手を冷凍、さらに衝撃を加えることで相手を粉碎してしまう。人間業じゃない」

「原、人間業ではない、まさにその通りだ。だが彼らは人間でもある。そうあるためには、これからが重要になってくる。しかし、これほどすごい技を持っているとはな。相手を凍らせてぶっ壊す。さしずめ、アイスブレーカーかな。む、さすがに負荷が大きすぎたか、あいつも限界のようだ」

見ると滝部長の言う通り、ライダーは体の至る所か湯気が立ち上り、足もふらふらしていた。完全に覚醒しきらない中でのアイスブレーカーの発動は負担が大きかったらしく、足がもつれその場で一回転すると、そのまま倒れ込み気を失ってしまった。

目覚めた男

なんだろう、この感覚は。足が地面につかず、ふわふわしているようだ。手も、自分のものとは思えず、こん棒を振り回しているように他人事の感覚だ。視界も、ぼやけていながら色々なものがたたと見えたり、あちこちに視点が飛んで集中できない。不思議だ、何か変な映像を見せられているようだが、スクリーンなんて見当たらない。しばらくすると、脳につきあげてくるような轟音が鳴り響き、視界が真っ白になると、視界の中に現われたのは蜘蛛だった。普通ではない、自分の何倍もあるような巨大な蜘蛛だ。その蜘蛛の体の至る所を拡大して映され、嫌が上にもその気味悪さが伝わってくる。

そうか、これは夢か。夢なら、この不思議なビジョンの説明もつく。巨大な蜘蛛が現われる、存在するなんて絵空事だ。どれ、じゃあその絵空事のような夢の続きを堪能しようか。映像は、次第に激しい動きを見せる。蜘蛛に接近し、離れ、今度は腹の下に潜り込んだり、背中の上に飛び乗ったりと縦横無尽だ。すると、誰かの腕が蜘蛛の体を殴りつける。これは面白い夢だ。こういう夢なら醒めたくない、そう思っただけでみる自分がいた。

だが、次第に変な気分になってきた。夢にしては何だか臨場感がありすぎる。視点が誰かのもの、三人称ではなく、自分の視線のように感じる一人称なのは夢だから仕方ないが、段々殴っている腕の感触が自分でも感じられるようになってきた。今度は、蜘蛛は糸を吐きかけてきた。腕だけでなく自分の体全体に粘着質な糸の感覚がべつとりと伝わってくる。そして、今度はひやりとする感覚が足元に感じられた。冷気は前進にも伝わっていき、寒さすら覚えてくる。視線は、宙高く飛び上がり蜘蛛を蹴り飛ばして粉碎していて、映像にもなった感触が体中に伝わってきた。

間違いない。これは夢ではなく、自分が体で感じ記憶した現実の

出来事だと認識せざるを得なかった。そう思うと、超人的な感覚で戦う自分、敵である巨大蜘蛛という人知を超えた存在を、頭の中で処理しきれなくなり、ぐるぐると様々な思いが頭の中で交錯し思考停止状態に陥ると、目の前は暗くなり、体の感覚も失われていった。

突然。まさにそうだった。眠りから覚めたはずなのに、バチっという音がしそうな感覚で、視界が明確に広がった。目が覚めたばかりのぼんやりした感覚はなく、視覚も、聴覚も含めて、頭がはつきりした状態で目が覚めたのだ。まるで、テレビのスイッチをつけた時の様な、瞬間的な感覚の覚醒だった。周りを見渡すと、そこは部屋というには広すぎ、コンクリートが剥き出しの壁面に囲まれた体育館ほどの広さがある屋内空間だった。自分の体は、病院のベッドの様なもので、ベッドの周りには様々な機材が置かれていた。立ち上がって周りを調べてみようと思えば立ち上がろうとすると、感覚とは逆に肉体がうまくコントロールできず、足がもつれて床に倒れ込んでしまった。どういうことだと、男は訝りながら再び立ち上がろうとするが、生まれたばかりの草食動物のように足の使い方や重心移動がうまくいかず、また倒れ込んでしまった。「どうなってるんだ、これは」

そう言おうとしたが、舌がうまく回らず発音できないので言葉にならない。どうやら、五感以外は思い通りに自分の体を扱えないようだ。途方にくれて床に転がっていると、どこかで扉が開く音がした。そして、足音を響かせながら誰かが近づいてくる感じがする。首を動かして足音の方を見ると、歩いて来るのは、白髪交じりの60代に入るかどうかぐらいに見えるスーツを着た男だった。感じる年齢の割に、背筋はピンと伸び、ウエスト周りも引き締まっていて、足取りも軽いため年齢を全く感じさせなかった。彼は機材の周りに来てスイッチをいじると声をかけてきた。

「思ったより目覚めが早いな。いい傾向だ。嗚呼、すまんすまん。見ず知らずの人間に話しかけられても、警戒を抱いてしまうし、名無しの権兵衛じゃ会話にならないな。私は滝だ。滝一也だ。よろしく。こっちだけ一方的に喋っても、君はまだ無理か」

滝は、そばにあつた鉄パイプを軽く持ち上げると、横たわっている男の手元に差し出した。

「つかまれ。軽くだぞ。じゃないと私の肩が抜けてしまう」

相手の出方がわからないが、このまま寝転がっていてもしょうがない。言われた様に、慣れない手の動きに耐えながらパイプを軽く握った。滝は、片手だけでパイプを引き上げると、男一人を一息で引き上げ立たせてしまった。見た目の年齢以上に滝の体は鍛え上げられているようだ。

「喋ることもできないし、体も動かない。いろいろ大変だろうが、物事には順序がある。ちよつとチクツとするぞ」

滝はそう言うと、コードを伸ばしてきてその端子を男の後頭部に突き刺した。言うとおりの鋭い痛みが走ったがそれ以上のことはなかった。滝は、もう一方の端子をパソコンに接続し、何やら操作している。

「眠っている内にやればよかったんだが、脳がきちんと目覚めた状態じゃないと無理があつてな。今、言語野の調整が終わるぞ。よし、喋ってみろ」

「あんたは一体誰だ。それにここはどこだ。俺の体はどうなっているんだ」

「喋りは問題ないな。予想以上だ。そう矢継ぎ早に質問するな。今は、俺一人しかないんだ。それに色々質問して来るが、お前はお

前自身のことをどれだけ覚えている」

「どういう意味だ」

「そのまま、額面通り受け取ってくれて構わない。まず、お前の名前を言ってみろ」

男は何を言うんだと言うような表情をしたが、すぐに戦慄した。

自分のことはわかってはいるはずなのに、一番基本的な自分の名前が言葉に出てこない。記憶の中から浮かび上がってこないのだ。その事実には恐怖し、顔から血の気が引いていくような気がした。

「まあ、そこまで悩むな。脳改造されたわけじゃないが、資料によるとお前は5年間も眠りについていたんだ。寝ぼけていても仕方ない」

「5年間、眠っていただと」

事故に遭った記憶も、そんな形跡もない。健康な男が5年も眠るわけがない。滝という男の言うことを冗談と一笑に付したい所であったが、自分の名すら覚えていないこの現実が、戦慄のものとなって彼を捉えていた。

「どうして俺は、5年も眠っている様なことに」

「話には順序がある、それは次の話題だ。まずお前の名からいこう。ええと、不破龍雄。ほお、なかなかいい名だな。どうだ、思い出したか」

「不破、龍雄。それが俺の名前」

不破の頭の中で、その名前がぐるぐると回り続けているが、初め

て聞かされる名にしては拒絶反応もなく、ずっと頭の中に染み込んできた。しかし、自分の名すらはつきりと思いつけないことに、苛立ちは隠せない。そんな彼を落ち着かせようと、俺は至って砕けた調子で話続ける。

「焦るな、まず自分の名はもう忘れるな。お前の今までの経過を話してやる。お前は戸籍上は25歳になる。7年前、高校卒業と同時にプロレス団体に入団。運動神経が図抜けて発達していたお前はかなり期待されていたが、道場での練習中に首を痛めてしまい、その怪我でデビューが叶わず退団。その後、トレーニングジムのインストラクターを目指して活動していたところを、ある組織に拉致される。組織の名はシヨツカー」

「シヨツカーだと。あんた、ふざけるのはいい加減にしろよ。そんな仮面ライダーみたいな絵空事を離しているんじゃないんだ。それに、この体はどうしたら動くんだ」

「こっちは真面目さ。後、お前のその激しやすい性格があるから、怖くて運動野のスイッチを入れられん。落ち着いて話を聞いてくれ。シヨツカーは実在する組織だ。本気だ。そして、彼らを架空の存在にしてきたのは我々だ。奴らの危険すぎる行動、思想、そして存在そのもの。世の中に解き放つてはいけない忌まわしき存在だ。だから、実在のものではなく架空の存在、虚構の世界へと押し込むのが我々の仕事でもある。お前を拉致した頃のシヨツカーは、もう資金も底をつきかけ、影響力も失ったカルト集団だったが、お前の拉致前後に出処不明の資金が流れ込んでいた。この資金の流れは今も調査中だが、この資金を基にかなり規模の大きい計画が進んでいた。その計画の中核がお前だ」

「俺がその中心にいただと。話が大きすぎて、信じられない」

「信じられないと言う割には落ち着いてきたな。いい傾向だ。シヨツカーの計画は、新時代の超人計画。つまりお前にわかりやすく言えば、あいつらは今も改造人間に執着していたんだよ。だが、現代における奴らの最新型改造人間は一風変わっていてな。細胞をナノマシンで統制するのは今までもあったんだが、そのナノマシンを統制する指令系統に、隕石から得られた鉱物で作られた新たな電導物質を使い、より複雑高度な機能を搭載した仮面ライダーを製造したわけだ。仮面ライダー型改造人間に拘るのは、その高性能を兼ね備えた改造人間のプロトタイプに仮面ライダーを想定していること、もう一つは彼らのような組織の前に立ちはだかってきたライダー達の意趣返しという意味もあるんだろう」

「俺が改造人間、仮面ライダーだと」

「試しに体を動かして、体験してみるといい。これで、お前は体の自由も効く」

滝の言う通り、不破の体は自由を取り戻していた。歩こうとするが、5年間眠り続けていたという言葉を実証するように、足首やひざの力の入れ具合、抜き具合がわからず、転倒してしまった。歩けないという事実が、滝の言葉を立証していく。そうであって欲しくないという思いが虚しく、この体が信じがたい事実を現実のものとして突きつけてくる。

手を伸ばすと、指先が鉄パイプに振れた。不破は、受け入れがたい事実に向面するのを承知でパイプを手繰り寄せ、両手で握った。立ちはだかる現実には恐ろしいが、避け続けていた道は開けない。覚悟を決めて腕に力を込めた。鉄パイプは、紙を折る様子にも簡単に折れ曲がった。ほんの軽くしか力入れていないはずだった。なのに、ここにある現実、彼を虚構の人間にしてしまう結果を見せてつけている。

いとも簡単に折れ曲がった鉄パイプと、それを可能にしたこの腕の力。降りかかる現実を二恐れをなす様に、不破は鉄パイプを壁に投げつけた。目でとらえるのが不可能な速度でコンクリートの壁面に突き刺さった。壁に突き刺さったのもそうだが、彼の目は飛んでいく鉄パイプの軌道や回転をはつきりと捉えていたことも、不破を重大な現実で拘束してしまった。

「本当に、改造人間の体になっちまったようだな。認めたくないが」「認めるしかないぞ。じゃなきゃ、お前はそこから一步も動けない。これを見ているか。お前はさっき一人称の視点、自分の視線でこれを見ているだろう。夢のことだよ。それは夢ではなくお前の記憶、もっと厳密に言えば記録映像だ。よく見て、心の整理をしろ」

滝はテレビを不破の前に設置すると、リモコンである映像を移した。画面には、不破がさっき夢で見たのと同じ映像が映っていたが、どこか違った。視点が違うのだ。さっきの夢では目の前にいるのは蜘蛛だけだった。しかし、今映し出されている映像には、蜘蛛と戦う一人の仮面の戦士が映っていた。そして、その戦士と蜘蛛の戦いは、彼が見ていた夢と符合しているのだ。

不破は、もう観念するよりほかはなかった。自分は改造人間、仮面ライダーであることを。

目覚めた男？

信じられない、信じようとも思えない現実が不破の目の前に立ちふさがっていた。否定したくてもできない、絵空事のような出来事がこの体に起こり、今も体内で活動している。座り込み顔を手で覆い、動けない不破の隣に滝が並ぶように座った。

「俺は、変わり様のない、どうしようもないことは口にしても仕方がないと思っている。その上で言わせてもらう。お前は改造人間だ。これは、お前がどうあがこうと変わらない現実だ。それは嫌でも受け入れてもらう。だが、この先お前がどう生きるかはお前が選べ。その選択権は、脳まで改造されても、意思だけはいじられなかったお前に残っている。どうする」

「どうするって言われても、今しがた「お前は改造人間だ」、と言われて納得できるわけがない。その上、この体でどう生きる道があるって言っただ」

「まあ、それもそうだな。シンプルにいいこうか。まず一つ、リハビリして人間の振りをしてこそこそ生きる。一番当たり障りないな。その代わり、いつ死ぬるかわからない体を抱えて世間で生きる羽目になる。その二。改造人間らしく怪物として、この社会で生きる。一番気楽とも言える生き方だが、お前は社会の敵となり、すべての人間を敵に回す。その場合は、俺も全力でお前を潰しに行く。その三。一番これが過酷だな。その体を武器にして、決して報われることはないかもしれないが、人のために生き、そして戦うことで己が人として生きる道、仮面ライダーになることだ。そんな生き方を選んだ馬鹿な男達を俺は見てきた、何人もな」

「おい、それって。仮面ライダーは本当にいるのか」

「だからいるって。仮面ライダーも悪の秘密結社も実在してきた。だが、それを広表すると何も知らない市民がショッカーに先導されたり、彼らとの戦いに一般市民が巻き込まれる地獄絵図が現実化する恐れがあった。そこで、仮面ライダーとショッカーの戦いをエンターテインメントの場に移し、こういう悪が社会に潜むというサイン、仮面ライダーと言う崇高な意思を持った戦士たちが人のために戦っている、そういったことをそれとなく伝えてきた。ある意味、虚構の世界だけに悪の存在を押し籠めてこれたから、とりあえず均衡を保った世界でいられるわけだ。だから、仮面ライダーは実在する。現実のこの世界に、今もどこかで存在している」

「そうか、わかったよ。すまないが滝さん。一人で考える時間をくれないか」

「かまわん。これから先の長い人生の決断だ、じっくりと考える。しばらくしたらまた来るから、納得いくまで考える」

滝はそう言い残し、広い部屋に不破を残し外へ出て行った。外へ出ると、そこには原が待機していて、滝が出てくるのを待っていたかのように近寄ってきた。

「何かあったか」

「黒子が出ました。新宿です」

黒子と言うのは、滝達が属する組織における怪人に対する隠語である。存在するが存在しえないものとして扱われる黒子と怪人の立場をだぶらせた呼称だ。報告を聞いた滝は険しい表情を浮かべた。

「何、新宿だと。金曜の夜だぞ、目撃されると、情報処理が面倒になる。それで黒子の現状は」

「狙撃部隊を編成して、ビルの屋上にくぎ付けにさせているので、飛び立たない限りは人目につきません。ただ、狙撃だけで始末するとなると難題になりますね。接近して始末となると、こちらに損害が出ます」

「損害を前提にできるほど、こちらの人員は多くないし、黒子を始末する確率も高くない。原、お前の意見はあるか」

「率直な意見ですが、今のままでは足止めも難しくなります。犠牲を覚悟で突撃を仕掛けるか、若しくは、あいつを投入するか、ですね」

「わかった。一時間待て。それまでに、武装を整え出動に備えろ」

「了解」

原は命令を受け、部下に伝えて指示を送るべくその場を去った。滝は煙草を取り出し、一本だけゆつくりと燻らせていた。吸い終わると吸殻を始末し、その場を行ったり来たりを繰り返した。それを30分だけ繰り返した後、呼吸を整えると、不破のいる部屋のドアを開けた。彼は、先程と同じ場所に座り、自分の戦いが映っている映像を眺めていた。

「どうだ、生きる道について考えた、その結論は」

「何となく出そうな気はする。実際に選択肢は少ないし、この体と言う現状を証明するものの説得力もある。考えたよ、どう生きられるか。孤独に息を潜めて生きる勇氣はない。この唯一残った人としての感情を棄てて、怪物として生きる決断もできない。そんな中で自分の戦いを何度も見てみたら、これしか生きられる道はなさそう

に思う。だけど、こんな空想みたいな生き方をこれからできるのか俺は疑問だ。だから、あんたに頼みがある」

「なんだ。言ってみろ」

「俺が仮面ライダー足りえるのか、見守って欲しい。俺には仮面ライダーになる以外の選択肢はとれない。だが、どうすれば仮面ライダーになれるのかわからない。この体だけで戦っても兵器にしかない。何かが足りないんだ、俺が思う仮面ライダーには。だから、あんたに俺を後見して欲しい」

「今しがた会ったばかりの俺に後見を頼むのか。俺でいいのか、いきなりこんな現実を突きつけて、生き方を選択させる俺なんかで」

「あんたしかいないだろ。さっきの言い方からすると、あんたは他の仮面ライダーを知っている。彼らの生き方を見てきた人だ。だから頼むんだ。俺は人として生きるために仮面ライダーになる。だが、不安や戸惑いは隠せないし、正しい道かもわからない。だから、俺が仮面ライダー足りえる様に、そばで見えて欲しい。教えを請うんじゃない。あんたの姿から、生き方から、仮面ライダーとしての生き方を学びたいんだ」

「俺の姿から、仮面ライダーとしての生き方を学びたい、か。そういうことを言う奴は初めてだ。後見と言うから、自分を支えてくれとか言う泣きごとを言うかと思ったら、覚醒から短時間でここまでこのことを話せるとは、予想以上に骨のある奴だ。よし、いいだろう。俺の部下に特別編成させてやる。生活のことも面倒を見てやろう。そして仮面ライダーの戦い、生き方、その世界、知り得る限りを教えてやる。後は、どんな生き方をお前ができるかはお前次第だ。それでいいか」

「ああ、頼む」

「では、さっそく任務がある。準備がこちらで整えるから、用意が済み次第合流してもらう。人口密集地に怪人が出現した。その始末に当たるぞ」

「いきなり、戦いか。でも、えり好みできるほど、まだ俺には自由も意思もない。わかった」

「先の戦闘の記憶は良く思い返しておけ。お前の脳には、戦闘スキルや体のシステムなどが組み込まれている。記憶や経験をそれらに結び付ければ、すべてが身になる。正直、お前の能力はこちらでも把握しきれていない。そこは何とかお前自身で解決しろ」

「了解」

話し合いが終わると、滝は部屋を出て、オペレーターが様々な機器を捜査している指令室に入った。受話器を取り、出勤に備える隊員がいる部屋に内線電話をかけて、追加指令を伝えた。

「戦闘に仮面ライダーが加わる。最新型だがスペックは不明、戦闘経験も無しだ。お前たちのバックアップが必要になる。その所をよく覚えておけ。緒方はあいつの所に行つて、戦闘服の調達や、状況説明を。出勤まで30分、気を抜くな」

その名はメテオ

準備が整い、部隊は二手に分かれて展開した。一つは、原が指揮する地上部隊。地上や建物から黒子、つまり怪人を狙撃することで牽制するチームだ。もう一つは、ヘリ部隊。不破が搭乗し、彼を怪人にいるビルに送り届ける部隊だ。不破には緒方がサポートにつき、これから展開する作戦を説明をする。

「黒子は、新宿にある高層ビルの屋上にいます。我々の舞台で狙撃などを行いここに足止めさせているが、そろそろ限界が近いでしょう。相手の存在を知られるのが最も避けたい事項ですが、何より人口密集地です。被害が拡大するのを抑えるためにも、このビルの屋上でけりをつける必要があります」

「わかった。俺に選択の余地はないだろ。やるだけやってみる」

「敵のデータはこの通り。見たところ梟ですね。暗い夜でこそ目がき利くことで優位になります。他のビルの照明が入り込まないポイントです。ですが不破さんの目も特別製ですので、この点は互角のはずです」

「はつきり言うんだな。まあ、普通とは絶対に違うから否定できないけどな。さつきから気になってんだが、お前、確か緒方だったな、どうして敬語なんだ。そんなに歳が違う気もしないが」

「いや、さすがに仮面ライダーを目の前になると、緊張すると言うか。テレビの中が存在がこうして目の前にいると思うと、舞い上がってしまつて」

「舞い上がらないでくれ。お前は目の前に俺がいるだけで済むが、

こっちは仮面ライダーになつた当事者なんだ、緊張も戸惑いも、否定だつてしたいところだ。それに、まともに自分の意思で戦えるかどうか」

「前は、無意識の内の戦闘だつたと報告書で読んでいます。けど無意識であれだけの戦闘ができるのなら、不破さんのスキルも相まって戦えますよ。プロレスラーだったんですよね」

「練習生どまりだ。デビューはしてない」

確かに緒方の言うとおり、プロレスラーになるために練習を積んできたスキルはあるが、それはあくまで基礎体力作りや、怪我をしないための受身、後は才能として身についていた身軽さや柔軟さしか、完全に板についているものはない。実戦経験はないし、人を超越した怪人を相手に命のやり取りをするのとは根本から違うのだ。自分の体にどんな力があり、性能を持っているのか全く把握できないまま、ぶつつけ本番の戦いに挑む。ヘリのローター音が鳴り響く中、機内で不破の緊張感が増す一方だった。何か、気を紛らわす話題が欲しかった。

「なあ、緒方。一つ相談があるんだが」

「何ですか。それに俺でもいいんですか」

「お前が一番気兼ねなくは話せそうだ。歳も近そうだし。その、何だ、俺の名前をどうしようかと思って」

「名前ですか。不破さんには名前、ちゃんとあるじゃないですか」

「いや、そうじゃない。仮面ライダーとしてのさ。俺達が知っているテレビの中のライダーは、みんな名前を持ってるだろ。個別のコ

「ドネームと言うか」

「ああ、なるほど。確かに、それぞれのライダーにそういうのがありますね。けど、よくこれから戦いに行く時に、名前のことを思いつきますね。やっぱり、不破さんって豪傑ですか」

「違うよ。その逆で緊張して落ち着かないから、気を紛らわせたいたんだ。俺一人で考えるより、お前と話をしていた方が集中できる」

「いいですよ。あなたのサポートが任務ですから。そうですね、どうしましょうか。ただ、識別番号だけ入れるのもつまらないし、出来れば由来や意味がしっかりした方がいいですよね」

「その名前で呼ばれることを考えれば、やっぱり名は体を表す様なのが恥ずかしくないな」

「ですよ。うーん、漢字も捨てがたいし、アルファベット系も意外にいいんだよな」

これより、戦場に赴くようには思えない、和やかな雰囲気では名前について話し合い、意見し合っていた。すると、資料を読んでいた緒方があつと言う声を上げて、その個所を不破に見せてきた。「不破さん、この箇所を見て下さい。組織は、不破さんの体に様々な機構を埋め込んでいますが、その複雑な回路を制御するために、隕石に含まれていた未知の鉱物を集積回路や神経伝達機構に応用し、過剰ともいえるハイスペックな肉体の統制を可能にしているんです」

「ああ。そのことは滝さんからも聞いたが、それがどうした」

「ここですよ、隕石の鉱物の応用。これこそ、あなたの仮面ライダ

ーのアイデンティティですよ。これを名前にしたらどうですか。隕石によって誕生したんですから、メテオってのは。宇宙も意識する結構いい名前だと思いますよ」

「メテオ、か。何だかい響きだ。俺は、仮面ライダーメテオ。気に入った。少しだけだが、ただの改造人間から仮面ライダーに一步踏み出せる気がする」

二人の話し合いで名前が決まったのとタイミングを合わせるかのように、操縦士が二人に大声で叫んできた。

「現場に到着しました。目標から200メートル上空です」

「わかった」

緒方は返事をする、ヘリのドアを開けて、双眼鏡を取り出して標的の姿を確認した。ビルの配管に身を潜めている巨大な鳥の姿が確認できた。

「いたいた。うちの狙撃班もやっぱり大したもんだな。黒子の動きをしっかりと食い止めている。不破さんも見ますか」

緒方は不破に双眼鏡を手渡そうとしたが、不破は差し出したその手を押し返した。

「いや、道具はいらない。肉眼で見はつきり見える」

「え、この距離と暗さの条件下で」

「くつきりと見える、ここから鳥の化け物の姿が。どうやら、俺の化け物じみた能力も起動し始めたようだ。やはり、俺も化け物だと言ったことが、こういったことで否応なく意識させられる」

「不破さん……。あ、連絡が入りました。はい、隊長。……、わかりました、こちらでも待機中です。行動に入り次第連絡します」

「準備ができたようだな」

「はい、各ビルに狙撃犯が配置しています。後は、不破さんの突撃で作戦が開始します。あ、不破さん、何してんですかつ」

緒方は、安全ベルトもつけずにランディングギアに足を置いて立っている不破の姿に驚愕した。いくらなんでも、地上に落下してしまえば、改造人間でも無事で済むはずがない。あわてて引き戻そうとするが、不破は意に介さなかった。

「不破さん、危険です。ヘリの中に戻ってください。まだ、肉体の起動も説明していないのに、無茶苦茶です」

「その必要はない。この体が教えてくれている」

「どういうことです」

「戦うと言う俺の意思に反応して、視力が解放され、今度は戦闘モードに切り替えるための動作も体自身が教えてくれている。後は、そこに俺の決意と行動が加わればいいだけだ」

「本当に大丈夫なんですか」

「ああ。後は、俺が明日を勝ち取るか、化け物が生き永らえるかは、戦いの結果次第だ。だが、必ず勝つ。そこにしか、俺が生きる世界はない」

「わかりました。不破さんの行動で作戦開始になります」

「なら、今すぐ開始だ」

不破は、足を一步踏み出すと、はるか下方のビルに向かって死のダイブを開始した。目の前には、目標とするビルの屋上が迫ってくる。このままだと、確実に死が待っている。しかし、自分が望むのは生だ。その意思が体を起動していく。

視界には、脳から送られた様々な数値が並び、膨大な量のデータが処理されていくのがわかる。やがて、体の自律的な反応と、自身の意思で体を動かす動作が重なっていく。人工的に処理を受けている筋肉が発動し、次第に体中が隆起を始める。皮膚も柔軟性で硬度を兼ね備えたものに変わっていき、顔つきも次第に引きつっていく。そのまま変異が続けば怪人そのものになるのだが、真の変異を遂げるためのキーワードを、不破は脳からのナビゲートと、自身の意思で叫んだ。

「変身」

光輝く宝石のようなバツクルから、肉眼で捉えられない速度で粒子が放射されて、瞬く間に体を装甲で覆っていく。全身の装甲が終わり、最後に肩甲骨の辺りから羽をモチーフとする銀色のレーダーの役割を果たす細身のマントが装着されていく。変身を終了させた瞬間、不破は、いや、仮面ライダーメテオは戦場に降り立った。

降り立ったビルの屋上は、静寂に包まれている。しかし、サーモグラフィー機能もあるメテオの視界は、明らかに異常温度を感知している。配管の影に、高温の物体が潜んでいる。高エネルギーを放出する怪人の存在は明らかだった。

「出てこいよ、そこにいるのはわかってる。お前の様な奴がビビってるわけじゃないだろ」

メテオの声に応じるかのように、ゆっくりと異形の影が姿を現し

た。事前に聞いた話の通り、その姿は梟の姿を取っていた。褐色の羽毛に顔に備わる巨大な目と嘴、しかしそれが鳥と言えないのは、シルエットが人型を取っているためだ。完全に脚は人のもので、鳥の足の部分は人間の両腕に備えられている。メテオは、初めて自我を保ったまま対峙する異形の影に、内心戸惑いを感じていた。こいつは人なのか、鳥なのか。そもそも生物なのか。そんなことを考えていると、耳に何かノイズ音が走り、次第にその奥から人の声が聞こえてきた。

「聞こえるか、メテオ。聞こえるか、メテオ。俺だ、部隊隊長の原だ。応答できるか」

どうやらこの強化服、若しくは脳にはあらゆる回線に対応できる機能がついているらしい。まさに改造人間だなと思いながら、目の前の手に気に集中しつつ、メテオは精神を統一して通信チャンネルをチューニングした。やり方は知っていたわけではないが、この体が知っている知識や情報に身を任せた結果だが、それがうまくいきノイズが取り払われ、肉声の様にクリアな音声が届いてきた。メテオはその声に呟くような声で応答する。

「俺だ。原さんだったな、聞こえるぞ」

「すまん。緒方の奴、通信のことを見落としていた。これは減俸処分だな。まったく、コードネームも勝手に決めやがって」

「愚痴なら後にしてくれ。こっちは立て込み中だ」

「わかった。用件だけ伝える。敵は人型はしているが、命令に従って行動するだけのバーサーカーだ。人間の意思も理性もない、危険な奴だ。この街で何人か人を襲って殺害している。猟奇殺人事件ということで警察には囁かせているが数が多すぎて、隠蔽も限界だ。何とか始末してくれ。遠慮すれば、お前の命も危ない。理性なんか

ない化け物だ、躊躇するな。以上だ、頼むぞ、メテオ」

「ちっ、隠蔽か。嫌な響きだぜ。かといって、こんな奴が白日の下にさらされてもいいことなんか一つもないか。絵空事は絵空事のまに。さあ、行くぜ」

決意を込め、一步踏み出した、つもりだった。しかし、まだ体を使いこなせず、基本的な動きの出力をコントロールできないメテオは、たった一步の踏み出して、前方に弾丸のように飛び出してしまった。方向も間合いもなく飛び出したその体は敵の格好の的だった。肉食の生物らしく、メテオの動きを距離感、スピードとともに完全に把握し、腕に備わったかぎ爪を振り抜き、完璧にメテオの顔にヒットした。強化服の装甲はかなりのもので、わずかに傷をつけた程度だったが、無傷といかない以上、心配はゼロには決してならない。「ちくしょう、ぶつつけ本番が通じるほど、プロレスも仮面ライダーも甘くないな。だが、お前を倒さないと、明日がないんでな。兵器として、化け物として生きるのはごめんだ」

メテオは立ち上がり、再び踏み込もうとするが、どうしても力の加減がつかめずどうしても見当違いの方向に飛んでしまう。今度はやや上方に飛び上がってしまった。狩人の相手にとっては、あまりにたやすい獲物に見えるのだろう。軽く跳躍すると、顔に備えられた巨大な嘴をつきたて、メテオを撃ち落とした。今度も装甲がわずかに削れただけだったが、衝撃波に打たれ内部を貫き、痛みとして認識される。しかし、その痛みをこらえ、いや無視してメテオは立ちあがる。

「この野郎、やってくれるぜ。けど、そう簡単にぶっ壊れる体じゃないみたいなんだ、このクソみたいな体は。おい、来いよ。かかってこいよっ、俺をぶっ壊してみろ」

その言葉がわかったのか、怪人はメテオめがけて低空飛行で近くと馬乗りになり、かぎ爪を突き立て、嘴を振り下ろす。それに飽きると、メテオの体を持ち上げ何度もいたぶる様に投げ飛ばす。メテオはいい様に弄ばれているように見える。

その様子を上空から、ビルの物陰から見つめる隊員達。

「隊長、緒方です。大丈夫でしょうか、メテオは。説明書というかシヨツカーの残した資料は断片的なもので、どれだけのスペックが彼にあるかわかりません。さすがに一方的過ぎる気がするんですが」

「資料がない以上、俺達にもあいつにもどれだけ力があるかわからない。実戦で使ってみないことには、どうしようもない。ここからでは、狙撃で介入するのは難しい。政府の閥組織、都内で銃撃なんて号外なんて洒落にならん。黒子が逃げる様なそぶりを見せない限り、俺達は介入しない」

「彼に、メテオに一任すると」

「それがあいつの望んだことだ。しっかりと見ててやれ」

「了解」

隊員達が見守る中、メテオは再びコンクリートに叩きつけられる。装甲に傷は殆どないが、内部に伝わる衝撃はかなりのもののはずだ。動けないでいるメテオに向かって、再び飛翔して襲いかかる怪人。馬乗りになろうとしたその瞬間、メテオは相手の胸元に足を突き立てた。串刺しの状態になった怪人の顔面に今度は拳を振り打ち抜いた。怪人は吹き飛び、コンクリートの上を滑走していく。メテオは再び立ち上がるが、足取りが先程までと違い、自信に満ちていて安定している。どうやら、完全に肉体の制御をものにしたらしい。

「ああ、こんなに技を食らい続けるのも久々だったな。プロレスの

道場を思い出すよ、ひたすら技を受けて受身を取り続ける。さつきまでのお前の遠慮のない攻撃、受身に使わせてもらった。おかげで体の加減が段々つかめてきた。さあ、倍返しでいくぜ、かかってきな」

まだ先程までの優勢さに自信があるのか、怪人は真正面から突っ込んできた。メテオは間合いをぎりぎりまで引きつけ、回避不能な距離の所で体を回転させて回し蹴りを胸元に叩きこんだ。タイミング、距離感、精度ともに完璧で、先程までのメテオとは明らかに違う。立ち上がってくる怪人に対し、一気に間合いを詰めて蹴り野手を叩き込んでいく。スピードも上がり、両者の力関係は逆転している。メテオは相手の体を抱えると、空中に向かって放り投げた。それを見た隊員たちが一斉に銃を構え、ビルの屋上に撃ち落とそうとするが、通信にメテオの声が割って入る。

「原隊長、手出しは無用だ。俺が片をつける」

メテオは跳躍し、軽く30メートルくらいまで達すると、怪人の体を逆さまにして抱え込み、そのまま落下していく。メテオの体には重力を制御する機構が備わっているのか、常識外れの加速度を伴って、怪人の頭をコンクリートに叩きつけた。

「ファルコンアローだ。昔覚えた少ない技だが、体がすっかり覚え込んでいた。ん、ファルコンじゃないな、梟ならストリクスか」

技を解き、相手から離れるメテオは、昔覚えておいた技に懐かしさを感じていた。将来に夢を持ち、必死で取り組んで覚えた技。それが、今度は仮面ライダーというありえない生き方で、あの頃の技がよみがえったことに感慨を覚えていた。

しかし、そのわずかな静寂を破って、コンクリートにめり込んだ頭を引き抜き、血まみれの顔を晒しながら怪人がメテオの方にふらふらと近寄ってくる。

「こいつ、不死身か」

「残念だが、そういうことだ、メテオ」

メテオの驚きに、原が通信で割って入ってきた。こちらの状況は、わかつているようだ。

「頭を砕いたんだぞ。普通死ぬだろ」

「普通はな。だが普通じゃないから怪人なんだ。そいつらは脳を砕いても、体の自己再生機構が肉体を修復にかかって、自立した制御機構が体を動かす。要は、体さえあれば死んでも勝手に動いて目的を果たすんだ。完全に動きを止めるには、体を木っ端みじんに吹き飛ばすしかない」

「そこまでしなきゃ、勝てない、いや、相手を止められないのか」

「そうだ。躊躇うな、メテオ。躊躇いも同情も、お前や敵のためにはならない。相手に憐みを持つなら、楽にしてやれ。忌まわしい夢から解放してやれ」

「そうか……」

相手を救うには、肉体ごと消滅させなければならない。それが救いになると言うなら、生き残る俺の救いは何だ。このまま戦い続ける人生に、救いはあるのか。メテオは自問自答する。わずかな時間がひたすら長く感じる。しかし、考えても道は見えないのだ。生きていかなければ、望む答えは得られない、いや、答えはないのかもしれない。ぐずぐずして、人でも獣でもない化け物になっていくより、仮面ライダーという幼いころ憧れた存在になるのなら、それはそれで生きる意味があるかもしれない。立ち止まっても、答え

はない。そして、自分と道理で生きる道を失った者たち。死ぬことすら許されず、この世を徘徊する者たちに死を戻せるのも自分しかないのだ。

決意は固まった。メテオは腹部のバツクルをまわし、余剰エネルギーを解放する。

「THUNDER」

バツクルから音声が流れると、両腕に高電圧の電気が巡り始める。拳を握りしめると相手の間合いに入り、電気を帯びた拳を何発も叩きこんでいく。人間の目では確認できないほどの速さで拳を叩き込み、相手の体に高電圧をかけ、その負荷に耐えられなくなった怪人の体は爆発して消滅した。

「サンダー……、ストームだ……」

任務の処理が終わり、報告書をまとめた原は、部長の部屋のドアをノックしていた。メテオが怪人を撃破した後、彼を回収し、ビルに残った痕跡を系する作業もあった。建築物での戦闘は損壊が出るので後始末が面倒だったが、何とか夜明け前にめどをつけて基地に撤収することができた。後はこの報告書を提出すれば、しばらくの間は仕事から解放される。もちろん銃撃などの荒っぽい仕事が終わりであって、書類整理などの仕事はしっかりこなさなくてはならぬのだが。

「部長、よろしいでしょうか」

「構わん、入れ」

原が部屋の中に入ると、そこでは部長と不破が向き合っており、卵を持ちながら真剣な顔をして向きあっていた。彼らの周りのテーブルには無数の卵の殻や、つぶれたり無事な形を保つ卵が皿に浮かんでいた。

「何ですか、この有様は」

「不破のエネルギー調整の特訓だ。強い力を出すのはいいんだが、日常生活を送る上でこれでは問題だ」

「調整つて、不破、お前ちゃんと戦えてたろ」

「そのはずだったんだ。だが、緒方と任務終了後にハイタッチした瞬間、あいつの掌にひびを入れてしまった。弱い力を出す加減がまだつかめていないみたいだ」

「それで、この卵の山か。しかし、ひどいな。これも経費で落ちるんですかね」

「そこは、俺の腕に任せておけ。もったいないから、基地に詰めている連中の食事は、この卵で済ませてもらうぞ」

「最悪だ。報告書はここにおておきますよ。不破、お前の住居と諸々の問題は、その特訓の後だ。その様子じゃ、ペンでサインもできないだろ」

「了解です、隊長」

不破は、原を見送ると再び新しい卵を滝から受け取りそつと指で支える。角にぶつけて皿の上まで持つてくることに成功した。少しずつ力を加え、最後の作業に取り掛かる。卵の殻がくしゃつという音とともに割れた。

「よっしゃ」

皿の中には、こんもりと盛り上がった黄身がきれいな卵がうかん

で
い
た。

義手とメモリースティック

滝がデスクのパソコンを見ながら腕組みをしていると、部屋のドアが開き不破がコンビニの袋をぶら下げて入ってきた。卵による力の調節のリハビリもだいぶ進み、今では外出も自由になっていたが、まだ一人暮らしは安全上承認できないと言うことで、未だに広大な地下の部屋が不破の専用スペースとなっている。もっとも、不破は地下室と滝の部屋がドア一枚でつながっていることと、話し相手がいらないという理由で、仕事の邪魔をしない範囲で滝のオフィスに入り浸っていた。滝が何かにとりこんでいるのを見て、パテ ションで仕切ると、買ってきたプロレス雑誌などを開いてソファーに横たわっている。中を読んでもみると、当時道場で同じ釜の飯を食った同期がタイトルを防御した記事が載っていて、改めて自分が失われた時間を過ごしてきたか痛感した。少しさみしさで胸が詰まりそうだったが、今は自分は仮面ライダーという誰にも真似できない生き方をしている自負があるので、コンプレックスを感じることはないのだが。

滝曰く、改造人間になった者は、強靱な肉体と繊細すぎる人間の心の折り合いがつかないものらしい。大抵の者は、改造された体の力に吞まれて怪人化するか、稀にその現実を乗り越え崇高な意思によって精神と肉体を融合させた希有な人間が、仮面ライダーになると言っらしい。しかし、不破の場合は自分の意思で生きる道を選択し、恐るべき短時間で肉体に宿る力を制圧したことは驚嘆すべきことらしい。ただ、不破にしてみれば、幼いうちに両親を失い顔も知らない人生は、意識するまでもなく周りに比べればハンデを負っていた。守ってくれる人、手本にする人、尊敬する人、甘えられる人、そういう存在がいなかった。それが普通だった。それを悔しく思ったことはあったが、他人をねたんだことはなかった。幼いながらも「世の中はままならない」ものと悟り、何とかしたければ人より倍

以上頑張るだけでいいと言う、醒めていて子供らしくない考えを持つようになった。それだけに、何か必死に打ち込めるものが欲しい、そう思ったころ古本屋で見つけたのが、孤児院で育った青年が仮面をつけて悪いレスラーと戦い、ファイトマネーを寄付すると言う漫画だった。自分と同じような境遇のキャラも痺れたが、仮面をつけて戦うと言うそのストイックで、ミステリアスでダンディズムを感じる姿勢に、少年だった不破は時代遅れとも言えるほどのめり込んだ。バイトを許可してもらい、稼いだ金でプロレス会場にも通った。「あの仮面のヒーローの様に、弱い人にさっさと手を差し出せるような、強くてイカした男になりたい」

単純かつ明快で、最近では熱すぎる様な心が不破に宿った時だった。高校を卒業するころに合わせて入門テストを受け見事合格すると、施設を出て憧れのプロレスデビューに向けた生活が始まった。集団生活は慣れていたし、何より大好きで目標にしていたプロレスとリングが同じ屋根の下にある生活なのだ。厳しい練習も疲れはしても、面白くて仕方なかった。運動神経もよく、与えられたノルマをこなしていく彼は、期待の練習性として、団体内で評判が高かった。

しかし、好事魔がさし。練習中に受身を取り損ね、頭からマットに落ちた不破は、首を痛め、脳にも後遺症があったのか、軽い麻痺が指に残った。プロレスを続けられるわけがなく退団することになったのだ。目標をなくしたショックはあったが、根底に「世の中はままにならない」という考えがあったので、また何か頑張ればいと考え、肉体を生かしたトレーニングジムのインストラクターをやるうと思いい、それを目指した矢先だった。アパートを出たところから後ろから羽交い絞めにされ、鍛えた体で反抗する間もなく眠らされてしまったのだ。それが、人間としての最後の記憶だった。次に目覚めたときは、体は世界中で五本の指に入るであろうほど頑丈になり、念願の仮面をつけた戦士になっているのが、まるで皮肉であり

洒落でもある。

そんなことを思いながら雑誌のページをぱらぱらと捲っていると、仕切りの向こうから、

「おい、不破、面白いものを見せてやる」

と、滝の声が聞こえた。面白いものという言葉にひかれ、不破は体を起こすと滝のデスクにそばに行ってみる。

「何だい、滝さん。面白いものって」

「これだよ」

滝が机の上に広げたのは、カラフルな色のメモリースティックの束であった。様々な色に識別されていて、側面には何かアルファベットの表記がされている。

「ただのメモリースティックだろ。へえ、結構いいデザインだ。経費でノートパソコン買ったら、少しもらおうかな」

「馬鹿、何が経費だ。俺のカードを勝手に使いやがって。ここでネットショッピングから仮面ライダーの本を買ったのはお前だろうが」

「勉強だよ、勉強。で、これのどこが面白いんだ」

「このメモリーはな、人を怪人に変えるんだよ」

「嘘だあ」

不破はまったく本気にしていない。どう考えても、目の前にあるメモリースティックは、パソコンに記録を保存する、便利な携帯型記憶媒体に過ぎなかった。これが、人を怪人の体に変えるなんて信じられないのだ。

「お前が寝ている間の事件だ。このメモリーに怪人の遺伝子情報を導入し、人体に特殊な処置をすることで受容体を作り情報を流しこむと、情報というソフトと人体というハードが一体になり、怪人が誕生する、こういう仕組みのメモリーが闇ルートなどからばらまかれた事件があつてな。ある一都市が実験場になってしまった。メモリースティックという生活感あふれる媒体が使われたものだったのがたちが悪く、回収に手間取った」

「信じられないな。それも仮面ライダーが関わったのか」

「ああ。体を怪人化するなら、調整次第では超人化もできる。目には目をだ。メモリーを使って仮面ライダーとなつて怪人化して暴走した奴らを止めて、メモリーの破壊や回収に当たった人物がいる。接触はできていないがな。それで、得られた情報を基に仮面ライダーの作劇をテレビで流すように発信した」

「どうしてそんな事件を、わざわざ娯楽作品として流すんだ。こういうのは極秘情報扱いの様な気がするが」

「最重要項目は極秘だ。だが、ある程度公開することで、同じような手口はさせないという警告になる。例えば、ダウンロードコンテンツで怪人化するとか。それを、こちらは情報を押さえているから不可能だと警告することで、芽を摘むわけだ。何しろ、実際にこのメモリーはバージョンアップを繰り返しながら、未だに根絶でないでいる。巧妙に生活に紛れ込むから厄介なんだ」

「なるほどね。まるで、麻薬だな。しかし、色々種類があるなあ。これはコロナか。太陽の炎みたいにかなり熱そうだな」

「発想次第で何でもありだ。ちなみに、これはもう芯を抜いて処置

済みだから、効力はない」

「じゃないと、怖いだろ」

不破は興味深そうに、様々な種類のメモリーを見比べていた。すると、デスクの電話が鳴り、滝は電話を取る。

「俺だ、どうした。何、フロントに客だと。間違はなくアポはある。すぐに通してくれ。それと装備課に注文の品を部屋に届ける様に言ってくれ」

「客か」

「客であり、仲間と言つか協力者だな。会うのは久々だ」

「お邪魔の様だから、俺は部屋に戻るよ」

「いや、構わん。伊達にメモリーの解説をしたわけじゃない。それにお前も会った方がいいぞ。客はお前の先輩だ。仮面ライダーだよ」

「入ってかまわん」

滝がそういうと、ドアが開かれて一人の人物が入ってきた。革のライダージャケットとパンツを着こんだ女性だ。彼女は、デスクの前まで進み滝に向かって手を差し出して、

「お久しぶり、滝部長」

と語りかけた。滝も強く握手しあいながら、

「久しぶりだな。まあ、座れ」

と言って、椅子をさし出した。女性は、部屋の片隅で立っている不破を見つけると、興味深そうに眺めていた。

「滝さん、彼が噂の」

「ああ、そうだ。不破龍雄、コードネームはメテオだ」

「ふーん、メテオね。初めまして、不破君。私は常島由紀、よろしく」

どこか、ふてぶてしい態度で話しかけてくる由紀に、何か引つかる思いはしたもの、それを表に出さず、素直に挨拶を返した。
「はじめまして。仮面ライダーとして後輩になります。どうぞよろしく」

「そんなに気にしないで。体育会系は好きじゃないから。シンプルに行きましょう」

どうも好きになれないタイプだと思いつつ、顔に出ないように椅子に座り、不破は二人のやり取りを黙って見ていることに決めた。
「ここに来るのは何年振りだ」

「10年になりますかね。私、変わってないでしょ」

「言いづらい話題を振るな。武装の注文はできている。お前の注文はいつもハードルが高くて、装備課が泣いている」

「敵は泣き言を聞いてくれないでしょ。それに、今回は注文をこなせるだけの技術があつたわけだし」

「ああ、このガイアメモリのおかげで、お前の要望に応えられる装備ができた。これがなかったら、まあ無理だったな」

「できると思ったから注文して、受け取りに来たのよ。ほら、部屋のノックよ、届いたようよ」

「わかってる。おい、入っていいぞ」

滝の声に迎えられ、白衣を着た男が、手下アタッシュケースを滝のデスクに置くと、そそくさと部屋を後にした。

「開けてもいいでしょ」

「お前のだ、好きにしろ」

「それでは。不破君も見るとどうぞ」

不破はむっとはしたものの、好奇心はどうすることもできず、椅子から立ち上がってアタッシュケースの中身を見てみることにした。由紀は、勿体ぶる様にケースを開け、不破に見せてやった。

中にあつたのは腕だった。と言っても、生きた人間の腕ではなく、金属質な輝きを放つ鋼鉄製の義手だった。

「常島さんが注文してたのってこれですか」

「そう。これよ。私の右腕」

そう話すと、由紀はいきなり自分の右腕をものすごい音を立てながらおかしな方向に折り曲げると、肩から下を引き抜いてしまった。その腕は精巧にできた義手だったのだ。

「よく出来てるでしょ。もう何台目になるかな。ただ、もう時代遅れで、要求に応えられなくて。なあに。そんなにびっくりしたの。」

ま、それだけこれが精巧にできていたってことね。さて、新しいのをつけてみましょう」

不破も、驚いて声を上げることもできない。滝は、相変わらずだなという思いのため息をついている。由紀は、袖をまくり上げ新しい義手を腕にねじ込んだ。金属音が響き、由紀は顔をゆがめながら新しい義手の具合を試している。

「うわあ、なじむまでこれは気持ち悪そう。反応はいいんだけど、接合面が異物感ありまくり。少しぴりぴりするわ」

「帰り際に装備課で微調整させればいい。メーカー保証は効く」

「ありがと。ふーん、思ったより多いメモリーに対応しているのね。これなら、戦闘で手数がなくなることもないし、助かるわ」

「これぐらいはやっておかないと、お前の指摘は戦闘の専門分野だけに、ねちねちしてるからな。装備課も冷や汗もんなんだよ」

「仕事は緊張感を持たないとね。じゃ、装備課に寄って失礼するわ。それとメテオ、今夜暇なら付き合いなさい」

「はあ、どういことですか」

「コードネームで呼んだんだから、任務よ。あんたの戦いぶりも見たいし、新しい義手の試運転も兼ねてね。来なさいよ」

由紀はそういうとケースを持って部屋を出て行ってしまった。あつけに取られた不破は、事情が飲み込めず、滝に説明を求めた。
「滝さん、義手を使うライダーって女だっけ」

「現実と虚構を全く同じにしたら意味がないだろう。現実の姿にずれがあるのは当たり前だ」

「なるほどね。で、あの任務って言うのは。なんか今夜あるんですか」

「うーん、お前を当てるつもりはなかったんだがな。このメモリーがらみの奴でな、横流ししているバイヤーを見つけて、捕捉している。一応、生身の人間だから、お前だと加減がまだ難しい。で、由紀が武器の調達を兼ねて担当するんだったんだが。お前、やり過ぎて相手を殺すなよ」

「まあ、力の加減は慣れてきているから。ただ、あの女はどうも苦手だな。カチンとくるんだが、なぜか逆らう気が失せる」

「そりゃそうだ。お前よりはるかに年上だ。俺と変わらん」

「うそでしょ、どう見たって20代前半でしょ」

「あの女には、色々あるんだよ、不破」

義手とメモリースティック？

都内の某オフィスビルの階下の歩道では、ビルの窓の清掃員が、ゴンドラに資材を持ち込み、作業の準備に取りかかっていた。しかし、清掃員は本物ではなく偽装で、格好だけ変装しているのにすぎない。誰が変装しているかと言うと、一人は緒方、もう一人は由紀である。二人は、ヘルメットに作業服と外見は清掃員と変わりはないが、目的は向かいに建っているホテルの一室を監視することだ。目立たないケースに入れた望遠鏡を取り出して設置し、準備を進めている。そこへ、同じ作業服を着た人間がゴンドラに乗り込んできた。予定外の事態に焦った緒方だったが、その人物の顔を見てほっとする。

「何だ、不破さんか。焦りましたよ、予定外の行動をとらないで下さい。今回は、不破さん抜き作戦ですよ」

「その事なら滝さんに頼んで、俺をねじ込んでもらった。現場も原さんに許可をもらって、少しだけ由紀さんと話をさせてもらうことになってる」

「そうなんですか。じゃあ、席は外しますよ。用が終わったら持ち場を交代しましょう」

緒方はそう言い残し、ゴンドラを降りて偽装車両の中に入っていた。残った二人の間には、妙な空気が流れていて、場所をセッティングしておきながら、不破はうまく話題を切り出せないでいる。そんな彼の心境を見透かしたのか、由紀の方から話しかけてくることになった。

「女性と話をするのにこういう場所はないわね。せめて、コーヒーや紅茶、それにケーキをつけて、静かな席を用意するのが、女と会

話したい男がすべきことよ、新人君」

「すみません。こういう経験をさせてもらえないまま、眠らされていたもので」

「そここのところの事情は知ってるわ。女性との会話のマナーは今から勉強して。もっとも、マナー講座を受けにきたんじゃないくて、私の身の上話を聞きにきたんでしょ」

「わかりますか」

「初めて会って、私の情報を少しでもかじれば、みんな食いついてくる。約40年間、恒例になってるから驚きもしない。隠すのも面倒だから、好きなだけ話してあげるわ」

意外なほどあっさりとした承されると、不破にとっては逆に話しかけづらいものだったが、時間も押し迫ってくる。まごまごしてる場合ではないと腹をくくり、疑問をぶつけてみることにした。

「じ、じゃあ遠慮なく聞かせてもらいますけど、あなたは どうして仮面ライダーに。その経緯が知りたい」

「単刀直入な質問ね、嫌いじゃないわ、そういうの。あたしは、ある組織で働いていた生化学部門の技術者だった。組織といってもろくなものじゃない奴よ。技術部を統括していた人は、とても優秀な学者であり、技術者であり、組織の一員であり、人間としても素晴らしい人だった。でも、すばらしい人間は深い妬みを買う。彼の台頭を危険と見なした勢力は、証拠をでっち上げて失脚させ、粛清しようとした。対象は彼だけでなく、部下である私たち全員。徹底的だったわ」

「そんな肅清から、どうやって助かることが」

「上司の彼は、金を使って内部の人間を買収して脱出し、組織が研究していた仮面ライダーのデータから得られた対ライダー用の強化服を奪回して、私たちを助けに向かった。けど一足違いで、組織から怪人を含めた処刑人がやってきた。阿鼻叫喚ってああいうことをいうのよ。降り注ぐ銃弾、襲いかかる刃物、恐怖の怪人、炎と煙に巻かれる建物、辺りで響き渡りながら次第に減っていく悲鳴。彼が到着し、追っ手を振りきって脱出したときには、生き残りは数名しかいなかった。私も助かることはできたけど、怪人に浴びせられた猛毒のせいで右手を失った」

「それで腕が義手になっているですね」

「毒のせいで腕を切り落とす必要があったから。改造人間用のパーツを使って義手を作ったの。それからの日々は最悪だった。処刑をかいくぐり脱走した私達は、引き続き標的として追われる羽目になった。助けを求めようにも、自分達の研究で人を不幸にして、いざとなれば助けてくれなんて誰にも言えない。身分を偽りあちこちを放浪して逃げ回った。でも、追っ手の手に掛かり、一人、また一人殺されていった。最後に残ったのは私と上司。でも、上司も限界だった。強化服着用の副作用で体はぼろぼろだった。最期は、隠れていた空き家で死んでいったわ。彼は、私に強化服を渡して言ったわ。戦い続けて生きろ。生きて私たちが犯した罪を償い続ける。私たちが生きた証を残し、悪に鉄槌を下せ。それが私と死んでいった者達の遺言だと思え」

「その言葉通りに生きてこられたのは一体何故ですか。何故過酷な道を一層険しくしてまで」

「あの人を愛したから。命がけで、自分や他人をぼろぼろになるまで守って、助けられなかった人の思いを背負い込んで守ってくれた。そんなあの人をみんな好きだった。みんなが愛していたから、生きようとした。愛した人の願いを叶えることで、私は愛されることができる。個人的な理由で申し訳ないけど、仮面ライダーになった理由はこういうこと。愛した人の願いを叶え続けることで、愛されようとする。その人の名前を、自分の名前に組みこんで、その名で生きてまでね。陳腐でしょ」

「陳腐だなんて思いません。寧ろ、人間の感情で仮面ライダーとして生きる道を選んだ人がいた、それに共感します。自分も余りに人間的すぎて、こんな気持ちで仮面ライダーになれるのか、正直引つかかっていたので」

不破にしても、人間らしい意志のまま戦いに身を投じている。それしか今の自分には決意のしようがないのだが、すでに人間ではない自分が、人間臭さが漂う決意のまま仮面ライダーを名乗っているのか、心の内では引つかかっていた。しかし、由紀の愛のためというストレートで人間らしい動機に、少しほっとするとともに、自信を取り戻していた。

「話を聞いてよかった、そう強く思います。人の心のまま戦ってもいいんだと、ようやく踏ん切りがきました」

「信条なんて人それぞれよ。あたしは素直に愛した人に報いたいだけ。ま、人間らしい気持ちを持っていないと、こっちも化け物と変わらないしね。他に質問は。早くしないと、作戦に支障が出るわよ」

「これで最後です。まあ、下世話な質問ですが、どうしてそんなにお若い姿で。とても滝さんと同年代には見えないのは何故です」

「確かに女性には聞きづらい質問ね。ま、これは自業自得。強化服の反動に対応するために、ドーピングに手を出したのが始まりよ。元々の専門が生化学、表の世界のドーピングと訳が違うレベルで使ったの。強化服の性能と相まって、改造人間と互角に戦う力を得ただけで、それだけじゃ済まなくてね。次から次へと生えてくる悪の芽を摘み続けるために、肉体を最高の状態に保つ必要があつて、老化を遅らせるホルモンを合成した。ただ、薬剤漬けの体には危険が大きすぎて、老化が遅いどころか、老化しなくなってしまった。まるで、ルブランのカリオストロ伯爵夫人のリアルな奴ね。お陰で、殺されない限りは死ねない体になつたし、女の機能もなくなった。もっとも、組織での研究で多くの人に災いを振りまいた手前、これくらいでないと帳尻が合わないけどね。どう、疑問は解けた、メテオ」

「充分すぎるほどに。俺みたいな若造、まだまだ甘いことを痛感しました。この道を行くなら、もっと覚悟を持たないといけないかもしれない。ところで、今日の標的の詳細は」

「あら、聞いてないの。今夜、あのホテルに滞在する男よ。彼は、ガイアメモリのバイヤー。検拳のついでに、私の義手に使うメモリーも調達するはずだったんだけど、組織のメンバーを押さえたものの、彼は逃走。外国に高飛びしようとした情報を入手して、滝さんに協力をお願いしたの。メモリーを持っている以上、彼は怪人の能力を持っているに等しい。周りへの被害を防ぐには、一人じゃ無理だから、人手を借りたの。でも、あなたも参加するなら、少しは楽しみもできそうね。見てみたいわ、新人君の活躍を」

「足を引っ張ることだけはしないようにしますよ。それでは、今度は作戦中に会いましょう」

「それじゃ」

二人は別れると、由紀は緒方とともにビルの窓清掃に変装して、外から向かいのホテルの一室の監視を始めた。不破は、偽装したトラックの荷台に乗りこんで待機になった。荷台の中は様々な機材が並び、現場での戦闘指揮を執るのに十分な状態を整えている。お国椅子に座って、モニターを観察していた原が不破に気がつき、ファイルを手にして近づいてきた。

「お前が作戦に参加するとなって、正直ホッとしている。経験の少なさで部長は見合わせるように言ったんだが、現場としてはいてくれた方がいい」

「こつちから頼んだ以上はへまなんかできない。遠慮なく注文してくれ」

「お前の任務は標的であるバイヤーを部屋から引きずり出し、外におびき出すこと。これが一点だ。相手はメモリーを使用してくるはずだから、かなりの抵抗がある。お前じゃないとまともに相手にできないだろう。生身の人間で怪人を誘導することを想像してみろ」

「ぞつとするな。いいよ、やってやるさ」

「出来れば、ホテルの施設は無傷にしてくれ。さすがにその隠蔽をやるのは骨が折れる」

「ま、まあ任せてくれ、何とかする。多分」

「廊下の防犯カメラなどは、こつちで細工して映像を差し替える。宿泊客は部屋を完全ロックしてしばらく出られないようにする。一般人を巻き込むなよ。お前は相手を非常階段に向かうよう追い込め。」

階段には狙撃部隊を配置してあって、敵が屋上に向かうようにしてある。後は屋上でお前と彼女の舞台だ、好きにやれ。妙な手加減はするなよ。生身の人間とは言えメモリを使えば超人だ。それに、ダメージは最終的にメモリに負荷となつて流れ込むから、人体への影響はそれほどではない。せいぜい、灸を据えるのにちょうどいい程度だ」

「わかった。作戦の決行は」

「20時だ。時間になったら、こつちから指示をまた出すから、少し休んでろ」

義手とメモリースティック？

午後八時。作戦とともに、ホテルのフロアのエレベーターのドアが開く。中からは、ホテルの制服を着込んで変装している不破が出てくる。確かな足取りで向かうのは、ガイアメモリのバイヤーが宿泊している部屋だ。捕り物の騒動がホテルに発覚しないように、防犯カメラの映像は差し替えられ、原たちが監視できるように調整されている。部屋のロックもされていて、他の客が廊下に出られないようになっている。無論、電話回線も押さえられていた。

準備が整った状況で、後は不破のさじ加減次第だ。緊張が体中に走り、この後のことを想像させるが、とにかく一步前にでなければならぬ。始まらないし、失敗に終わる。意を決して、ドアをノックする。

「お客様。お休みのところ申し訳ありません。よろしいでしょうか」

「何だ」

部屋の奥から、男が返事をよこした。予定通りの展開のおかげで緊張がほぐれ、次の言葉がなめらかに口から出てくる。

「フロントで、お客様宛のメッセージをお預かりしています。伝言ではなく、お客様に直にお伝えして欲しいとの要望でしたので、メッセージカードをお持ちしました」

餌は撒いた。問題は獲物が食いつくか。このままドアを破って突入する方が、不破にとっては簡単だ。しかも相手が生身の人間ならなおさらだ。だが、相手はその気になれば、宿泊客を全員人質にとれるだけのツールを所持している。やはり、原隊長のたてた計画に沿った行動で間違いはない。そう考え、相手の出方を待っていると、部屋の鍵を解除する音が聞こえてきた。ドアホールからこちらの気

配を察知されないように、ホテルマンになりきって、ドアが開くのを待つ。鍵が開くと、チェーンロックをかけた状態のままドアを開けて、その状態のまま手を出してきた。餌に食らいついた相手に集中し、偽のメッセージカードを渡す。恐らく、取引相手や、バックにいる存在からの伝言だと思っっているのだろう。

「こちらになります」

カードを手に渡すのと同時に、不和のもう片方の腕は、チェーンに指を引っかけ、軽く力を入れて引きちぎった。そのままずっとドアを押してこじ開け、バイヤーにつかみかかろうとする。ここで押さえれば作戦は終了になる。しかし、相手も犯罪の世界で商いをし、法の網をかいくぐって生きてきただけのことはある。不破の不意打ちを素早い身のこなしでかわすと、もう片方の手に握っていたガイアメモリを起動した。ホテルマンの訪問すら信用しない用心深さは、この男が本当のプロである証である。黒い配色のガイアメモリのボタンを押すと、起動の合図として音声が流れてきた。

「JOKER」

バイヤーは、起動したガイアメモリを首筋に差し込んだ。メモリが体の中に侵入するに従って、次第に肉体に変化が始まる。筋肉質で引き締まったから打破より発達し、黒光りする体はしなやかさとたくましさを兼ね備えている。その体とは不釣り合いに、顔には満面の笑みが浮かび、相手をあざ笑うようであり、自分自身も嘲り笑われるような道化のような顔をしている。

奇妙な姿は、一瞬ではあったが不破の心に隙を生んだ。怪人は、奇妙な構えから信じがたい速度の蹴りを繰り出し、不破の腹部をとらえた。改造された肉体だから、廊下に放り出されるくらいですが、生身であれば肉体が木っ端みじんになる勢いだった。息を詰まらせながら、不破は自分に課せられた作戦を思いだし、ここからが本当の勝負だと気を引き締める。

「なかなか強いな。こうなったら手加減は無しだ。変身っ」

すぐに変身したメテオの前には、アタツシケースを持って逃亡を図ろうとするジョーカードーパントがいる。ガイアメモリで人間が一時的に怪人化した形態がドーパント、メテオの記憶が視覚化され、視界に表示される。その情報を片隅に起きながら、メテオは、ジョーカーが非常階段に向かうように戦わなければならない。階段は、自分の後ろ。位置を入れ替えなければならない。まずはそれを悟られないように攻撃を始める。パンチのコンビネーションで相手を引きつけるが、ジョーカーは身のこなしが軽く、最小限の動きでパンチをよける。その上、片手にアタツシケースがあるためか、手を使わずに足だけで反撃をする余裕まで見せるから腹が立つ。本気で行きたいところだが、壁一枚隔てた所には宿泊客がいる。メテオは冷静さを保ち、フエイントを入れて水面蹴りを放った。足元を払われ、ジョーカーは倒れ込んだ。そこにメテオはわざとよけやすい攻撃を入れた。当然、ジョーカーは簡単に交わすが、これによって理想的な位置に入れ替わる。

この状態なら遠慮は無用、メテオは次第に相手を追いつめていく。しかし、格闘能力に特化したメモリーの力は侮りがたく、倒立の状態から切り裂くように繰り出された蹴りは、メテオの装甲を削る威力があつた。倒れ込んだメテオにいやな笑みを向け、ジョーカーは非常階段への扉を開けて姿を消した。

「すげえ蹴りだ。まったく、冗談はあの顔だけにしてもらいたいね」

メテオはそうこぼしながら、自らも非常階段へ向かった。階段では下方から、数人分の足音が近づいてきた。階下にジョーカーを向かわせないための部隊だ。

「メテオか。黒子は上に向かわせた。あとは俺達には手が余る領域だ。」

「了解。遠慮抜きで行くよ」

メテオは隊員たちに見送られ、屋上へ向かっていった。

ホテルの向かいのビルの屋上では、緒方と由紀がホテルの状況を監視していた。彼らの許に、無線機からホテルに展開している部隊からの連絡が入ってくる。

「黒子は屋上に向かっていて。メテオも追跡中。そちらも準備を」

「了解。由紀さん、出番ですよ」

「OK。それじゃ始めましょう」

由紀は立ちあがると、作業着を脱ぎ捨て、その下に着込んでいた戦闘用の強化服をあらわにした。メテオが装備している最新型の装甲とは何世代もの差がある古いタイプだが、それでも世界中に存在する怪人と戦うに値するものを持っている装甲の数少ない一品だ。さらに、彼女は袋からヘルメットを取り出して装着すると、戦闘服が起動してより硬度を増し、身体能力も補助的に高める。仕上げるに、身体能力増強用の薬品が入ったアンプルを取り出し首筋に注射した。これで、由紀は戦闘態勢への移行を完了した。

「薬品使うつて言うのは、リスクが多そうですね」

「まあね。それでも反動は抑えてある、私自身の特製よ。じゃ、行ってくるから」

由紀は、腰のバックルからメモリーを取り出すと、右腕の挿入口の差し込んだ。

「OCTPUSS」

ガイアメモリを応用した義手は、そのメモリーに記録されている情報によって義手の形状や材質を分子構造から変換し、タコのような軟体の形状に形を変えた。由紀は、右腕を思いっきりふるうと、伸縮性を持った腕は、ホテルの屋上まで伸長し、腕についている吸盤がコンクリートにびったりと張りついた。腕の収縮力によって縮み始め、由紀の体をホテル側に一気に引き寄せて行つた。緒方は、そのオーバーテクノロジーによる仮面ライダーの戦力に舌を巻いて見送った。

「すげえな、あのメモリーは。そして、あの人が4号ライダー、コードネームがライダーマンか」

ライダーマンは、伸縮する腕に引つ張られる様にしてビルの間を飛び越え、ホテルの屋上に到着した。そして、非常階段の入口に向かって歩きながら、ガイアメモリを装填し直す。

「POWER」

電子音とともに腕が巨大な万力の形状に変化する。その万力を扉の前で構えていると、絶妙のタイミングでジョーカーが扉を開け放つて飛び出してきた。ライダーマンは、その体を万力で挟み込むとギリギリと締めあげた。突然動きを封じられたジョーカーは為す術がなくなつた。そんな彼にライダーマンは遠慮せず左手の拳を打ちこんでいく。戦闘服の補助と薬剤のドーピングによる身体強化で撃ちこまれるパンチは、ドーパント化した相手にとつても十分効果を發揮している。さらにラッシュをかけようと力を込めた瞬間、抵抗が右腕に伝わってくる。ジョーカーは力任せに万力をこじ開け、拘束を解いてしまった。ジョーカーの身体能力向上も負けてはいない。自由を取り戻すと、全身を躍動させて反撃に出る。一時的に強化してあるとはいえ、生身の部分が多い以上、メテオに比べると耐久力が低いライダーマンは、相手の攻撃を不用意に受け

る事を避け、相手との距離を広げる。戦闘は右腕の義手の性能に依存しているのだ。相手の素早い動きに合わせるため、兵装を換装させる。

「SWORD」

右腕を巨大な剣に変えて、再び相手を攻め込もうとする。しかし、相手の体の強化はかなりのもので、直撃しても傷を負わせることはできない。やがて、太刀筋を見切られ腕を受け止められて攻撃を封じられると、ジョーカーはライダーマンの腹部に何発もケリを打ちこんでいく。生身の肉体には、かなり危険な攻撃だ。意識が飛びそうになり、ばやけて行く視界の中にメテオの姿が飛び込んできた。メテオは跳躍し、その勢いのまま体当たりしてジョーカーを吹き飛ばす。

「お待ちせしました、先輩」

「女性を待たせるなんて、ほんとデリカシーがないわね」

ダメージが大きく、彼女の声は息も絶え絶えだ。そんな状況でもユーマアを忘れないのは、さすがは歴戦の戦士、伝説の仮面ライダーの余裕と貫禄だ。

「お詫びに後は俺が引き受けるんで、休んで下さい」

「なら、相手に遠慮は無用よ。最終的にダメージの大半はメモリーに負荷となって送り込まれる。素体となってる人間が死ぬことはないわ。少し痛い思いはするけどね」

「それ聞いて安心しました。おらおら、タッチで選手交代だぜ」

メテオの攻撃が始まる。遠慮は無用という条件が氣を楽にし、動きが予想以上に軽い。ジョーカーも攻撃を加えてくるが、いくら当

ててメテオの勢いが衰えない。ダメージを感じない相手に戸惑いを覚えたジョーカーの攻撃に乱れが生じ、隙が生まれる。それを逃さず、メテオの肘が顔面にワンツーで鋭角につきささる。衝撃と痛みで脚がもつれたジョー化は、ひざから崩れ落ちた。

「闇雲に殴っても意味ないぜ。打撃用の受身つてあるんだよ。お前の攻撃は全部衝撃を受け流したから、痛いだけで何ともなかったぜ。痛いのは我慢すりゃいいからな」

「貴様……」

「こんな怪人化させるツールを世間にはらまこうなんて、少しふざけ過ぎだぜ。覚悟しな」

「逆だぜ、若造。欲しがる奴がいるから、俺らが売りさばくんだ。需要と供給なんだよ、この資本主義の社会は。俺みたいな悪は必然の存在だ。必然の悪を一人捉えたところで何もならないぜ」

「言い訳すんじゃない。お前みたいな悪い奴ほどよく喋るんだ。真面目な奴は寡黙に生きてるんだよ。まだ懲りねえんだな」

「若造に説教される覚えはないな」

二人は再び相手を攻撃し合う。しかし、自分に搭載されている高性能の電子頭脳を駆使し、完全に相手の動きを見極めたメテオは、ジョーカーの繰り出す技を余裕でかわしていく。次第にスタミナを失い、ジョーカーの動きが鈍ってきた。すると後ろから、叫び声が聞こえてきた。

「あなたの相手は二人、ハンデキャップマッチだつていうのを忘れたわけじゃないでしょうね」

体力を回復させて再び立ち上がったライダーマンは、新たなメモリーをちらりと見せると右腕を装填させた。

「BURNER」

彼女の右腕が巨大な炎放射機に変形し、大火力の炎をジョーカーに浴びせた。炎に包まれたジョーカーは熱さによるダメージと酸欠によって、身動きが取れなくなった。

「行くわよ、メテオ。フィニッシュを決めるわよ」

「いいぜ、先輩」

メテオはジョーカーの体を抱えたまま飛びあがり、ジョーカーの体を空中で放すと自分はさらに上昇した。落下してくるジョーカーめがけてライダーマンは右腕を構え、最後の変形を起動させた。

「GATLING」

重武装のガトリングガンに姿を変え、重工の狙いを定めると、一斉掃射を開始した。見事な制度でジョーカーに銃弾が着弾していく。かなりのダメージがジョーカーに加わるが、それでもメモリーと靱帯の接続がカットされない。そこにメテオが上空から矢の様に降下してくる。すでに、バツクルを作動させ、フリーズモードが起動している。

「これで終わりだ。アイスブレーカー」

メテオの必殺技のアイスブレーカーが発動され、凍結と衝撃がジョーカーを貫き、バイヤーの体からメモリーが排出され、過負荷によって崩壊させることに成功した。メモリーさえなければ一人の弱い人間、しかしメモリーを手にすると、心も体も人であらざるものにいつも簡単に変えてしまう。こんなものが世の中にばら撒かれていると思うと、ぞっとする思いだった。

「俺の相手は怪人だけじゃないんですね」

「そうよ。怪人を製造するのは様々な組織や存在だけど、彼らを生かし、力を与えるのはこの社会。何が自分の相手かよく考えてね。でないと、あなた自身が社会の、人類の敵になるから」

「肝に銘じます」

「それじゃ後の方はよろしく。私はシャワーでも浴びて休んでからすぐにおさらばするわ。また会えるといいわね、メテオ」

「先輩もお元気で」

次の日、不破は滝に呼び出されていた。滝の部屋に顔を出すと、色々な荷物がデスクの上に置かれていた。それらを、滝は仏頂面で見つめている。

「何ですか、この山は」

「何ですかじゃない。全部お前の注文の品だ。ノートパソコン、電子書籍リーダー、紙媒体の書籍類。全部おれのカードで買いやがつて。お前への手当てから差っ引いておくからな」

「まあ、それはいいですよ。ん、これは」

不破は一つの包みを見つけた。そんなものを注文した覚えはなく、一体何か手の上で調べてみたが、よくわからない。

「こんなの注文した覚えはないけどなあ」

「それは由紀からのお前へのプレゼントだ。誕生祝い、就職祝いだ

「そつだ、仮面ライダーとしてのな」

「由紀さんからのプレゼントなんて驚きだな。一体、何だろ」

「ショッカー基地から運び出したお前用の装備のための品物だ。システムにロックがかかっていたり、未完成な部分を、あいつが手を加えておいたらしい。今後ともお前が使うものだから、自信の持てるものになっているとのことだ。近いうち、お前に支給される」

「ありがたいね。礼も言いたいけど、もう行つたんだろうし残念だな」

「礼が言いたきゃ、今後も死なないことだ。同じ世界で生きていれば、その内に会える」

不破は、永遠の美しさを保ちながらどこかで戦い続ける、女戦士の顔を遠い目をしながら思い描いていた。

口数の多いパートナー

滝和也をトップとする対秘密結社実力行使部隊、通称「零部」の本部兼基地は、東京都新宿区にあるホテルに外観を偽装している。無論ホテルの機能も備えているのだが、部屋のほとんどは部員の宿舍、資材の設置などに割かれており、一般人はその機能を知ること、特定のフロアには足を踏み入れることもかなわない。強固な謀議システムにより、一般人に危害が加えられないようにしながら、法律上存在しない独立遊撃型の武装集団は、木の葉を森の中に隠すように、都内の一等地に身を潜めているのだ。

不破は、いちいちここに足を運ぶのが面倒に思えてきたので、ホテルの一室を住居として構えるようになった。顔馴染みができて、まあまあ居心地がいいのと、不測の事態があつた時に駆けつけやすい利便性を考えれば、当然の結論だった。

その日の朝も、眠る必要がほとんどない特別な体のこともあって、深夜テレビの観賞やゲームをしながら朝までの退屈な時間を潰しながら朝を迎えた不破は、ホテルのレストランに朝食を取りに向かい、手早く済ませるとフロント階に降りた後、秘密のエレベーターに乗り替え、指令室や武器開発から情報分析まで幅広く行う科学資材班、日本トップクラスのスーパーコンピューターが設置された広大な地下施設に下りた。最下層には、滝のオフィスや不破専用の訓練用の部屋がある。いつもはそこに詰めて、過去のファイルを頭にたたき込んだり直接脳にデータを流しこんだり、まだまだ能力が眠っていると言われる体の鍛錬を行って一日を過ごしている。その日もいつも通りの日課をこなそうと歩いていると、この部署で最もスーツの似合う男と言われている、科学資材班主任の吉村浩二が不破に声をかけてきた。

「やあ、お早う。不破君。今日も出勤が早いねえ」

「まあ、通勤時間がゼロですからね。一番遅いとばつが悪いですね」

「まったくだ。それはそうと、今日は君に支給される物があるから、九時にはいつもの君の部屋にいてくれ。滝部長も立ち会うことになる」

「いいですけど、何がもらえるんですか」

「それは、その時のお楽しみだ。時間だけは覚えておいてくれ」

吉村はそういうと自分のラボへ入っていった。不破にとっては、この零部で緒方に次に親しい人物が吉村だった。もともと、メテオの体のメンテや情報の吸い上げと言う仕事がある吉村と一緒に時間の方が長いせいだが、どうもメテオの体に強い興味があるらしく、興味本位の視線を感じることがあり、決して悪人ではない人なのはわかるのだが、今いち苦手な意識が不破の中にくすぶっているのは確かだった。

それでも、「支給品」があると言うからには任務に関係あることなのだろう。その時間が来るまでの間、不破はいつも日課にしているトレーニングを終わらせることにした。改造人間の出力を考えれば、単純な筋力アップによる力の増大は必要ない。ただ、スポーツの世界にいた不破にとっては、力だけで強さが決まるわけではないことを重々承知している。どれだけ力が強くても、それを使いこなす体を確実にコントロールできなくては戦いで優位には立てない。体に柔軟性を持たせ、自在に力の出し入れをすることで俊敏な動きを持たせることで、より効果的な身体能力を発揮して強さを引き出せる。じっくりと地味な運動を反復させることで、細部にわたる筋肉に負荷がかかることで、筋力の最大値を少しずつ上げていく。歩行で出来るギリギリのスピードで歩き続けることで、同じような効

果を上げるとともに、力の強弱を身につけて、体がしなやかに、柔軟性を持って動けるようになる。とにかく、自分のものになっているように、大半は作りかえられた肉体を自分のものにしなければ、この先必ず壁に当たる事は避けられない。それに危機感を持ちながら、不破は毎日地味なトレーニングを続けていた。

やがて、オフィスに出勤してきた滝が、不破の所にやってきた。トレーニングをしている不破の姿を見ては、思い出し笑いをこぼしている。

「お前の姿を見ていると、昔が懐かしいよ。俺としては、会議室の椅子に座って書類を睨めているより、お前と一緒に体を鍛えて、汗でも流している方が性に合うんだがな」

「滝さんがかい。何とかの冷や水って言うよ。無理しない方がいいぜ」

「馬鹿もん。それでもインターポールにいたんだ。しかも現場担当で、秘密組織にアタックをかけたり、仮面ライダーと一緒に活動したこともあるんだ」

そう言えばそうだと、以前読んだファイルで滝の経歴を思いだしていた。記憶を探る思考が、電子頭脳に伝わり、そのファイルを持ちだしてきた。滝が最初に接触した組織が、不破を改造した組織と同一系統であるショッカーだった。そして滝は、その組織を追ううちに仮面ライダーと接触して、秘密裏に共闘している。

「通常任務の捜査だけじゃないんだぞ。怪人や肉体強化された戦闘員ともやりあうんだ。鍛えていないと怪我だけで済まないからな。おまけのライダー達の特訓に付き合う羽目になったのはまずかった。こっちは生身、向こうは強化された体だ。冗談を知らない熱血バ力が相手だったからな、こっちは命懸けだよ」

「まあ、そつだよね。でも、確かに、歳の割には滝さんって引き締まってるし」

「歳の割は余計だ。それはそうと、お前への支給品、なかなかご機嫌な奴だぞ」

「一体何ですか、その支給品というのは」

「見ればわかる。仮面ライダーには必需品だからな。お、吉村がその支給品を持って来たぞ」

滝が指さすと、大扉が空き、吉村が一台のバイクを手押しの状態で不破の所に運んできた。おお、と不破はため息を漏らし、吉村が運んできたバイクを色々な角度から見まわした。運ばれたバイクは、デュアルバーパスにカテゴリーズされるもので、以前彼が読んだバイク雑誌に乗っていた、BMWのR1200GSに酷似している。

「うわあ、BMWだよ。ほんとにいいの、これ使って」

「いいも何も、君の専用機だ。これと君、1セットで完璧な戦力になる。外観は君も知っているようだが、R1200GSが基礎フレームになっているが、エンジンはショッカー特製のエンジンだ。それプラス、この偽装した追加マフラーがブースターロケットになってマシンを最高400キロまでは加速させるようになっている。この前、常島さんがきただろ。あの時、彼女に義手の引き渡しの条件に、このマシンの修復をお願いしたんだ。君の救出作戦の時に仕掛けた爆弾、あれの直撃を受けて未完成だったこの機体の結構な部分が破損していたんだ。部長、我々は便利屋じゃないんですから、機材にはデリケートに扱って下さいよ」

吉村の指摘に、さすがにばつが悪そうな表情を滝は顔に浮かべた。不破も、一つ爆発の場所が狂えば自分もお陀仏だったかもしれないと思い、少し背筋が寒くなる思いだ。

「まあ、何とか補助動力のエンジンは修理できたが、メイン動力の高性能イオンエンジンのスペックに技術が対応できないので、彼女に任せたんだが、身の程以上の技術を持つのは危ないと言って、プロテクトをかけられてしまった。修理が必要なら呼べと入ってたがね。修理できる奴はいないよ、大気圏内で使用できるイオンエンジンなんてあり得ない技術なんだから」

「言わんとすることは理解できますけどね。それにしてもイカスねえ、このバイク」

「どうせ乗るなら、カッコいい方がいだろ。そう思ってたね。だが、こいつの特徴はこれだけじゃない。目玉はこれだ、おい、もうしゃべっていいぞ」

「あー、待ちくたびれましたよ、吉村博士」

不破はさすがに驚いた。何とバイクが言葉を喋り、スタンドなしで自立して身をよじったりしているのだ。目を点にしてバイクを見つめていると、そのバイクの方からこちらに寄ってきて、話しかけてきた。

「君がメテオか。登録しておくよ。これからは君と僕とで一つの戦力だから、その所よろしくね。あれ、さすがに驚きましたか」

「何で、バイクが喋るわけ」

「なんでって言われても、生まれた時からそうだからとしか。博士、説明してあげてください」

吉村は、バイクに博士と言われるのがくすぐったいのか、少しばかり嬉しそうな表情を浮かべ、バイクのそばに立ちながら不破に説明を始めた。

「高性能イオンエンジンの修復とともに手間がかかったのが、このバイクを自律思考型マシンたらしめるＡＩの搭載だ。この設定に非常に手間がかかって、エンジンよりむしろこのＡＩの設定に常島さんに骨を折ってもらった。色々プログラミングしてもらったが、初期設定の性格付けは彼女の趣味なのかね、実にご機嫌ない子になっている」

「俺には、少し生意気に思えますが。これから作戦の度に、こいつが俺に指示を出すんですか」

「指示なんてとんでもない、助言だよ、メテオ。その場に応じた適切な情報と助言を与えるから、安心してしっかり動いてね」

「ほら、言葉の端々に毒がある。由紀さんの性格がよく表れているよ。まあいいよ、俺とお前でコンビを組むんだ、よろしくな」

「よろしくね、メテオ。うーん、君がメテオなら僕は何だろう。僕は誰」

「誰って、人じゃねえんだから。だけど、こんな口数の多い奴を、名無しで済ませるのみな。名前ぐらいつけてやるか」

そこで三人でバイクの名前を考えることとなった。人の名付け親になるなら色々考えるところだが、相手はバイクだ。そう思いながら手軽に考えているのだが、相手は自律思考の上、口数が多いのだ。やりづらいことこの上ない。

「仮面ライダーのマシンだから、懐かしの風からイメージをとるパターンで、ウィリーウィリーとかはどうだ」

「部長、それ、安易」

「俺がメテオだから、シューティングスターはどうだ。インパクトあるぞ」

「メテオ、プロレス技からとったね、浅はか」

「速いんだから、韋駄天はどうでしょうかね」

「うーん、何だか固いなあ」

いちいち茶々を入れるバイクに腹が立つのだが、それが適切だから人間は文句を言えない。このようなAIの性格設定をした人間の顔を思い浮かべながら、口数の多いマシンの名前に頭を悩ませている。しばらく考え込んでいると、はっと気がついたような顔で吉村が口を開いた。

「これなら文句は言わせないぞ。ジョン・ヘンリーはどうだ」

「まるで人の名前みたいですな」

「そのとおりだ。アメリカの黒人鉱夫がモデルになっている神話に近い話なんだが、蒸気ハンマーと掘削の競走をしてその鉱夫が勝利したと言う伝説を残している。使役される立場に負けない伝説を残しているわけだ。もう一つは競走馬の名前だ。ジョンヘンリーという馬は、何度も故障しながらそこから這い上がり、何度もチャンピオンになった。お前はこれから戦場に出るわけだが、そんな逆境に負けない強さを持つて欲しい。それができる知恵をお前は持つてい

るんだからな」

「ジョン・ヘンリー……。うん、カッコいいね。ありがと、博士。それで決まり、いいよねメテオ」

「いいぜ、ヘンリー。じゃあ、早速だが試乗させてもらうぞ。いつ、出勤命令がかかるかわからないし、その時はお前の初陣だからな」

「じゃあ、僕の背中にまたがって。振りおとされないでよ」

不破はヘンリーにまたがり、広い地下室の中で試乗を始めた。自動操縦も可能ではあるが、やはり鉄騎兵との意思に従ってこそ騎馬の力は生きるのだ。不破と口数の多いパートナーは、時を忘れて絆を築こうと必死に走り回っていた。

口数の多いパートナー？

ヘンリーを乗りこなそうと、昼から夕方にかけて不破はずっとヘンリーに跨りっぱなしだった。元々バイクが好きだったこともあるし、ヘンリーの基礎フレームになったバイクのデザイン性もあって、気持ちよく乗っていられる。一人と一台でワンセット言うだけあって、不破の捜査とヘンリーの自立した思考が非常に相性良く結び付き、抜群のコンビネーションを発揮できるのだ。出来れば、早く公道で乗りたいところだが、勝手に外に出て行くわけにいけないので、地下室でひたすら練習を繰り返していた。そこへ、滝がオフィスからやってきた。原も同行しているので、不破はキナ臭いものを感じ取っている。

「何だか、深刻な顔をしているところを見ると、事件かな」

「その読みは当たっているな。緊急事態だ、原、説明してやれ」

呼ばれた原が前に進み出て、不破にプリント用紙を差し出した。
「一時間ほど前だ。夕方五時ごろに、渋谷で衝突事故があったんだが、どうもそれが妙なことがあって、渋谷署で騒ぎになっているのを嗅ぎつけたんだ」

「交通事故にどうしてここの部署が乗り出すんだ。黒子関連なのか」

「そういうことだ。その写真を見てくれ。車がコントロールを失う前に、何かに弾かれた様な動きをしている。その上、事故現場から数十メートル以上離れた所にスモールランプの破片が落ちている。そうすると、透明な障害物に接触したことが原因としか考えられん」

「透明になる能力がある奴もいるのか」

「数体のタイプが確認されてファイリングしているが、透けているんじゃない」

「めんどくせえなあ」

敵が見えない以上対策が立てられないし、何より相手の位置がわからない。これでは、こっちは何か事件や事故が起きるまで、相手の痕跡を追うことができないのだ。

「姿が見えないだけなら、サーモグラフィーとかは使えないの」

「それで発見できればすでにやっている。人混みが多い中で、数に限りがある熱探知機を設置するには数も場所も限定される。渋谷のどこに目をつけるか、それを考えると現実的じゃない」

「じゃあ、俺の目を使えばいい。熱探知の機能はある」

「それは検討した。だが、その能力はメテオの状態の時しか使えない。セーブ状態である今のままでは機能しない。その上、お前を変身させたまま、渋谷の人ごみの中に放り出せるか。言い訳はどうする。アトラクションやコスプレ、テレビの収録ですともいうか」

「確かにそうだけど、悩んでいる内に見失ったら、被害はまた増えて行くぜ」

敵の目的はわからないが、雑踏の中に強大な力を持つ存在が紛れ込んでいるのだ。それだけでも十分危険なことだ。しかし、その敵を確認する方法がない以上、メテオも零部も無力な存在になってしまう。

「あのー、バイクに発言権はありますかね」

ヘンリーが恐る恐る会話の中に入ってきた。事態が事態だけに、いちいち相手にするのも面倒なので、あまり真に受けて話を聞く者はいない。

「言いたいことがあるなら、さっさと見え」

「ありがとうございます、隊長。あのですね、僕の機体に組み込まれている機能に、イリユージョン・ステルスというものがあります。ステルスというからにはレーダー感知されないのは当然ですが、イリユージョンの名の通り、この機能は少し変わっています。まず、このステルスはレーダー探知だけでなく、視覚探知不能、つまり光学迷彩機能を持っています。もう一つ、このイリユージョン・ステルスは僕に搭乗するメテオの外殻、つまり装甲部分に連動させることができるので、僕に乗ってさえいればメテオの姿は第三者には探知されません」

「本当か。それができるなら……」

「メテオの目を使いながら、その姿を探知されない状態で捜査作が広範囲でできます。メテオの映像を僕のAIに送ってくれば、即座に分析して敵を探すこともできますよ」

ヘンリーの多機能ぶり、そして冷静な能力と状況判断に皆が舌を巻いていた。もはや、バイクという装備ではなく、立派な隊員として見なければいけない、そんな風に皆考えていた。

「よし、そうと決まればすぐに出る。原さん、そっちでも捜査は続けてくれ。俺は地上から敵を探す。さて、お前の初陣だな、行くぞヘンリー」

「OK。では滝部長、原隊長、ジョンヘンリー、出動します」

「お、おう」

滝と原は、何とも言えない面持ちで一人と一台を見送っていた。ぐうの音も出ないほどの、ヘンリーの冷静な説明や提案にたじたとになり、苦笑いを浮かべるしかなかった。

「新人は、なかなか有能だな。あれ以上の働きが望めないなら、原お前の部隊の給料を見直さんとな」

「勘弁して下さいよ」

そんな二人を後にして、不破とヘンリーは地下のエレベーターに乗り込む。不和はバイクにまたがり変身を終わると、自分とヘンリーに搭載されるAIをリンクさせ情報を共有させた。

「メテオ、イリユージョン・ステルスを展開したら、そのまま車道をつつ切るよ。渋谷区に入ったら操縦はこっちに任せて。メテオは黒子の搜索に集中してかまわないよ」

「頼むぜ、相棒。ステルス起動だ。飛ばすぞ」

「了解」

音もなくイリユージョン・ステルスが起動され、メテオとヘンリーの体が透き通っていき、肉眼で確認できないようになった。見えない体に戸惑いながらも、メテオは扉が開くと同時にマシンを前進させた。ほとんど音も立てずに走り出し、地下駐車場をぬけだし、街に出るメテオとヘンリー。しかし、透明化した彼らの姿は、道行く歩行者や渋滞の中にいるドライバーの視界には入らない。メテオも自身の体を見ることができない中、周りの景色だけが動いていくのでなんだか気味が悪い感じがする。

「自分の体を見ることができないままバイクを飛ばすのは、何だかおっかねえな」

「大丈夫。君の体なら、何かにぶつかってもぶつかった方が大破するよ。僕のボディも、そこらへんの車だったらぶつかっても、傷一つつかずに済むから安心して」

「なおさら怖いよ。急いでいる時に限って、信号に引っ掛かるなあ」

「緊急事態だ。行こう」

ヘンリーは勝手に主導権を取って発進し、車の隙間を縫って赤信号の交差点を割ったってしまった。わずかの差で車を交わしていたが、乗っている方は生きた心地がしない。

「馬鹿野郎、勝手に動かすな。渋谷に行くまでは俺が運転する。赤信号の意味もわからねえのか」

「緊急事態だからだよ、仕方ない」

「緊急車両じゃないんだ、見つかったらアウトだぞ」

「メテオ、僕らは今、見えなんだよ」

「あ、そうか。じゃあ、ぶつからないように補助するだけでいい。車や歩行者がいたら、ブースターで飛び越えろ」

「了解」

メテオはアクセルを吹かし、一気にスピードを上げる。自身の視覚で周りの動きをいち早く察知するだけでなく、ヘンリーの頭脳で

突発的な交通状況を察知し、車の間を縫い、歩行者をブースターロケットで飛越して、一気に渋谷区に入った。ここからは、メテオは怪人の捜査に集中し、ヘンリーは自立して操縦することになる。

「ヘンリー。ここから先は通常の交通ルールに従え。出来るだけ広い視野をじっくり見渡すからな」

「わかった。メテオの頭脳にリンクして、本部と同時進行で映像解析に当たるから」

「OK、頼むぞ」

メテオは、視界をサーモグラフィーに切り替えた。しかし、日に強いひ剤を浴びた街中は、路面からビルに壁面にかけて真っ赤に表示され、識別が困難になっている。メテオは、果たしてこんな状況で怪人を発揮できるのか不安になり、本部に通信する。

「本部聞こえるか。こんな状況で見つけられそうか」

「原だ。予想以上に厳しいな。ヘンリーを中継して送られてくる映像だが、今の所動きを見せている者はない。恐らく、黒子は姿だけでなく、高温のコンクリートに同化することで、熱探知もされないようにしている。黒子の体は発熱量が高いから、高温の状況では見つけづらくなる」

「やっかいだな。とにかく引き続き調査を続ける」

「頼むぞ。発見したらすぐに制圧してくれ。こちらはビルの屋上をヘリで探すが、カメラの感度はお前の方がいい。頼むぞ」

通信が終わると、メテオは搜索を続行する。夕暮れ時でも、夏の日射しはまだ強い。改造された体では暑さを感じることはできない

が、外を歩く人間の服装や流れる汗、表情を見ればおおむね察しはつく。この大勢の人が出歩く中、どこかに怪人がいるのだ。雲をつかむような話だが、この雑踏の中にいる姿の見えない敵を見つけなくてはいけない。そう思いながら、一時間以上は街中を搜索した。すでに何周もした道もあるが、一向に発見できそうな気配はなかった。すると、いきなりヘンリーが声を上げる。

「メテオ、今来た道に戻るよ」

メテオが事態を把握する間もなく、ヘンリーは交差点を飛び出すと、車の行きかう中をUターンし、反対車線に潜り込んだ。危険な動きに怒鳴ろうとしたその間を縫って、原の声が耳に響いてくる。「その道を戻れ、ビルの屋上から移動する影を見つけた。そのまま行けば、お前の視覚なら簡単にとらえるはずだ」

メテオの視界にヘンリーを中継して映像が入ってくる。確かに、高温にまぎれてそれより若干高い温度の物体が動いている。ビルの位置を割り出し、そのビルに視点を合わせた。

「見つけた。ヘンリー、補足したか」

「もちろん。追跡しますよ、市街地で戦闘は極力避けたいですからね」

「わかってるじゃん」

メテオの視界には、完全に黒子の影が映っている。ビルの壁面を素早く這い、ビルからビルに方法はわからないが簡単に飛び移っていく。ヘンリーはメテオの視界と同調させ、自動操縦を続けながら追跡する。メテオは視界を通常モードに戻し、この道路の先がどこか確認した。その情報を手にとれると、ヘンリーに指示を出す。

「ヘンリー。恐らく奴は直進する。並走しろ」

「どうして、そう言えるんです」

「人間界にはな、木の葉を隠すには森の中に、っていう格言があるんだ」

「どついう意味ですか」

「お前にもまだわからない言葉があつて安心したよ。つまり、隠したいものがあるなら同じものの中に紛れ込ませろ、そういう意味だ。ビルの壁面温度が下がってきたんで、あいつは別の隠れ場所に行く。色を変えられる奴にとって後は温度だ。その温度も遮ることができる場所がこの先にある」

「えーと、この先は、明治神宮ですね」

「都内で、温度を遮って姿を溶け込ませるには、うってつけだ。葉にさえぎられると、温度も判別させづらい」

「了解しました。速度を上げて並走します」

「敷地に入る直前に攻撃を仕掛ける。後は任せろ。原さんも聞こえたな」

「ああ。明治神宮に向けて、出動する」

ヘンリーはスピードを上げ、黒子と並走を始めた。相手のほうからはこちらは見えないので、発見される恐れはない。次第に目的地が近付き、相手の動きが早くなる。メテオはシートの上に立ち上がり、相手の動きを見定める。

「ヘンリー、少しスピードを上げる。奴より頭一つリードしろ」

スピードあげたヘンリーの上で身構えたメテオは、明治神宮の敷地に入った瞬間、高々と跳躍し姿の見えない敵の体を捕まえ、森の中へ落ちて行った。ステルス機能が解除され、メテオの体があらわになる。相手はまだ透明でいるが、温度の低い森の中ではメテオの目から逃れることはできない。

「涼しい森の中で暑苦しい奴だぜ。もう無駄だ、姿を見せな」

その言葉が通じたのか、その場所が保護色にそぐわないと判断したのか、相手が姿を現した。深緑色の鱗の様な体色に、ぎょろりと大きな目が備わったその姿は、間違いなくカメレオンが他の怪物だとわかった。それまで戦ったヒューマノイド型ではなく、完全な動物型なのが却って気味が悪くもある。言葉を発せず唸り声を上げる怪物、一体誰が何のためいこんな獣を放ったのか。

メテオは間合いを詰めながら、相手に向かって駆けだした。蹴りを入れようとした瞬間、相手は素早く後ろに回り込み、メテオの腕に噛みついた。人型なら相手の動きが多少は読める。しかし、完全に獣が相手だと、そのフォルムも違い勝手がわからず動きについていけないのだ。噛みついた相手を振りほどこうとすると、さっと離れ今度は長い舌で脚を払って体を放し、メテオの上ののしかかって首筋めがけて噛みついてきた。すんでの所で相手を食い止めるが、戦いにくいことこの上ない。

「野郎、ちょこまかと。いい気になるなよ」

メテオは相手をしたから蹴りあげ、引き離すことに成功した。しかし、カメレオン型怪人は草むらに着地すると、姿を消し視界から消えてしまう。遅れて、メテオが感熱モードに視界を切り替えるが、相手を見薄いなった後ではどうにもならない。相手の息遣いが聞こえてくるが、あちこちを移動しているので補足できない。次の瞬間、

真上から相手の強靱な尾がメテオの後頭部に叩きつけられ、前方に突っ伏してしまった。それを見て、怪物はその場から逃げようと木を登って行こうとした時、何かが怪物の体に埋め込まれている。「まったく。僕がいないとこれ何なんだから。来てよかったよ」

声の主はヘンリーだった。自身の判断でここまで突入し、車体から射出された鋼鉄製のワイヤーフック敵を拘束したのだった。

「お前がパートナーでよかったよ。おかげでへませずに済んだ」

「まだミッションは終わってないよ。メテオ、これを使って」

ヘンリーの車体の前方から何かが飛び出し、メテオをはそれを手で受け取った。短剣の様だが、刀身が小刻みに振動している。

「超振動ブレード。相手が相当の硬度を持たない限り、大抵のものはそれで斬り裂けるよ」

「サンキュー」

メテオは、剣を構えて相手に躍り掛かった。カメレオン怪人は、ワイヤーから筋肉が引き裂かれるのも構わず、力づくで拘束から抜け出し、メテオに向かって長い舌を出して攻撃してきた。メテオは軽く剣を舌に添えただけだったが、豆腐でも斬るような感覚で舌を切断し、すれ違いざまに相手の方を切り裂いた。武器をなくし、肩まで不能にされたことで、敵は戦闘力を失っている。だが、メテオの目で拡大された傷口は、細胞活動が活発になり、再生を始めている。その上、再び光学迷彩に入り、姿が闇にとけ込んでいく。

「メテオ、バックルを起動して。剣が連動して発動する」

ヘンリーのいうとおり、腹部のバックルを操作すると、「EX PLOSION」の音声が流れる。そして、それをきっかけにして、

剣が赤熱して炎をまとい始め、廻りの空気と反応して火が大きくなる。

「逃がさねえよ。刺激の強いのお見舞いしてやる」

メテオが剣を振るうと、放たれた炎が渦となって怪人を飲み込んだ。炎で動きを封じられ、保護色も使えない。メテオは、剣を構えながら相手の懷に飛び込み、袈裟懸けに切り払う。切れ味と超振動に加えて、物凄い勢いの炎が体内から発生し、怪物を吹き飛ばしてしまった。メテオはこの光景を間近で見せつけられ、新しい技の威力にあきれていた。そこへ、ややタイミングが遅かった原の部隊が到着する。メテオの様子を見て、状況を察したようだった。

「遅かったようだな。すまん、道路状況が悪かったとはいえ、一人でやらせる羽目になって」

「こつちにはヘンリーがいたから、問題はない。しかし、あの怪物一体が、何でぽつんと渋谷の真ん中に現れて徘徊してたんだ。それはわからず終いだ」

「それも解決できればよかったが、奴っこさんは体も残ってないからな。継続調査だな」

怪物が現れた理由という根本的な問題が解決されない状況で重い空気を漂わせる二人に、ヘンリーが割って入ってきた。

「あの、原隊長、お話があるんですがいいですか」

「何だ」

「仕事をしたわけですから、対価を払っていただきたいのですが、何を頂けますか」

「報酬がほしいのか、機械のくせして労働の概念があるとはな」

「高等知能があるので、そこらのロボットは違います。いいんですか、ストライキしても。今度の作戦も僕なしでは成功はあり得ませんでした。どうします、隊長」

「わかったわかった。部長に話して、最高級のワックス仕上げと、レースで使うような特別製のオイルを使つてやる」

「やったあ」

表情がわからないものの、喜んでいる様子を感じるメテオと腹は苦笑いしながら、ヘンリーを見つめている。

「全く、注文の多い料理店ならぬバイクだな」

「これじゃどっちが主かわからねえな。本当に口数の多いパートナーだ」

紅の暗殺者

2011年某国。夜の様荒野にぽつんと一軒家が建っている。見た目は粗末な石造りにみえるが、窓は防弾ガラスがはめ込まれ、壁面は強固なコンクリート造りになっている。家を覆う高い塀には、高圧電流が流れる鉄線が張られ、庭にはあろうことか子が地雷まで仕掛けられている。物々しい雰囲気その家では、銃で武装した人間達があちこちに配備されていた。そう、ここはテロリストたちが潜み、その活動の拠点となっている場所だった。ここから、自分たちの思想を広め世界に認めさせるべく、武力と暴力を前面にする活動への指令が行われているのだ。そんな家の中から話し声が聞こえてくる。

「しかし、奴らがあんな思い切った作戦を行うとは」

「世論の支持率が下がった時、あの国の動向に注意しなければならぬ。私の首を上げることで、世論を味方につけようと言うのだろうが、そんな浅はかな考えが通用するのだよ」

「しかし、電撃的な作戦でしたな。あそこまで迅速に部隊が展開するのは、正直驚きました。しかも、世界に発信する演出も周到なのは、あの国らしい。だが、その後が茶番でしたな」

「ネットで情報が配信されていますが、さすがの奴らも替え玉にはすぐ気付いたようです。ですが、事を起こした後では遅い。あれを『本物』として処理しなければいけないのですから。事前の準備はなかなか周到でしたが、後があればとんだ茶番です」

「それくらいにしておいてやれ。あそこまでよく似た替え玉が手に入ることもそうそうない。まずは、大国をあざ笑いながら、殉教し

た彼をたたえよう。そして、来るべき時、亡霊は再びこの世界に帰るのだ。その時まで、奴らをびくびくさせ、疑心暗鬼の心で血眼になって我々を探すさまを見ようではないか」

そう、ここは記憶に新しい死んだはずのテロリストの首魁が潜伏するところであつた。世界に大々的に発信された死亡報道は、替え玉の死によるものであつた。世界の首脳はその事実を知っていたが、死んだ者として世界に通さねば、安全保障への信頼、類似するテロリスト達への抑止力を失うことを恐れて発表できずにいた。一テロ手段に大国が欺かれたと知ったら、どれだけ望まぬ影響が世界中に広がるかわからないのだ。再び無から手がかりを追うことになった国々は、秘密という暗闇の中で手探りで歩き回るしかなかった。事實上、国家側は敗北したも同然だつた。偽物をつかまされながら、それを公にできないのだ。そんな構図をあざ笑つていた夜更け、急に周囲が騒がしくなつた。

建物内に備えられた警報器がやかましくなり始めた。侵入者がいた場合、些細な痕跡でも反応をする用に赤外線レーザーが張り巡らされているのだ。臆病すぎるほどの警戒感だが、世界中から命を狙われる立場でありながら、その追跡の目をかいくぐって生き残り、世界に脅威を与え続けてこられたのは、この神経質なほどの警戒感があるおかげでもある。その警戒網に何者かが入り込んできたのだ。即座に、「各自が銃を取り、外にいる兵士も照明を焚き侵入者への警戒に当たる。捕らえて背後関係を探るのがベストであるが、場合によっては即時殺害も辞さない構えだ。照明の中に誰かが紛れていないか、目を凝らして探し回る。その時、うつすらと人影の様なものがすうーっと浮かび上がり、兵士はその陰に向かってアサルトライフルを構え威嚇した。

「動くなっ。武器を捨てろ」

兵士は警告を発した。銃の安全装置は外されているので、いつで

も打ち殺せる状態だ。相手の方からもこちらの状況は見えているはずだから、素直に従わない場合どうなるかはいやというほどわかるはずだ。しかし、人影は動きはしないものの一向に投降する気配もなければ返事一つない。妙な雰囲気を感じた兵士は、もう一度警告を発する。

「武器があるなら捨てて、手を頭におけ。従わない場合、射殺する。逃げ切れると思うな。わかっていると思うが、ここは地雷を設置している。下手に動けば吹っ飛ぶだけだ」

しかし、それだけ警告しても人影に動きはなく、いよいよ不気味さを増してくる。すると別方向にいた兵士から声が上がった。

「貴様、何者だ」

少しだけ視線を移すと、そこにも同じような人影が立たずんでいるのがわかった。敵は、複数で侵入しているのか。いよいよ疑心暗鬼にうはんや恐怖が生まれ始めると、さらにそれを煽る事態が起こり始めた。さらに多くの人影が次々と現れ始めたのだ。

「動くな、撃つぞ」

「それ以上近づくと命はないぞ」

あちこちで兵士の声が上がる。もはや、これはただの侵入者のレベルだけではなく、部隊単位での攻撃である。ここにいる人物の所在が敵に知れ、特殊部隊を投入してきた以外に考えられない。その考えが兵士たちに引き金を引かせることになった。

「撃て、敵を殲滅しろ」

一斉に銃口が火を噴き、銃弾が雨あられとなって人影に降り注いだ。相手が誰かというより、この脅威を消すことが重要だと判断されると、容赦なく銃弾が発射される。しかし、謎の敵はいくら弾を

撃ち込んでも当たっている手ごたえがなく、未だにその場にたたずんでいる。何かがおかしい、その事に気がついた瞬間、足元が破裂し、熱と爆風が兵士たちを吹き飛ばした。いつの間にか、爆弾の類いか何かが単一方向に爆風を集中させて兵士たちに爆風を浴びせたのだ。吹き飛ばされた兵士が、痛みに耐えながら敵の方を見やると、数体の人影は姿を消していた。それと入れ替わるように、今度は上空から一人の人間が少なくとも十メートルはある上空から舞い降りてきて、兵士たちの真ん中に降り立つ。兵士は、すぐに敵だと判断し、再び銃を撃ち始める。今度こそ着弾する手ごたえがあった。にも変わらず相手は一向に倒れず、それどころに着弾した弾が兆弾し、兵士たちに逆に命中し、負傷した者達が次々と倒れて行く。侵入者は、目にもとまらぬスピードでまだ発砲を続ける兵士のそばに接近すると、銃を取り上げて素手で折り曲げて破壊し、みぞおちに拳を叩き込み気絶させた。残りの兵士は必死に応戦するが、銃が効かない上、人間業とは思えないスピードに翻弄され、武器を奪われ戦闘力をなくしていった。いつの間にか、外にいた兵士はすべて倒されてしまっていた。あまりの手際の良さに、その侵入者は軍事訓練を受けたものを通り越し、暗殺に特化された技術を持ち、その経験を積んでいる暗殺者としか言いようがない。

暗殺者は静まり返った外から建物内に入る前に、倒れている見針の兵士に向かって何か球体の様なものを投げつける。球体は軽い破裂音の後、その中に充満していたガスを霧状に発生させ始める。すぐに効き目が表れ始め、倒れていた兵士たちは、目や鼻などに痛みを感じて、せき込んだり涙ぐんだりし始め、さらに強い吐き気に襲われのたうちまわっていた。それを見ていた暗殺者は、

「命までは取らねえよ。その分、十分苦しんでもらうぞ。お前らがやってきたことに比べれば、足りないくらいの仕打ちだがな」

と呟くと、今度は建物内に向かって、再び球体を投げ込み始めた。やがて、窓やドアの隙間から白煙が漏れてきた。相手の視覚を奪う

ための発煙装置だ。暗殺者は仕掛けが発動したことを見届けると、一旦ドアから離れ、壁の前に立つと自分の拳を壁に打ち込んだ。壁はもろくも崩れ去り、彼は建物の中に飛び込んでいった。

視界を奪われた上、予想もしない侵入経路を取られたことで、相手側は完全に不意を突かれ、暗殺者の手にかかっていく。命を奪われはしないが武器を破壊され、ナイフなどで格闘する間も与えられず強烈な一撃を与えられて意識を失っていく。肉眼では視界が効かないはずの状況でどうして相手がこうも的確に、銃も使わず制圧してされるのは、組織のリーダーは全く予想もつかなかった。全く未知の脅威に沿われ理解の範疇から外れるこの事態に、次第に恐怖の感情が芽生え始める。人の声が聞こえなくなり、沈黙もまたこの場を支配し始める。聞こえるのはリーダーの激しい呼吸音だけだった。物陰に隠れながら、銃の引き金はいっ引いてもおかしくないほど神経が張りつめている。やがて、白煙が落ち着き始め、少しずつ視界が回復してきた。すると、部屋の入口の前に人影が立っているのが見えた。もう冷静さを失った状況となっており、味方かどうかを確認せず銃を発砲した。銃に装填されているだけのありったけの弾丸を発射するが、敵は微動だにしない。その事にぞっとするものを感じたその時、リーダーのこめかみに何か固いものがつきつけられた。発砲をやめ、恐る恐る自分の隣をみると、いつの間にか暗殺者が隣に立ち、自分の指を相手の頭に突きつけていたのだ。

「このまま、この指をお前の脳にぶち込むだけで事が終わるんだが、残念なことに、そう簡単にはこの仕事は終わらないんだよね」

暗殺者は不敵に言い放つと、リーダーから銃を取り上げると、何とその握力だけで銃を握りつぶしてしまった。その光景を見ていたリーダーはその光景に恐怖を感じるとともに、敵の姿を見てさらに恐怖のどん底に叩きこまれた。暗殺者は金属質な装甲で武装され、その上返り血を浴びたように体中が新区に染まっているのだ。明らかに普通の兵士の装甲ではない。いや、これは装甲なのか、訳のわ

からない考えが頭の中を巡りパニック状態に陥り始めた。その変化を暗殺者は見逃さない。

「おやおや、随分心拍数が上がってるねえ。発汗量も半端じゃない。どうした、俺が怖いか。そんなことはないよなあ、あんだけ無関係の人を死に至らしめて、未来ある若者を自分の思想につきあわせて死なせたあんたがさ、この程度で怖さを感じるような臆病ものものわけないよねえ」

暗殺者はそういうと、相手の胸倉をつかむと壁に向かって叩きつけた。骨が数本は折れたであろう、凄まじい衝撃と音だった。リーダーを悲鳴をあげながらうずくまっていたが、暗殺者は冷酷にさらに攻撃を加える。首を締めあげ、床に叩きつけ、無表情の仮面で相手を見下ろしながら無慈悲な攻撃を加えて行く。やがて、相手を引きずりあげ椅子に座らせ、じつと見詰め始める。リーダーは血を吐き、痛みにも全身を襲われながら、敵に向かって喋り始める。

「お前は人間か。まるで機械のような奴だな。でなければこれだけの兵士を一人で制圧し、私を死なない程度にここまで残虐にいたぶることはできないな」

「俺が残虐だと。言ってくれるじゃないか。お前に言われたくもない。自分達の宣伝、考えをこり押すために、無関係の人間の命を強奪し投資する自分の行為を棚上げするな」

「この私に恐怖を与えるのだ。相手が人間なら私は恐れない。自分と同類かそれ以下の存在に恐れを抱く理由はないからだ。だが、どうにも抑えようのないこの恐怖は、お前が人間ではないことから来るものだ。お前は獣か機械、そうとしか思えない」

「それがわかる嗅覚はさすがだな。世界の裏側で生き抜き、大国相手に喧嘩を仕掛けてきたあんたならではの洞察力を認めるよ。だが、

そこまでだ」

暗殺者はそういうと、相手の胸元に蹴りを入れ、自分の足と壁の間に相手の体を挟み込んだ。そして万力の要領で締め上げるように脚の力を加えて行く。肋骨が一本ずつ折れて行く感触が、じかに伝わってくる。その行為にどんな気持ちを抱いているのか、その仮面から窺い知ることはできない。

「俺が後少し力を加えるだけで、あなたの肋骨や胸骨は粉々になる。さらにちよっぴり力を加えれば、心臓を踏みつぶすこともできる。それができる力があることをあなたは身を持って学習したろ」

「何が狙いだ。この命が欲しいのか」

「俺としては、あなたの命が欲しいね。だが、依頼人が殺すなって言うんだ。わかるかい、この依頼の意味」

「……。私を殺すことでの報復テロを恐れているな」

「正解。正直なところ、お前を殺す機会は永久に失われてしまった。替え玉に食いついたあの国のおかげでね。おかげであんたは今や自由の身になってしまった、と考えているだろうがそうじゃない。お前さんが替え玉を仕立てたことを、事前に把握している国もあるんだよ。そこからの依頼で、俺はメッセンジャーとしてきたわけだ。依頼人の言葉を伝える。世間体を守っている限り監視以上の措置は取らない、とね」

「どつという意味だ」

「世間じゃあんたは死んだ身だ。つまり亡霊だ。亡霊は亡霊らしく、世間の目につかないところでひっそりしてればいい。つまり、おと

なくしてさえいれば、命だけは保障するとな」

「報復をせず、次第に手足をもがれていくのをじっとしていると」

「それぐらい痛くもかゆくもないだろ、たくましいお前さんだ。生きている限り、あんたは不死鳥の様によみがえる生命力を持っている。そこは認めるよ。だが、もし変な気を起こせば、その時は俺という巡航ミサイルが発射され、世界中どこまでも、地の果ても海の底までも追いかけて、命をもらうよ。俺の力はもう十分わかるだろ、普通の人間の価値観で考えない方がいい。さ、これで俺の仕事は終わりだ。おとなしくしてろよ、じゃあな」

紅の暗殺者は、リーダーを解き放つと背を向け、部屋から出ようとした。しかし、屈辱的な扱いを受けて人間は恐怖を凌駕して反抗心を書きたてられるものだ。そばにあったライフルを手にして構えると、暗殺者の後頭部に向かって躊躇いもせず発砲した。弾丸は後頭部に命中した、はずだった。しかし、傷一つ残せず、全くの蠅螂の斧に過ぎなかった。暗殺者は足を止め、肩越しに振り返るとじろりと力なく壁に寄り掛かる男を一瞥すると、振り向きざまに何かを投げつけた。リーダーはとっさに目を閉じて死を覚悟した。しかし、体に痛みは走ることもなく、何が起こったのかうつすらと目を開けた。その目に飛び込んできたのは、顔の両側に数ミリの距離で壁に突き刺さっていた、十字の刃がついた手投げ式の武器だった。あのわずかな時間の素早い動作で、これだけの精度で刃物を投げて、わざと外してきたこの意味は、次は殺すという意思表示、いつでもお前の命はこの掌の上にあるという声明に違いにないことは明らかだった。

「意味はわかったな。いくらお前でも命は惜しいだろ。俺には、そのこと自体がへどが出るほど気に食わないんだがな。二度と俺に会わずに済むように、今日から本気で前前の神に祈ってる。お前を殺

したい奴は世界中にすることを片時も忘れるな。そして俺への報復が無意味なことな」

それだけ言い残し、暗殺者は建物を後にした。離れた所に止めてあったバイクにまたがると、ようやく緊張感を解き走り始めた。彼は、舗装されていないオフロードを高速で疾走しながら独り言をつぶやいていた。

「さて、次の任務は継続中の案件だったな。久々の日本か、何年ぶりかな。確か、名はメテオだったな。何だか面白そうな奴がいるらしいな、楽しみがありそうだ」

事件がないと暇だと言うのは、不謹慎ながらもつらいものだ。戸籍すら抹消されて存在しないことになっている不破にとつて、暇な毎日というのは非常に苦痛なことだった。一般人同様労働しようにも、身分を証明しえるものはないし、この特別な体で出来ることとこの制限られる。いつ出勤がかかるかわからないので、常に連絡は取れるようにしておくしかない。外出の度にヘンリーに乗っていくのは、急な招集の連絡がつくようにするためなので、ヘンリーに監視されているのと変わりはないのだ。結局できることと言えば、事件のファイルを読み込んで「勉強」をしたり、買い込んだ本やゲームで暇をつぶすしかない。おまけに夜は寝なくて済む体のため、長い夜は非常に苦痛だ。今夜も買いこんだゲームをしながら、意味も感じられない夜明けを待つ時間を過ごしていた。

深夜0時を回った頃だった。突然部屋の電話が鳴り、不破は反射的に受話器を取る。

「ご存知、不破ですよ」

「俺だ、滝だ。すぐに作戦室にいけ。全員招集だ」

「全員とは、かなりヤバいことらしいですね」

「説明は後だ。俺もすぐに到着する」

「わかりましたよ。それじゃあ、また後で」

不破は急いで着替え、地下の作戦室に向かった。作戦室は、様々なモニターが所狭しと並び、部屋の奥には標準装備の武器が収められ、特殊車両子につながる通路につながる作りになっている。普段は、俺のオフィスで作戦指示を受けることの多い不破まで、零部の中枢と言えるこの作戦室に呼ばれることは、事の重大性を示している。

「さすが早いですね、不破さん」

「斎藤さんこそ。え、情報分析の斎藤さんが一番早いってことは、何かヤバそうな気がするんですが」

「さすが嗅覚が鋭い。極秘事項ですから、部長が来てから伝えますからね。それまでは皆さんが来るまで待っていてください」

斎藤と呼ばれた女性は、零部でも数少ない女性構成員の一人だ。彼女は、様々な情報が集中する零部で、有益、あるいは零部が関与すべき情報を分析、ピックアップするインテリジェンスを担当している。社会の裏に潜む零部、あるいは仮面ライダーの敵を探し当てるには、膨大な情報を処理し必要なものを抜きだし、その裏に潜む怪物の正体をあぶり出す能力が不可欠だ。その彼女が最も早く作戦室に到着したということは、迅速な対応であたかなければならない事件が起こっていることを示している。そんなことを考えている内に部員たちがぞろぞろと集まってきた。原や緒方の様な実働部隊だ

けでなく、科学資材班の吉村、拳句の果てにジョン・ヘンリーまで運びこまれている。どうやら、本当に重要な事件が起こっているようだ。全員が揃った頃、滝が作戦室に入り込んできた。顔には険しいしわが寄っており、事態の深刻さを物語っている。

「全員揃っているな。すぐに本題に入る。斎藤、説明してやれ」

「わかりました。では、みなさん、こちらのモニターに注目してください」

斎藤がモニターのパネルを移ると、どこかの人ごみの様子が映し出された。どうやら、空港の映像のようだ。流れている放送を聞いていると、どうやら国際便らしい。

「今日の夕方の国際便到着ロビーの様子です。実はこの中に、ある人物が映っていることが判明したわけですが、みなさん、この人物はご記憶でしょうか」

「おい、こいつはスコープオンじゃないか」

原は、アップになった男の顔を上げて驚きの表情で叫んだ。他の部員もそのことを理解しているのか、どよめきが起こっている。自体が飲み込めない不破は、原に疑問をぶつけてみた。

「すいません、原さん。こいつ、誰ですか」

「お前が知らないのも無理はない。こいつは、警視庁麻薬取締班、厚生労働省麻薬取締部でマークされている奴の中でも、特Aクラスでマークされている麻薬王だ。国際的にもマークされているんだが、なかなかしつぽをつかませない秘密性と、複雑な組織を誇る難攻不落の国際犯罪者だ」

「何でそんな奴を零部が」

「わからんか。零部が扱っているってことは、奴の別の顔が、俺達の管轄に関わってるからに決まっているからだ。そのコードネームどおり、奴はサソリの形質を持つ怪人の顔がある。サソリだけあつて、未知の毒物を作り出せるんだが、その能力で未知の麻薬を作つては売りさばいている。俺達も何度かやりあつたんだが、手に負えなかった」

「そんなとんでもない奴が、入国したのか」

不破は、驚くしかなかった。これまでかかわってきた事件は、まるで自分が絵空事の世界に放り込まれて戦ってきたような感覚しか持てなかった。だが、今目のまで起こりつつある事件は、現実世界の犯罪と地続きで起こっていると言つ生々しさが恐ろしさを掻き立てるのもだった。もしこの犯罪が怪人という絵空事を伴つて社会に解き放たれたらどうなるだろう。不破は、滝達が仮面ライダーと虚構の世界に押し込め、それでいながら情報を小出しにし、秘密裏に活動しながら社会を守っていることの意味がおぼろげながら理解できたような気がした。

「警視庁の方の情報も抜いてきたが、スコピオンの入国は間違いない」

「となると、今回の標的はこいつですね。警視庁の裏をかくわけか、面倒だな」

「原、残念だが面倒なことがもう一つある。斎藤、次を」

「はい。スコピオンの入国を確認した後、港や国際空港の監視を強化しました。これだけの大物となると、課外諜報員の動きも把握しておかないと、面倒な国際問題になりますので。ですが、網にか

かったのは意外な人物です。スコープオン到着の二時間後の香港からの便です。乗客の中にこの男の姿を確認しました」

映し出された映像には、一際背の高い日本人男性が写っていた。遠目ではあるが、男の視線は隙のない鋭いものであるのが不破の目にはくつきりと映っている。その映像を見た原達が一様に頭を抱えて険しい表情を浮かべた。一体、どうしたと言うのだろうか。

「皆、わかっていると思うが、こいつがスコープオンとほぼ同じに日本に入国した事実、これは偶然である確率は低い。恐らく両者は、確実に接触する。かなり面倒な案件になるぞ」

滝の言葉からかなりの重要人物であることは明白だ。皆をここまで矢やませるのは一体誰なのか。不破の表情から思っていることを察知した斎藤が、疑問に答えた。

「不破さんにも教えておくべき情報ですね。この男の名前は、ムラサメ。本名かどうかは不明です。他のコードネームは、JUDO、若しくはZX」

「ZXって、まさか」

「そう、彼は仮面ライダーZX。この世界では、紅の暗殺者という異名で恐れられるヒットマンです」

「ヒットマンだって。仮面ライダーが。まさか」

「本当だぜ、ルーキー。カッコいい妙な名前つけられるほどじゃないけどね」

作戦室にいた人間全員が驚いて部屋の入口を見ると、まさにモニターに映っている男が今現実にはドアの前に立っているのだ。不破も

驚きのあまり、声が出なかった。

「よう、滝さん、久しぶりだな。ヘルダイバー、とりに来たんだけどね。スコープオンだけど、俺の獲物だからね。依頼料は受け取ってるんで、やるしかないんだ」

「わかってる。お前への依頼人もおおよそ見当がつくが、俺は口が堅い。そこは不問に処すが、警視庁が動いてる。外務省からも、お前の仕事を秘密裏に完了させろということだ。内政も外交も俺には興味のない。人々を守り、秘密は秘密のままに。これだけは守れ。おい、不破。作戦前だ、あまりいきり立つな」

滝の制止も聞かず、不破はムラサメににじりつつあった。暗殺者ヒットマンという響きがどうしても聞き捨てならなかった。ましてや報酬など、聞くだけで虫唾が走り、反吐が出そうな気持ちにさせられた。じつと視線をあわせながら、不破の口から思わず心の声が思わず漏れ出していた。

「殺し屋が仮面ライダーだと。ふざけるな、俺は絶対認めない。仮面ライダーはヒーローだ。お前なんか絶対に認めない」

紅の暗殺者？

涼しい目でやり過ぐすムラサメと、今にも掴みかかりそうな不破の間は、一触即発の雰囲気である。滝は、あわてて相手に入り二人を遠ざけた。

「悪いが、いざこざを許す余裕はない。少し頭を冷やせ」

「そんなことは言っても滝さんよ。俺は別に相手にする気はないが、そっちの若いのは口で説明してもわからないと思うよ、俺の仕事内容に関して。別にいいよ、少しぐらい付き合ってやつても。スコーピオンの足取りはつかめるんだし。そうでしょう、お姉さん」

ムラサメはにつこり笑いながら、斎藤に話しかけた。彼女もやれやれと言った表情で部員に説明を続ける。

「スコーピオン自身の足取りは、なかなかつかめませんが、彼と接触するかと思われる団体が浮かび上がってます。広域指定暴力団の傘下組織、冥王会、この組織に不穏な動きがあります。この組織は上納金として麻薬密売での売り上げを上部組織に納めています、数日前にこの組織の口座から突然多額の引き出しがあったようです。そして、スコーピオンの入国。これは偶然にしては出来過ぎています。恐らく接触が考えられる可能性が最も高い線です」

「スコーピオンの足取りはつかめそうか」

「彼は、怪人の能力を有しているので、警察との遭遇や、取引相手とのトラブルを全く恐れていないせいか、痕跡は多く残しています。彼は空港でレンタカーを借りているので、このナンバーを辿れば網にかかるはずです。道路監視カメラで現在照合中です。冥王会の動きを監視していれば、取引先もわかるでしょう」

「冥王会が動くとなると、マル暴も動いてくる。警察関係が相当な数で動く条件は我々にはかなり厳しい条件だが、何としてもスコープオンを秘密に処理しなければ、被害者は相当な数に上る。隠蔽もより難しくなる。心してかからなければならぬ。全員、出動態勢を整えておけ」

会議が終わり、部員達は各々持ち場につき、出動態勢を整える。しかし、会議が終わっても不破とムラサメの間には緊張感が漂っている。不破にしてみれば、幼いころにヒーローという強い存在に憧れ、その生き方を実践しようと思い、擬似的にも実践してきただけに、仮面ライダーでありながら暗殺者という生き方をするムラサメがどうにも我慢ならなかった。自分が抱えてきた目標やヒーロー像に泥を売られるような思いがするのだ。しかも、暗殺者という生き方をしながら、軽薄とも言える言動をするのがなおさら腹立たしく思える。そんなピリピリした様子を察知した滝は、二人を何とか引き離そうとする。

「ムラサメ、久しぶりだなと言いたところだが、依頼による入国なんだろ。外務省経由じゃなく、とある紳士の国からお前の入国を零部に直接知らせてきた。おおよその依頼主の見当はついてる」

「さすが、滝さんの零部は、戦闘力だけでなく知力も優れているね。察しの通りだけどそれ以上は言わないでくれよ。取引先との信頼関係に関わる」

「そこは心得ている。スコープオンが網にかかるまで俺のオフィスでコーヒーでも飲んでろ。インスタントじゃない挽きたての豆が用意してある」

「ありがたいけど、作戦前に片づけておいた方がよさそうだ。そこ

のお兄さんは、俺のことが気に食わないらしい。殴りたいなら好きにさせてやらないと、爆弾を抱えたまま作戦に突入することになる。どうだい、新人」

不破の視線は、射るようにムラサメを見つめている。どうにも彼が仮面ライダーとして語られている虚構の設定と、現実世界で暗殺者として存在することへの整合性を取ることができず、彼を認められないでいる。

「いいぜ、新人。俺たちみたいな人間は、理屈を語りあうよりぶん殴って主義主張をぶつけあわないと納得できないことが多すぎる。滝さん、確かオフィスの隣に広い部屋があつたよね」

「おい、この上はホテルだぞ。都内のだ真ん中でお前らの喧嘩をやられたらたまらん」

「だからいいのさ。一般人を巻き込みかねない状況で、あいつがどう出るのか試したい」

「止めても無駄だな。だが、少しでも騒ぎになりそうになったら、特殊弾を遠慮なくぶち込んで止めるからな。不破、あまり張り切んなよ」

滝の許可を得た二人は、オフィスの隣の部屋、不破が改造されて初めて目覚めた広大な部屋の中に入った。二人きりになった彼らは向き合いあながら、一方険しい顔、もう一方は不敵な表情を浮かべながら立っている。

「暗殺者だったよな。その手で、普通の人間も手に賭けたのか」

「かけたさ。一人二人じゃない」

「どうして、そう簡単に話せる。人を殺すんだぞ」

「そいつが生きる分だけ、世の中で普通に暮らしている人間を不幸にして、真つ当な命が奪われるのを防ぐためさ。一人の命を奪うことで、多くの人が救われ、世界が平和になるのなら、俺は汚い仕事にでも手を染めることができる」

「それをビジネスにするのが許せないんだよ。結局、金のための詭弁だろ。変身」

不破はメテオに変身すると、ムラサメに殴りかかった。ムラサメは、殴りかかるメテオを真正面から受け止めると、合気道の要領で勢いを殺し、触れもせずに床に投げ捨てた。そしてメテオの周りを歩きながら「変身」と呟き、深紅の戦士であるZXに姿を変え、軽いフットワークデジャブを繰り返しながらメテオに語りかける。

「逆だよ、新人。金のためにビジネスをやるんじゃない。ビジネスに変えるために金を貰うんだ」

「どういう意味だ」

「個人の頭でどんなに高潔で立派な理屈とこねようと、それは正当化のためのきれいごとだ。お前はまだ、人格を有した怪人に出会っていない。完全な獣、若しくは安全装置つきの人間ベースとしか戦っていない。だが、完全な人格を有した怪人に会ったらどうするんだ。そいつは姿は怪人だが人間の人格なんだ。そいつを殺せば、それは殺人となる。そういうことを考えたことはあるか」

「それは……」

答えに窮し、隙が生じたメテオにZXは容赦なく顔面へのパンチ

を繰り出す。建物への被害を考えて加減はしているが、体に伝わる衝撃は大きく、メテオの体はその場に崩れ落ちた。Z Xはメテオに休む間を与えず、追い打ちをかけてきて、腕より発射された鋼鉄のワイヤーロープで相手の体を捕獲し、動きを封じた上で雨あられのように蹴りを入れて行く。

「ん、人なら殺せない、獣なら殺せる、メカなら破壊できる。そんな都合のいい理屈であるかい。それで、仮面ライダーが務まるのかい。敵は、人を不幸にし、命を奪うことも辞さない連中だ。そういう奴が相手だと断定したなら、手を下さない限り負の連鎖は断ち切れない」

「俺は、殺人マシンじゃない……」

「別にそういう意味じゃない。自分の手を汚したくない、そういう理由で決断を避けるなってことさ。お前は人として生きるために仮面ライダーの生き方を選択したらしいな。それに文句はない。だが、今のままなら、お前の未来は間違いなく殺人マシンだよ。もしくは破壊兵器だな。このままだと、お前は戦いにおける自分自身の矛盾にぶつかり、耐えきれなくなる。そして思考停止した瞬間、お前は人間性を失う。人として生きるためには、お前はもう一歩踏み込む必要がある」

「だからと言って、あんな様な殺しの道具になる生き方は真似できない」

メテオは、自信を拘束する鋼鉄のロープを力任せに引きちぎると相手から離れて体制を立て直し、互いに密室空間の中を高速で移動しながら攻撃し合う。互いに意見を主張するが如く、手加減無用の応酬が続く。

「仮面ライダーメテオ、お前に問う。ガキの頃、仮面ライダーは何

のために戦うと教わった」

「人類の自由と平和だ」

「そうだ。決して正義のためじゃない。正義は人それぞれだ。どうにでも形を変える。欺瞞すら含む定義不能の代物だ。そんな代物のために俺達のような超人が動いてみる。核弾頭より恐ろしい存在になる。お前はまだ、正義って奴にすがって戦っている。だが、それじゃあ仮面ライダーにはなれないんだよ」

「じゃあ、ライダーたりえる条件は何だ」

「本当に人類を愛し抜く覚悟だよ。自由と平和には、必ずしも美しくない面もついて回る。それも含めて人類の側に立って戦える覚悟があるか。戦う度に失う命もある、奪うことになる命もある。そんな悲しみや苦しみ、罪という十字架を背負って道を歩む覚悟があるかどうか。生身の人間にはできない生き方、鋼鉄の体と人の心を持つものにできない生き方、それが仮面ライダーだよ」

心の応酬が激しくなるにつれ、次第にぶつかりあいが激しくなる。一方的だった戦いが次第に互角の戦いに移行していく。

「わかってきたよ、あんたの生き方の意味が。仮面ライダーと言うナイフのような生き方を人類のために活かすため、普通の人間にはできない活動をすることで、怪人と戦う以外の人類の未来につながる行動をしてきたんだ。金を求めるのは、自分の行動を正義ではないと戒めるため、あえて悪の行いに変えているんだろ」

「飲み込みが早いな、新人。だったら、魂のこもった一撃を喰らわせてみる」

「ああ。すべてを理解しきれたわけじゃない。本当の仮面ライダーの道をまだ歩めるかわからない。だが、俺の自分自身の生き方に対する、今見せられる覚悟のほどを見せてやるぜ」

二人は一旦は慣れ距離をとると、力を溜めこんで肉薄する。メテオはバツクルを回転させて、必殺技を発動させる。ZXも体内の器官を全開にしてエネルギーを放出させる。

「サンダーストームッ」

「ZXパンチ」

空気の壁を突き破り、二人の拳が交錯した。互いの主張を乗せた攻撃は、一切手加減なしだった。互いの顔に拳が激突し、二人とも衝撃に耐えきれず、変身を解除してその場に倒れ込んだ。二人の間には、先程までのぎすぎすした空気は漂っていなかった。ムラサメは、息を弾ませながら不破に語りかける。

「いいパンチじゃねえか。お前の思いの強さはわかった。なら、俺のことを聞かせる資格はある。虚構に隠されている俺の過去、あれは大方事実だ。俺は、完全に秘密組織に脳まで改造された、完全兵器化された仮面ライダーだ。俺としての自我を抹消され、破壊と殺戮のための武装サイボーグになった。当然、兵器は試験運用されなければ、性能もわからないし、後続の量産化もできない。折しも、当時はアフガニスタン紛争やイラン・イラク戦争と、兵器の実験をする場には事欠かなかった。そこに俺は実地試験として投入された」

「そこで、人を……」

「俺はマシンなんだ。自我も何もないマシンは、入力されたコマンド通りに動くしかない。戦場の怖さは死ぬことじゃない。死ねば恐怖は感じない。怖いのは、昨日まで法律で保障されていた生命が、

戦場に放り込まれると紙切れ同然に消えていく恐怖の中で動けな
きやいけないことだ。戦死者は丁重に扱われるが、死ぬ瞬間はあつ
さと終わってしまう。そんな異常空間では、死体一個増えたところ
で誰も怪しまない。俺みたいなサイボーグが秘密裏に動くには絶好
の場所なわけだ。何人も殺した記憶は、今も俺の記憶の中に刻まれ
ている」

「ライダーになった経緯も、世間一般に知られている通りか」

「ま、大体な。記憶が戻った時の恐怖は恐ろしいなんてもんじゃな
い。罪の意識がどつと降りかかり、記憶が戻ったことを呪ったよ。
機械のままでは、罪悪感なんて感じずに済んだんだからな。行
き場をなくした俺は組織を抜けて、仮面ライダーと出会った。人間
として生きて行けず、マシンにも徹することもできない俺は、半ば
やけくそで仮面ライダーについた。そんな俺の心を見透かしたのか、
一人のライダーが言った。『生き方を共有しろとは言わん。ただ、
自分なりの生き方を見つけない限り、お前は自分の心を破壊し狂っ
た機械にいずれなる。そうなれば、俺達の誰かがお前を破壊する。
そんなことをしたくはないし、お前自身そうなりたくなければ、お
前の生き方を見つけるしかない』とな」

「俺にさっき言ったことと一緒にだな」

「受け売りの言葉とはカッコ悪いな。だが、その通りだ、人に与え
られた生き方は、自分自身の人生にはそぐわないし、いつかは破綻
し路頭に迷う。俺たちみたいな奴が路頭に迷うなんて、危ないこと
この上ない。生身の人間に手をかけた人でない俺の生き方、それが
御覧の有様さ。人の領分では始末のつけようのない世界、それに俺
の血にまみれた手が仕上げをする。だが、それでも俺が助けたいの
は、何も知らずに日常を生きる人だ。金を受け取るのは、勘違いを

しないためだ。自分の行為を正当化しない、世直しのためだとか思わなくするための苦い薬だ」

「わかった様な気はする。でも、その場にスコピオンのような奴がいたとしたら、俺は動けるのか、それは断言できない」

「そういう気持ちも捨てなくていい。ただ、覚悟は決める。でないと、仮面ライダーとしては生きていけない。ただの機械人形だ。お前なりの覚悟を決める時が、もうすぐ来る。俺の仕事に支障がない程度には付き合ってやるよ」

二人が大の字になっているところに、扉を開けて滝が入ってきた。どうやら、作戦開始のようだ。

「いい歳した男が二人も揃って大の字とはな。スコピオンの足取りがわかった。奴は高速から横浜に入っている。大黒PAで降りたのが、監視カメラで撮影された」

「なるほどね。海に囲まれたあそこは人間には逃げ場がないが、スコピオンにとっては周りが海だろうとお構いなしだ。ヤクザどもも恐らくその場所に向かうはずだ。多分、そこでビンゴだ。俺はヘルダイバーで空から向かう。そっちとは関係なく動くぜ。アサシンと一緒に作戦行動したと上にはなれると、滝さんの首に関わることになるからな。それじゃ新人、向こうで会おう」

ムラサメはそういうと、一人で部屋を出て、別行動に入っていた。自分の仕事のためと、滝を含む零部の処遇を考えた上でのことだろう。不破も起き上がり、痛む顎をさすりながら、滝に向き直った。

「滝さん、俺はどうすればいい」

「作戦を伝える。今回は、零部はお前を支援できん。何しろ警視庁が躍起になってスコープオンを追っている上、冥王会が動いたことでマル暴も動き始めた。彼らから、スコープオンが黒子だと言うことを隠さなければならぬ必要から、部員達はその足止めや細工に集中せざるを得ない。お前がスコープオンを排除しろ。ムラサメも関わってくるが、あくまでお前の判断で動け、今後のお前の生きる道においてもそれは必要だ」

「話は聞いてたのか。正直、不安で仕方ないんだ。人間性を宿したままの怪人に向き合うのが。要は、俺と一緒にわけだろ。自分自身に拳を振りかざすことができるか、わからない」

「まあ、そうだろう。鏡像みたいなもんだな。だが、それから目をそらすことは、自分の獣性から目をそらすことでもある。敵を撃つことは、相手の獣性、そして自分の負の側面と戦うことになる。これだけは言うておくが、相手を元に戻すことはできない。お前が元の人間に戻れないようにな。それに拳を振るうのをためらうのは、お前の内心に眠る牙を光らせる獣を認めることだ。その先は、ムラサメが指摘した通り、心を破壊し尽くされた殺人マシーンだ」

「自分自身との戦い、か」

「そうだ。そして、相手を人として死なせてやる情だ。拳は血で濡れるかもしれない。だが、その拳が救うものもあるんだ。相手を人として最後を迎えさせること、そして知らないまま脅威の中にいる人々を守ることにつながっていく。つらいことだが、その苦行が人たらしめる。お前以前の仮面ライダー達もそうだった。悩み苦しみながら、茨の道を歩んでいった。その力を、己のためでなく人のために使うことで、守られた笑顔で血に濡れた拳を癒しながら。それがライダーとして生きるということだ。そして宿命だ」

「わかったよ。じゃあ、行ってくる」

「ヘンリーを使って高速でいけば、30分もかからず現場につくだろう。ヘンリーを介して連絡を入れる」

「了解」

不破は、直ちに变身すると、ヘンリーに登場しイリユージョン・ステルスを展開、道に行く一般車両の間を高速で縫うように走りながら、高速道路に進入した。信号や歩行者のいない環境は、高速マシンであるヘンリーにとってはまたとない条件で、200キロを超えるスピードでメテオとヘンリーは疾走する。ルート変更も、マフラーに擬態したブースターロケットで驚異的なジャンプで行い、通常ではありえないルートをとり続ける。

「ヘンリー、走行中に悪いが、上空を飛んでるヘルダイバーの位置はわかるか」

「了解、ただ今検索中。お、発見。現在、横浜港上空を旋回しながら待機中です。すごいですね、バイクなのに空を飛んで。僕も飛行機能をつけてもらおうかな」

「やめてくれ。口うるさい暴れ馬が翼を持ってペガサスになられたら、こっちはお手上げだ。しばらくは今のままで我慢しろ」

「しばらく、ということはいずれと言う意味だね。解禁を楽しみにしてるよ」

彼らもまた高速運転で、スコピオンの出現初速地点へと急ぐ。ヘンリーを経由して送られてくる情報には、冥王会の構成員がオン

夕車が補足されたとの知らせが入っていた。進行方向からして、予測通りの場所に向かう可能性が濃厚になってきた。メテオは、さらにマシンを加速させ、取引場所へと急ぐ。

夜になり、辺りが暗闇に包まれるが、メテオの視界は昼間と変わらず鮮明に見える。恐らくZ-Xも上空から監視しているのだろう。埠頭付近を中心に、マシンをゆっくりと走らせながら警戒を続けるメテオに連絡が入ってきた。

「原だ。警察関連の車は、信号などで進行を妨害をしているが、それほど時間は稼げない。冥王会の車はもうすでに埠頭に入っているから、スコーピオンとの接触は近いはずだ」

その連絡通り、埠頭という場にはやや不釣り合いな黒塗りの車が、メテオの視界でも確認された。恐らく、取引相手の冥王会の車だ。車の中から降りたのは三名、それぞれが辺りに気を配り、スコーピオンの到着を待っている。それを見届けると、

「こちらでも確認した。後はこっちで片づける。制限時間はあるかと、原に問い返すと、

「十分だ。それ以外は目撃者が増える恐れがある」

という答えが返ってきた。勝負は短時間、確実に仕留めなければいけない。恐らくZ-Xもこの通信を聞いているはずだ。果たして、どう出てくるか。静かに様子を見間もっていると、物陰から人影が一つ、音もなく出てきた。メテオの聴覚にも察知されないと言うのは不可能なはずなのだが、それを可能に言うことは、相手はやはり普通の人間ではないことの一つの証明だ。メテオは、より鮮明な映像を得ようと念じると、視界も添えに伴ってクリアになり、相手の顔がはっきりしてきた。

スコーピオンと思わしき人物は、褐色の髪に高い鷲鼻が特徴的な外国人だった。彼は気配を殺しながら取引相手の背後によると、かなり近い場所で声をかけた。相手は不意をつかれてさすがに驚いた様子だった。メテオは、今度は聴覚の感度を上げ、彼らの会話を拾い上げた。

「待たせたな」

「あんたか、驚かせないでくれ」

「相手より先に来て、様子を観察するのが習慣だね。代金はキャッシュかな」

「その方があんたも安心だろ。ブツは」

「この通りだ。取引が済んだら後は用はない。帰らせてもらう」

そう言い残したスコーピオンは、その場を去り始めた。余計な会話も何もない、あつという間の進行にメテオは内心焦った。ヤクザどもとはいえこちらの存在をばらすわけにはいかない。しかし、このままではプロのスコーピオンはすぐに行方をくらますだろう。どうすべきか躊躇しているメテオの耳に、Z Xの声が聞こえた。

「構わずいけ、メテオ。後始末は俺の方でしてやるから、スコーピオンを確保だけはしろ」

その声とともに上空から数個の十字手裏剣がヤクザの足元に突き刺さり、ものすごい明るさの閃光が上がった。Z Xの狙いがとつさにわかったメテオは、ヘンリーを発進させるとスコーピオンに向かってつてつ込んでいき、閃光に一瞬隙を見せた相手を後ろからつかみかかった。スコーピオンはわずかに隙を見せたが、すぐに態勢を整えメテオと正対した。

「俺のバックをとるとはな。ほう、仮面ライダーか。見たことのないタイプだな、新型か」

「最新モデルだぜ、俺はメテオだ」

「なるほど。だが、スペックが高いだけで戦いが決まるほど、闇の世界は単純なものじゃない」

スコピオンは、大胆不敵な態度をとり、次第にその姿をサソリが他の怪人形態に変えていった。尾てい骨の辺りからは、独針を持つていると思われる長い尾が見える。敵の武器はこの毒のはずだとメテオは警戒しながら、間合いを取る。

一方、閃光弾で視界を奪われたヤクザ達の許に、上空からZ-Xが舞い降り、蹴り一発で彼らを海に叩き落とした。スコピオンから渡された麻薬の入ったケースを取り上げると車のトランクに放り込み、鍵を叩き壊した。

「お巡りさんも来ているし、これぐらいでいいだろう。塀の中で少し反省しな。さて、メテオの奴は大丈夫か。俺の仕事もあるし、行つてやらないとな」

メテオとスコピオンの戦いは、敵の言う通りスペック差が全く関係ないものとなっていた。裏の世界で殺しを重ねているであろうスコピオンは、相手の動きを見切りながら最小の動きで、ピンポイントで急所を攻めてくる。さらに、強力な腐食液を足や手に噴射し、メテオの動きを封じていく。動きを封じられれば、いかに性能がよくとも発揮のしようがない。動きの鈍ったメテオをさらに攻撃していくスコピオンの優勢が強まっていく。

メテオとしては、反撃はできるはずなのだが、相手が完全に人間の意識を持った相手と言うのが、やはりやりづらいことこの上ない。以前戦ったドーパントなら、安全装置付きで命を奪うことはなかつ

だが、今度は相手の撃破が死を伴う。その事への恐れが、動きに鈍さを、そして相手に隙を与えてしまう。メテオを追い詰めるスコーピオンが間合いに踏み込んだ瞬間、十字手裏剣がその腕に突き刺さった。ZXもメテオに合流し、スコーピオンと戦闘に入る。

「ZX。どこかの国に俺の排除を依頼されたということか。少し面倒だな」

「面倒で済めばいいが、もう終わりだぜ。俺に狙われて逃げられると思うな」

「お前から逃げ切るのは難しいな。だが、一対一ならわからんぞ」

スコーピオンは何かを思いつき悪鬼のような笑みを浮かべると、自分の尾を伸ばしメテオの首に巻きつけると、その先端を首に突き刺し何かをメテオの体に注入した。

「おい、今そいつに何をした」

「別に。俺はサソリだ。毒が俺の武器であるからには、こいつに注入するのも毒に決まっている。改造人間の体でも死に至る強さのものだ。メカニックス系も破壊できるように腐食剤も混ぜてある。こいつは終わりだ。さあ、どうする。こいつ死ぬぞ」

「てめえ、やってくれるじゃないか。だが、お前お逃がすわけにはいかないんでね。それに、こいつがここで死ぬのなら、仮面ライダーにはなれない、それまでの男だ。当てが外れたな」

ZXは躊躇なくスコーピオンに向かっていく。メテオとは違い、攻撃に躊躇がなく急所を容赦せず狙う。まさに、暗殺者の名に違わぬ戦法だった。しかし、スコーピオンも命の値段が軽い世界で生き残ってきただけのことはあり、毒を駆使しながらこの場から逃げる

隙を狙っている。

「まだこの期に及んで逃げ切れるつもりか」

「逃げるさ。死んだらどうにもならん。それぐらいの常識はあるさ。だが、この世知辛い世の中、薬を使っても現実から逃避して、快楽を求めようとする奴らがいる。俺から見ても異常だし、そんな奴を生む世界は救いがないな」

「だから、お前の力で救済しようと言うのか」

「そうさ。苦痛や苦悩を取り除いて、緩やかな死を与える。この世界はもうお終いだ。なら、安楽死を選択するぐらいの慈悲を与えてやれよ」

身勝手な論理に異を唱えるように、ZXは電磁ナイフを取り出すと、相手の頭めがけて斬りかかった。しかし、スコープオンは刃を素手で受けとめると、傷口から流れる体液でナイフを腐食させボロボロにしてしまった。勝ち誇り、笑みを浮かべたのと同時に、背中が何かにぶつかり、後頭部を何者かに掴まれ、動きを封じられた。スコープオンの後ろに立っていたのは、メテオだった。致死量の毒を撃ちこまれたはずなのに、今の彼はしっかりと自分の足で立ち、いつもと変わらぬ力を発揮している。

「貴様、あの致死量の毒では、いくら改造された体でも無事には済まないはず」

「俺は最新型だぜ。お前の毒だって解毒するぐらいの機能は備わっているみたいでな。それとも、お前が旧式だけなのかもな」

「まさか、解毒しただと。ふざけるな」

「現実を受け止めな。お前の理屈を聞いてはつきりしたよ。お前みたいな身勝手で、自己弁護の論理で人を不幸に追いやる奴、人の心に付け込んで傷口を広げる野郎は絶対に逃がしちやいけないとな。お前みたいな奴を俺の甘い覚悟で逃がすことが、どれだけ多くの人を不幸にするか、今わかった。スコープオン、ここでお前は終わるだ」

メテオは静かにさういうと、自分の拳を相手の背骨に叩き込んだ。粉碎には至らないものの、相手の体の自由を奪うには十分の威力で、スコープオンは体に激痛が走り、身動きが取れなくなった。メテオは、「FREEZ」を起動させ、アイスブレーカーの態勢に入る。ふと視線を上げると、ZXも跳躍しZXキックの態勢に入っており、メテオの脳に脳波を送ってくる。

「答えが出たようだ。覚悟を決めていくぞ」

「ああ、いいぜ、先輩」

「お前の技で奴を凍結しろ。そして俺の技で徹底的に粉碎すれば、奴の体内にある毒は無害なレベルまで拡散できる。行くぞ」

二人のライダーによるキックが相手を捉える。メテオがアイスブレーカーでスコープオンを凍結させる。そしてZXが、さらに衝撃を加えるべくキックを命中させた瞬間、スコープオンは体を粉々に粉碎され、強い海風に乗って海の方へと霧散していった。

メテオはしばし呆然としていた。自分の手を汚してでも守るべきもの、守るべきものために何を思い背負っていかなければならいいのか、今初めてわかったと実感し、心に今までない何かが生まれたような気がしていた。ふつとため息を漏らし辺りを見回すと、いつの間にかZXの姿がなかった。仕事が終われば、早急に現場を去る。彼の生き方の掟なのだろう。そう思い、その場を立ち去ろうと

したメテオの耳に、Z Xの声が聞こえてきた。

「とうとう足を踏み出したな。お前に助けを求める人はこれからも増えていく。その人を助けるためにも、お前の決断は必要だった。そして、お前は決断した。ここからだよ、人類の自由と平和と言う願いを込めて、悲しみを知り、そして背負っていく仮面ライダーの道は。また、会おうぜ。いい面構えをしているのを楽しみにしてるぜ」

どこにいるのかはわからないが、その言葉はメテオにとって忘れられないものになるだろう。これから、必ずぶち当たる悩みや矛盾、それに苦しむことはあるだろうが、彼の言葉が自分をずっと支えて、背中を押してくれることも少なくはない。そう思いながら、メテオは再び自分の戦いの場に戻るべく、ヘンリーの許へと力強く歩を進めていった。

海外出張

その日は、何事もなく昼が過ぎ、不破は久々に本でも買い込み
にいこうと考えていた。テレビの中のライダーならパトロールにか
けずり回るのが王道なのだが、現実には犬も歩けば棒に当たるの格
言通り事件に出くわすなど、広い世間を考えれば不可能な話である。
それに、この零部の人材、機材、情報網に任せた方が確実だし、自
分は最後の仕上げだけに関わればいいのだから、それまではフリー
で過ごした方が、緊張感を保ち続けるより遙かにいいのだ。

リラックスも兼ねて、買い物やツーリングに出かけようかと思
い、ヘンリーを連れ出しにいこうとしたところ、
「不破、すまんがオフィスまで来てくれ」

と、滝に呼び止められた。何となくいやな気がした。事件が起こる
までは野放しになれている自分を呼びつけるということは、事件の
香りがぶんぶん臭ってしょうがない。舌打ちしながら素直にオフ
イスに入ると、滝はデスクで頭を抱えていた。

「何だか面倒な事件ですか」

「簡単な事件が零部にあるなら、教えてほしいな」

「そりゃそうだ」

不破は、デスクの向かいに椅子を置いて座り込み、リラックス
して会話をしている。二人だけの時は、こうして砕けた感じで話す
のが二人の間で自然なことになっていた。

「今度の任務は実際に面倒だ。お前にはいつもの戦闘を任せるが、
問題は今回は零部は介入できない」

「それはまた、えらいことだ。冗談はさておき、俺が必要だということ、黒子絡みだろ」

「確かにその通りだ。だが、今度の事件は我々の管轄を越えるんだ。この零部は現実には内閣直属であり、建前上は存在しないはずの組織だ。トップは総理で、限られた官僚や政治家しか知らないことになっている。もっとも、政権交代のゴタゴタや、総理の首が相次いですげ変わり、55年体制のように、我々の立場は確固たるものではなくなっている。それでも、我々の組織が日本国の一機関だというのはわかるな」

「税金がこの予算になっているんだから、それは心得てるよ。この体のメンテも血税のおかげだ」

「日本の機関である以上、国内でしか俺達は活動できない。だが、今度のおまえの指名がきているのは中国からだ」

おやおやと不破は、意外に思った。何しろ、これまでの任務は日本国内、しかも首都圏に限られているのだから。しかし、世界中でライダーが戦っている（とはいっても、彼が接触したのはまだ二名なのだが）現実を踏まえると、自分も海外で戦うことになるのは必然なのだが、その相手が中国と言うのも不思議な感じがした。一応、大人の関係を取り繕ってきた二国間だが、最近は何となく目がにつき、国民レベルでくすぶりが目立っている中、零部に直接依頼が来るのが妙だった。

「お前も妙だと思ってるだろうが、俺もだ。こういう事件は他のライダーが嗅ぎつけるか、ZXみたいな奴が担当するのが普通なんだが、向こうはかなり急ぎらしくて、明日にも現地入りして欲しいということだ」

「緊急の依頼か。一体何だっけ言うんだ」

「そこまで話そうとしない。そういう一方通行な話があるかと、思いきって怒鳴りつけてやったが、それでも未知の生命体が村一個を全滅させて、その封じ込めに人民軍が一個小隊で出張つていと言うんだから、穏やかじゃない」

「そんな所に俺が行ったら、国際問題じゃないの」

「まあ、そうなんだが、黒子を世の中に撒き散らして困るのは、お隣も一緒のようだ。仕方ないから、あまりこの国を挑発しないでくれと言ったら、さすがに黙り込みやがった」

「滝さん、すごい度胸だと思うよ、その発言は。政治家に爪の垢を煎じて飲ませてやりたい」

「まあ、現実的に譲歩して、日本円で5000万でOKした。金で動くと思うなよ。この部署を存続させて動かしているのは予算、つまり金なんだからな」

「それぐらい、ガキじゃないから呑みこめるよ。で、いつ出発するんだ」

「すぐにだ。場所は中国湖南省。詳しい場所は、現地で指示があるようだ。問題は、これは海外における秘密行動だ。つまり、日本は一切関知しない。現地で何があっても知らぬ存ぜぬだ。お前がどんな目にあっても、助けられないし、最悪の場合は見捨てるしかない。そんな人間は関知しないとな」

「厳しいねえ。まあ、そうそう簡単に消されやしないよ。その気に

なれば日本海を泳いで帰ってくるから」

「これが、存在しないはずの部署であることのつらさだな。今回は急な出張だからヘンリーは積み込みが間に合わない。お前のサポートには、緒方をつける。武器も向こうが用意すると言う話だ。不破、向こうがここまでお膳立てして俺達に始末をさせる、相当な面倒を含んだ狙いがあるかもしれないことを忘れるな」

「俺も、そう思うな。どうも話が無茶なところとおいしすぎるところと混ざりすぎだ。普通の依頼じゃないな」

「気をつけるよ。任務に必要ななりそうな最低限な資材は向こうで用意される。こちらでは渡航に必要な偽の戸籍によるパスポートを作成した。お前たちから、この組織の細部を知られるのは避けたいしてやれるのはここまでだ」

「じゃあ、行つて来るよ。何だかキナ臭い気もするけどな」

「そのくらいの警戒心でいけ」

滝の言葉を背に、不破は今までとは異質の緊張感を胸に抱きながら、オフィスのドアをくぐった。果たして、無事にこのドアをまたくぐれるだろうか、そんな考えが頭の中で渦巻いていた。

零部の本部を一時間も過ぎないうちに緒方とともに出発し、香港行きの便にすぐに乗り込むこととなった。海外出張の会社員を装ってスーツ姿になっている二人は、機内で任務の話をベラベラしゃべるわけにいかず、二人は取り留めのない会話をしながら時間を過ごしていた。実際の所、不破にとっては初の海外渡航で、パスポート

を所持したり国際便のターミナルに入っただけで、少し心が舞い上がっているのも事実だった。しかし、この後に待ち受けているスパイ映画まがいの任務を思うと、あつという間に現実に引き戻され、胸のあたりが苦しくなるような気がした。

「不破さん、緊張してますね。海外主張の仕事だからって気負わずに、いつも通りの仕事をすればいいんですよ」

「そうは言っても、パスポートを使うのも初めてだからなあ。お前、中国語は大丈夫なの」

「それは、不破さんがいるから大丈夫だって聞いてますよ。ものすごく性能のいい翻訳機があるそうですから」

緒方はそういつて、笑いながら頭を指さしていた。どうも、電子頭脳に搭載されている言語翻訳機能のことをそれとなく指しているようだが、今いちその機能になれないでいる不破だった。空港ターミナルでも外国語の放送が聞こえたり、外国人の会話も耳に入るのだが、確かに学校の英語もろくな成績ではなかった不破の頭に、その会話の内容が日本語の様にはつきりとした形で意味が脳内で再生されるのだ。まるで自分の耳や頭が自分のものではない様な気がして、異物感と言いか気持ち悪さがあって馴染めないでいる。

「向こうの空港に着いたら、すぐにあちらが用意した物資と足を調達して、湖南省の村に向かいます。尻ぬぐいだけで済めばいいんですよだね」

「まったくだ。とりあえず、飛行機の中でこの話はもうやめよう。気が滅入る一方だ」

思い気持ちを抱えながら、不破は窓の外の青空を見ていた。こんなきれいな青空の下で、怪人や国家が暗躍する暗部があると思うと、

改めて自分が選択した生き方の重みが否応なく感じられるのだった。

暗い気持ちのまま、香港国際空港に到着し、その後、湖南省空港
行きの便に乗り換えた。そして、現地に到着すると荷物を受け取る
とあらかじめ連絡のあった駐車場へと向かう。荷物の中には、最低
限持ち込める零部の支給品が、X線をパスできるトランクに入って
いた。武器は、こちらの存在が足が付きやすいので持ち込むのは控
えたが、そのほかの活動に必要な最低限の資材は、怪人と戦うこと
が前提の零部の資材の方がいいからだ。駐車場に向かい、指定され
ていたナンバーの車を二人は見つけた。緒方は早速、盗聴器などが
仕掛けられていないか車の隅々を調べている。些細な会話で、秘密
部隊の詳細が漏れることを防ぎたいからだ。車がクリーンであるこ
とを確認すると、トランクを開け中に積まれた武器を確認する。
中には、95式自動歩槍、92式オート、さらにはグレネードラン
チャーのPF89まで用意されていた。

「うわあ、本格的ですね。人民解放軍の装備がてんこ盛りですよ」

「でも、これってさあ、失敗してもこちらの軍の人間ってことで、
俺達は闇に葬られるってことだろ。怖いねえ。しかも、グレネード
ランチャーだろ、それ。こういう敵なんだよ。零部だってここまで
の装備をすることはないだろ」

「確かに、重武装すぎる気がしますね。いつもの任務とはだいぶ毛
色が違います。用心するに越したことはないですね。さあ、急ぎま
しょう。メッセージカードが中にあっただんですが、タイムリミット
は明日の深夜零時です。それまで黒子を始末できなかった場合、非
常手段に移ると言うことです」

「気になるね、非常手段って言うのが。共産主義の国だけに、個人
より国の方針の方が優先されそうで。とにかく、俺達は黒子を始末
してしまえばいいわけだし、さっさと仕事を終わらせて撤退しよう

ぜ」

二人は、車に乗り込み、中にあったナビに従った道を辿っていく。かなりひどい大雨が降りしきる中、目の前に見える川は、日本の狭く流れの速い川とは違い、雄大でゆったりとして速さで流れており、こういう自然の違いも同じような風貌でありながら全く気質の違う民俗性の違いにつながっているのだろうか、不破は何となく感じ取っていた。見渡す景色も広大で、平地はどこまでも続き、山の形も日本とは違って見える。一体この国に現われ、非情な判断すら下されかねない黒子とその正体とは一体何か、頭の中はいくつものことを同時に考え、気持ちから落ち着きやゆとりを奪っていった。

緒方に運転を任せたまま、日が暮れる時間まで経った頃、ナビが目的地に近づいた子を示していたが、あることに二人は気がついた。指定された地点は川の向こうなのだ。しかし、付近には橋がないのだ。しかも気になることは、通りすぎてきた橋には必ず警察がいて、通行禁止が徹底されていたことだった。つまり、目的地である対岸に行く方法がないのだ。

「おいおい、まさか自力でこの川を渡れってか。俺はいいけど、緒方、お前、流されるぞ」

「相当川の水も増えてますし、この川を渡るのは僕は無理ですね。あ、だからトランクの奥にゴムボートが入っていたのか」

「緒方君、そういう大事なことは最初に言っただけいいね。天然ボケは、非常時にはいらつとくるよ」

「すみません。とにかく向こう側に渡りましょう。暗い中でこの流れの速い川を渡るの危険ですから」

緒方の言うとおり、悪天候の下では暗くなるのが早い。二人は、

車を近くにあつた茂みに隠し、トランクに入っていた武器や非常食などをバックに詰め込んでいく。荷物はかなりの重量になるので、体力が豊富な体で不破が二人分を持つ。手が空いた緒方は、小さなガスボンベでゴムボートを膨らませ、日本から持ち込んだ携帯型ナビを設定する。

「このナビは、うちの部署の特性品です。ナビ機能だけでなく、簡易のレーダーになります。人工衛星も所持してますからね、うちは」

「恐ろしいほどの装備だよな、零部は」

「衛星を所持する組織から接收したんですよ。組織の構成員は逃走しましたが、組織や装備を奪ってうちが使用しているんですよ」

「なるほどね。秘密を第一にするのもわかるよ。公になつたらえらい騒ぎになるからな。よし、川を超えるぞ」

ボートの準備を整え、小型エンジンを取り付けると二人は対岸に向かつて出発した。完全にあたりは暗くなり、数メートル先の視界も厳しい状況だ。しかし、不破の視界は暗闇でも不自由なことはなく、非常に助かっている。

「緒方、方向は間違いないか」

「大丈夫です。このまま北西の対岸に向かえば現地近くに到着します」

進行方向を確認し、さらに川をのび理ながら対岸に向かつていく。その時、不破の視界に何かが飛び込み、反射的に緒方に指示を出していた。

「緒方、モーターを止めて伏せる。見張りがいる」

「えっ」

緒方は疑問を感じる前に行動をしていて、モーター止めて船の中に身を隠すように伏せていた。不破もまた、身を伏せて隠れるように対岸を目をこらして見つめる。彼の視界には、はっきりと銃を持った兵士が対岸で待ち構えているのが見え、さらに目を凝らすと暗視カメラを装備して、川からの侵入者を警戒しているのがわかった。

「おい、どうなってる。川岸沿いに見張りを展開していて、これじゃ近づけねえぞ」

「何で見張りがそこまで配置されているのか、妙ですよ。ここまでレベルの警戒は普通じゃない。外部からの侵入はもちろん、もしかしたら内部からの脱出だって難しい。推測ですけど、ハイレベルの秘密保持がされている気がします」

「一体、そこまでして漏らしたくない秘密って何だ。零部に介入を依頼するほどの事態ってどういうことなんだ。とにかく、対岸まで渡らないとどうにもならない」

「どうします」

「うーん、体力勝負だがやってみるか。緒方、モーター外してボートに引き上げる。ボートは少しガスを抜け。出来るだけ、小さくするんだ」

「不破さん、何するつもりですか」

「このまま進めば、モーター音で気がつかれる。だから、俺が泳いでボートを引っ張る。後は目立たないようにボートを小さくしとけ

ば大丈夫だろ。しっかり捕まっておけよ、流されたら魚の餌だ」

「勘弁して下さいよ。しょうがない、命を預けますよ。荷物も持っておくので、全速力でお願いします」

緒方は洪々モーターを外し、ボートのガスを抜き始めた。次第に浮力がなくなり、二人の体重を支えられなくなると不破は水面に飛び込み、自分の体にロープを巻きつけた状態得ボートを引っ張り始めた。強化された体から繰り出される掻き込みや蹴り足はモーター並みの推進を発揮し、ボートとそれにしがみつくと緒方を引っ張っていく。時折、顔を出して兵士の見針の様子を確認しながら、15分ほどで泳ぎ切り、見張りを交わしてようやく目的の地付近に辿り着いた。不破は全く体に疲れを感じず、緒方も疲労を無視してボートからガスを完全に抜いて、モーターと一緒に草と川らの意思で人目につかないように隠し、その場所をナビに記憶させた。二人は荷をほどこき、銃に弾を装填して奥地に進む用意を始めた。渡され装備は軍隊のものと同じと言う重装備となると、出現する黒子の強さもかなりのものだろう。準備をして行動を開始するに越したことはない。そう考えて手を動かしていると、不破の耳に何かが聞こえてきた。

「緒方、隠れる。何かが近づいてくる」

「え、黒子ですか」

「雨音がノイズになってうまく判別できない。とにかく視認して確認しよう」

二人は、草むらに隠れると、足音の主が現われるの待ち構えた。銃はもちろん安全装置を外している。次第に、不破の耳に入る足音は鮮明になってくる。足音の複数出二手に分かれている。先頭と後続。先頭の集団は、どうやら三人組の様で走ってこちらに近づいて

いる。問題は後続だ。奇妙なリズムの足音で、走ったり歩いていると言うより、相当の歩幅を跳ねているような足音なのだ。これが黒子かと思っただ、これではまるで姿の想像がつかない。そう考えている内に、先頭の足音の主が現われた。

三人のうち一人は女性で、その両手には男の子と女の子の手が握られており、三人の顔や服は泥だらけで、何度も途中で転倒したことを思わせた。これは救助対象だと思い、不破と緒方は身を乗り出し、

「大丈夫か」

と、声をかけた。三人は銃を持った二人を見て急におびえた表情になって後ずさりしたが、すぐに懇願するような表情で必死に、

「？助（助けて）」

と、必死の表情で訴えてきた。不破の電子頭脳の翻訳機能は、相手の言葉を理解し、自分の言葉で翻訳して相手に自分達のことを伝えた。

「大丈夫だ、撃つたりしない。一体、何があつたんだ。誰が追いかけてくるんだ」

「か、怪物が……」

うまく話せずたどたどしい言葉で、追跡者のことを二人の子供の母親らしい女性がそう表現した。全く相手の言うことを理解できない二人だったが、やがて不破の耳に追跡者の足音が近づいてきた。

「来るぞ、緒方。銃を構えろ」

「OK。さあ、鬼が出るか蛇が出るか」

二人は、暗闇に向かって95式自動歩槍を構える。緊張の面持ち

で暗闇に目を凝らしていると、突然一つの物体が二人の近くまで飛んできた。それは人型をしており、古い民俗衣装を着こんでいる人であった。だが、それがただの人ではないことは明らかであった。爪は変色して異様に伸び、口からは牙をむき出しにしており、目は腐りかかった様に濁っている。肌も緑色で腐敗が進み、腐乱臭が鼻についてくる。目の前にいる怪物のことを、二人は記憶していた。しかし、それは零部の資料のなかっではなく、子供のころに見た映画の中で出てくるものとして覚えていたのであった。

「キヨンシー、か」

「ですよね」

何とも言えない空気が二人の間で流れたが、現実は何談で済ませたくない。キヨンシーは常人ではありえない高さに跳躍すると、その牙や爪をむき出しにして二人に襲いかかってきた。その姿はまさに血に飢えた野獣で、映画の中の様な愛嬌など一切ない、恐怖の怪物そのものだった。その姿に一瞬恐怖が芽生え、体が固まってしまった二人だったが、敵を倒さねばならないという意識に戻り、銃の引き金を引いた。さすがに軍で正式採用されているだけあって、相手の体を貫通する威力で炸裂し、キヨンシーは吹き飛ばされた。しかし、負傷などなかったかのように立ち上がると、体からきつい臭いの体液を流しながら再びこちらに向かって来る構えだった。「当たり前だよな。元々死んでる、ゾンビの様なアンデットだからな」

「どちらかと言えば、死にぞこない、ですけどね。さて、どうしますかね」

「決まってるだろ。怪人が現れたら、仮面ライダーだ」

「あの家族に見られますよ」

「キョンシーをすでに見てるんだ。もうあの家族はこっち側の人間、別にいいだろ。おーい、今から見る物は他言無用だ。それだけ守れば助けてやるからな」

不破は後ろにいる家族にそう答えた。母親は子供達を抱き寄せ、何としてもこの子達だけでも助けて欲しいという顔で、必死に顔で訴えかけてきている。

「よし、行くぜ。いつもの秘密に行く戦いより、こういうシチュエーションはなかなか燃えるぜ」

「家族の方は任せて下さい。用が済んだら、さっさと脱出しましょう」

「了解。いくぜ、変身」

不破の体は光に包まれ、仮面ライダーメテオに変身した。その光景を目の当たりにした親子は、あまりの出来ごとに驚愕の表情を浮かべていた。メテオに向かって押しかかるキョンシーだが、体に硬直が残る死体ではメテオの動きに対応はできず、鋭い爪の生えた腕をいとも簡単に払いのけられると、胸元に鋭いパンチを打ち込まれて吹き飛ばされた。メテオのパンチを食らえば、相応のダメージがあるはずである。しかし、死体である以上痛みを感じることもないため、何事もなかったように立ち上がってくる。

「ちっ、現実にキョンシーがいること自体が妙なんだが、俺のパンチを食らって人間の死体が形を保っていられるはずがない。どうやら、普通じゃないのはもちろんだが、人為的に手を加えられた黒子らしいな」

アンデットと言う非常に厄介なタイプの敵にやりにくさを感じているところに、2体のキョンシーがさらに加わってきた。足音からして、一体ではないのはわかっていたが、敵の性質を考えると、あまり好ましくない状態だ。時間をかけるほど体力の消耗が激しくなる、そう考えメテオは速攻に出る。相手を誘うような攻撃を加え、三体を親子から放していく。どうやら、目は見えていないらしく、肌で感じる熱や空気の流れて敵の動きを察知していることが戦いの中でわかってきた。動きが見えないのなら、その他の感覚で把握しきれない素早い動きを繰り出せば、視力のない彼らはついてこれなくなる。三人の体の隙間を縫うように動き回って素早く攻撃を加え、次第に一力所に集めていく。そして、相手が固まったところで「FREEZ」を発動させ、アイスブレーカーで肉体を完全に粉碎した。

変身を解いた不破は、あまり長居はできないなと思った。依頼は、このキョンシー達の排除なのだろうが、子供を抱えたままでは危険この上ない。夜のうちなら、見張りの間を縫って脱出は可能だ。とにかく、敵がアンデットと言う特殊な相手では、ただ殴ったり蹴っていればいいというものではない。そう考え、緒方と話当て見ることにした。

「一旦退却だな。対岸に引き揚げて、この家族を安全な所に避難させよう。残りの敵は、俺が一人で戻って、制限時間いっぱいまで片付ける。時間を超えたらどうなるかわからないが、子供を巻き込むわけにはいかない」

「そうですね。夜の内ならさっきのやり方で、対岸まで家族を運べる。ただ、生き残りがまだいるかもしれませんよ」

「俺が戻って、救助に当たるか。奥さん、生き残っている人たちはいますか」

不破の問いに、落ち着きを取り戻した母親は、何かを頼みこむ様な目つきで喉の奥から声を絞り出した。

「村の人は、あの怪物に襲われて全滅です。殺された人も怪物になって、数がどんどん増えてます。それと、実は、……」

「何ですか」

「主人がまだ村に残っているんです。怪我をして動けないのです。置いていくたくなかったのですが、子供のために今すぐ村を出るように言われ、日暮れ前に川岸に着こうとしたんですが、子供二人の抱えては時間がかってしまい、お二人に助けて頂いたわけです」

「何ですって。と、なると救助を急がないと。さて、どうしたものか」

「まずいですね、不破さん。今、思ったんですけど、あの見張りの兵士ってバイオハザードの封じ込めじゃないかって気がするんです」

「バイオハザードだと。どうしてそう思うんだ」

「だって、あんな生き物が出ていて、しかも人を襲う。危険極まりないですよ。有害生物による危険って言う条件に当てはまりますし」

「そっぴや、この人が気になることを言っている。村で襲われた人たちも、怪物になるって。昔見た映画も、キョンシーに襲われるとその人もキョンシーになる。その通りだとすると、政府が封じ込めに躍起になるのもわかるな」

「そう考えると、制限時間も辻褄が合うんですよ。恐らく、その時間までは地理的条件による封じ込め何でしょうけど、時間を超えた

ら対応のレベルが上がって、抹消するってこともありますよ。手段はわかりませんけどね。恐らく、零部への依頼者は、どちらかと言えば人権的思考の持ち主で、仮面ライダーを所有する零課に協力を求め、キョンシーの排除と、無事な人たちの救助を望んでいる可能性があります。国の事情を考えれば、こういったことを明言して零部に依頼できない。だから、最低限の依頼しかせず現場の判断に任せて、目をつむっているんだと思うんですね」

「となると、この人達だけを対岸に渡すわけにはいかない。お国柄からして危険すぎるな。そして、生き残っている可能性がある人を置いていくわけにもいかない。この人達もそう望むだろうし。緒方、行くか」

「そうしますか」

やるべきことが決まり、荷物をまとめながら、不破はこれから行うことを母親に話した。

「この状況を考えると、あなた方だけを対岸に渡すのは非常に危険だ。そして、あなた達の家族を見過ごすことも我々に出来かねる。少々危険だが、まだ我々と一緒に村に戻って、無事を確認しに行く方が安全だ。それでも構いませんか」

「構いません。主人を、この子達の父親を見捨てたままこの川を渡れば、私たちは一生後悔します。行きます」

「なら、この銃を渡しておきます。この安全装置を外せば使えます。子供を守るには力も必要ですから。もちろん、我々も全力を尽くします」

荷物をまとめた二人は子供を背負い、不破以外に疲労回復の高栄

養食を渡し、準備を整えると暗い森の中に足を踏み入れていった。
残り時間は、28時間である。

海外出張？

不破と緒方は手分けして体力のない子供を背負いながら移動する。日本からの移動を繰り返しているの、緒方に顔にも疲労の色がにじみ出ているが、仕事柄、体を鍛えているおかげで、まだ踏ん張りが利く。不破の方は、普通の体と違う分、疲労感は全くないので、重い資材を両手に抱えながらの移動だ。

背中の子供もかなり疲れているようで、うとうとしているがやはり夜の闇が怖いのか、眠ろうとしない。

「坊主、眠いなら寝てもいいんだぞ。いざとなったら、怪物はお兄さんがまた退治してやる」

「うん……」

「ん、さすがにびっくりするよな。目の前で人が変身するなんて」

「でも、キョンシーやって、助けてくれたから、いい人だね」

「シンプルな考えをするな。ま、子供が素直が一番だ。名前は」

「ティアンティアン」

「ふーん、天を意味する言葉ね。空高く羽ばたけ、昇って行けと言っ
お願いかね。妹は」

「メイイだよ」

「美しいもの、かな。二人とも暗い中、随分歩いたんだな。頑張ったぞ」

自動翻訳機能のおかげで、不破はよどみなく中国語を操って会話ができる。それが今、子供を安心させる上で、計り知れないほど効果を発揮していて、初めて改造されたこの体に感謝していい気持ちになっていた。

「不破さん、いいですね。言葉に不自由しないんですから。正直、こっちは話し相手がいなくて心細いですよ。疲労もたまってるし、愚痴をこぼすこともできない」

「何なら、お前も改造されてみるか」

「いや、黙って歩きます」

「冗談はさておき、お前のナビはレーダー機能もあるんだろ。どうだ、周りの安全は」

「半径200メートルに黒子は確認できません。不破さんの目や耳ではどうですか」

「正直なところ、この雨が邪魔になっている。視界に水滴が拡大されて来るし、聴覚にも雑音が入って判別が難しい。レーダーの補助がないときついな」

雨足はどんどんひどくなっていた。不破は別として他の4人は生身の体だ。雨に濡れれば体温が下がり、体はその分体温を上げようとする。そうすれば体力を消耗し、足取りがさらに重くなる。そうなれば、敵にとって格好の餌食だ。何としても、早く村に辿り着き、休息をとる必要がある。

30分ほど歩き続け、ようやく森が開けてきて、集落がうつすら見え始めてきた。皆、ほっと一息をつき、村に入っていこうとした

とき、リーダーに反応が出始めた。

「不破さん、村の中に黒子らしき影がいますよ。数も10は超えますね」

「あんなのが10以上いるってか。おいおい、さすがに面倒だぞ。奥さん、村の人はどれぐらいいます」

「ほとんどキョンシーに襲われてしまって、もう2、3人でしよう。主人もその中に。明るいうちは尾そってこないのですが、夜になると数を増やしながら襲って来るんです」

「一刻の猶予もできないな。俺が奴らを始末する。その間に、この人達の家に向かって、立て籠れ」

不破は、家族にこれからどうするか伝えた。家族の命がかかっているため、みな真剣な面持ちで聞き入り、家族を守るために覚悟を決めているようだ。不破は子供の頭を撫でて励ますと、メテオに変身して村に突入し、広い通りに躍り出た。キョンシー達は、生きている人間を探しているのか、辺りをうろろろしているたが、すぐにメテオの存在に気がつき、わらわらと集まり始めた。

「嬉しいね。おれを生きてる人間扱いしてくれるとはね。だが、食感はい鉄みたいでまずいと思うぞ」

メテオは軽口を叩きながら、敵のど真ん中に突っ込んでいく。は萎えて爪をつきだすか、噛みついてくる以外の出来ない単調な攻撃なので、何なく相手をちぎっては投げ捨てる。しかし、背中の高感度センサーの役目を果たすマフラーが反応し、とつさに後ろを振り向いた。民俗衣装を着たキョンシーに混じって、普通の服を着て、血まみれの姿で疾走してくる個体が何体か駆けよってくつるのだ。素早い動きでメテオに取りつき、するどい牙を何とか装甲に突きた

てようと噛みついて来る。体に硬直が見られず、体や衣服に付いた血、首筋に生々しく残る傷を見ると、やはり子供の母親が言うとおり、どうやらキョンシーに襲われたことで、彼らも同族になり果てたようだ。

「おいおい、本当に映画のままかよ。これが悪夢ならどんなに気楽か」

メテオは悪態をつき始めた。被害者が増える度に、敵もまた増えるだけでもうんざりだった。しかも悪いことはそれだけではなかった。先程の戦いでも感じていた、異様なほどの相手のタフネスぶりにも、押され始めてくる。元々は人間の体であるのだから、超人であるメテオの攻撃を受ければ確実に人体を損壊することができずである。しかし、どの個体を攻撃しても、目立った外傷もなく立ち上がってくるの。これはもうしたいだからという理由だけではない。何かの方法で、人体を超人レベルに引き上げた武装した死体とも言える脅威だった。今の所は問題ないが、生きているメテオにはいずれスタミナ切れが訪れる。そうなると非常に厄介になる。メテオの中で、次第に焦りが生まれ始める。早めにけりをつけないと、時間が経つほどこちらが不利になる。

そう思っている所に後方から銃声が上がった。反射的に後ろを振り返ると、緒方が銃を三点バーストモードにして引き金を引いたところだった。緒方の狙いは、頭部だった。銃撃が当たったキョンシーは頭部を吹き飛ばされ、体を動かす指令を失ったようで動きを止めた。これで、まだ襲いかかるようなら、本当にシャレにならない事態だった。

「緒方、そいつを貸せ」

メテオをはそう言って緒方から銃を受け取ると、片手で銃を構えて敵の頭部めがけて発射していった。相当の至近距離でないと破壊できないほどの相手の体の強度だったが、それでも効果的なダメージ

ジを与えていく。メテオも相手の頭部に狙い定めて攻撃を繰り返していき。一点集中なら、素手でも何とかやり始めてきた。敵の数が減り始め、銃弾が切れたところで、メテオは「THUNDER」を起動させた。

「緒方、雨の当たらない家の中に入ってる。感電しちまうぞ」

メテオはそう叫んだ。狙いを察した緒方は、親子を近くの家の中に入れ、自分も身を隠した。メテオはそれを見届け、高圧電流が流れる両拳を地面にたたきつけた。雨を伝って電流が相手の体流に流れ、ダメージを与えながら吹き飛ばした。さすがにこれ以上はまずいと考えたのか、キヨンシー達は撤退を始め森の中へと逃げ込んでいく。メテオは追いかけてようとしたが、足に力が入らず、その場に倒れ込んでしまった。視界の中に「Overlord」の文字が流れてくる。どうやら、先程使ったアイスブレイカーと今使ったサンダーストームを短時間に内に続けざまに使ったことで、この体に負荷がかかったらしい。変身を解くしかなかったが、まだ熱が体にこもっている様な気がする。もしかしたら、時間をおかないと変身するのきついかもしれない。ぐったりとその場に座り込んだ不破の許に、緒方が駆け寄ってきた。

「不破さん、大丈夫ですか」

「あまり大丈夫じゃないかも。少し熱が体にこもってな。俺の体に、触らない方がいいぞ。しかし、何体か逃してしまったな」

「レーダーを見る限りでは、集落からは離れていますね。とりあえず、あの家族の父親の所に行きましょう。怪我次第では、休息を少しとって脱出した方がいいですよ。それから戦闘でもいいわけですし」

「そうだな。まずはけが人のことが先決だ」

不破は、ふらふらとした足取りながらも立ち上がると、銃器類など担ぎ、家族の家へと向かった。少し歩くと、庭が荒らされ、玄関の扉に無数の引っかけ傷のある家が見えてきた。そこが彼らの家らしく、外れかかった扉を見ると、不安の面持ちになった。不破と緒方は銃を構えながら外れかかったドアを取り払い、家の中に入った。割れた窓から風や雨が入り込み、じめじめしている。足元にはガラスの破片が散乱し、一歩ずつ歩く度にガラスが碎ける音が響く。懐中電灯で部屋を照らし、二人は寝室のドアを見つけ、壁に体をぴたりとつけ、そとドアを開け放った。部屋は荒れた様子はないが、何かが潜んでいる気配は確実にある。不破は思い切って声をかけてみる。

「誰がいるのか。いるなら返事をしてくれ。救助にきた」

かすかに物音がするのだが、返事がない。気配のする方に明かりを向けてみると、人の頭が見えた。小刻みに震えているのが肉眼で確認できる。不破ははっとして、自分の銃を見た。さすがに、恐怖の中で身を隠している人間にしてみたら、銃を持った人間がいきなり話しかけても警戒させるだけだ。緒方とともに銃を下し、もう一度話しかける。

「銃は降ろした。俺達は軍人じゃない。本当の救助だ」

「軍人じゃないのか。助けてくれ……」

弱々しい声がとともに、男が物陰から崩れ落ちるように姿を現した。かなり体力を消耗し、消耗しているようだ。子供たちの父親に間違いない。二人は、父親の元に駆け寄ると彼の様子を確認する。意識はあるものの、疲労感でぐったりして喋るのもきつそうだ。家の中にもキョンシーが侵入した形跡もあり、極限の緊張時間の中で身を潜めていたことも、より一層の疲労感を味合う原因だったろう。

さらに体を調べると、右足太ももに訪台が何重にもなつてぐるぐる巻きにされている。何かの怪我だろうかと思い、とりあえず母親に布団を敷かせて父親をそこに寝かせると、緒方が包帯を解いていった。ほどこれるに従い、包帯が赤く染まっていき、すべてを取り除くとひどい出血と大きな傷口が露わになった。医学の知識はないが、プロレスという環境上、血を見ることには大勢があつた不破も思わず「うっ」と思うほどのひどさだった。

「ひでえ傷だな。こりゃ動けるはずがないから、家族を先に逃がそうと思うよな」

「確かに。ただ、不破さん。この傷、銃創ですよ」

「銃で撃たれた傷だつて言うのか。おいおい、穏やかじゃないな」

「まったくです。ただ、傷を見ると銃弾が貫通しないで止まったままです。傷口も小さいので遠距離から撃たれたんでしょうが、このままだとやばいですよ。止血も長時間続けば、壊疽を起しますし、かといって、ここにあるものじゃないした治療はできませんし」

「かといって、この状態じゃ動かせないだろ。血の臭いに誘われて奴らも出てくる夜はヤバいぞ。とにかく、今は動けないんだ。何とか弾だけでも取れないか」

「無茶言わないでください。傷は浅いですけど、間違いは許されないですよ。医者じゃない以上、保障はできませんし、やっぱり正面から病院に行くためにここを抜けさせないと」

そう話している二人の間に母親が入ってきた。日本語で話して意味は話からいだろうが、どうも場の空気を何か察して言いたいことがあるようだ。

「どうかしましたか」

「あの、主人を撃ったのは、村への入口や森、川を見張っている兵士なんです」

「えっ、どういうことです」

何と、不破達も村への侵入に難儀した要因である見張りの兵士が、事もあるうちに民間人に向かって発砲したと言うのだ。民間人に発砲するなど、どう考えても穏やかな話ではない。不破と緒方は顔を見合わせ、ひそひそ声で話しあった。

「おい、緒方。お前さっき、この件はバイオハザードとして扱われていると言ったよな。なんか、それっぽくなってきたな」

「多分、この地域で封じ込めて、秘密裏に処分する気ですよ。住民を救助して洗浄するより、この地域に押し込めることですべてを抹消する、そういう方法じゃないですか。普通の事件ならここまではやらないですよ。でも、この国だって、裏では黒子の存在を認識しているんです。そして、ひずみが生じている社会情勢、目指す社会と矛盾する貧富の差、くすぶる続ける民俗問題。こういう問題を見れば、黒子がもたらす不確定要素は、社会にばれる前に処理したいはずです」

「闇から闇へってことか」

「仮面ライダーとコンタクトが取れる、取ることへの支障がない国ならいいんです。でも、なかにはそういう外から入り込む因子に神経質な国もあります。建前は開放路線でも、本質的にはコミュニケーションですからね。個人が巨大な力を所有して、特定組織に属さない仮面ライダーの様な存在は、より警戒され、忌み嫌われるんでしょう。」

だから、黒子に対しては、人民も含めた抹消を行ったとしても、ありえない話じゃないじゃないと思いますよ。それが、今回の秘密に包まれた海外出張のからくりですね」

「そうなる、脱出は相当困難だな。時機に夜が明ける。俺は、脱出可能かどうか警備の具合を確かめに行く。雨に当たっている方が、熱がこもってる体にはちょうどいいしな」

「じゃあ、僕は怪我人の応急処置をします。すぐに病院に運べないとなると、何か処置を施した方がいいですから。幸い、弾は浅いところで止まっています。応急処置の道具を使えば、何とか摘出はできると思いますが、薬もほとんどない状況ですから、何とか、早めの脱出をしないと」

「わかった。じゃあ行って来る。彼らの話を聞く限り、夜が明ければ、あいつらも攻撃しないようだ。けが人は頼んだぞ」

不破はそう言い残し、レーダーつきのナビを受け取って、夜明け間近の村を出ていった。

雨も次第に霧雨となり、うつすらと明るくなり始めている。狭い道を道なりにひたすら歩き、村の出口を不破は目指した。体に当たる雨が、体内にこもる熱を奪い、重みを感じていた体が次第に軽くなり、オーバーロードで機能不全に陥った体が正常に戻っていくのがわかった。それにともなって、互換も研ぎ澄まされていく。レーダーと併用してあたりを警戒するが、特に敵はいないようだ。やはりキョンシーは日中は活動できないようだ。

次第に草木が多い場所に入り、不破は警戒を強めていった。いきなり発砲してくる可能性がある以上、頑丈な体でも撃たれるのはごめんだ。発見されないように草むらの方に身を隠し、ほふく前進しながら進んでいく。うつすらと霧がかかる中、警備している兵が

見えてきた。かなりの人数が銃口をこちらに向け、瞬き一つしない形相でこちらを凝視している。普通ではない緊張感を漂わせており、雰囲気だけでも一般人に発砲したという話が嘘ではないことがわかる。不破は試しにそばにあった石を、少し離れたところに放り投げてみた。がさつと言うものがした瞬間、数名の兵士が音がした方向に、対象を確認せずに発砲してきた。そして、その正体を探ろうと緊張感を保ちながらわらわらと人が集まり始めた。予想以上の反応に、不破はさすがにたじろぎ、ここからの脱出はまず無理だと判断し、発見されないように慎重にこの場を離れていった。

やはり、行動沿いの脱出は不可能だ。それではと思い、昨夜上陸した川沿いの様子を不破は確認しに行った。川へ向かう間にも、見張りの兵が立っている気配もする上、レーダーにも反応することもある。しばらく歩いて、川に出た不破だったが、視界に兵士が入りさつと身を隠した。見晴らしのいい高台から等間隔で監視をしている。夜に見た時には気がつかなかったが、かなりの人数が見を隠したいものも加えて、川からの侵入や脱出、廻り込みへの警戒を張り巡らせていた。

これでは、明るいうちの脱出は厳し過ぎる。ちつと舌打ちをした不破は、忌々しい気持ちを抱えながら集落に戻ることにした。天気は完全に回復せず、霧雨が降りしきり体が濡れてくるので、それが余計にいらいらさせる。集落に戻ると、緒方が玄関先に座りこみ、疲労の色を顔に浮かべていた。

「緒方、どうだった、傷の手当ては」

「我ながら、うまくいきましたよ。弾はうまく摘出しましたし、抗生物質を飲ませて休まさせていますけど、あくまで応急処置ですから、早めに病院に入れる必要がありますね」

「弾創の治療だと、そこで足がつきそうな気がするけど、その点はここから出て連絡がつくようになったら、部長に相談するか」

「それでいきましょう。脱出経路はどうですか」

「厳しすぎるな。高度や森にかなりの兵士が見張りに立って、封鎖されている。川沿いも、いい数で見張ってくれているから、こつちの動き丸見えになる」

「脱出は夜ですか。キョンシー達も夜に動きだすとなると、かなりのギャンプルですね。気が滅入るなあ。あ、それとですね、村に一体キョンシーにやられた死体があつたんで、血液サンプルを採取しておきましたので。出来れば、死体の始末をお願いできますか」

「何で俺が」

「いやあ、ウイルスがらみとなると、接触はあまりしたくないですよ。その点、不破さんの体は、抗菌作用は万全、ウイルス対策も問題なしですから。軽油があつたので、それを使ってください」

「簡単に言うなあ。いくら改造人間でも、記憶はついこの間まで一般人なんだぞ。しょうがねえ、やっつくよ。しかし、あまり樂觀でない状況だな。武器もすぐに底をつきそうだしな。緒方、お前、休んでいいぞ。俺は大丈夫だが、お前は生身で限界がある。寝て、体力を回復させた方がいい」

「じゃあ、そうさせてもらいます。食事も用意させてもらっているので、よければどうぞ」

緒方はそういうと、家の奥に引つ込み廊下に横たわって、あつという間に眠りに落ちた。やはり、長距離移動や戦闘、緊張が長く続き、さすがに疲れていたようだ。不破は、緒方に言われた家の中に

はいるとシーツを被せられた死体を見つけた。さすがに気分が悪く、多めにシーツを被せ家の裏まで運び、家具を素手で破壊して薪の代わりにし、燃料をかけて火を付けた。景気良く炎が明かり、遺体とともにそこに潜んでいるかもしれないウイルスが炎に消えていく。もくもくと黒煙があがり、まるでこれからをの困難を示すような黒煙の様に村を覆っている。

不破は、自分の服も念のために脱ぎ捨てて火にくべると、粗っぽく消毒用のエタノールを体に塗りたくった。ウイルスの知識に疎い彼らしいやり方ではあるが、体の機構を考えればこれで十分なのである。今夜の脱出はどんなことになるのか、そんなことを考えながら数時間過ごしていると、目を覚ましたティアンティアンが不破のそばにやってきた。

「どうした、目が覚めたか」

「うん。でも、夢が怖いからあまり眠れない」

「仕方ないか、あんな怖い目に遭ったんじゃない。少し、俺と話してもするか」

不破に誘われ、ティアンティアンは彼の隣に座り込んだ。この小さい子供が恐怖の中で暗闇の中を救いを求めて走ってきたのだと思うと、いたたまれない気持ちにあると同時に、自分に課せられた役目の重さが身にしみてくる。

「お兄さんはどこから来たの」

「海の方こうだ。日本だよ」

「日本では、みんなお兄さんみたいに姿が変わるの」

「まさか。でも、似たような人が世界中にいるらしいよ。まだ二人

しか会ってないけど」

「みんな、お兄さんみたいな強くてカッコいいのかな」

「俺がカッコいいかどうかはわからないけど、他の人はみんな強くてカッコ良さそうだな」

会話をしているうちに、不破はヒーローはどんな国でも子供にとっては仰ぎ見られる存在なのだった。だからこそ、仮面ライダーを初めて見た子供でも、その目に映ったメテオだけでなく、この世界のどこかにいる他のライダー達をヒーローとして認知できるのだろう。ヒーローとは何か、その一端がわかったような氣に不破はなれた。ヒーローとは、助けを求め、行き場をなくした人たちに手を差し伸べられる存在ではないのだろうか。姿形も、能力も、そんなものは二次的なものだ。弱い立場の人のために手をさしのばす勇氣、行動こそが仮面ライダーと言うヒーローのあり方ではないかと自分の目指すライダーの姿が見えた氣がした。

「お兄さんみたいな人たち、仮面ライダーって言うんだ。その人たちは、色々なところで、見えないところで戦っているんだ。困っている人を助けるために。お兄さんも、そんな仮面ライダーになるのを目指しているんだ」

「お兄さんはもう仮面ライダーだと思っけどなあ」

「ありがとう。今夜な、また川まで行って、川を超えてここを脱出する。あいつらも出てくると思うけど、俺がお前も、妹も両親も絶対守って向こう岸まで渡してやる。約束だ」

「うん。仮面ライダーがいるならきっと大丈夫だよ」

「そうだな。もう少し休んでな。目を閉じているだけでもいい。しっかり体力をつけておけ」

「わかった。夢にも、仮面ライダーが出るといいな。そしたら、全然怖くない」

ティアンティアンはそう言って、家の奥へ戻っていった。不破は思った。今夜は今までで一番、自分が仮面ライダーであることを意識し、求められることになる。

日が暮れると、いよいよ行動を開始することになった。完全に日没する状況にならないと、見張りの兵に発砲される恐れがあるからだ。危険ではあるが、闇にまぎれて行動することになる。家族や緒方は移動に備えて食事を済ませ、移動の準備を整える。父親の傷口は、新しい包帯に変え食品用ラップで固定して雑菌を入り込めないようにする。

「私は、日本人と言うのは実際に会ったことはないが、こうして会ってみると違う印象を持ちます」

「それはお互い様ですよ。国も違いは考えも違う。ですが、目の前に困った人がいれば、助けたいと思うのが、どの人間でも同じようにある人情でしょう」

「家族のことをよろしく願います」

「もちろん、あなたも含めた家族全員ですよ」

緒方と父親の会話を聞きながら、不破は銃の点検をしていた。昨

夜の戦闘でかなり球を消耗しており、自動歩槍は残る弾装が二つである。無駄撃ちできない状況だが、視界の効かない夜と言うことを考えると厳しい状況だ。PF89はメテオの力以外では最も威力のある武器だが、一回きりの使い捨てだ。いざと言う時まで使えない。残る拳銃は、気休めにもならない。

「緒方、かなりきついな」

「ええ、何とか川岸まで持てばいいんですけど、追いつかれると不破さんが頼りです」

「オーバーロードの心配もあるから、慎重にならないとな。父親は俺が背負う。体力は一番なるからな」

「こちらで家族は護衛します。リーダーも任せて下さい」

「じゃあ、行くか」

一行は暗闇の中を、決死の移動を始めた。都会の様な街頭のない田舎では、夜は月明かりだけが結いつの明かりになるのだが、厚い雲に覆われた夜は全く視界が利かなくなる。光量のある懐中電灯があってもその周囲しか明るさが生まれず、暗闇の中は想像以上に恐怖感が煽られる。

けが人と子供連れと言う状況は、行軍を送らせてしまう。そうすれば、敵はすぐに追いついてくる。敵は、眼だけで対照を追う人間と違い、敵の体温や呼吸を感知して追って来る。暗闇は敵の味方になっても、こちらを助けてはくれないのだ。やがて、予想通り敵が近づいてくるのをリーダーが感知する。

「不破さん、敵が半径1キロ以内に侵入してきました」

「思ったよりも足が速いじゃないか」

「数もどこで増やしたのか、20はいますよ」

「イライラさせてくれる相手だぜ。とにかく歩くぞ。銃もぎりぎりまで使えないんだ」

一行はスピードを上げるが、やはり暗闇の恐怖と疲労で、子供が先にバテていく。それにつれて、敵との間隔がどんどん狭まっていく。不破は、銃の安全装置を外し、振り向きざまに銃を発砲した。三点バーストで発射された弾丸は確実に相手を仕留めていくが、距離がある分、すべてを仕留めることができない。特殊な暗視カメラの視界を持つ不破だから可能な芸当だ。しかし、それも効果は薄く敵はどんどん接近してきて、100メートル近くまで接近してきた。これ以上は、いつ追いつかれてもおかしくない。

「緒方、この父さんを頼む」

「不破さん、行きますか」

「それしか、方法がないだろ。川まであと少しだ。あいつらは、どうせ泳げない。俺にかまわず漕ぎ出せ」

「了解。じゃあ、川で会いましょう」

緒方は家族の父親を背負い、一行を引き連れ、ボートを隠している川岸を目指す。彼らを見送りながら、不破は暗闇の中で変身する。眩い光の中にメテオが姿を現し、子供達の目には力強いヒーローの姿が輝いている。

「仮面ライダー、頑張れ」

ティアンティアンが無意識のうちに発した声援に、メテオは手を

振ってこたえる。絶対にあの子たちを、あの家族を守る。不思議といつもより力がわき出てくるような気がした。

「ヒーローは、子供たちの憧れで、目標にならないとな。さあ来い、遠慮なくぶつとばしてやる」

不破は暗闇に向かって飛びかかった。敵の弱点は脳や脊髄、体に命令を下す部分だ。そこを破壊してしまえば、死体とは言え体を動かす指令が伝わらなくなる。むしろ、相手が死体だからこそ、そこしか弱点がない。目手をは昨晚の経験を生かし、的確に攻撃を仕掛けていく。一点に集中すれば、いかに強化された肉体を持っているキョンシーでも、たやすく肉体を破壊できる。頭部に拳を叩き込み、身を翻しながら流れるように蹴りを見舞い、次々と敵を撃破していく。しかし、そのメテオを無視して、緒方達生きている人間を狙っていく者もいるため、メテオも次第に後退せざるを得ない。緒方も目に見える敵は銃撃を加えることで足止めをし、あと少しで川岸のところまでやってきた。

メテオもそれを確認してようやく一息ついたところ、その耳に妙な足音が聞こえてきた。ゆっくりと振り返ると、二体の奇妙なキョンシーがこちらに歩いてくる。

体には古めかしい鎧を着用し、ぎこちないが普通の歩行を行っている。顔は、これまでの個体とは違い、かなり腐敗が進んでいる。どうやら、埋葬時期が他と違うようだ。

「鎧を着た奴か。フルメタルって言ったかな」

メテオは、少し気を引き締めて二体に踊りかかる。しかし、見てくれと違って俊敏な動きをして、信じられないほどの馬力を持ったフルメタルキョンシーは、メテオを翻弄する。これだけの力を持った黒子に体同時となると、メテオは圧倒的に不利になる。殴られ蹴られ、体を吹き飛ばされながら後退を余儀なくされる。

一方、緒方達は川岸にようやくたどり着いた。ぐったりと座りこ

む家族を尻目に、素早い動きでボートを隠し場所から引きずり出し、ガスを注入していく。ものすごい勢いでゴムボートが膨らんでいくが、敵が近づいているのがレーダーに映っているので、余計にボートが膨らむのがゆっくりに見える。やがて、肉眼で見える距離まで敵が迫ってくるが、メテオのおかげで数が少ない。緒方は銃を構え、相手の頭を的確に撃ち抜いていく。後ろ振りけると、ボートがもう膨らみきっている。緒方は身ぶり手ぶりで、ボートを水に浮かべてそこに乗りこむように指示をする。その意味がわかったのか、家族は父親の体を支えながらボートに乗せ、いつでも漕ぎ出せる準備を整えた。それを見届け、緒方もボートに乗り込もうと駆けだしたその時、メテオの体がそばに転がり落ちてきた。

「不破さん、大丈夫ですかっ」

「こんな状態で大丈夫だなんて冗談言えるほど、俺はタフじゃねえ」

緒方が暗闇に目をやると、そこからフルメタルキョンシーがこちらに向かって歩いてくるのが見えた。緒方は、銃で彼らの頭部を撃つが、全く効果がない。

「何だ、あの装甲は。普通の鉄じゃない」

「清とか明とか、そんな時代の代物じゃねえのは確かだがな。俺のことはいいから、早くボートを出せ。何とか足止めをするから。どうやら、時間切れが迫っているせいか、見張りの兵士もいないようだ。モーターも心おきなく使えるぞ」

緒方は、敵の異常性を認め、この場をメテオに任せてボートに走った。もう生身の人間の力が及ぶところではない。船にモーター取り付けエンジンをかけ、少しずつ川岸から離れていく。川岸に目をやると、メテオを振り北っキョンシー達が川に入ってくるが、彼らにメテオが飛びつき、指を頭蓋骨にめり込ませ、行動不能にして放

り投げた。そこに、フルメタルキョンシーが掴みかかり、メテオの首を絞りあげる。

緒方の目にもその状況が映っているが、もう銃弾が尽きた上、例えあったとしても彼らには効果がない。歯ざしりsながら状況を見守っている緒方の背中を叩くものがいた。振り返るとティアティアンがPF89を手にしていた。これだと思い、その手から対戦車ロケットを取り上げると、フルメタルキョンシーに狙いをつけて発射した。

命中はしなかったが、爆風に巻き込まれ一体が吹き飛ばされた。緒方は、さらに一発撃ち込み、今度はその爆発に巻き込まれ、一体を撃破することに成功した。残るは、メテオと対峙する一体だけだ。強敵を前に、メテオの息は上がりそうだった。しかし、ここでの能力を持っていると、川を超えてくることも十分あり得る。何としてもここで仕留めなければいけない。緊張感が張り詰めるメテオの耳に何かが入り込んできた。何か、巨大な機械音の様なもの。メテオの視界は超望遠モードになり、その元を捉えた。どうやら、こちらに受かって戦闘機が向かっているようだ。一体、何故。

ハッと、その意味が理解できた、メテオは、時間がないとばかりにラッシュをかけていく。相手も、それに呼応して、より激しい動きを可能にして応戦してくる。恐らく、今までの敵で一番強いと思える相手に、心が折れそうになるメテオだが、時間をかけてはいられなかった。そんなメテオに、子供たちの声が届いてくる。

「頑張れ、ライダー」

「早く一緒に行こう」

わかってるさ、と心の中で応えるメテオに、子供たちの声が力を呼び起こす。相手の動きをギリギリまで見極め攻撃をかわし、相手と間合いをとりバツクルをまわして「FREEZ」が起動する。エネルギーが足に集中するのを感じ取ると、メテオは空中に飛び上が

った。足を突きだし降下が始まると、さらに集中力を増し、それに抗応して背中のマフラーが伸長し翼の様に変化し、それに伴ってメテオの体が回転を始めていく。ドリルの様に回転をしながら、唯一敵の体のがむき出している部分に強化アイスブレーカーを決めることに成功した。フルメタルキョンシーは鎧を残して肉体が崩壊した。しばらくそこに佇んでいたメテオに向かって、後から来た足の遅いキョンシーがやってきたが、それに構う必要はメテオにはなかった。何故、見張りの兵士がいなくなったのかもようやく合点が行った。メテオは敵を背にして駆けだし、助走をつけて跳躍し、ボートの近くに着水した。そのまま、泳ぎながらボートを押し、加速させる。「不破さん、どうしたんですか」

「証拠隠滅が始まるんだ。あの戦闘機だよ」

緒方が空に目を向けると暗闇の中から戦闘機が音速を超えてやってくるのが見えたが、その高度が低いことに気がついた。このままでは、非常に危険だと思われる高度を切っても上昇することはなく、そのまま村があった地点に墜落し、辺りを吹き飛ばす大爆発が起った。恐らく、相当の爆薬も積んでいたのだろう。キョンシーの存在、その出現に伴うバイオハザードの隠滅を、戦闘機一機の墜落事故と引き換えに成し遂げたわけだ。恐ろしいまでの徹底したやり方、手段を選ばない考えに緒方は戦慄するしかなかった。

その後、脱出に成功した彼らは隠していた車で一刻も早く遠ざかり、証拠隠滅の手から逃れることにした。父親の怪我の治療もこうなると場所を選ばざるを得ず、連絡が取れる場所に入ると、東京の滝に連絡を入れ、状況を報告し、指示を仰いだ。さすがは滝で、海外にいてもその判断は素早くて確で、指定する病院に運ぶように指

示をし、手配を済ませておく伝えてきた。不破と緒方の身柄も、すぐに安全を確保できる様に指示を出し、安全でクリーンなホテルと、足のつかない形の飛行機の手配を済ませてくれた。滝の指示に従い、家族を病院に送り届け、二人は香港に入り、ようやく一息つくことができた。ふかふかのベッドに体を横たえながら不破は、携帯で滝と話をして報告を終えていた。

「ご苦労だったな、不破」

「国も違えば、やり方も違う。まさか、隠蔽に戦闘機一機を使つて、墜落事故なんていう大事件で隠しちゃうなんてありえないですよ」

「まあ、お国柄だな。それはそうと、あの家族のことだが、父親の怪我は無事治療が成功した。だが、彼らはあの事件の真相を知ってしまった。証拠隠滅の危険を回避するには、日本に移住した方がいいかもしれない。日本でなら、こちらで証人保護プログラムを使うことができるし、生活の支援もできるからな」

「それなら、あの依頼金の5000万円はあの家族に当てましょうよ。どうせ、向こうの国の金なら、あの家族にも恩恵にあずかる権利がある。それに、計上できない金なら、あの家族の生活資金に充てた方が使い道がある」

「それはそうだな。ま、その方向で俺も考えているところだ。だが気になるのは、黒子のことだ。報告通り、ウイルスか何かが原因だとしても、死体が腐敗しない状態で怪人化したとなると、埋葬する時点で何か細工したことになるが、その時代におオーバーテクノロジーを持った人間や組織がいたことになる。これまでの組織の系譜か、またまったく新しい組織か、油断ならないことだな。採取した血液サンプルの結果次第だろう。とにかく明日の便で帰ってこい。お前達は、一応そこにはいないはずの人間だからな」

「わかりました。では明日また」

数日後、血液サンプルの結果が出た。血液には、紫外線に対して非常に弱い未知のウイルスが混入しており、これが死体をキョウシに変え、アンデッド化させていたという結果になった。ウイルスの解析によると、それはこれまでのどの組織とも類似性のないウイルスと言ったことが判明した。零部の、メテオの前には、正体不明の影が暗躍し、不気味な暗雲が立ち込めていた。

合わせ鏡

海外出張から帰り、ようやく緊張から解放された不破は、久々にヘンリーに跨って近所をツーリングを楽しんでいた。誰にも知られず、世間の裏で活動すると言うのは、息がつまり、肩がこる。そんな窮屈な世界から普通ん世界に帰ってきたことを満喫するため、バイクを乗り回したいと言うのも、彼にしてみれば自然な欲求だった。その上、元々乗り心地の言い期待だけに、疲れも感じることなく爽快な気持ちになる。

「いやあ、いい乗り心地だ。風が身に染みるよ。お前の乗り心地はいつも最高だよ、ヘンリー」

「褒め言葉は嬉しいけど、バイクの僕からはお世辞を言っても何も出ないよ」

「別にお前に何かくっついていてねえよ。この風を満喫してるだけだよ。けど、そろそろ帰るか。呼び出しがかかってから帰ると、気分が台なしだ」

「じゃあ帰りましょう」

不破はそう決めハンドルを切ると、ヘンリーを零部の基地へと向かわせた。夕方になり、少しずつ涼しくなってきた風が当たって心地よく、先日の真夜中のアンデッドとの格闘や、秘密裏に行動する緊張感で張り詰めた体には一番の薬だ。流れていく景色も、不破の超資格では色々な物がはつきりと見え、その景色は見ていて飽きなかった。やがて、零部の本部が入っているホテルが見え、その手前で裏路地に入ると、人目につかないところから地下駐車場に入り込んだ。表示されている地下2階の地下駐車場の一角の壁が開き、本

部の入っているエリアへと入っていった。地下深くの本当の駐車場に入り、その最深部にあるエレベーターへとヘンリーを滑り込ませようとした。その瞬間、不破の耳に何か聞き慣れない音が入りこんだ。不破の耳には、人間では聞き取れない音域を捉えられる。ヘンリーを止め、辺りを見渡したがいつもと特別変わったことはない。「ヘンリー、10秒以内に記録された映像と音声进行分析して、異常がないか調べてくれ」

「了解」

ヘンリーは不破の指示に従い、自分のメモリーに納められた映像や音声を分析している。自立思考型マシンであるジョン・ヘンリーならではの芸当だ。小さな電子音を鳴らしながら、ヘンリーが結果を報告する。

「13秒前、ここより68センチ前で、不審な音波を観測。正体不明」

「68センチだな」

不破は、バイクから降り、その場所にゆっくり立ってみた。周りにあるのは、駐車してある車ぐらいたし、これは零部部員達の物だから、不審である点はない。何が自分の耳に聞こえたのかと考えていると、再び謎の音が聞こえてきた。

「また来たぞ。ヘンリー、記録しとけよ」

ヘンリーに指示し、不破は何が起こるか見極めようとした。次第に音が高周波になり、耳を突き破りそうになり。すると、突然、フラッシュでも焚かれた様に閃光が走り、目の前が真っ白になった。「メテオ、メテオ、どうしたの」

ヘンリーが呼びかけるが、いつのまにか不破の姿はなかった。まさに、目の前から消え失せたのである。何が何だかわからないヘンリーは、何をすべきか計算して思考し、とにかく報告しなければと思い、自動運転でエレベーターに走り込み、本部のフロアへ向かった。

扉があくと、ヘンリーはそのまま廊下を走行し、滝のオフィスのドアを突き破って中に入っていた。さすがに、バイクが部屋に入ってくるという事態に、滝は驚いて飲みかけのコーヒーを噴き出してしまった。

「馬鹿野郎、ヘンリー。部屋に入る時がはノックを……、お前ができるわけないか。だからって、バイクがドアを破壊して部屋に上がり込むとは一体どういうことだ」

「そ、そ、そ、それが部長……」

「落ち着け。世界最高水準のA・Iが泡食って口が回らないなんて、いい笑い者だぞ」

「本当に大変なんですよ。駐車場で、メテオが目の前で姿を消したんです。本当に、目の前からふっと消えたんです」

「何だと。どこかに隠れたとかじゃないのか」

「何なら、僕の記憶からその映像を吸い上げて下さい。ああ、僕にはもう理解不能の領域だあ」

「えらいこった。おい、鑑識課。すぐに出勤だ、場所は地下駐車場。それと、地下駐車場は調査が終わるまで徹底封鎖だ。部員全員立ち入り禁止だ」

滝は、落ち着きつつも意思での確な指示を出し、また違う部屋にも電話をかけた。

「吉村か。大至急俺の所に来てヘンリーを回収しろ。メモリーから吸い上げたい物がある。それと、妙な事件が起こっている。お前も今日は残業だ」

どうやら、零部と言う秘密部隊のお膝元で、その最最高戦力である仮面ライダーが文字どおり神隠しにあったのだ。基地内は、蜂の巣をつついたように騒然となった。

同じころ、不破は不思議な感覚を味わっていた。奇妙な音と突然目の前が光に包まれたと思うと、再び彼は、いつもの駐車場に立っていた。辺りを見回しても、別段変わったことはないように思えた。「ヘンリー、今の記録して置いたか。とりあえず、零部で検証してもらおう」

ヘンリーに呼び掛けたが、返事がない。あのおしゃべりが無視するはずもないので、おかしいなと思って振り向くと、そこにヘンリーの姿はなかった。あたりを探しても隠れるところがあるうはずもなく、一体どうなってるんだと不破は胸騒ぎを覚えた。あたりをきよろきよろする内に、周りに何か違和感を覚え始めた。その原因は何かわからないが、明らかにこの駐車場内にある物が、違和感の源であることに変わりはない。だが、この駐車場内にある物と言えば、車ぐらいのものだ。部員の車は、彼らの報酬に十分見合うだけの高級車ぞろいで、好みのモデルの最高ランクの車ばかりが並んでいる。その車を見ていると、やはり何か違和感を感じ、次第にその感覚が強まってくる。次第にあることに不破は気がついた。

「これ、滝さんの車だよな。確か滝さんって、国産車に乗ってたは

ずだけど、何で左ハンドルなんだ」

国産車なら当然右ハンドルであるべき車が、なぜか左に運転席を備えている。周りの車を見回しても、国産車は左ハンドル、輸入車は右ハンドルとすべてがあべこべなのだ。その瞬間、ある仮説が不破の頭にひらめき、彼は車のナンバーを確認した。恐ろしい仮説が的中した瞬間だった。ナンバーの文字は、鏡に映したかのように左右が反転しているのだ。

不破は、腰を抜かしそうになった。いつの間にか、彼は鏡の世界にいたのだ。すべてが左右反転した物を見れば、もうそれは認めるしかなかった。その時、彼は思った。鏡の世界にいるのなら、こちらの世界の鏡を見れば、向こうの世界が見えて、コンタクトがとれるのではないか。彼はとつさに、駐車場に設置されているカーブミラーの所に駆け寄った。彼の読みは当たり、鏡には正常な世界の様子が映し出されていた。鑑識と思わしき人間が写真を撮ったり、車を丹念に調べて調査している。人がいるなら、こちらの姿に気がついてもらえさえすれば、救助も可能かもしれない、そう思ったのだ。「おい、俺はここだ。見えるだろ、こっち向きやがれ」

不破は大声をあげ、オーバーアクションで手を振ったが、誰も彼の姿人気がつきはしなかった。一瞬、一人の部員と目があつたように思えたが、どうもこちらの世界はあつちから見えないようだ。それはそうだろう。不破自身、鏡の中にこちら側にいない人間が、鏡に映り込むような気味の悪い経験はした事がなかったのだから、当たり前前の反応だろう。

これから、どうするべきか不破は考えた。あちらでは調査は始まっているから、自分がこつという面倒に巻き込まれたことはもう知られている。ヘンリーも傍にいたから、あいつの証言とメモリーを分析すれば、ある程度のことができるだろう。だが、自分の居場所が分かったとして、果たして救助が可能だろうか。零部の装備は、仮

面ライダーや秘密組織の技術も組み込まれているだけに、相当レベルの高い装備が揃っているのは知っている。だが、その技術で鏡の中に救助しに來られるだろうか。

「厳しいだろうなあ。鏡面世界なんて、SF過ぎるよ。ま、俺が言うセリフでもないか」

連絡が取れない以上、どうするべきか考えてみた。自分の足で脱出口を探るべく、外を見回ってみるか。だが、ここで姿を消したと言ふ事は、零部のメンバーもこの現場からしか自分の事を追跡できない。となると、あまりここを動くのは得策ではない気がした。そう思いながら、コンクリートの上に大の字になって寝そべっていると、外の方で大きな音がした。まるで、コンクリートが砕けるような、そんな音だった。

「何だ何だ、俺以外にもここに迷い込んだやつでもいるのか」

不破はそう思い、外に向かって駆けだしていった。音はまだ続いており、どうやら外から聞こえてくるようだ。何かつかめるかもしれないともい、不破は全力で左右あべこべの建物の中を走り、地下駐車場から外に飛び出した。

外に出た瞬間、自分に向かって燃え盛る車が宙を飛んで向かって来るのが目に飛び込んできた。不破は、とっさに体をよじって、すんでの所で回避した。頭上を超えて飛んで切った車は地面にたたきつけられ、大爆発を起こして炎上している。

「一体、何だつて言うんだ」

車が飛んできた方向を見ると、そこには見たこともない怪物が二、三体群がっていた。生き物ではあるのだが、金属質な質感を持ち、器官も刃物を備えたりするなどサイボーグ的な面が見受けられる、今まで見たことのない生物だった。そのうちの一匹が不破を見つけ、植えた野獣のように飛びかかってきた。車を避けたばかりで、体制

が整っていなかった不破は攻撃を避け切れず、怪物に捕まってしまった。本当に自分を捕食しかねないほどの獰猛さに、不破はさすがに焦った。相手の力も強いのでなかなか振り切れずにいるうちに、相手は不破の肩口に噛みついてきた。生身の人間ではない分、肉を切られたり骨を砕かれることはないが、それでも肉体を傷つけられるのは激痛が走る。

「いつてえなつ。俺は鉄分たっぷりだろうけど、食ってもまずいぜ」

不破はようやく足を怪物の腹部に叩き込み、相手を跳ね飛ばした。すぐに立ち上がり態勢を立て直すと、残りの個体もこちらに近寄り、いまにも飛びかかるとしている。どうやら、相当好戦的か、食べ物に関して貪欲な生物のようだ。

「相当、腹が減ってるようだな。けど、こっちも正当防衛が成立するぜ。腹をくくりな。変身っ」

メテオは、奇妙な怪人の群れに踊りかかっていく。それほど知能は高くはなさそうだが、獣性は強いようで、メテオの攻撃にひるむどころか、さらに闘争心を掻きたてられるように襲いかかってくる。一体一体はそれほどでもないが、集団で来るとメテオの手には少し余ってしまう。少し、相手を散らす必要があると感じ、メテオは群れの中に突撃していった。馬力は上の優位さがあり、怪物はそれぞれある程度の距離を持って吹き飛ばされた。一対一になればメテオに分がある。メテオは一体の怪物に集中して攻撃を加え、相手を持ち上げると近くにビルのフロアに放り投げた。割れたガラスが降り注ぐのを意に介せず、メテオは別の個体に体当たりをかけ、パンチのラッシュを加えていく。メテオの攻撃に相手もたじたとになり、戦意が段々削がれていく。しかし、もう一体がメテオの隙について突っ込んでくるのが視界に入った。怪物の突進を跳躍でかわしながら、メテオはバックルを回転させ「THUNDER」を起動させる。そして、相手の頭上に体が到達した時を逃さず、サンダーストーム

を頭上から浴びせた。力量に差があり、一体はあっという間に撃破できた。

残る二体に追い打ちをかければ十分に倒す余力はあったが、メテオにはその気はなかった。ここは異世界である上、深追いしてまで敵を倒す必要はないからだ。とにかく脱出の機械がや手段が見つかるまでは、生き残らなければならない。だから、不用意に戦いにのめり込むわけにはいかないのだ。その場を走って立ち去ろうとした瞬間、先程ビルに放り込んだ個体がメテオの頭上に降り注ぎ、がっしりとその体を取り押さえてしまった。メテオは必死に体を動かすが、相手も死に物狂いでしがみつき、獲物を逃がすまいとする。やがて、先程グロッキー状態まで追い詰められた個体が立ち上がり、動けないメテオに向かって駆けだしてきた。クソつたれと心の中で罵るが、相手はメテオを逃がさないことにすべての力を注いでいて、どうすることもできない。これで終わりかと諦めかけた時、どこからか不思議な音声が続いてきた。

「アドベント」

その音声とともに、空に巨大な深紅の姿の東洋の龍のような生き物が現われ、口から火炎弾を発射し、メテオに向かってきた怪物に直撃しあつさと焼き尽くしてしまった。メテオも驚いたが、それ以上にはがみついていた怪物は、その龍の姿に恐怖を抱いたのか戒めを解き、逃げようと後ずさを始めた。どうやら、圧倒的な力の差をあつ龍に対して抱いたようだ。怪物がその場を立ち去ろうとしたその時、怪物の目の前に人影が躍り出た。真っ赤な装甲に身を包んだ甲冑の様なマスクをつけた戦士は、腹部に装着されたカードケースの様なものから一枚カードを引き抜くと、左手に備えられたアーマーにカードを差し込んだ。

「ストライクベント」

音声とともに、戦士の右腕に空中を飛ぶ龍の頭部を模した武具が

装着され、戦士はその武具のついた拳を怪物に叩き込んだ。龍の白化円と同じような高温の炎が拳を包み、怪物を炎の打撃で粉砕してしまった。その様子を啞然とした様子で見ていたメテオだったが、その戦士の姿を見ている内に、ある事を思い出した。以前、零部で見た事件のファイルや、世間で流布して認知されている「虚構としての仮面ライダー」の資料の中に、目の前にいる戦士と酷似した存在がいて、その名前も思い出したのだ。

「知っている。俺は知っているぞ。紅い龍を使役する鏡の中の仮面ライダーがいるのを。確か、お前は龍騎」

「へえ、俺の名前を知っているんだ。ここ数年、そういう人が多いんだよね。でも、随分変わった奴だな。仮面ライダーみたいだけど、随分見た目が違う。とりあえず、場所を変えようか。飢えてるミラーモンスターが餌を探してうろろろしているし、落ち着いて話もできない。まともに話をする理性があるなら、ついてきな」

龍騎はそういうと、ビルの中の細い路地に入っていった。メテオとしても、自分が餌扱いされている以上、ボーッと突っ立っているわけにもいかず、龍騎の後を追いかけることにした。とにかく、この世界に関する手掛かりが欲しい、そんな思いもある。果たして、この世界を脱出できるかどうか、あてのないサバイバルが始まった。

零部では、不和が神隠しにあった現場を徹底的に操作をしていた。最新鋭の機材を使い、事件に関わりのないものまで採集され、分析されている。その中でも最も重視されているのが、ヘンリーの記憶である。ヘンリーに搭載されている極小カメラで撮影された映像は長期間保存され、拡大やコマ送りなど、あらゆる映像解析に耐えられる。吉村のラボに送り込まれたヘンリーは、不破が姿を消し

たときの音声や映像、温度や湿度などのデータを表示し、吉村がそれを解析していた。

姿を消したその瞬間は、すぐに把握できた。不思議な音が鳴り響くのと同時に、あたりを探っていた不破の姿が、パツと一瞬で消えているのだ。映像に細工したはずもなく、本当に一瞬で姿を消したのだ。問題は、姿が消える瞬間に何が起こっているかだ。それがわからない限りは、本当にただの不思議な消失事件となってしまう。

「吉村、この映像から他にわかることはあるか」

「部長、これが監視カメラ程度の性能のカメラで撮影された映像であれば、これ以上のことはわからないでしょうが、ヘンリーに搭載されているのは、世界でも最高の性能を持つ記録技術です。限界までスローにしたり、拡大したりできますから、さらに詳細が分かるはずです」

「よし、まず不破の姿が消える本当にぎりぎりの所を探ってみよう」

「了解です」

吉村はコンピューターを操作し、まず不破が消える瞬間のギリギリの映像を映し出す。かなりスローで映し出しても、やはり一瞬で姿を消しているように見える。これがフィルム映像ならまさに一コマで次のシーンには姿を消している、そのように見える。吉村はさらに、不破の姿が消える0.0001秒の世界までスロー映像で先送りして映像を映していく。そこまで引き延ばしても、映像に乱れが生じないのはヘンリーに搭載されている機材の性能のハイスペックによるものだ。次第に、消失の瞬間が明らかになっていく。どうやら、不破の周りに光が発生しているらしい。

「何だ、この光は。相当強い光が一瞬だけ、彼の体を包み込んでいくようです」

「この光に秘密がるのは確かなようだ。光源はわかるか」

「少し映像にフィルターをかけてみます。これで、微弱な光も見えるはずです」

吉村はキーボードを操作し、映像に特殊フィルターを合成した。様々な光線が画面に入り乱れるが、不破の周りには光だけを色付けしてあるので、その軌道がわかりやすくなっている。光の起動は、反射を繰り返して不破の許に到達しているようだ。

「不破の許に到達するまでに、駐車している車のフロントガラスや、駐車場のカーブミラーを中継しているようだな。ん、ヘンリー、お前のミラーからも光が発射されているぞ」

「え、そんな。僕には、身に覚えのない話ですよ。僕は潔白です。部長、信じて下さいよ」

「誰も、お前を疑つとらん。吉村、お前はこの現象をどう考える」

吉村は、うーんと唸りながら腕組みをして考え込んだ。この映像から何か考えられるにしても、あまりに情報が乏しいので、科学者の彼としては拙速な判断を避けたいと言う反射的な思いがあるのだ。彼は、今わかる情報から考えられる仮説を、言葉を選んで話し始めた。

「何が不破を消したかと言う原因、出発点からではなく、姿を消したと言う結論から考えてみます。彼の身の回りに起こった変化は、それはこの発光現象しかありません。では、この光はどこからいたのか。光が発生するのは鏡やガラスと言った反射物です。それも一個ではなく複数です。これはもう光速を捉えられない以上、発生源や軌道を割り出すことは不可能です。ですが、光の軌道上にあるも

のを辿ると、やはりこの駐車場にある物しかない。つまり、反射物から発生した光が不破に到達し、彼の姿を消したと」

「反射物から光だと」

「はい。反射物は、車のフロントガラス、バイクのサイドミラー、駐車場内に設置されているカーブミラー、既成概念を取り去ればすべてが鏡の様なもの。そしてそれらの配置を線で結んでいくとあるで万華鏡の様な鏡の設置、いわば合わせ鏡の状態なんです」

「合わせ鏡、か」

滝はぽつりと言葉を漏らしたが、その顔には田茂の様に汗が噴き出ている。いつもと様子が違うことに吉村も驚いていた。滝は、よろめくように椅子に座ると、内線電話をかけ、

「20年前の事件ファイルを頼む。未解決事件に収まっている。コードネームはミラーワールド」

滝はそれだけ言うと、受話器を置き、椅子の背もたれにぐったりと寄りかかった。しばらくそうして黙りこくった後、重い口を開いた。

「過去に、これと似たような事件があった。この零部が発足して10年を迎えた頃だ。妙な噂があつてな。鏡をある数だけ向き合わせていると黄泉の国が見える話。行き止まりの建物で人が消えて、その部屋にあったのは鏡一枚で、鏡の中に人が消えてしまう話。一人暮らしの女性が行方不明になり、警察が部屋に踏み込んだ所、鏡台が血まみれになっていた話。そして、鏡の中に現われる謎の仮面の影。零部は、この事件を追っていた。しかし、当時の技術では鏡がキーワードだとわかってても、それ以上の捜査ができなかった」

「まるで、今回の事件とそっくりじゃないですか。偶然と言うには無理がありますね」

「そうだ、ヘンリー。吉村の話を聞いているうちに、20年前のことが俺の頭に真っ先に浮かんだ。実は、当時の事件で俺の部下が一人行方不明になっているんだ。そいつは、なかなか柔軟な発想を持っていたし、この事件に関する調査でも鏡と言うキーワードに最も早く注目した。頭もキレて、正義感の強い奴でな。零部設立前に会った、仮面ライダー達に似た部分もあってな、俺も可愛がっていた。だが、そいつは捜査中行方不明になった。姿を消す前、俺に連絡してきたんだ。『失踪のからくりがわかりそうです』ってな。そして、奴は姿を消した。当時、その事が与党の重鎮、内閣の方にも知れ渡って大問題になった。秘密組織の一員が在籍したまま姿を消したとなると、とんでもないことになる。法的にも存在せず、超法規的な組織が平和国家日本に存在するとなると、俺の首どころか、政治家や官僚、協力企業など影響があらゆる所に波及する。結果的に零部は規模を縮小、予算も大幅削減されたが、仮面ライダーとのコンタクトがあつたおかげで任務をこなし、今日の規模まで回復してきたんだ」

「つまり、20年前の事件が、偶然の結果開いた扉によってまた姿を現したわけですね」

「そうだ。鏡がキーとなる失踪事件。証明はできなかったが、鏡の世界に何か人工的か自然発生的かはわからないが、別世界があるんじゃないかという仮説までは立てられたが、その事に気がついた本人が失踪したのと、当時の技術では検証ができなかった事で、事件は迷宮入りした。都市伝説だけがしつこく残り、そこで仮面ライダーを絡めて潜在的に人々に啓蒙したんだ。ただ、妙なのは、この都市伝説があるのが非常に限られた地域だけに存在することだ。日本

ではこの東京だけだし、アメリカでもある特定の街で同じ都市伝説が広まっている」

「特定地域って言うのが作為的だなあ」

「作為を感じるならば、これは人の意思が関わった事件になる。人が関われば、必ず隙が生じる。今回の不破の消失は、この異世界、コードネーム・ミラーワールドへの鍵となる。この映像と同じ条件を揃えれば、同じような現象を起こすことは可能か、吉村」

「やってみる価値はあります。物理的な条件を揃えれば、何か変化が起こるかもしれません」

かくして、異世界、通称ミラーワールドの入口をこじ開ける鍵を探すための作戦が現実世界で始まった。滝としても、20年ぶりのこの事件との戦いに、並々ならぬ気迫がこもっているようだった。

合わせ鏡？

不破は龍騎の後について、左右反転した無人のビルに案内された。左右が逆と言うだけで雰囲気は全く違い、風景を見ていると少し気分が悪くなる。

「ひとまず、ここならゆっくり話せる。変身を解いても全然影響がないところを見ると、君は普通の人間じゃないな。こんな露骨な言い方をするつもりはないけど、他に言いようがないんだ」

「別にいいよ。周りにいる人間は一切気を使ってくれないから、慣れてるよ。不破龍雄って言う。さっきは命拾いしたよ。名前は」

「さっき君が言った通りでいい、龍騎だ。この世界にいる限り、この姿でい続けなければならない。生身を晒した瞬間、さっきのミラーモンスター達の餌になる。人の名前を名乗ると、この仮面を外したい衝動にかられておかしくなりそうだ」

「どうも、複雑な事情がありそうだ。さっきはでかい態度をとって悪かったよ。命の恩人に対する接し方じゃなかった。どうも、俺が会う仮面ライダーは先輩風を吹かすと言うか、ライダーそのものが縦社会なのかな」

二人は、そんなたわいのない会話をしながら笑い声をあげ、次第に打ち解けた空気になってきた。口も滑らかになったところで、龍騎からこの不思議な世界の事を聞きだそうと不破が思った矢先、突然地面がぐらぐらと揺れ出した。揺れはかなり大きく立っているのもやっというほどだった。

「おい、でかいぞ。大丈夫か」

「大丈夫、これは地震じゃない。定時の時差合わせだ」

「一体何が起るんだ」

「通りに止まっている車を見るといい」

不破は言われた様に通り沿いに駐車された車をじっと見ていた。車も激しい揺れにさらされているが、次第に目の前の車が姿がぼやけ始めた。それだけではく、ビルの中の椅子の一の配置もどんどん変わり、空にあった太陽が沈みかかり、反対側にはいつの間にか月が昇り始めている。まばらに星がきらめく夕方の街に時間が進み、周りの状況も変わってしまったのだ。不破には、こういう仕掛けでこんなことが可能なのかわからずにいた。不思議な現象について、龍騎がゆったりとした口調で解説を始める。

「この世界はミラーワールド、つまり鏡面世界。現実の世界が反転した世界のはず。でも、通常の鏡面の世界と違い、時間の流れが再現できない。車が動き出しても、すぐにミラーワールドにその移動が再現できない。そこで、定期的に生じる時間差のずれを今みたいに調節する仕掛けだ」

「じゃあ、そんな帳尻合わせが必要ってことは、ここは人工の世界と言っことか」

「そう。あくまで鏡面世界に似せて作った人工空間。だから無限な空間ではなく、限界がある。この場合は東京都がこの世界のすべてになる。そこより先はない。まだ確認したことはないが、アメリカにもこのミラーワールドが設置された街があるらしい。世界各地に、こういった空間が都市に並立して設置されているようだ」

「仮想世界、か」

不破の脳裏に浮かんだのは、あるゲームの事であった。神の視点となり、土地や地形をいじり、街を作り上げていく、そういうものと同じように、現実世界に寄り添う空間に、現実世界と反転した世界を設置していく事なのだろうと想像した。

「なるほど。仕組みはわかったけど、このからくりを作ったのは一体誰なんだ」

「わからない。少なくとも、この世界は20年前にはあった。それ以前にもあったかもしれないが、確認ができない。誰が作ったのかもわからない。わかることは、時々人がここに迷い来い、モンスターに捕食されるか、仮面ライダーと言うキャラクターを演じさせられるかだ」

「もう少し、ゲームの内容を聞かせて欲しい」

「ルールはこうだ。ある条件が揃った時、ミラーワールドと現実世界にインターフェイスが生まれる。ミラーモンスターや仮面ライダーはそれを感知できる。出入り口ができた時、運悪く人がいれば、こちらの世界に引き込まれる。引き込まれた人間は、モンスターの格好の餌になり、まず生き残れない。助かった場合でも、元の世界に戻れないとこの世界の異質さに肉体が耐えられず、消滅する運命が待っている」

「俺が変身を解いても消えないのは、普通じゃない体だからか。けど、ミラーワールドの仮面ライダーになるパターンはどうなんだ」

「この世界の仮面ライダーは13人。ここに空きがある場合は、このカードデッキが現われて仮面ライダーになる。そして、モンスター倒したり、他のライダーを倒すことでエネルギーを高め、自分以

外のライダーを全員倒せば、現実世界への帰還が成功する。一度でも敗北すれば、カウント0になって最初からやり直した。ここまで知るまで随分時間がかかった」

「きつすぎるバトルロイヤルだな。一体誰が何のためにこんな手の込んだ事を」

「それがわかれば、こんなところはさっさとおさらばしてるさ。それが知りたいから、ここにいる様なものだし」

過酷なルールと複雑な世界の配置。明らかに、人為な臭いがする構造なのだが、誰が何のためにと言う意図がわからない。同じようなことを不破は最近経験していた。海外出張でのキョンシーと的一件である。未知のウイルスが発見され、それが人為的にかなり前の時代に手を加えられたという報告を受けていたので、未知の存在や勢力の影がちらつき始めていた。今回のこの事件も同じような未知の勢力が関わった大きな背景を持っているかもしれない、不破の頭の中でそんな不安が大きくなりつつあった。

二人でそんな会話をしている所に、忍びよる何者かがいた。しかし、姿見えないので二人とも気配に気づかないでいる。何者かは、息を潜めて壁伝いに二人に接近していく。一步、また一步近づいていき、最後の間合いを詰めた瞬間、龍騎は本能的に敵を察知し、不破を突き飛ばした。

「ホールドベント」

なにもないところから音声が流れるとともに、龍騎のボディに何発も何かが着弾する音と衝撃が走った。敵がどこにいるかわからないため、不破も隆起も対処のしようがない。

「畜生、姿を消すタイプか。だが、それなら経験済みだ。変身」

メテオに変身すると、視界をサーモグラフィーに切り替える。狙い通り、龍騎の傍に熱源が存在するのを確認した。姿は消しても、強化服に流れるエネルギーの温度までは隠せない。メテオは、見えない敵に向かって駆けだしていく。敵は姿が見えないはずの自分にメテオが来るのに動揺したか、繰り出す攻撃の精度が落ちることなくよけられてしまい、逆にメテオは距離をあつという間に詰めて、顔面に拳をお見舞いした。殴られた敵は、ビルの床を火花を散らしながら滑走し大きな窓ガラスに激突して、その体の上にガラスの破片が降り注ぎ、姿を現し始めた。

「メテオ、あれはベルデだ。姿を消すステルス機能を持っている。擬態も得意なトリッキーな奴だ」

「道理でこそそしたやり方だぜ。その分、打たれ弱いみたいだな」

メテオは、相手の能力を把握したことで、戦いを優位に進めていく。ベルデは、ヨーヨー型の武器のバイオウィンダーでメテオを攻撃するが、高い動体視力と軌道計算を行う電子頭脳の前ではその攻撃はすべて無意味なものとなる。攻撃をすべてかわし肉薄すると、メテオの拳が高速でベルデに打ち込まれる。防御力が低いベルデは、その攻撃はかなりのダメージとなり、これ以上の戦いは不可能に見えた。しかし、さすがはライダーバトルに執念を燃やしている一人である。攻撃を受ける最中で、わずかな隙についてカードをデッキに装填してしまった。

「ファイナルベント」

メテオがしまったと思ったのと同時に、その首に何か巻きつき、そのまま宙に放り投げて振り回す怪物がいた。カメレオンに似た使役モンスター・バイオグリードだ。メテオの首を絞めながら遠心力を加えて振り回し、どんどん加速させていく。遠心力で体に力が入らないメテオを空中に放り投げると、ベルデが跳躍しメテオの体を

捉えると、脳天から地面に突き刺した。衝撃はビルに伝わり、振動で割れたガラスが地面に降り注いだ。

「メテオーっ」

龍騎の叫びも救出もあと一步の所だった。だが間に合わなかった。メテオの頭はアスファルトにめり込み、到底無事だとは思えなかった。「ベルデ、お前にはメテオがイレギュラー、この世界の仮面ライダーじゃないのはわかっていたはずだ」

「レギュラーだろうといレギュラーだろうと、関係ないな。この仮面の世界では、仮面をつければ人間は皆ライダーだ」

ベルデの強引な主張に、龍騎は怒りをあらわにした。仮面さえつけていれば人間はみな自分の標的、sの強引な論理で目の前にいる敵を手には賭ける思考に我慢がならなかった。ベルデも、この世界にいて長くなるのはわかって入るが、人間性が欠けた言動に狂気を感じるとともに、怒りが誘われる。カードを引き抜き戦いを始めようとしたが、龍騎の手を止める声が響いた。

「龍騎、こんな奴にまともに付き合う必要ないぜ」

「何、生きているだと」

ベルデは驚いた。一撃必殺の技を決めたはずなのに、メテオは平然と口を利いていることが信じられなかった。そんな彼をあざ笑うようにメテオは話し続ける。

「放てば必ず決まる、技って言うのはそういうもんじゃないぜ。角度やタイミングに気を払わないと、相手に受身を容易にさせる。それに、俺の体は基礎フレームが頑丈でね。鎧の下は人間のあんたとは、鍛え方が違うんだ。けど、さすがに仕掛けられた時はヒヤっとしたぜ。お返しにもっとひんやりさせてやる」

メテオは首の力だけで体を飛びあがらせると、体勢を入れ替えベルデを振り回し、ビルの壁面にいるバイオグリードに放り投げた。そして自分もそれを追い、「FREEZ」を起動させ、ライダーとモンスター二体まとめてアイスブレイカーを決めた。龍騎の話では、敗北は無限ループに入るだけで、死にはならない。恐らく彼も、一定時間を置きこのゲームに強制復帰させられうのだろう。実にいやな性格付けのゲームである。

「君の力もなかなかすごいね」

「ま、元プロレスラーなんで、受身の技術が体に染み込んでいるのが今役立っている」

思わず笑みが仮面の下でこぼれてしまったが、和んだ空気を大蛇の様なモンスターが強襲し、二人は道路の料端に飛びのいてこれを避けた。紫を色した蛇は、二人の脇を滑るように通りすぎ、彼らと正対して威嚇してくる。

「あれは、ベノスネイカー……。まずい、奴がきた」

龍騎は舌打ちを漏らした。その視線の先にはベノスネイカーの横に立つ一人の紫色のライダーが立っていた。ふてぶてしい態度をとり、それに鋭い殺気を放ってくる姿は、ベルデとは比べ物にならないものを醸し出している。

「龍騎、遊びに来たぜ。そこのお友達もなかなかやるじゃないか。二人まとめて、仕留めてやる」

接触する前から戦意、いや殺意むき出しである。異常だ、メテオは相手をそう断定した。疑惑ではない、完全に相手の頭はイカレている。本能的にそう察知した。

「龍騎、あの頭がぶっ飛んでいる怖いお兄さんは誰だい」

「王蛇。戦いを続けたくて、リーチがかかると自分のデッキを破壊して、このループに居座り続ける相当やばい戦闘マニアだ。カードの手数は少ないがスペックが高いのと、倒したライダーの契約モンスターを使役できる、無茶苦茶な設定がされている」

「なるほど。最近ネットで見るとチートって言う奴か。全く、こんな世界、早く失礼したいもんだ。零部は何やってんだか」

メテオが面倒なことに巻き込まれた頃、零部の駐車場ではある実験が行われていた。不破g姿を消した場所にヘンリーを置き、その代わりに同タイプのバイクをあの時ヘンリーのいた所に設置し、同じ条件を作っていたのだ。もしかすれば、こうすることで異世界への入口が開くかもしれないという仮説だった。しかし、その条件がわからず、まずはあの時と同じ状況を作って試しているのだ。

「設定条件はいいのか」

「そうですね。物の配置はこれでいいでしょう。まあ、ヘンリーの代わりのバイクの位置、ミラーの角度をミリ単位で変えていく作業を続けていけば、寸分違わぬ条件が作りだせるはずです」

「頼むぞ、吉村。何としても、あいつとコンタクトをとる方法を見つけないと、救出のしようがない」

配置を終えた後、まさにミリ単位でバイクの位置を変え、ミラーの角度を変えながら、あの時と同じ条件を探していく。配置と計測を繰り返しながら、次第に誤差が限りなく小さくなっていく。しかし、まだ小さな変化すら起きない。

「部長、本当に大丈夫なんですか、この方法で」

「ヘンリー、じゃあお前に聞くが、搭載されている素晴らしい人工知能で確実な方法を教えてくれ」

「何もそんな皮肉をバイクに向けなくても。ひどいなあ」

「そうだろう。この方法も何も、元々打つ手がない中暗中模索してるんだ。それに、今は突っ立っているだけでいいが、向こうの世界に転送後はお前が頼りだ。簡単じゃないぞ、向こうの世界では零部所有の衛星のイーグルサットが使えないんだ。条件は厳しいぞ」

「任せて下さい。どんな条件でも、極地でも適応するのが、僕の設計コンセプトですから」

彼らの実験の目的は、ヘンリーを異世界に送り込み、不破を救助することだった。向こう側がどんな世界かわからない以上、生身の人間を送り込むわけにはいかないのだ。そして、異世界までの扉を開くための条件が整えられていく。

「部長、物理的条件は再現できました。後はそれ以外の条件になります」

「温度や湿度に大きな変化がない。照明の明るさも同じ状態。後は時間か」

「かもしれません。周期的にその条件が起こるなら、後はこのまま待つだけです」

滝と吉村は、人為的には調整できない条件が揃うのを待っている。吉村は腕時計を見ながら、

「部長。不破君が姿を消した時刻からもうすぐ二時間です。いい区

切りの時間です」

「何かが起こってくればいいんだが」

期待と不安を抱えながら、行方不明から二時間の時がきた。すると、不思議な音が鳴り響き、鏡などが発光し始めた。

「部長、来てます。色々なコンピュータとの回線がカットされています。この分だと機械の僕も転送されそうです」

「ヘンリー、今の時間を記録しろ。その時間から一時間ごとにここに扉が開く。その時間に合わせて不破を連れてこい。いいな」

「了解」

地下駐車場に閃光が走り、ヘンリーのボディはそこに包まれて姿を消した。後に残ったのは、計測に用いた機械や車だけである。入口を開くのは成功したようだ。

「後は出口まで迷子を連れてくるだけか」

滝は祈るような気持ちで呟きながら待つしかなかった。向こうで起こる出来事は、彼には一切うかがい知ることとはできない。

王蛇の攻撃は凄まじいものだった。すぐに使役モンスターを三体繰り出し、龍騎とメテオを分断させる。王蛇は、メテオに興味があるらしくサイ型モンスターのメタルガラスと連携して攻め立てる。

龍騎も、ドラグレッダーを召還し、数の上で互角にモンスターと戦うが、やはり野良モンスターとは強さが違い、防戦に回らざるを得ない。そんな戦いを一時間近く続いているのだ。

メテオと龍騎は、体力的にきつくなってきたが、王蛇は戦い

に熱が入るほど攻勢を強め、怪物並みの体力を見せつける。スタミナが切れてくると、集中力も続かなくなる。メテオに所持たわずかな隙を逃さず、王蛇は手にしたサーベルで袈裟がけに斬りつけた。装甲の第二層まで達した切り傷は、致命傷は負わないものの、装甲が肉体とリンクしているため痛みとして体に伝わる。痛みで動けなくなったメテオを、王蛇は仕留めにかかった。

「楽しませてくれたよ、お前は。だから、最期も盛大にいこうじゃねえか」

王蛇は、戦いで生じる興奮を抑えきれないようだ。カードを引き抜きバイザーに装填し、最後の態勢に技に入った。

「ファイナルベント」

バイザーの音声とともに、彼とメタルグラスがドッキングし、猛烈な動きで突進してくる。メテオはダメージと体力の消耗が激しく、身動きが取れない。

「くそ、ここで終わりか」

メテオが観念したその瞬間、わき道から何かが飛び出し、王蛇達に激突し吹き飛ばした。一体何がと目をやった先には、メテオにとって頼もしい仲間が立っていた。

「メテオ、今のは結構危なかったね。やっぱり僕がいないと、君は完全にはなれないよ」

「ヘンリー、地獄の道連れに来てくれたか」

ただのバイクにここまで愛情を持つとは、メテオも思っていなかったが、この異世界にまで出勤して助けに来てくれたマシンを初めて愛おしいと思った。ヘンリーはいつもの調子で喋りかけてくるが、それがまた嬉しい。

「乗りなよ、メテオ。ダメージがあるなら、休んでいいよ」

「やろう、馬鹿にすんな。こっちにだって使役モンスター以上に頼りになるのがいるんだ。見せてやるぜ、俺のパートナー、ジョン・ヘンリーを」

メテオはアクセルを一杯にまわし、王蛇に向かって猛進させる。立ち上がった王蛇は、メテオを引き吊り降ろそうとするが、マシンの加速を得たメテオの拳が胸に突き刺さる。そして、ヘンリーをその場でスピンさせると、メタルゲラスに連続蹴りを浴びせてビル of 壁面にめり込ませた。そして、再びヘンリーを走らせ加速させていく。

「舐めた攻撃しやがって。今度こそぶつ殺してやる。来い、ベノスネイカー」

王蛇の意思に反応し、ベノスネイカーが合流する。そして、ファイナルベントを発動させ、メテオとヘンリーに向かってベノクラッシュを仕掛けてきた。

しかし、信頼しあえるパートナーと合流したメテオには、全く脅威にはならなかった。それはヘンリーも同じだった。

「メテオ、これを使って」

ヘンリーは、メテオに搭載されている剣を差し出した。その剣は、メテオの三つ目の技を発動するのに必要なものだ、

「これを使えば、体に負荷なく技を発動できる」

「ありがたい。運転は任せるぞ、ヘンリー。ブースターで加速しろ」

メテオがシートの上に立ち上がると、ヘンリーは偽装マフラーからブースターロケットを点火させ、急加速させて王蛇達に迫る。メ

テオも「EXPLOSION」を発動させ、自分とヘンリーの体を炎に包む。その炎に、王蛇の体に付着している猛毒が焼き尽くされていき、さらにメテオのフレイムスプラッシュが炸裂し、王蛇は無限ループのスタートに戻る事となった。

「ナイスアシストだ、ヘンリー」

「これぐらい、へっちゃらだよ」

談笑する二人のそばを残されたモンスターが通りすぎていく強制契約から逃れたことで、新しくライダーバトルに参加する者が現われるまで彼らは自由になる。本当に終わりのないループをしているサバイバルだ。龍騎もようやく解放されてメテオのそばに駆け寄ってきた。

「今度は助けられた形になったな。しかし、すごいバイクだな」

「なかなかご機嫌なマシンで。ところでヘンリー、お前どうやってここへこれたんだ」

いまだ仕組みが解明されないミラーワールドにヘンリーがどうやって侵入できたのか。現実世界で行われた実験について、ヘンリーは詳細を話した。

「なるほどね。特定の時間に、特定の合わせ鏡の条件が揃うと、ミラーワールドと現実世界に窓口ができるというわけだ」

「メテオ、その特定時間は定期的な時間調整のタイミングじゃないか。話を聞くと、君がこの世界にきたタイミング、このヘンリーがここにきたタイミングは、時間調整の時に一致している。多分、あの時がこの世界が不安定になって、一番現実世界にアクセスしやすいんだ」

この世界のからくりがわかり、メテオは少しほっとした。しかし、聞けば聞くほどこの世界が人工的に作られ、何らかに意思によって辻褃合わせて成り立っていることが鮮明になってくる。この世界は誰が作ったのか、そんな疑念が大きくなるのだった。

「メテオ、仕組みが分かった以上、早めに行動して脱出した方がいい。この世界は変化を強制されている。昔は、現実世界の鏡に姿を移すことも楽にできるくらいで、それで鏡の中の仮面の戦士の都市伝説が広まった。だが、今はそんなことはできなくなっている。世界の構造に修正が加えられたんだ。そして今、合わせ鏡のからくりが判明したとなると、すぐに修正がかかるはずだ」

「この世界の監視者がいるなら、多分そうだろうな。ヘンリー、次の出入り口はいつ現われる」

「後34分」

それまでに、ミラーワールド側の零部の地下駐車場に行けばいいのだから、事はそんなに難しくはない。それまでにトラブルに巻き込まれなければの話だが。だが、この世界には望む望まざるを関係なく、バトルロイヤルに放り込まれている仮面ライダーがいる。そして、飢えているミラーモンスターがいるのだ。何も起こらずに済むとは思えない。

そんな危惧を抱いていると、龍騎の契約モンスターのドラグレッダーが威嚇するような声を上げ始めた。どうも何かが近づいているらしい。

「どうやら、何かが近づいているらしい。モンスターかライダーか。メテオ、君は先に脱出口に行け。ここは引き受ける」

「どうして俺にそこまで肩入れする。ただのお人好しにしちゃ、や

ることが過ぎている」

「ちょっとした事情が俺側にあるんだ。まあ、それは今は大事なことじゃない。安心しろ、俺は死にはしないよ。誰かを守るためには自分が先に死ぬわけにはいかないからな。何とか食い止めるが、そっちにも邪魔が入るはずだ。何とか突破しろよ」

龍騎はそういうと、ドラグレッダーに飛び乗り、敵のいる方へと飛び去っていった。一体何が彼をそこだ出させるのかわからないが、彼が体を張ってまで自分を脱出させようとする思いを無視するわけにはいかない。メテオは、ヘンリーに飛び乗り、進路を零部へと向け発進した。別の通りに廻ってう回しようと考えたのだが、その通りもどこから湧いて出てきたのか、相当な数のモンスターであふれている。だが、これを突破しないと脱出は不可能だ。

「楽には、行かせてくれないみたいだな、ヘンリー」

「ですね。でも急がないと、このモンスター達に脱出口を破壊されてしまう可能性もあります。強行突破しましょう」

「俺も同じことを考えていた。ハンドルは任せる、俺はモンスターをやる」

「了解。振り落とされないでね」

そういったヘンリーは瞬間的に加速し、高速走行に入る。メテオは搭載されているサブマシンガンを発砲してけん制しながら、憂い無スプラッシュを広範囲に放ち、敵を薙ぎ払っていく。ヘンリーも高速走行にも拘らず巧みなハンドル捌きで最短ルートで敵をかわし、目的地を目指す。残り時間は24分。

滝と吉村は、合わせ鏡の状態を保ちながら、不破達の生還を待ち続けている。落ち着かない様子で何度も時計を覗き込む滝。

「後、20分。一発で出てきてくれれば一番なんだが」

「時間が経つほど、未知の場所にいる彼らの回収が難しくなってきましたからね」

「ああ。メテオが『あいつ』に会っていれば、一番いいんだが」

滝は、合わせ鏡で無限に像が写り込むのを見ながら、鏡の向こう側にその思いつきを届けようとするが如く、じっと見つめている。

メテオとヘンリーは、モンスターの群れを何とか強行突破しようと悪戦苦闘している。敵は空から襲いかかり、突破の難易度は上がっていく。零部が入っているビルはあと少しなのだが、あと一步が非常に遠い。

「メテオ、このままだと間に合わない。ブースター加速で、強引に一気に突っ切るよ」

「構わないから行け」

ヘンリーがブースターを点火させ、爆発的な加速を得ると、モンスター達を弾き当たり負けせず跳ね飛ばして、目的地まで急接近する。後一つ角を右折すれば目的と言う時、上空から火炎弾が発射されてきた。メテオは巧にヘンリーを動かし、炎を回避するが、走行は止められてしまった。上を見上げると、ドラグレッダーに似た黒

い龍がこちらを睨みつけている。そして、背中に冷たいものを感じ、後ろを振り向くと龍騎と瓜二つの黒い姿がこちらを窺っている。メテオは、ライダーの書物で見た姿とほとんど同じであるシルエットを見て、

「リュウガ……」

と、呟いた。黒一色の姿には、心の揺れも隙もなく、人間らしいところが見られない。これが最後の難関かと思い、金中間を走らせるメテオの耳に、リュウガとは別にどこからか声が響いてきた。

「お前をこの世界に引き込んだのは、失敗だった。からくりが気がついた以上、ここから出すわけにも生かしておくわけにはいかない。ここで消える」

そう言い放つ声の主は、黄金の翼を纏いながら地上に降り立てきた。これまでのライダーと明らかに風格も存在感も違う姿だ。黄金のライダー・オーデインは、手を振りかざすものすごい突風を生させ、メテオとヘンリーをなぎ倒す。隙ができたメテオにリュウガがドラグセイバーで斬りかかるが、ギリギリ剣で受け止める。上空からは、ドラグブロッカーが零部本部のビルに攻撃を始め、現実世界との入り口を塞ごうとしている。オーデインは高らかに宣告する。

「我々が作ったこの世界に、仮面ライダーは13人。ワイルドカードは異物だ。このような異常は排除しなければならない。お前は、このループには組み込まず、分解する」

オーデインの口調は、まさにこの世界の創造主、監視者の視点での発言だ。オーデインは、ライダーであるとともに、このゲームの監督、世界を調停するための創造主側のインターフェイスなのだろう。オーデインの目を通して、世界は管理され、ライダーバトルは永遠に続き、マイナーチェンジを繰り返しながら未来に続いていく。

オーディン、仮面をかぶり、全知全能の神である北欧神話の主神の名を語るだけの能力と役目を彼は担っている。

そんな彼と手を組んでくるリュウガの強さも半端ではなかった。格闘センスでは引けを取らないはずのメテオがパワー負けし、スピードで翻弄される。剣がぶつかり合うが、あまりの拳剣圧に手からこぼれてしまう。次第に不利になっていくが、ヘンリーがビルのがれきの下敷きで動けないでいる。壊れてはいないようだが、動くことができないのは空回りする体の音でわかる。残り時間が5分を過ぎる。このままでは、脱出口をふさがれる。焦り始めたメテオの背後から聞き覚えの聲がした。

「メテオ、伏せろ」

条件反射で身を伏せたメテオの頭上を火炎弾が通過し、リュウガを直撃した。龍騎の放ったストライクベントだ。どうやら、モンスタ―を振り切り合流できたようだ。

「面倒な奴らに絡まれたみたいだな」

「面倒どころじゃないよ。二人をさばくのは難しい、黒いのを頼む」

「OK。けど、オーディンはかなり強い。覚悟した方がいい」

メテオは、ビルに破壊をまくるオーディンに立ち向かっていく。素早いというより、ほぼレポートに近い移動でメテオの背後をとって攻撃をするオーディンは攻撃力もレベルが違う。ハイスペックのはずのメテオでもきりきり舞いさせられる。

「まったく、この程度の性能とはな。最高の資材を提供しながら作れるのがこれしきとは。シヨッカーを選んだのがそもそも間違いなのだ」

「何、お前は一体」

メテオは重要な事を聞いた。しかし、オーデインはそれ以上情報を漏らすつもりはないらしく、ソードベントで二刀を装備し、メテオをの体を切り刻みに来る。自分の出自に関わる手掛かりに触れた驚きもつかの間、命の危機に恐怖が起こり始めた。必死で攻撃をかわ氏交代する途中、ヘンリーがようやく脱出に成功したようだ。メテオはヘンリーに脳波で指示を送り、剣を弾き飛ばすように命令した。ヘンリーはすぐさま反応し、前輪で剣を弾き飛ばすとそれを受け取ったメテオは「EXPLOSION」を起動して、オーデインを薙ぎ払った。炎と剣で切り裂かれたオーデインだったが、わずかに剣を交わすと間合いをとり、ファイナルベントを発動させる。すると、空から黄金の鳥が舞い降り、オーデインの体をつかみ上げ空中に上って行き、黄金の輝きを放ちながら放熱を始める。次の技でとどめを狙っているようだ。目手をは構えをとりながら、相手を補足している。

「ヘンリー、オーバーロードの心配はあるか」

「大丈夫。今ならFREEZ、THUNDERを起動できる」

「ありがたい」

メテオはバツクルを回転させ、FREEZを起動させ、アイスブレーカーを放った。空中で二人はぶつかり合い、衝撃波が地上を襲ったが、空から舞い降りてきたのはメテオだった。ホッと一息ついた彼だったが、ふと龍騎の事に気がつき、視線を移した。

リュウガはやはり強く、龍騎を圧倒していく。しかし、龍騎は切り札であるサバイブのカードを使い、強化形態になる。攻撃オプシヨンが増えることで次第にリュウガを圧倒していく。旗色は明らかだった。

リュウガは、半ばやけくそでファイナルベントを発動して、黒い

炎に包まれながら蹴りを繰り出した。対するサバイブ体の龍騎は、ドラグランザーのバイク形態に跨り、炎を撒き散らしながらリュウガに飛び込み、圧倒的な強さで勝利を飾った。

「メテオ、急げ。時間がないぞ、ビルも崩れそうだ」

龍騎の言う通り、ビルはモンスターの攻撃で倒壊寸前だ。メテオはヘンリーに跨り、地下駐車場に入っていく。左右反転した駐車所を巧みにコーナリングしながら最下層につき、指定された位置に着した。そして、時を待つ。

「メテオ、時間だよ」

ヘンリーの声に伴い、あの不思議な音が鳴り響いてきた。そしてあちこちの反射物あら光が灯り始め、強い光に包まれたと思った次の瞬間、目の前には滝と吉村の姿があった。

「滝さん、吉村さん。心配かけて悪かったよ、今帰った」

「うまく行って安心したよ。吉村とヘンリーに礼を言うんだな」

滝はメテオの姿をホツとした表情で見守っていた。その時、再び光が強くなり始め、三人はその方向を驚いて見つめた。そこにいたのは龍騎だった。しかし、こちら側の世界には来ていないのか、姿がぼやけている。

「よっ、滝さん。実物を見ると、やっぱり老けたね」

「その声、やっぱり城戸か」

滝の表情は驚きでこわばり、顎が小刻みに震えている。どうやら知り合いのようだが、驚き方が尋常ではない。一体どういうことか。「こっちから情報を送るのは苦労したよ。最初の頃はこっちの世界の影響がそっちに波及しやすかったけど、段々ガードが固くなって

ね」

「鏡の中の都市伝説はお前がやったんだな」

「ああ。警告を与えないといけないと思ってね。まあ、よく出来ていたよ、鏡の中の仮面ライダーの物語。零部の仕事の中でもいい出来だ」

「何でもいい、早くこっちに来い」

「それはできない。この世界の事を知る内、これは放置しておけない事態だとわかってきた。誰かが作った世界であるなら、こんな危ないものはぶっ潰すに限るが、それはこっちからじゃないと難しい。それができるまでは、こっちで仮面ライダーを続けるよ。滝さんと生きている内に酒が飲みたいし、それまでにはね。滝さんも頑張つてよ、じゃあ」

「おい、城戸、城戸ーっ」

三時間後、不破と滝はオフィスにいた。あの後、二人ほど実験を繰り返したのだが、もう合わせ鏡のパズルによる鏡の世界への扉の鍵は開かなかった。懸念した通り、世界の構造が変わり、出入り口の開く条件が変わったのだろう。不破は、滝と龍騎、つまり城戸と言う人物の事について聞いてみたのだった。

話によると、零部を立ち上げた20年前、滝の部下だったの城戸だったらしい。有能な人物で、この特殊な仕事への獣脳や理解も高く、将来は滝の右腕、後釜になると誰もが思っていた。そして起きたのが、鏡のある場所での失踪事件であった。当時の資料では、ミ

ラーワールドの検知はできず、捜査は難航したのだが、城戸はいち早く鏡という共通項を発見し、調査をしている内に行方不明になった。残された報告書から、鏡の中に異世界や怪物がいるのではないかと言う事が書かれており、それに基づく調査が行われたが、城戸の足取りはつかめず、隊員の失踪と言う組織の恥部と失態になり、零部は今に至るまで低予算で編成される闇の存在しない組織と言う扱いになっているのだった。

「あいつは、あっちの世界でこっちの事も見ていたんだろう。そして、責任を感じて今も一人で事件を追っているんだ。20年だ。いくら年齢を、歳をとらないと言って、精神がもつはずがない。お前が話した他のライダーみたいに、どこかイカレテしまった方が幸せかもしれない。苦しまずに済む分だけな」

「滝さん。あの人は任務だけで、20年間の孤独に耐えているわけじゃないよ。人や世界を守りたい、その気持ちがないや、迷い込んだ俺のためにあそこまでしてくれない。滝さんに親しく話しかけたりしない。あんな強い人に慕われて尊敬される滝さんの事、改めてすごいと思ったよ。ここにいて良かった、本気だぜ」

「馬鹿もん、背中がむずむずする。だが、ミラーワールドを作った存在がいるという報告は聞き逃せないな。キョンシーの事もある。でかい山が動くかもしれん。だが、今はこの苦いコーヒーを静かに味あわせてくれ。そんな日や時間がある」

二人は熱いコーヒーを口に運びながら、今もこの世界に寄り添うもう一つの世界で孤独と悪に戦い続ける仮面の戦士を思い浮かべていた。

東京ラピルス

零部の仕事は、秘密結社の痕跡を探しその芽を摘むこと、黒子による事件の解決、そしてこれら不可解な事件の隠蔽である。隠蔽と言つと聞こえは悪いが、世の中には機密にしなければ公に害を及ぼす者、一ぢるしく損害を被るもの。そして、知つてはならぬものがある。

知つてはならぬもの。そう聞けば、誰しも知りたくなる。空けるな、と言われた戸を開けたがために、美しい女は実は鶴ということ が明らかになり、夢が覚めてしまう儚い昔話がある。何故知つては ならないか。現代に生きる我々は、とかく理由を求め、論理的に考 えてしまう。しかし、古の人達は。「ならぬ物はならぬもの」と言 う戒めを守ること、災いから逃れ、人知の及ばぬものから弱い自 らの身を守ってきたのだ。それは情報開示と言つ現代の価値観から は決して相容れないものだ。だが、知つてはならぬものと言つ前時 代な考えを現代にも用いなければならぬものが、現実にあるのであ る。その一つが、仮面ライダーでもある。

考えてみて欲しい。第一世代の仮面ライダーは人体を極限まで改 造され、一人で一つの軍事力になりえる存在である。そこには倫理 はなく、人類を破滅しかねない危険な技術と思想が詰め込まれてい る。聡明な意思を持った者たちは仮面ライダーとなつて人類の側に 立つたが、悪魔の様な力に魅了され飲み込まれた者は怪人、つまり 黒子となつて社会に放たれ、今も獣の様に人類と社会に牙をむいて いるのだ。

ライダー達もバージョンアップが繰り返され、人体を改造しなく とも一つのツールを持ちさえすれば超人化できる強化服化している。 これは、特定の身体的特徴を持たなくとも、誰でも仮面ライダーと 言う存在になりえるのである。誰でもと言つ無制限な条件は、殺人 鬼でも仮面ライダーになるということだ。そして、超人の力は誰に

でも向けられることを意味する。零部が仮面ライダーや組織の存在をひた隠しにするのは、そのような存在を野放しにするのではなく、社会の裏側に封じ込めることが目的である。裏側に押し込めることで被害を最小限に食い止め、その戦いが知らずに済むものに抑えるのである。決して善行とは言えない行為であるが、社会が無意識に要請することを命懸けで行うのが零部、そして仮面ライダーメテオの使命であった。

「で、滝さん。日が暮れてから呼び出した以上、何かあるんですよ」

不破は少し機嫌が悪そうに滝に詰め寄っていた。零部所属と言う扱いである以上、いつ招集をかけられてもおかしくないのだが、夕食時に呼び出しを、しかも携帯ではなく脳に直接無線を入られた事で、不破はかなり不機嫌になっていた。背で、変身前は人間らしく過ごそうと、摂らなくていい食事を三食きちんとホテルのレストランで摂っている不破の多くは楽しさを邪魔され、かなりむっとしていたのだ。不破は、出されたコーヒーを無然とした表情で飲み干していた。

「悪かった、悪かった。急な案件が上がってな。それも、条件が夜じゃないと駄目なことなんだ。すまん」

滝は珍しく不破に謝っている。ここは上司と部下ではない不思議な関係ならではの光景である。不破も、組織の長である滝に頭を下げられては、いつまでも子供の様にふて腐れているわけにはいかず、鉾を収めるしかなかった。

「もういいよ。その代わり、連絡は作戦以外の時は携帯にしてよ。脳内無線は、何か自分が備品扱いされているみたいでさ。その所は、仮面ライダーとの付き合いの長い滝さんならわかるだろ」

「わかった。部内の人間にも徹底させる。お前に家出されたら困るのは、俺達だからな」

「じゃあ、この話はもうやめるよ。で、一体何が起こったの」

「うーん、まあ、零部でも都市伝説の類いと楽観視していたんだが、ここにきて現実らしい話になってきてな。情報調査部の斎藤が今、資料をまとめている」

「都市伝説を作るこの部署が、都市伝説を追うと言うのも珍しい」

不破は、軽口をたたきながら、ソファーに身を投げた。呼び出しの事をいつまでも言っていないかもしれない。事件が起これば、些細なことをぐずぐず言う状況ではなくなる。不破は落ち着いた気持ちで、説明を待つことにした。そして、10分ほどしてこの組織のインテリジェンスの中心の斎藤女史と、原隊長がオフィスに入ってきた。どうやら、メンツが揃って話が始まるようだ。

「よし、それじゃ早速説明に入ってくれ。斎藤、話してやってくれ」

「はい、部長。では、始めます。ここ一カ月ほど、ネットで妙な噂が流れています。どうも、都内お地下鉄で怪談紛いの話、或は怪物らしい影や声など不思議な現象の話が掲示板や個人のブログに散見します。断続的にちらつと出てくる程度ならいいのですが、短期間に集中して話題になっており、類似性が高いので、情報調査部で分析してみました」

「結果として、どという判断だ」

「噂話は、全くデマと言うことはありません。原型となった話が存在し、それが口伝やメディア、ネットの中で変形し、姿を変えていく生き物の様なものです。この痕跡を探っていけば、大抵はデマの根源はわかるものです。ですが、今回の噂話は短期間に発生し、バリエーションが少ない新しいものです。そして、類似性が非常に多く偶然の域を外れています。作り話であれば、必ずと言っていいほど手が加えられますが、その様子がないんです」

「つまり、本当の事だから、尾ひれや背びれがつきようがないってことか」

「そういうことになりますが、調査に吹きかどうか悩む題材なんです。それこそ、面白半分の都市伝説に近いトーンなんです。有名どころで関連するのだと、地下鉄秘密路線や地下都市の類いです」

それを聞くと、場の空気が一斉に緩んでしまった。都市伝説など大抵は一度聞いただけで嘘だとわかるものもあれば、誰しもが信じてしまい、教科書に載ってしまうような類のものもあるが、地下鉄をネタにしたものなど、確かめようのないものに好き放題にネタを張りつけていったものが多く、眉唾ものなのだ。

「今回の噂になっているのは、地下鉄網に現われる未確認生物です。とは言っても、地下鉄路線内は暗闇ですので、はっきりしたものはありません。ですが、走行中の電車の窓から見える異形の影、あるいは光る目、終電間近になると奇妙な声がホームの奥から聞こえるなどで、確証の持てるものはありません。しかし、このうわさは、ここ一カ月で集中的に発生しています。さらに、噂に上がった地下鉄の駅を路線図に重ね合わせると、ほぼ円形を描くという結果です。情報処理の人間から申しますと、噂話に人為的なものはなく、痕跡には人の意思の様なものが感じられる。このような意見になりました」

斎藤の意見を聞き、不破や滝、原は腕を組みながら唸り声を上げた。確かに、奇妙な事件を扱うことの多いのは、零部の仕事の特色だが、果たして本格的な介入をするレベルにあるのだろうかと言う疑念が頭から離れなかった。まだ、これは噂話、都市伝説の類いの域を出ないと思っていた。しかし、零部はこれまで仮面ライダーや怪人の事件をそういった都市伝説やテレビのネタに変えてきたのだ。新しく発生した都市伝説、そして彼らが意図して作り上げた都市伝説、両者の園が重なり合う部分が存在するなら、そこは現実と虚構の混在する場所であり、そこに零部の敵がいることになる。そうであれば、やはりここは初期対応的措置としても動く理由になる。阿吽の呼吸が生まれ彼らの目が合い、互いの意見が一致した事を確信するのだった。三人を代表して原が口を開いた。

「斎藤さん、噂による怪情報の発生地域はどこです」

「大手町を中心に大江戸線、三田線、新宿線で囲まれたエリアです。ここに噂話のストーリーが集中しています。その割合は7割5分」

「7割越えか。相当臭いな、この噂話は。部長、やはり初動捜査として、地下鉄網に潜りましょう。夜に集合をかけた意味もそのケースを考えてですし」

原の提案に、滝も力強く頷き、正式な命令が彼の口から発令された。

「よし、早速今夜、地下鉄網に直接侵入して捜査を行う。原、隊員の編成と人員の選択はお前が行え。不破、地下と言う特殊環境ではお前の存在がいつも以上に要になる。そして、ヘンリーも投入する。地下に入れば通信が脆弱になる。ヘンリーを中継器として使う。よし、各自行動を開始しろ」

零部の部員達は、原によって数班に分けられ、限定されたとは言え広大な地下鉄網の調査をするために分配されていた。そして、本部を出動し深夜最終便が出払って、人気なくなる時間を待つことになった。通信の中継器の役割を担うヘンリーは先行し、イリュージョンミラージュで迷彩を施した状態で、まだ閉鎖されていない内に地下鉄構内に潜入し、不破達と合流するのを待っている。

終電列車が最期の駅に到着し、地下鉄構内が閉鎖されて人気がなくなると、零部の部隊が侵入していく。不破も、ヘンリーと合流してプラットフォームに降りると、ヘンリーをレールに自走させて、地下での通信が少しでも容易になる様に測られる。不破は、原と二人で暗い地下鉄路線を歩き、噂話の真相につながるものをしらみつぶしに探し回る。

「不破、こう暗いと俺の目じゃどうにもならん。何か見当たるか」

「全然。目も耳も鼻も変わったことを見つけそうにない。しかし、地下鉄都市伝説なんて、今度の事件はふざけたもんだ」

「正直なところ、俺もそう思っている。軍事施設の名残だとか、地下鉄職員の機密ルートだとか、非常時に備えた物資運用機能だとか、荒唐無稽もいいところだ。だが、だからこそ黒子は隠れやすいとも言える」

「そうなんだよなあ。笑い話で終わらせるには、目撃情報が集中しているし。ただ、地下鉄と言っても東京は複雑にたくさんの路線が絡み合っている。一日じゃ終わりそうにないな」

「最低でも、調査と分析に1週間から10日はかかる。しばらくはモグラの様な暮らしが続くぞ」

二人は愚痴をこぼしながらしらみつぶしに手掛かりを探して、ゆ

つくりと足を運んでいく。暗闇の中、細かい手がかりを探すことは、非常に骨が折れるとともにストレスがたまるものだった。集中力は続かず、途切れ途切れに作業が中断し、気を取り直しては仕事に戻ることの繰り返しだった。

効率の悪い捜査が3時間ほど経過した頃だった。疲労の蓄積と集中力の限界に達した原が、煙草を一本吸わせてくれと言い、二人はレールに腰掛けて休息をとることにした。体力が豊富な不破も、精神的にグロッキー状態で、二人とも無言のまま項垂れて座りこんでいる。その時、不破の耳が何か拾った。非常に小さな音であるため、原には全く聞こえない音域だが、不破の耳ならぎりぎり捉えられる音の大きさだった。

「原さん、何かが聞こえる。間違いない、向こうからだ」

「何、本当か」

原は不破の言葉に、手早く集音マイクを取り出し、進行方向に向けて最高感度に設定した。自分の耳に聞こえなくとも、不破が聞こえると言った以上、その音は存在するという確信があるからだ。不破は、音を捉えながら、ヘンリーに連絡をとり、データの中継を命令する。

「ヘンリー、俺の聴覚にシンクロして、そのデータを外にいる部長達に回せ」

「了解」

不破は、精神を集中しより一層小さな音を拾おうとする。一定のリズムで刻まれるコンクリートを叩く音、ヒューヒューという呼吸音、そういったものがおぼろげながら届いてくる。音は一度止まるとしばらく制止し、やがて重いものをこするような音が聞こえてくると、それっきり何も聞こえなくなった。

「不破、どうなってる」

「もういいよ、消えた。原さん、やっぱりこの地下鉄には何かいる。しばらくは徹夜になるよ」

「わかった。収穫はあったんだ。一先ずは、監視体制を整えたら一旦退却だ。疲労で体が動かない中、敵に遭遇しないともかいらないからな。ヘンリーに、皆に撤収するように伝えてくれ」

ようやく手にした手掛かりを抱きながら、零部は一度退却し休息をとるとともに、手にした手掛かりの分析を行うことになった。やはり、この地下には都市伝説に身を隠した何かがいる、誰しもがそういう考えを持ち始めていた。

東京ラビリンス？

不和が妙な気配を見つけてからも、数日間の調査が続けられたが、決定打になる手がかりを得られずじまいだった。何しろ複数の地下鉄路線が複雑に張り巡らせているにも関わらず、零部には必要最低限の人員しか割かれない。そのためいつこうに調査が進まないのだ。しかし、わずかずつではあるが、小さな手掛かりが集まりつつあった。

その手掛かりへのアプローチとなったのが、不破の聞いた微弱な音である。記録した音の分析によると、確かに地下鉄の路線沿いのどこからか、なぞの音が発生しているらしいのだ。無人の場所で、普段も人のいるはずのないところで、何故音が発せられるのか、不自然極まりないことだ。そのとの分析の報告を基に、滝は今後の方針を原達と話し合っていた。

「どうも、不破の聞いたこの音が、いちばん疑わしいな。いや、これしかないというべきか」

「いや、部長。不破が微弱な音をキャッチした後、隊員には集音マイクをも込ませて調査させました。そこでは、場所や時間、路線は様々ですが、明らかに類似した音がキャッチされました」

「まあ、数はあるがパターンは一つと言ったところだな。この微弱音の分析の結果は出たが、約100キロほどの体の二足歩行生物が歩くと、このような音になるだろうという見解だ。さてどう思う、この結果を」

「随分と大柄な奴ですね。そんな奴が深夜の東京の地下をうろつく。臭いことこの上ないですね」

原は頭を抱えるしかなかった。この小さな音だけを頼りに、標的を探らねばならないのだから、難易度は格段に跳ね上がる。打つ手が無いと言わんばかりに野表情で天井を仰ぎ見る。その中で、不破は何かふに落ちないと言った顔で滝に話しかけてきた。

「滝さん、他に音はなかったかい。今聞いた話にあった音は俺も覚えてる。でも、確かあの時も一つ違う音を耳にした様な気がするんだ。かなり小さい音だから、確信は持てないけど」

「ん、まあ確かにあるが、これは解析不能らしい。あまりに音が小さくて、機械も判別できかねるようだが、その音だけを抽出して、ポリウムを上げたのがあるが、現場にいるみんなの意見を聞いてみたい。これが不破の言う正体不明の音だ」

滝は、キーボードを操作すると、記録された音を部員達に聞かせた。ノイズも大きくなっているが、確かにそこに混じって何か濁った様な音が聞こえる。ここまで音を抽出されると、これも地下の誰もいない場所でするには不自然な音だ。何か、ざらついた音が引き延ばされているような音に聞こえた。その戸を聞いた部員達は、一体何の音が考え込んでいると、緒方が手を上げて意見を述べてきた。

「自分の見解ですが、何か重い音を引きずったら、こういう間延びしたざらついた音が出るのではないでしょうか」

その意見に滝や原達は、ほう、と言う顔を浮かべた。確かに、重いものを地面につけたまま匹づったりすると、この様な音がするとも思えるし、この場合最もふさわしい音に思える。もっとも、地下で一体何を持ち運ぶというのか、そしてそんなものがどこに消えてしまったのか、それが問題である。

「部長、確かにこの音は何か重量物を誰かが引きずった際に出た音でしょうが、一体地下で何を運ぶのかわかりません」

「そうか、俺はもうわかったけどな」

滝は、にやりとした笑みを口元に浮かべ、いたずら心が見える目つきを向けてきた。滝の謎かけに答えを窮している原の横で、不破があつと声を上げ、椅子から立ち上がった。

「そうか、わかった。重いものと言えば鉄や岩とか思い浮かべる。そして岩に似たような物で重いものと言えば、コンクリート。地下鉄はコンクリートで囲まれている。コンクリートは外から運び込んでも、隠しようがない。でも、そこにあるコンクリートを動かせば……」

「そうか、隠し扉か。コンクリートの扉を開けるなら、必ずこすれ合う音がする。なるほど、敵は迷路のように入り組んだ地下鉄網の内側にあるさらに複雑なルートが展開する迷宮を使って、様々な場所に出没するから、路線に関係なく現われるのか」

そんな不破と原のやり取りを見て、部下の推理に満足な表情を浮かべていた滝は椅子から立ち上がり、いつもの調子でこの後の行動を毅然と伝えた。

「標的は、やはり地下にいる。手掛かりを得たのは不破と原が潜った地点だ。ここを全員で集中に捜査、入口を見つければ潜入だ。最悪の場合は施設の破壊もあるかもしれないが、何せ東京のど真ん中で簡単に派手な行動は取れない。そこは臨機応変にやる。全員出動」

滝の号令に従い、全員が出動の体制を整える。狙いが一カ所のため、今日は全員が一緒に行動する。例によって、ヘンリーが先行し、地下鉄構内に忍び込む。そして、構内が閉鎖される時間を待ち、彼らは地下に侵入した。

不和が感じた気配の出所は、かなりの範囲に絞られている。隊員は、怪しい場所の壁面をたたき、反響の違う場所を探索することで、地下鉄網の内部に存在するであろう迷宮の入り口を見つけだそうとしている。

実に地味な操作であるが、ここまで網を狭めたら、そこから先はこの方法よりなかった。原の部隊全員がコンクリートの壁を叩き、音に変化があるところを探す。そうして、深夜の地下鉄線路沿いで、二、三時間余り調査が続いた頃だった。

「隊長、かすかにですがこの辺りで音が変化しています」

一人の隊員の報告に、全員が色めきだった。数日間の暗闇の中で調査、さらに地道な当てのない操作方法で、タフな隊員達も根を上げそうなところでの朗報だった。全員が、報告のあったコンクリートの壁面に集まってきた。原が全員を落ち着かせ、静かな状態でコンクリートを叩いて確認している。

「確かに、ここだけ音が違う様な気がするが、微妙だな。不破、お前の耳で聞いてみてくれ」

感度が人間の物とはまったく違う不破の耳で確認してみようのとのことだった。小さな金槌を手にし、不破は壁に耳を当て、その違いを聞き取ろうと精神を集中する。

「うん、確かにこの壁の向こうに空洞があるような音だ。ヘンリー、お前の解析ではどうだ」

「間違いなく、この壁の向こうに空洞がある、計算結果が出ました。ただ、あまり広くはありません。狭い通路が奥にずっと続いている、そんな反響音です」

入口が見つかれば、後は開けるだけである。もし、この通路を出入りしている者がいるなら、そして通路が開けているなら、ここは

開くはずである。不破は、重いコンクリートを色々な方向に力を入れて押してみた。すると、壁面をこすりながらコンクリートの扉がスライドしながら開いたのだ。そして、明かりに照らされたその中は、暗く細い通路がどこまでも続いていた。

「誰かがこの通路を通って、あちこちの地下鉄路線に出没しているわけか。となると、相当入り組んだ広大な迷路になっているかもな」

「その正体も、中を探検しないことにはわからないし。原さん、ぼちぼち行きますか」

「そうだな。全員、これから内部の調査に入る。二名は入り口で、出入口を確保。ヘンリーは入り口で待機し、通信を補助。残りの者は俺に続け。原、済まんが戦闘で言ってくれ。狭い中で正面から敵に鉢合わせると、獣も発砲できない。行ってくれるか」

「嫌だっという選択肢はないでしょう」

「まあ、本音はそうだ」

「わかってますよ、じゃあ行きましょう」

こうして、原が先頭に立ち、地下の不思議な探検隊が東京の地下に広がる誰も知らない迷宮”ラビリンス”に足を踏み入れていった。通路は大人一人がぎりぎり入れる幅で、高さも中腰にならないといけないため、非常に体力を消耗する。携帯しているLED電球で奥を照らす、光は最深部までは届かず、一体どこまで進まなければならないのか、そして今自分達が地上のどこの辺りにいるのか、距離感も方向感覚も掴むことができない。

「いくら暗闇で目が効くと言っても、さすがに心細くなるな」

「不破、あまり喋らないでくれ」

「どうしたんです、原さん」

「お前は大丈夫そうだが、少し息苦しくなってきた。この狭い通路で、通期もままならない空間だ。どうも空気が薄い。しかも、この人数だ。これ以上進むと酸欠になる」

「悪かったよ、原さん。自分の体の基準で考えてしまつて」

「まあ、仕方ないさ。だが、これ以上いくと、万が一の場合は全滅する。一旦引いて、装備を整えてくる」

「俺は、このままいくよ。通信はヘンリーがいるから途絶えることはまずない。何かあっても、そう簡単にはくたばらないから」

「無理はするな。ヤバくなつたら、すぐに引き返せ。じゃあ、俺達はいったん戻るからな」

酸欠と言う危機的な状況を前に、原の正しい決断で撤退すること、敵に辿り着く前の最悪の事態は回避することはできた。不破は自分で出来る範囲の操作は続けようと、足を進める。大した距離は歩いていないにも拘らず、無理な姿勢が余計に歩いている感覚を与える。歩くのにもそろそろ飽きてきた頃、通路の行き止まりが見えて来て、そこから下へ続く梯子が見えてきた。

「やっと、狭いところから出られるか。下の方は少し広いようだ。それにしても、東京の地下にこんな人工物があるとは。都市伝説もあながち冗談ではなさそうだ」

これだけ広大な人工の構造物がある以上、誰かが何らかの目的で

作ったのは明白だ。しかもこれほど入り組んだ、完成度の高い構造物となると、その裏にいるのはあまり表で活動をしたくない秘密組織と言うことになる。不破は、自分なりの推論を頭で組み立てながら、梯子を伝って下方へ降りていく。照明は全く灯っていないく、暗闇が辺りに充満する。

「まいったね。ここまで暗いと、さすがに視界が効かなくなる。それにしても、妙に臭いな。少しムカムカしてくる。灯りがつけられないやいいんだが……」

不破は、辺りをライトで照らして、何か辺りを明るく出来る者はないかと探し回った。すると、部屋簿一角にブレイカーを見つけ、そばによって確認してみた。かなり埃をかぶっていて、相当長い間使った形跡はない。だが、他にまわりを明るくする方法もないので、思い切ってブレイカーを上げてみた。心配する必要はなく、電気は問題なく通電し、次々と明りが灯っていく。冠谷辺りを見回せるようになった不破は、少し広くなっている空間に足を運び、そこにあるものを見て驚愕そいた。暗闇の中では、全くわからなかったのだが、あらゆる所にガラスの様な容器が設置され、その中には改造人間達が収まっていた。その数は数十体におよび、地下の空間の至る所まで、ガラスの中の培養液につかり、静かに眠っている。

「おいおい、マジかよ……。東京の地下に改造人間のプラントがあるなんて。これじゃあ首都は、弾が込められた拳銃を突きつけられていることに気付いていないことになる。ま、こんな地下深い所に、しかも地下鉄に沿って基地を作られたら、零部もマークのしようがないな」

不破は茫然としつつも、この施設を調べ始めてみた。すると、怪人達が収まっているガラスケースに近づくほど、妙に酸味がかつた臭いが強まっていくのだ。何故なのか、不破は怪訝に思いながら辺りを見回すと、ある事実気がついた。

大量に培養された怪人のほとんどが死んでいるのだ。死んだ怪人のガラスケースの中は、濁りが目立ち藻の様なものが浮いている。体も、完是粒部の痛みが激しく、あるものなど体中がぶよぶよになり、関節が緩んでしまったのか、足や手が抜け落ちている者もあった。不破が不審に思った臭いは、彼らの腐乱臭だったのだ。

衝撃の事実には、自分の体が自分の悪さを再現しようとするのを感じた。今の不破の体では、吐き気を催すことはありえないのだが、あまりの惨状に体が生身の肉体の様な反応を強制するほど、激しいショックを彼は受けているのだ。

「ひでえな、これは。嗅覚が強いせいで、最悪の体験を味合う羽目になったぜ。しかし、何でこんな有様になったんだここにいた奴は、こうなったからここを放棄したのか、放棄したせいでこうなったのか。どっちかだろうが、放りっぱなしはひでえだろう」

不破にしてみると、おぞましい光景ではあるが、この死体の数々はある意味自分の分身と言えた。改造され、人でもなく、獣でもなく、この世に存在価値を容易に見いだせない彼ら。不破にとって彼らは自分であった。そして、この世に生まれることのなかった水子なのだ。彼にとっては兄弟かもしれないし、親子関係にあるかもしれない。仮面ライダーの戦いは、自分自身と、そしてもっとも近い存在であり、親兄弟とも言える者達との果てしなき闘争なのだ。

衝撃を受けて呆然としている不破の背後に、何かが近づく気配があった。気配を搔く、気は毛頭ないようで、一気に接近してくる。

不破はすばやく身を翻し、敵の攻撃をかわした。彼が目にしたのは、筋肉が異常に発達した人間の下半身に、重量感ある毛むくじらの体を持つひどくアンバランスな姿の怪人だった。攻撃をかわした不破に向かって振り返った怪人の頭部は、恐ろしく巨大な角を備えた牛の頭部だった。モチーフとされた牛は、牛の原型とも言えるオーロックスに近いが、そこにいびつな形で人間の下半身を持つ全身像は、半獣半人の伝説の生物であるミノタウロスにそっくりだった。

ミノタウロスは、不破に対して強い敵愾心を持っているのか、鼻息が荒く、目もギラギラしている。どうやら、話し合うだけの知性はなく、獣性の方が強そうだ。

「迷宮の奥にるのがミノタウロス。ひでえ皮肉だな。穏やかに話しあいつてわけにいかないなら、拳で語り合うしかないか。何だかここでそういうことをやるのは、気が乗らないが……」

不破は気合を込めてメテオに変身し、ミノタウロスの攻撃を迎え撃った。神話の時代の伝説の様な、戦士と怪物の戦いが、現代の迷宮で繰り広げられる。

東京ラビリンス？

ミノタウロスの突進を、相手の角を受け止めることで食い止めるメテオだが、相手の馬力が想像を超えるもので、驀進を止めることができずに背中からコンクリートの壁面に叩きつけられた。その際に、相手の角がわき腹をかすり、装甲を削り取ってその下の生身の部分を傷つけられる。電流の様な痛みが体を貫き、息がつまってしまふ。改造された肉体を得て以来、これほどの傷を負った経験はなかったため、痛みと共に死に対する恐怖が頭に入り込んできた。相手を振り払うためになりふり構わず体を動かし、膝頭を相手の胸に突き刺すことができた。予想以上に力が入っていたため、ミノタウロスの体は宙に浮きあがり、メテオとの距離を取った。

体の自由は取り戻したが、じりじりと焼きつく様な痛みが走る傷口からは、色は赤いが人の血液とは質感の違う血液がぼたぼたと滴り落ちる。傷口は直ちに再生機構が働き、傷を塞ぎにかかるが痛みがひどくそれを和らげてはくれなかった。どうやら、ミノタウロスは馬力だけならメテオを凌駕しているようだ。傷を負わされた以上、長期戦になれば自分が必ず不利になると考えたメテオは、早めに決着をつけるしかないと判断した。まだ残っている俊敏性を生かし、相手の懐に飛び込むと、拳を相手に叩き込み、足を鞭のようにしなせながら敵の体に食い込ませる。俊敏性と戦闘センスなら、メテオの方が上である。攻撃をかわしながら相手をどんどん追い込み、力を込めた拳を振り抜いた。

しかし、拳を振ろうと体を捻った瞬間、先程負傷したわき腹に激痛が走り、腕のスピードがガクンと落ちた。ミノタウロスはそれを見切って攻撃をかわそうとする。だが、何を思ったか彼は体を戻し、遅くなって簡単に避け切れるはずのパンチを肩に受け、鉄で作られた鎖骨や関節を破壊されてしまった。何故、よ蹴られるはずの攻撃を受けたのか、意味不明の相手の行動にメテオは戸惑ったが、すぐ

に相手の意図がわかり、はつとした。

「お前、まさか……」

ミノタウロスはメテオの言葉を遮り、怪力で猛烈に押し返し、無事な腕でメテオを放り投げた。メテオの体は、地下工場の天井近くに叩きつけられ、壁面をずるずると滑り落ちていったが、途中の地下鉄への抜け穴トンネルに捕まり、その中に体を入り込ませた。ミノタウロスのパワーは、メテオの体に着実にダメージを与えている。負傷をもとめせずに、彼は負傷した腕の人工筋肉をはぎ取り、金属の骨格を剥き出しにして、メテオを追って上のフロアへ跳躍していった。

一方、装備を整えてきた原達が遅れて地下工場に到着した。彼らは東京の地下にこれだけの怪人製造プラントが存在していたことに驚いたが、メテオを圧倒しかねないミノタウロスの強さに舌を巻く。その強さは、離れて見ている原達にも戦慄を与えるほどだった。隊員達は原の命令が下る前に、思わず銃を構えてしまふのだった。それを見た原は、血相を変えて怒号を散らす。

「馬鹿野郎っ。こんなコンクリートで囲まれた密閉空間で発砲してみろ。跳弾で俺達は蜂の巣だ。そんな基本もわからねえのか」

隊員達は冷静さを取り戻し、銃の安全装置をかけ直した。いかに零部とは言え、怪人と実戦経験のあるものは限られるのが現実だ。実際に戦闘の現場に来れば、冷静さを思わず失ってもおかしくはない恐怖が怪人から放たれている。

「びびるな。黒子はメテオが何とかする。信用するんだ。奴がメテオを追ってここを出たら、下に降りて記録をとるんだ。サンプルは取ればいいが、そんなゆとりはないだろう。都心の地下にこんなものを放置する理由はない。すぐに処分するからな」

原は部下達に言明し、戦いを見守っていた。黒子は、自身の肉を

はぎ取るといふ狂った行為をとると、メテオを追って、どこかの地下鉄に繋がるトンネルの中に飛び込んでいく。プラントが無人以上になったことを確認すると、原達は階下に降りて辺りに散らばり施設の調査を開始する。とは言っても、撮影をしたり、紙媒体の資料をかき集めたり、怪人が入った培養液のサンプルを採取するぐらいしかなかった。それでも、めったにない資料を目の前に隊員達も熱が入る。

「調査もいいが、爆破の方もしつかりやれよ。量を間違えると、んでもないことになる。ここが東京のど真ん中だということを忘れるなよ」

部下達に指示を出しながら、不破は無線機に呼び掛けていた。相手はメテオだが、なぜか通信がつかない。メテオの電子頭脳とは無線通信もでいるのだが、ノイズ音しか聞えてこない。ヘンリーが中継器として待機しているので、電波が届かないことはない。となると、考えられるのは回線を切っているしかない。

「この大事なタイミングで回線を切るとはな。相当やばい相手なのか」

原の危惧は、おおよそ当たっていた。ミノタウロスのパワーは絶大な上、なりふり構わず力の加減も関係なく、メテオに自身の体をぶち当ててくる。狭いトンネルの中でメテオの体はあちこちに叩きつけられ、傷つく体からの出血はおびただしくなっていく。失血による体力の消耗もあり防戦すらできず、メテオはひたすら逃げ回るのみだ。やがて行き止まりに達したが、そこは地下鉄路線への出口となる扉だった。重いコンクリートの扉をこじ開け、線路の上に転がり出てきた。地下に侵入したところとは違う路線の様だが、迷路のように入り組んでいる地下鉄網の中で自分がどこにいるかは、殺風景な景色からは想像もつかない。

すぐにミノタウロスも外に飛び出してきた。侵入者であるメテオ

を徹底的に敵視する彼は、容赦のない攻撃を加えてくる。頭部の角で何度も突き上げ、狂気と化したむき出しの金属骨格を叩きつけ、メテオの体を徹底的に傷つけ、殺意を強めていく。ダメージと出血のため、体力を失う一方のメテオは、自分の体すら重くなっていく程だった。立ち上がることや反撃するのも嫌になるほどのダメージに意識が遠のきそうになるが、特製の肉体が体を治癒し、意識を失わないように刺激を送り続けるので、気絶することすらできない。「せめて気絶くらいさせてくれよ。どこまで体を痛めつければ、楽にしてくれるんだ。サドなのかマゾなのかわからない体だよ……」

悪態をつくだけのつく気力は残っているメテオは、壁に手をつきながら必死に立ち上がった。勝機などではなく、もうやけくそであるミノタウロスも、長い戦いを好むわけではなく、施設に侵入する者を排除すればいいだけなので、すぐに決着をつけるつもりらしく、大きな角を突きだしながらメテオに向かって突進してきた。

「これは、俺死んだね。意外にあっけないもんだね、仮面ライダーの最期は」

心の中で呟きながら、メテオは相手のとどめを受け止める覚悟を決めていたが、突然ミノタウロスは、身を翻すと地下へのトンネルに飛び込んでいった。一体何が起こったのかと、一瞬わけがわからなかったが、メテオは自分が通信回線を切っていた事に気がついた。回線を復旧させて原達の動向探ると、どうやら地下施設は破壊してしまつらしい。ミノタウロスは新たな侵入者を察知して引き返したに違いない。メテオは、出血が止まらない体に鞭打って引き返していった。

「爆破なんていきなり乱暴すぎるぜ。あいつがあのまま施設に戻ったら、間違いない全員殺される。ヤバすぎるな……」

メテオは原達の身を危惧しながら、必死でトンネルの中を走って

に行く。体中から血を流しながら走り続け、ようやくミノタウロスを捕まえる。狭いトンネルで互いを壁にめり込ませ激突させながら、奥へ奥へと進んでいく。

その頃、原達は資料をかき集めるだけ集めると、爆薬をセットし始めていた。密閉された空間なら爆風や炎、戸の地下プラントに集中するため、それほど量は必要としない。地下鉄路線も近いいため、下手に爆薬を増やすと被害が不必要に広まってしまう。

「隊長、爆薬のセットを完了しました。後は、無線で起爆できます」

「わかった」

部下の報告を聞き、原は起爆スイッチを受け取った。後は外に脱出してこれを起爆させれば、すべてが終わる。そう思っていたところに、コンクリートの破片をばらまきながらメテオとミノタウロスがトンネルから落下してきた。不意をつかれたこともあるが、それ以上に二人の姿を見た原達はぎょっとした。

メテオは、これまでの戦闘からはありえないほどの負傷を負い、傷口からはおびただしい量の血が滴り落ちている。その出血は危険域に達するほどで、メテオの視界に危険を告げる文字が映し出されている。その危険性は、傍から見つめている原達にも容易にわかるほどだ。そして、その相手であるミノタウロスも恐ろしいほどの姿でメテオに襲いかかってきた。全身が血まみれになり、肩口を破壊された腕は、筋肉自ら引き剥がしたため金属の骨格が剥き出しになり、それを武器にして相手を殴りつけたため、原形をとどめないほど変形している。まさに、命を削り合う死闘だ。フラフラになりながらも体を起こすメテオは、その視界に原達を捉えると、力のない声で呼びかけてきた。

「何だ、まだ地下にいたのかよ。さっさと行けよ。今回は俺に余裕

がないんだ。全員の命を守るなんて無理なんだ。早く外に失せる」

力がないながらも、その口調には鬼気迫るものがあり、隊員達に異様な恐怖感を与えた。一人、冷静を保っていた原でさえも、異常な光景に吞まれそうだったが、部下達にはそんなことはおくびにも出さず、

「ぼやぼやするな。巻き添えで死にたくなければ、さっさと引き上げるぞ」

と、部下たちを鼓舞するように怒号を込めて命令した。その声に我を取り戻した隊員達は、速やかに梯子を上ってトンネルに入り、脱出行動に入った。原も最後に梯子を登っていったが、メテオの姿を見て心配するような表情を浮かべた。

「あいつ、いつもと様子が違うな。余裕がないだけじゃなさそうだが……」

地下で行われる戦いを見下ろしながら、原は外に向かっていった。地下に残されたメテオは、ようやく二本の足で立ち上がり、同じように立ち上がってくるミノタウロスを見つめている。ミノタウロスも傷を負っているが、目の光は衰えていない。

「冗談じゃないぜ、お前の強さ。だが、その死に物狂いの強さの理由は何となくわかってきたぜ」

意味深な台詞を吐いたメテオに対し、ミノタウロスは雄たけびをあげながら頭部の角を突き出して、得意の突進を仕掛けてきた。飛び越えて避ける余力のないメテオは、両腕でがっしりと角を受け止めたが、馬力で負けてしまい、そのまま後方に押し込まれ壁にめり込まされた。その上、受け止めきれなかった角が腹部に深々と刺さり、衝撃と痛み、そして激しい出血に対するショックが体を貫く。普通の生の体だけならとっくに死んでいるところだが、機械化され

た部分が必死に補助を行い、何とか生命活動を維持しているが、改造人間としても限界を超えつつあった。

「さすがに改造されていても、これじゃ死ぬかもな……」

一瞬、死を覚悟するメテオだが、まだ死にたくないという生への渴望と死への恐怖が力を引き出し、腹部から角を抜きとると、相手の腹を蹴り飛ばして突き飛ばした。そして、危険を承知の上で「T HUNDER」を起動し、両腕の間取った高圧電流で相手にパンチのラッシュをかける。いつもであれば負担はほとんど感じないサンダーストームだが、出血がひどい体と機能停止寸前の負傷のせいで、いつものパフォーマンスを期待できない。それでも、死に物狂いでパンチを仕掛ける。ミノタウロスは、そのパンチを避けようとするが、いや、避けられるほどのスピードであるが、なぜかその胸板でサンダーストームを受け止め、踏ん張り続けている。やがて、メテオの体が限界を迎え、技を仕掛けた反動が体を襲った。その場に座り込み、視界が揺ら耳が遠くなり、負荷のかかりすぎた体の熱を感じながら、茫然とミノタウロスを見上げていた。

ミノタウロスも正面からサンダーストームを受け止めたため、体を激痛がが走っているはずである。にも拘らず、血走る目を光らせ鬼の形相でその場に仁王立ちしている。その姿を見上げたメテオはぼつりと、言葉を漏らした。

「やっぱりな……。お前も俺と一緒になんだ。守るために戦っているんだな……」

メテオの言葉が聞こえたのかどうか、突然ミノタウロスの体から力が抜け、体中から血を噴き出し始めた。ダメージをやはり相当肉体に溜まっていたようだ。立っていられなくなり、膝をついたミノタウロスの背後に現われたのは、怪人たち、いや、怪人になり損ねた者たちが入ったガラスケースだった。

地下迷路から脱出した原達は、酸素マスクとボンベを脱ぎ捨て、少しだけ一息をつくことができた。やはり、口を覆うマスクをつけるのは、酸素を供給すると言っても息苦しく感じる。楽に呼吸できるようにになった原は、ヘンリーにメテオに連絡して、撤退を始めるように伝えるよう命令した。

「全員脱出を完了した。後はあいつが出てくれば起爆して、それで終わりだ。調査はしたいところだが、あんな番兵がいる様な所が東京の地下鉄に隣接しているのは危険過ぎる」

「そうですね。では、メテオに連絡します」

ヘンリーは命令に従い、無線回線をメテオに合わせようとする。しかし、いくら待ってもメテオにつながる様子がない。

「おい、お前、故障でもしたのか」

「いいえ。エラーもアクシデントもない、良好な状態です。……、うーん、これはメテオの方で通信を遮断しているのでしょうか」

「何だと。あいつ何のつもりだ」

「メテオの意図はわかりません。おおつ、これは。大変です、原隊長。メテオは通信を遮断しただけじゃなく、爆弾の起爆に使う電波も妨害しています」

「あの野郎、ふざけた真似をしゃがって」

原は、感情を爆発させ、そばにあったマスクを蹴飛ばした。メテオの意図がさっぱり分からず、理解する術もない。こうなると、彼が戻ってくるのを待つか、向こうで爆破を行うなどをしないと、手

の打ちようがない。行動パターンを失った隊員達は、茫然と事態を想像するしかなかった。

傷だらけのメテオは、ミノタウロスが何故自分自身を傷つけながら戦いを続けるのか、何故、地下鉄路線に出では徘徊を繰り返すのか、そして何故メテオの攻撃を避けられるのによけようとしなかったのかを理解した。メテオの攻撃を受けた彼の背後には、怪人になれなかった者が培養液に浸かっているガラスケースがあった。あれだけの戦闘力を持ちながら、自らの体を破壊しながら受身になったのは、この怪人たちの入った装置を守るためだったのだ。ここを放棄した組織が残した番犬なのか、ほとんどの怪人が朽ち果て王とすゝる中で誕生したものはわからない。ただ、彼の目的は、この施設と彼の同類達を守ろうとしているのは明らかだった。

仲間を守るために一人で生き、戦い続ける。これまで戦った敵の中で最も獣らしいのだが、同時に感情を感じさせるこの相手を目の前にしたメテオは、積極的に戦う気持ちになれなかった。しかし、戦う大義名分を持つミノタウロスは、ボロ雑巾のようになった体を立ち上がらせ、メテオを殴りつけてくる。もう、自分の意思で動かすというより、本能や魂が肉体を動かしているに等しい。メテオは、防戦一方に状態で相手の攻撃を受けながら、相手の攻めを体で受け止めると同時に、それと共に伝わる魂の叫びの様なものを聞こえてくるのを感じ取っていた。その戦いの最中、メテオは耳に割り込んできそうな通信に気がついた。通信はシャットダウンはしているが、ヘンリーを介して無理やり割り込んできているようで、それを煩わしく思い、一応返事だけはしてみることにした。

「うるせえな。邪魔しないでくれ」

「馬鹿野郎。何が邪魔だ。爆薬の起爆スイッチは勝手に妨害するし、通信も無視する。貴様、何のつもりだ」

「貴様じゃねえよ。別に裏切りとかじゃねえ。こいつとはさして勝負したい、それだけだ」

「これは私闘じゃない。お前の個人的な感情を差し込むな」

「生身のアなたにはわからないだよ。こいつは俺と変わりない。勝手に体をいじられ、地下に押し込められ、そのくせ、何かを守るためだけに存在意義を求める。原さん、あなたに仮面ライダーと怪人の違いの定義は言えるのか。こんなの当事者の俺達じゃなきゃわからない。だから、二人の間にしゃしゃり出ないでくれ」

「お前……」

「さあ、話は済んだろ。まだ、文句があるなら、帰ってからにしてくれ」

「勝手にしろ」

原はそう言うと、無線を切りそれ以上は干渉してこなかった。かすかに、ヘンリーからの電波に、「通信記録は消しておけ」と言う声が紛れ込んでいた。彼なりの心遣いに感謝しつつ、メテオは戦いに集中し、魂のやり取りを再開する。

互いに体は傷だらけで、出血も体の中にある血を相当量を失ったせいでもう出てこなくなっている。殴り合う手には力はもうこもっていないが、気力を込めた拳には魂だけはのっており、ミノタウロスの魂の聲がメテオに流れ込んでくる。

地下の施設で誕生したこと。組織の命令で地下の迷宮基地を守り続けたこと。やがて施設が放棄され廃用に処分されかけたが、持つて生まれた生命力で生き残ったこと。自分と同じような存在を目

にし、彼らを家族と考え、守ることを生きる目的にしてきたこと。暗い地下で孤独に暮らしてきたこと。不思議なことに、それらの記憶が拳に込められ、メテオの脳に刻み込まれていった。

「守ることで、存在意義を見出す。俺と一緒にだな。しかも、お前は誰かを襲ったわけじゃない。自分の家族の様な存在を守っただけだ。……、だがな、お前の思いは実ることはない。こいつらはすべて死に絶えたんだ。孤独な生活は、未来永劫続くんだ」

メテオの悲痛な声を、いや、その言葉の意味を認めたくはないというかのように叫び声でかき消すと、ミノタウロスはメテオを突き飛ばし、反対側の壁に突き飛ばした。衝撃で施設内全体が揺れ、亀裂が一面に広がる。痛みがかるうじてメテオの意識を現実には押しとどめ、彼を立ち上がらせた。ミノタウロスは唸り声をあげながら、頭部の角を構え突進をして来る構えだ。腕は拳の皮膚が剥がれ落ち骨が露出している。反対の腕は、剥き出しにした金属骨格で殴り続けたため、変形が著しく原形をとどめていない。唯一残った武器にすべてをかけてメテオに向かっては駆けだしていく。

「これで終わりにしようぜ。人間じゃない、お前と同じ存在の俺が引導を渡してやる。もう十分だろ。お前は十分すぎるほど地獄を味わった。これで終わりだ」

メテオは足に力が入らなかったが、しっかりと腰を落として踏み張り、握り拳を構えた。刺し違える危険を冒しながら、カウンターのパンチを打ち込むつもりだ。一歩ずつ二人の距離が縮まっていた。そして、ミノタウロスの角がメテオの体を貫く寸前、気迫の一撃がミノタウロスの脳天に叩き込まれた。

通信を切り、無言で外で待っていた原達に、地下から衝撃が伝わ

つてくる。重低音が脚もとで鳴り響き、中で爆発が起こったことをその場にいたものに知らせた。

「終わった、な」

すべてを悟った原は、ため息をついた。後はメテオを迎えに行けばそれですべてが終わる。目で合図して、扉を開けると部下に指示した。数人の部下が重い扉を開けようと手をかけた瞬間、勝手に扉が開いた。内部から、メテオが自力で開けたのだ。外に出てきた彼の体はの様子に息をのんだ。傷口はさらに増え、装甲はあちこちをえぐられ、腹部には大きな穴が開いていた。そして、爆発に巻き込まれたのだらう、体のあちこちが燃えており、今も火が揺らいでいた。まるで亡霊のようにゆらりと体動かし、原の方に向き直ると「全部終わったぜ」

とだけ言い残し、そのまま前のめりになって倒れ込んだ。メテオの状態に、その場にいたものは度肝を抜かれ、言葉を失ったが、一人冷静を保っていた原は、いつもの口調で命令を下した。

「まったく、命令違反してこの有様じゃあな。こいつを回収しろ。怪我人だからな、丁重に扱ってやれ」

原はそれだけ言うと、やれやれと言った表情で、その場を後にした。部下達は、重いメテオの体を数人がかりで担ぎ上げ、地下から撤退を始めた。

暗闇の中に、突然光が差し込んできた。体にも電流が走り、自分の体の感覚が唐突に戻り、それと共に全身に走る痛みが蘇る。激痛で体を動かせない不破は、目だけを動かして周りを見回すと、そこは零部の基地のラボだった。全身は包帯でぐるぐる巻きにされ、中身が何だかわからない点滴の管が腕に刺さっている。どうやら、

無事に家まで帰ることができたんと言っ安堵を覚えたが、頭上に原と吉村の顔が自分を覗き込むようにぬつと現れた。

「不破君、無茶にもほどがあるね。君の体は世界で同じサンプルがないものなんだ。あまりひどい怪我をされると治療法がないだけに、こつちも困るんだよ。データを取るいい機会ではあるんだがね」

「最後の一言がすごく余計。お手数おかけしますね。この怪我、治りますか」

「もう再生が始まっているが、一週間は安静にしてくれ。失血がひどくて、血液の生産が追い付いていない」

一週間の安静で元通りになるのだから、そこは体に感謝したい部分でもあり、じゃあ、どうやったら死ねるんだという恐怖を感じる部分でもある。悩ましい事実に頭を悩ませていると、原がベッドの隣に座りこみ、不破を睨みつけてきた。

「不破、お前の行為に一応暗黙の了解はしたが、公式に許可したわけじゃないことは忘れるな。ああいう勝手な真似はこれつきりにしろ。個人的感情で暴走すれば、お前は歩く破壊兵器と変わらない。何があっても自制心は保てよ」

「悪かったよ。今度限りにするよ。滝さんはどうしている」

「上への報告だ。地下とはいえ、東京の地下で爆破を行ったことの申し開きだ。まあ、形式的なものにすぎん。保存したところで扱い切れるものじゃないし、他の秘密組織やテロリストに渡るリスクの方が大きい。データ最終だけで充分さ」

「そうか」

不破は、零部の冷静な手際のよさに舌を巻くと同時に、それと裏腹な個人的な感情で危険な行為に身を投じた自分を恥じるしかなかった。恥じる思いで目を合わせられない不破に、原はぶっきらぼうに視線を向けずに話しかけてくる。

「それで、どうだった。お前が満足いくまで戦った感想は」

「鏡に映った自分を殴る様な気持だ。目の前の存在は消せても、ずっと脳裏にこびりついて、あいつを倒した事がすつきりしない」

「なかなか文学的な表現だな。鏡像を討つ、か。確かに目の前から抹消しても、存在自体はお前がこの世に存在する限り付きまとう。そこまで、あの怪物に自分を投影した理由は何だ」

「何故、生まれたのかわからない。生き方は誰も教えてくれない。だから、何か存在理由を見つけようと誰かを守ろうとする。そうすることで、自分が何者なのかを規定する。俺と変わらない」

「なるほどな。確かに、お前が自分自身で葬りた気持ちはわかる。俺達の手にゆだねたら、自分自身が殺されるのを傍観することになる」

原は、不破の言う事が理解できた。少なくともこれまで何度か任務を共にしてきて、彼の考え方が把握できたからだ。だが、人間である自分が不破の事をすべて理解するなど、まず無理だとも考えてきた。そして、今は不破が直面する根本に関わる命題を聞き、彼がいかに不安定な立場で、自分自身が何者かをどうやって規定してきたのかを悟った。

「原さん、仮面ライダーと怪人の違いって何だ。どっちもふざけた様な能力を持っているが、一方は仮面ライダーと称賛され、一方は怪人と忌み嫌われる。その違いは一体何だと思う」

「難しい問題だな。そうだな、結局、仮面ライダーとは、名前や設定の問題ではなく、存在そのものなんだろうな。勝手に仮面ライダーを名乗ろうとそれは勝手だ。設定を整えて、これもライダーですと言つのも勝手だ。だが、仮面ライダーたらしめるのは、その生き方の問題だろうな。相応しい生き方をする事で、人は仮面ライダーという存在になりえる。これが、虚構ではない、現実世界を生きる仮面ライダーの定義だろうな」

「設定ではなく、存在が仮面ライダー……」

「ああ。だから、表面が化けものであっても、そいつの生き方が相応しいし生き方をしていれば、仮面ライダー足りえるだろう。もっとも、そう言う奴はなかなかいないようだがな。お前も、仮面ライダーとして生きるなら、ふさわしい生き方をして、仮面ライダーと言う存在を目指すんだな。今回みたいなことはもうしないことだ」

「ああ。わかった」

不破はそう言うと、目を閉じて眠りにつくことにした。怪我のせいか、体が休息を欲して、眠気を覚えている。瞼を閉じ、ふと記憶を辿ると、あのミノタウロスの姿が浮かんでくる。自分と同じく誰かを守ることで存在意義を見出そうとした存在。彼は仮面ライダーになれたのだろうか。自分は仮面ライダーになれるのだろうか。答えの出ないことを考えながら、不破はゆっくりと眠りの中に落ちていった。

仮想空間の戦い

前回の東京の地下での先頭から約三日が経過した。腹に穴をあけられるほどの重傷を負った不破の体は、驚異的な治癒力で外傷はほぼ塞がっていた。しかし、生命維持の危険域まで出血したため、まだ万全とは言えず、ずっとホテルの自室で寝込んでいる羽目になっていた。別に、こういう戦いをすることを職業にしたわけではないのだが、個人ではなく集団で動くことの多い零部にいると、自分も隊員の様な気になる上、滝からは、人であろうとするなら労働の報酬は受け取れという理屈で、決して安くはない金額を押し付けられているせいもあり、ほとんど職業ライダーの様な感覚を持たざるを得なかった。

「仮面ライダーって、俺のイメージだとフリーランスなんだけどな」

そんな愚痴をこぼしながら、ルームサービスで頼んだ食事を口に運んでいた。改造された体に食事は不可欠ではないのだが、今は無理にでも食べて血液を生産させると言う科学資材班の吉村のアドバイスもあり、まだめまいのする頭を起こしながら口に箸を運んでいた。零部の偽装ホテルの食事にしては、本物のホテルと同等、若しくはそれ以上の味を誇り、食事自体は楽しみながらとることができていた。

遅い食事をとりながら、なんとなくテレビのワイドショーなどを見ているところに、部屋の電話が鳴った。五年も行方不明になっている不破に電話をかける者などいるはずもなく、ましてやホテルの電話が鳴るということは、ある程度の相手の予想はついた。溜息をつきながら、不破は受話器をとって耳に当てながら、返事を返した。

「はい、不破ですけど」

「俺だ、滝だ。そんなふて腐れたような声で、電話に出るな」

怪我人は休んでろと言ったのはそっちのくせに、電話をかけてくるのは約束が違うだろと言いかけた不破だったが、それを腹にしまいこみ大人の対応をする余裕は残っていた。

「すみませんね。あまり気分がすぐれないもので。まさか、地下に出頭しろと言っくんじゃ……」

「話が速いな。まあ、そう言うことだ」

「俺、まだ怪我が治りきっていないんですけど」

「それはわかっているし、休めと命令したのは俺だ。だが、遊べと言っではないぞ。早く万全の体に直せと言っ意味だ」

これだよ、と不破はため息をついた。普通の企業ならとくに定年の年齢に達している俺が現場を指揮しているものだから、今いち感覚が合わないことがある。プライベートを犠牲にしても使命を果たそうと言っのは感銘を受けるが、負傷者に鞭打っのは、今時に割に合わないと言っのが不破の感覚である。

「それに、お前は前回通信を切った上、独断で戦闘を続行して、自分のタイミングで起爆したんだ。文句は言えない部分はあるぞ」

「わかったよ。行きますよ。その代わり、飯ぐらいは食わせて欲しいんだけど。一応、故障者リスト入りしている身なんで」

「お前はメジャーリーガーか。まあ、それぐらいの余裕はある。それに今回は肉体労働じゃないから、怪我は関係ない。それじゃあな」

それだけ言っつと、俺はブツツと電話を切った。言っただけ言っつて電話を切ると言っ強権的なのはもう慣れっつこなので、それほど腹は立

てなかったが、肉体労働じゃないという言葉が気にかかった。自分の経歴や現在の肉体からすれば、体を張った仕事以外思いつかないからだ。妙な気分になりながらも、不破は食事を終えると着替えを済ませ、地下の本部へ向かった。どうせ、風変りで刺激的な事件しか扱わない部署なのだから、今さら勘ぐるのもおかしいものだと思う、エレベーターに乗り込んだ。今いち気乗らず、ふてくされた表情でいると、途中で絵エレベーターが止まり扉が開くと、情報分析担当の斎藤綾子が乗り込んできた。変わり者や無骨な人間が多い零部にあつて、最もまともな神経を持っていると不破が評価している彼女と簡単な挨拶を済ませると、エレベーターは再び最下層に向かう。

「綾さんも招集ですか」

「そうよ。不破君も当然呼び出しでしょ」

「そうなんです。まだ傷が完全に治っていないのに、無茶苦茶ですよ」

「まあまあ。今回は体には無理のない任務になると思っから、そこは大丈夫」

斎藤になだめられながら、不承不承の気持ちで最下層に到着すると、不破は彼女と共に滝のオフィスに入室した。そこには吉村もあり、滝と共にパソコンのモニターを見つめながら話合っている。

不破が部屋に入った事に気がついた滝は、

「おう、きたな。まあ、ソファに腰掛ける。差し迫ったことではないから、四人でコーヒーでも飲みながら、話し合おう」

と言い、三人をソファに座らせると、滝自ら豆を炒り、挽いて、素焼きのカップに注いだ香り高いコーヒーが運ばれてきた。人使いが

荒いことに不満がある不破だったが、このコーヒーを飲まされると、
そう言う気持ちが消えていき、また頑張ってみるかという気持ちに
なるほど見事な味だった。まさに、五臓六腑に染み渡ると言ってい
いコーヒーが痛む体に少ししみるが、やはりうまいことには変わり
なく、不破の機嫌が直ってきたのを見計らって、滝が本題に斬り込
んできた。まさに絶妙のタイミングである。

「不破、お前はセカンドライフと言うものを知っているか」

「知ってるよ。老後の第二の人生のことだろ。いよいよ滝さんも、
隠居を考え始めたの」

「馬鹿野郎。そっちのセカンドライフじゃない。アメリカの会社で
運営される、3D型の仮想世界コミュニティの事だ」

「それなら、俺は知らないな。カプセルの中で改造されて、寝てい
る頃の話みたいだし」

「俺もネットはそこまで詳しいわけじゃないから、その点は吉村が
説明する」

吉村はコーヒーをすすりながら、どこから説明をしたらいいか考
えながら、極力わかりやすい言葉で説明を試みる。

「不破君は、ネットゲームとかはするかい」

「最近する様になったけど。セカンドライフもそんなもんなの」

「形式は似ているが根本が異なる。ゲームの場合はあらかじめ設定
されたストーリーに沿って、ある程度決められた動きをしていくも
のだが、セカンドライフは、初期設定を済ませれば、基本的に土地
を与えられる。後は、個人の目的意識に沿って、能動的に自由に動

き回り、自己責任のもとに行動することが主だ。メタバース、つまり仮想空間を3D化して、その世界で現実世界と同じような活動をする物だ。物質と言うハードがないから、色々な活動が比較的容易にできる自由度があつて、企業なども参加して独特の世界が出来上がっている」

「ふーん、何だか映画の『マトリックス』のプロトタイプみたいなもんかな」

「まあ、あの映画みたいに、個人の意識が中に入る今のではなく、外界で体験するわけだが、わかりやすく言えば、そうなるだろうな」

「で、その仮想空間と零部や仮面ライダーがどう関わるわけ」

「それに関しては斎藤さんが」

「まるでたらい回しじゃねえか」

不破は呆れながらコーヒーをすすり、話題の内容を整理しながら、今度は斎藤の話に耳を傾けることにした。

「不破君、この黒子に見覚えはあるでしょ」

不破は渡された資料の写真を一瞥した。思い出すまでもない。自分がメテオとして初めて能動的に戦った、梟型の怪人の写真だった。初めての戦闘の相手だから、忘れるはずもない。

「俺のおつむは、電子頭脳のせいで記憶力が半端じゃないから、忘れるはずもないが、こいつだけは絶対に忘れはしないよ」

「そうよね。あれ以来、この梟型の怪人の出所を探っていたんだけど、意外なところから出てきてね。今度はこつちを見て」

斎藤から渡された新しい資料を見ると、そこには少しドットの粗いキャラクターが映っていた。ゲームのキャラに言えるが、細部までよくあの怪人と似ているのだ。

「他人の空似どころじゃない、そっくりだよ。どうなってる……」

「この映像を手に入れたのは、セカンドライフ内なの」

「え。確か、怪人やライダーの戦いは、この零部が抹消して、必要最低限の物が世間に害のない程度に公開されているはずだろ。それが、何で仮想空間に堂々と出ているわけ」

「それを情報課で調査したの。そこで浮上したのが、セカンドライフ内にあるコロシウム」

コロシウムとは、古代ローマの闘技場の名に由来する。競技場の意味となっているが、やはり、戦いが中で繰り広げられることに変わりはない。一体、そこで何が繰り広げられているのか。

「この闘技場は、仮想空間内に一年ほど前から作られていて、正式名称が『ヒーローコロシウム』。自分でヒーローをデザインして、全世界のユーザーやコロシアムの管理会社が設定した敵と戦って、優勝者を決める場所らしいの。セカンドライフ内の通貨は、実際のドルに換金できるから、かなり盛り上がりを見せているわ。そこに現われたのが例の梟よ。姿かたち、スペックまでそっくりなキャラクターとしてね。なかなかの強さみたいで、難関の怪人だったみたいだけど、現実世界で黒子として活動を始めた時期と時を同じくして、仮想世界から姿を消している」

「ちょっと待って。テレビで見た怪人を再現したのではなくて、その逆で仮想空間にいたキャラを現実再現したってこと。まさか、

そんなふざけたことが。ゲームのキャラだよ。俺も改造人間だからわかるけど、そんな単純な作りの体じゃないんだよ」

「でも、その順番が問題なの。仮想空間を利用して改造人間の設計、スペックの検証、さらにそこに登録される様々なキャラクターから、改造人間へのフィードバックがされている節がある。このコロシアルを開催しているのは真つ当な合法企業だけど、そこに技術提供している会社がどうも怪しい。証拠は上がってないけどね」

「それで、零部が介入すると。でも、仮想空間だよ。どうやって調査するの。証拠も上がっていないのに、ガサ入れとかできないですよ」

不破の素朴な疑問に三人は無言だった。その内に、彼らの顔が上がり、その視線が不破の顔に集まると、不破は本能的に嫌な予感を感じた。そして、嫌な予感は最近当たりつぱなしである。

「何、何さ、みんなで人の顔見ちゃってさ。……、ははは、言いたい事があるならはつきり口にしようよ。ねえ、滝さん」

「おう、そうか。じゃあ、率直にいこう。お前の高性能な電子頭脳とネットを接続し、お前の意識を仮想空間に飛ばす。要は、電腦潜入捜査だ。バックアップはうちのスーパーコンピューターがやる。安心しろ」

予想は見事的中した。そして、ここの組織では一度決まると、どんなに不平不満を言っても、覆らないことを不破は知っていた。道理で、負傷してしようと肉体を使わないからという理屈で呼ばれるはずだと、今さらながらに納得するしかない。不破は災難により、また一つ賢くなるうと決意するしかなかった。

もはや、ギヤーギヤー言っても始まらない。不破は、三人につい

ていき、ラボに入った。いつも以上に様々な機械が並び、いくつものハードドライブが設置されている。それらを見ても、不破は全く安心はできなかった。大丈夫だと思おうとしても、こういうシチュエーションの漫画やアニメ、映画で起こるのは、事故で意識が取り残されるとか、向こうの世界でアクシデントが起こると死ぬとかいう展開だ。そこに、吉村が不用意な言葉をかけてくる。

「まあ、ないとは思うけど、ウィルスにやられたとか、強力なワクチンで攻撃されたとか、フリーズしたとかなったら、少し手間取るかもしれないけど、安心していいよ」

安心できるわけねえだろと殴りかかりたいところだが、もう事態は動き出していて、不破はあつという間にベッドの上に横にされた。「ああ、そうだ。今回は仮想世界でミッションだから、生身の人間はサポートできない。サポートすべて引き受けるのが彼だ」

「メテオ、一緒に頑張ろうよ」

「お前か、ヘンリー……」

未知の仮想世界にダイブするというのに、そのサポートがバイクとは。不破はもう投げやりな気持ちになっていた。

「まあまあ、メテオ。このスパコンと僕の頭脳があれば、快適なバーチャルツアーを提供するよ。大船に乗った気持ちでいて」

「でかい泥船に乗せられた気分だよ、こっちは。もう何でもいい、早いとこやってくれ」

待つてましたとばかりに様々な機器が不破にとりつけられ、データがコンピュータに再現されていく。そして吉村がプラグを持って、傍までやってきた。

「このプラグをつければ君の精神は、仮想空間に入り、セカンドライフ内に侵入する。ヘンリーの頭脳を介するおかげで、君の視覚、聴覚、痛覚などの五感はそのまま現実空間と同じように感じる事ができる。君の脳が混乱しないようにとの措置だ。もちろん、メテオとしての機能も使える。それで、コロシウムに登録して参戦するんだ。君の行動はこちらでも把握している。何重にもバックアップ体制がひかれている。とにかく、虎穴に入らずんば虎児を得ず。相手の懐に飛び込まないと正体がかめない。頼んだよ」

「OK。信用するからな。さあ、プラグをぶっ挿してくれ」

不破はそう言い終わると目を閉じた。そして、吉村がプラグを頭部に差し込んだ瞬間、瞼にたくさんの光の捜査線が走り、色とりどりの光が走る。何か、映画を見ている様な気分になり、不思議と不安感がない。屋はて、光は色を増やし、何かの風景を形作っていくように見えてきた。視覚が戻るにつれて聴覚も戻り、ヘンリーの声が聞こえてくる。

「メテオ、今から視覚情報を編集して、3D化、並びに現実世界にみえるようにをフィルターかけるよ」

ヘンリーの言葉と共に、不思議な感覚は次第に現実的な感覚に戻っていき、閃光が走った瞬間、不破はいつの間にかまっさらな大地に立っていた。現実空間と全く変わらないその風景に、不破は今一つ実感を得られなかった。

「ここが仮想空間か……。普通の空間としか思えないな」

「それは、零部のコンピュータで映像を編集し、僕がフィルターを与えているからそう見えるんだ。フィルターなしだと、飛び交う情報の光とコードの羅列にしか見えない。この方が、頭がパンクしないで済むからね」

「なるほどね。で、俺は今どこにいるんだ」

「零部が仮想空間に所有している土地だね。何にも建っていないね、アジトぐらい作ってくれてもいいのに。お金あるんだから、通貨買えば楽勝なんだけどな」

「お前、バイクのくせに詳しいな。まあいい、ここにバカンスに来たわけじゃない。例のコロシウムに行つて、登録を済ませよう」

不破はそう言うのとヘンリーに乗り、コロシウムに向けて出発した。バイクに跨つて移動するなど、これが仮想空間とは到底思えない。これも、ヘンリーのサポートのおかげなのだが、今いち現実感が無い。人は少ないが、それでも普通に視覚化されているし、時折道路沿いにみえるディスプレイの様に設置された看板など、とても仮想とは思えなかった。戸惑いの中、不破はヘンリーを走らせていたが、落ち着きのなさが不破にも、そして前代未聞のミッションに挑むいささか浮き足立っている零部にも、その看板の文字が見えていなかった。

S M A R T B R A I N

仮想世界の戦い？

不破は仮想空間内をヘンリーで移動を続けているが、今いち現実感ではなく仮想感と言うものを感じられずにいる。普通に太陽が昇っているし、海もある。これが作りものとは思えないのだ。

「本当にこれが仮想空間とは全く思えん」

「そうかな。機械の僕にとっては、これがいつも認識する世界だから、普通なんだけど。一度、フィルターを外して僕が見る世界を体感してみるといいよ。この世界の構造がわかるから」

ヘンリーは不破の許可を得る前に、不破の視界からフィルターを外してしまった。騒ぎ出す前に視界を変えられた不破は唖然とした。先程までの景色が消え、様々な文字列のコードが乱立し、周囲を電子化した情報が色とりどりの光となって激しく行き交っている。さらに、自分自身の体もコード化され、情報としてこの空間に存在しているのがわかる。

「どうだい、メテオ。これが機械の僕が認識している世界であり、君が今いる世界の構造だよ。君の体を構成するコードを細かく分析すると、この空間の構造物やアクセスしている人の情報とは作りが少し違う。メテオの能力をそれなりに再現し、また削除などの攻撃を受けた際の防御やバックアップのために、コードが複雑化されてオーバーすぎるほどのプロテクトがされている。人の意識をそのままネット界に飛ばすと言う危険なことをやっているんだから当然だよな」

「それで安心しろと言われても、生きている俺とお前とじゃ根本的に違うんだから、保障にならねえよ。まあいい、この世界の構造はわかったから、視界を元に戻してくれ」

不破の要望に応え、ヘンリーが視界にフィルターをかけると、再び目の前にリアルな世界が広がってきた。いつの間にか、周りを行き交う車やらバイクが増えてくる。

「だいぶ人が多くなってきたってことは、アクセスする人間が増えているってことか。フィルタのおかげで、動きや表情が人間にしか見えないな。こりゃ有難い機能だ」

「ようやく僕的能力を認めたね。初めからそうして欲しいよ、バイクを見る目がないなあ」

「それを言うなら人を見る目だろ。お、あのでかい建物かな、コロシウムって言うのは」

「うん。あそこに行ったら、まずユーザー名やパスワードを入力して、内部に入る手続きをする。このコロシウムには、他にも自分が登録するヒーローやモンスター、武器を登録しておけば、それを戦闘に使うことができる。ここがいいところは、カスタマイズがかなり細かくできるから、テレビのヒーローの再現が細部まで可能なんだ。一戦終えるごとに、アップグレードしたり交換したりできる。メテオの分はもう準備してあるから」

「OK。結局のところ、やることはいつもと変わらねえな。楽と言えば楽か」

不破とヘンリーは、広大なコロシウムの敷地に入っていた。様々な服装や容姿の人々、つまりアバターによって設定された人々があちこちにいる。彼らは、他の施設に目もくれず、コロシウムに向かっていく。

「えらい人気だな、本当に。どんなキャラを持ち込んで来るやら」

舌を巻くほかない盛況ぶりに目をやっていると、不破は後ろから呼びかけられた。

「君、初めて」

仮想空間内に知り合いがいるはずはないのだが、何故声をかけられるのか不思議で仕方なかった。だが、不破はネットゲームをしている時のことを思い出し、これはアバター同士の会話を仮想空間内で再現しているのだと気がつき、普通に挨拶を返せばいいのだと判断した。アバター同士の会話らしく、ぎこちな変事を返してみる。

「うん、初めて」

「がんばって。君はどんなデザインなの」

「うーん、仮面ライダー系かな」

「最近結構多いから、被らないようにしないと」

「助言、ありがとう。お互い、頑張ろう」

たったこれだけの会話なのに、不破はひどく疲れる気がした。如何にネット内で使う言葉が普段使う言葉に比べて不自然なのか、身を持って思い知らされた。あまり、人に話しかけられないように、目立つ動きをしないように、さっさと受付を済ませるしかない。ロシアムの中に入ると、人が非常に込んでおり、あちこちから会話をしているのが聞こえてくる。しかし、どこ行けばいいの川くらない不破は右往左往するしかない。そこに、ヘンリーが無線で割り込んできた。

「メテオ、あまりうろろすると不審に覆われるよ。受付は中央の窓口だよ。ポケットにカードが入っている。それを提示すると登録

完了。メテオの擬似データが登録される」

「擬似って言うことは、通常通りには動けないのか。なんでだよ」

「当たり前だろ。正直にメテオのデータを登録したら、相手にデータが筒抜けだよ。他の組織もここを見ているかもしれないのに、迂闊なことはできないだろ。そんなの電子頭脳を使うまでもなく、タシパク質の脳みそもわかるだろ、馬鹿だなあ」

「すみません……。戦いに支障がない程度ならいいんだけどさ。受付、済ませてくるよ」

バイクに馬鹿と言われたことに、腹が立つより惨めな気持ちになった不破は、これ以上ヘンリーの世話にならないように、さっさと手続きを済ませた。零部で用意されたユーザー名などを登録し、持ち込むヒーローの能力としてメテオの擬似データを読み込み、すべてが整った。エントリーナンバーが与えられ、順番が回ってくれば、電光掲示板に番号が表示される。

後は、ここで待てばいいだけなので、不破はまわりを観察しながら、時間を潰すことにした。アバターをフィルターで見ているせいで、本当に生きているように見えるのだが、ネット世界であるがゆえに奇抜なファッションも多い。それが見ていておかしくもあった。建造物は、確かにリアルなのだが、人工物であることが強調され、色合いは淡泊だし、塵一つない床は現実感を一切感じさせない。

「妙な感覚だな。だが、ここに怪人のデザインや能力を吸い上げ、現実世界に送り出す奴がいるはず。まずは、そいつを炙り出さないと」

改めて緊張感を持って気持ちを引き締めると、第一次予選のブロック発表が行われている。不破はBブロックの様だ。対戦順はかな

り早い。さて、控室にでも行こうかと思ったが、それがあんな感じがわからない。しかし、早くしないと順番が来る。勝手がわからない不破は、仕方なくヘンリーを呼び出すことにした。

「ヘンリー、順番は決まったが、この後はどうするんだ」

「その建物の中にいれば、それでいいよ。順番が来たら、フィールドに転送されて、体は自分が設定したキャラクターに変身するシステムになる」

「OK。まずは、目を引くように暴れ回るよ」

「頼むよ。ただ、擬似データだと言うことを忘れないで。使える技はアイスブレーカーのみ。体の再生機構はなし。外見も少し変わるからね。基礎体力もかなり落ちると思うけど、ここにいるユーザのキャラと互角の能力だから、後は戦闘センスの問題だね」

「任せとけ、じゃあ行ってくる」

メテオとの通信を切り、気持ちを落ち着かせていると、不破は自分の意識がどこかに飛ぶのを感じた。そして意識が落ち着きどこかに着地すると、不破はいつの間にかメテオに変身していた。周りは大観衆に包まれ、空中に箱の戦いを観戦する人間のコメントが空中に映し出されている。

「おい、仮面ライダーだぜ。安易じゃね？」

「最近多いよな、パクリとか行き過ぎてる」

「いや、これは素人にしちゃ、かなりの出来」

「ゲームキャラは、動かしてナンボだろ」

『ダサイデザインなら売れねえだろ。デザインも込みでキャラだ』

メテオは、自分の姿をネットで見てあんな風に言われているのだと思うと、非常に恥ずかしい気分になった。これが、自分が画面を除く状況でコメントされるのはまだ耐えられるが、仮想空間内で直接言われると、見世物にされている気分だ。しかし、そんなことは言っていられない。勝たなければ、餌としての役割も果たせないのだと、自分を奮い立たせる。

相手はは、鎧を着こんだ騎士の様なキャラクターだ。ファンタジー系に見られるキャラデザインだ。まあ、これならメテオにとっては敵ではないだろうと高をくくっていた。

試合が始まり、相手が剣を振りかざしながらかなりのスピードで肉薄した。さすがはゲームの設定、常人を超えている。振り下ろされる剣を、メテオは真剣白刃取りの要領で受け止めようとしたが、自分の腕が異様に重く感じ、剣を受け損なって頭からバツサリと斬りつけられた。ダメージも信号として再現されるため、体中に激痛が走った。いつもなら必ず受け止めていたはずなのに、なぜ。メテオは戸惑ったが、これがヘンリーの言っていた擬似データの影響なのだろう。正体を隠すためにはこの世界のルールを逸脱できない以上、ルールの上限にメテオの能力は限定される。つまり、今の様なこの世界の限界を超える動きはできないと言うことだ。

「さすがに、このルール設定で戦うのはきついな。だが、相手も同じ条件だ。ハンデ戦じゃない」

体験しなければわからない、メテオはそう考え、再び相手の攻撃を受けてみることにした。調子に乗ったのか、再び相手は同じ手で攻めてくる。しかし、今度はメテオも準備をして受け止める。まずは、防御を固めた上でどこまで耐えられるかと言う実験だ。防御のために腕を構えると、その部分が強化され、相手の剣にも攻撃に強

い耐性を示し、弾き返すことができる。次は、動きでどこまで交わすことができるかを試す。動きでかわすのはやや難しく、6割から7割が限度だった。これは、体力に余裕はある時以外は使えないと判断する。

さて、攻めるときはどうか。まずはパンチを浴びせてみる。相手の防御の隙についてパンチを浴びせたところ、これもまたスピードが落ちていて、勝手がいつもと違う。それでも、相手の攻撃パターンを読みさえすれば、大体はヒットできる範囲である。キックも似たような感じでスピードが遅いが、キックを必殺技にしているせいか、こちらはかなり信頼できる設定になっている。ここまでわかれば、後は確かにセンスの問題だ。相手の動きをある程度読み、クリティカルにならないように相手の攻撃をかわし、防御する。そして隙については細かく相手にダメージを与えて体力、つまりゲームで言うHPを削っていく。

「さてと、仕上げに行くぜ。こいつはカッコいいぞ」

メテオはいつものようにバックルを回転させ、「FREEZ」を起動させると跳躍し、アイスブレイカーを発動させ、相手を粉碎した。現実世界に比べて、大げさなほどのエフェクトが設けられ、フィールド全体が凍りついている。

「今のかっけええええ！」

「センスいいな」

「チートだろ、この技は」

「テレビでやっている奴より、仮面ライダーしてるんじゃない」

様々なコメントが辺りに現われ、この戦いを見ている者たちの感

想が手に取るように分かる。確かに、これなら悪い気分じゃない。
「まあ、本当に仮面ライダーを名乗ってるんだから、これぐらいの反響は当然だろ」

かなり気分を高揚させながら、メテオは辺りを見回していた。様々な企業も参入しているセカンドライフルしく、スポーツ会場の様な広告看板がかなり多い。その中に、地味なデザインの広告があり、「S・B・」というロゴだけが記されている。

「何だ、あの広告。似たような企業は見たことあるが、デザインが違うし。地味な分、気になるな」

そんなことを思っている内に、メテオはフィールドから受け付けのフロアまで飛ばされた。なるほど、こういうことの繰り返しを重ねて、勝利していけばいいのかという段取りを理解した不破にヘンリーから連絡が入る。

「コツはつかめたね。次の対戦は明日の同じ時間帯になる。一旦現実の世界に戻ろう。一気に戻るよ」

「わかった」

そう返事をした瞬間、不破の周囲が真っ白になり、電子化した情報が光となって飛び交うビジョンになり、しばらくすると真っ暗なところになっていた。それが自分の瞼だとわかった不破は目を開けてみた。やはり、現実世界の光は少し違い、目に刺激を与える。体に重力がかかる分、自分の重みも改めて意識することになる。

「不破、どうだった、向こうでの活動は」

「思ったより違和感を感じなかったけど、能力を削られるのは結構きついな。全然気が抜けないから、その点では、結局いつもと変わらないな」

「まあ、お前の様子を見ながら、こつちも調査は続けている。お前、妙な広告看板を見たようだな」

「ああ、あのSBだろ。似たような企業は思い浮かぶが、デザインもロゴも違うし、妙に殺風景だった」

「どうも、俺もあれはひっかるんだが、今いち鮮明なイメージが頭で出来上がらない」

滝も不破と同様な違和感を感じているようだった。まるで喉まで出かかるが言葉に表せない感覚、そしてどこか記憶の片隅にある様な既視感。やはり頭からどうしても離れない頭を悩ませていると、斎藤がはつとした様な表情を浮かべた。

「部長、それは二月作戦の中にあつたものでは」

「何、あの事件の」

「何だよ、その二月作戦ってうのは」

不破は、まるで聞いたことのない事件の名前にきょとんとしていた。零部のファイルは、暇つぶしに色々見ていたが、まだ自分の見てない事件ファイルにあるのだろ。不破は、その詳細を知りたくなり、斎藤に事件のあらましを訊いてみた。

「何、その二月作戦って言うのは」

「不破君は、朝の子供向け番組の時間帯は知っているわね」

「ああ。実は毎週見ている」

「なら、話が速いわ。二月と言うのは、その月に番組改編があるので、それに合わせて子供向けの玩具の発売や、その宣伝に力が入る時期なの。実は、その時期に合わせて、玩具の中に色々仕掛けをして世間に危険なものをバラもこうとする計画を零部で察知した事件があつた。それが二月作戦」

「危険なものって、爆弾とか」

「そこまで直接的な被害を出すと、零部だけじゃなくて一般の捜査機関の嗅ぎつける。だから、見えない振興を目的にしていた。盗聴や盗撮と言ったあり触れた犯罪から、子供の脳に影響を与える信号、あるいは体のごく一部に働き掛け、肉体的な変化を観察する、つまり生体実験のための極小機械を紛れ込ませたものまで幅広いものだった。でも、零部がその計画を察知し、その組織の関わる施設に介入して、彼らの計画をいざ際に阻止できたけど、組織の母体は逃げ切った。このままだと、同様の作戦を決行される可能性も高く、対策に迫られた零部は、いつもの手段でメディアを使った組織への警告を行った」

「あの虚構の中に現実を封じ込めるって言うやつか」

「そう。彼らは日常の生活の中に、ポピュラーなツールに紛れて侵入しようとした。そこで、そういう日常的なものを武器にしてしまうヒーロー像を作った。そして、その敵の性格付けとして、企業と言う表の顔を持つ組織に設定し、それをテレビ番組製作に関わる人間に目につくようにネタをちりばめ、あるいは無意識の内に心に植え付けるようにして零部の考えに少しだけ誘導した結果、彼らはあるヒーロー番組を作った。そのヒーローは、携帯電話、懐中電灯、カメラ、双眼鏡など、日常に溢れているものを武器にする。つまり、二月作戦を起こした組織に警告を送ったのよ。こっちはすべて計画

を把握しているから、同じ手口の犯行は無理だ、諦めろとね」

「おいおい、そのヒーローってまさか……」

「色々勉強しているから知っているわよね。そう、仮面ライダーフアイズよ」

いよいよ現実と虚構がごっちゃになってきた。不破はそう思い、この世界はどこまでが作りもので、どこから真実なのか確信が持てなくなるのを感じた。

仮想世界の戦い？

作りものであった仮面ライダーファイズが、実際は零部が仕掛けた情報介入の産物で、実際の組織が関わっていた。そうなってくると、あのコロシアムで見た広告看板のSとBの文字はおぼろげながらわかってくる。

「あの看板は、スマートブレインの意味か。洒落のつもりか」

「そんな粋な奴ならいいがな。恐らく零部が尻尾をつかんだ事を察知し、お前を送り込んだのを確認したんだろ。バックにいるのは、俺達が潰した組織なのは間違いない。なぜなら、俺達が関わったファイズの世界観の企業名を匂わせてきているのは、今度はこちらが零部の行動を察知しているというサインだろう」

「いたずらと言う線は」

「今のところ、それも否定しきれない。だが、お前が勝つ度に向こうも無視できないはずだ。何か、介入してくるだろう」

「俺は生餌か。まあ、いいさ。奴らが直接介入してきたらどうする」

「それを狙って、奴らの本部を探し当てる。簡単ではないだろうが、そうでもしないと実体はつかめない。お前の方に刺客を送ってくるだろうな。ウイルスやワクチンとして、それに対応する相手が現われるはずだ」

「場所が違っただけで、俺の役目はいつもと変わらないな。ま、その方が慣れがあるから気楽と言えば気楽だ」

自分のやるのはいつも体を張った仕事だ。意識だけとはいえ、仮想空間ではいつもと変わらず体を使っているの、自分のアバターさえものにすればどうってことはない。事件の全貌を飲み込み始め、気合が入っている不破であったが、技術畑の吉村が警告を与える。

「不破君。普通の相手に負けた場合は、そこでゲームから弾き出されるだけで済むが、もし向こうが本気になって君を潰しにかかり始めたら、敗北は君の死を意味する」

「敗北は、死……」

「仮想世界だからと言って甘く見ないでくれ。私達は君の意識、いわば魂を送り込んでいるんだ。ただの3Dとは違うんだ。向こうで君が刺客に敗北したら、削除される可能性が高い。普通の状態ならヘンリーがバックアップしているから安全だが、それ以降のステージとなるとセキュリティが保障できない。その段階で敗北、削除されると言うことは、君の意識の抹消、つまり死を意味する。魂のない肉体は死んでいるに等しいからだ。もちろん君の体は特殊だから、肉体は生き続けるが、君は二度と肉体には戻れなくなる。肝に銘じてくれ」

「わかった。覚えとくよ」

こんな命懸けのネットゲームをさせられるとは。幼い頃に達観したとはいえ、現実になんという事態に向きあうため息が出る。

「まったく、人生はままならないな」

次の日も、仮想世界のコロシムでの戦いが続いた。すでに自分がマークされていると思うと、緊張感が次第に強まっていくが、勝ち続けないと敵の実体は見えてこない。これ以上、敵が自分の存在を静観できないところまで勝ち進むしかない。

「メテオ、いい感じだね。このコロシムはポイント制。一勝ごとにポイントが換算され、短時間で敵を倒せば、ボーナスが得られる。メテオは今の所、30秒以内に敵を倒しているから、かなりボーナスを稼いでいる。後三回、15秒以内に秒殺すれば決勝トーナメントを確実にできるね」

「秒殺か。プロレスラーを目指していた俺にとっては、甘い響きだね。しかし、15秒以内は結構きついな。勝つ度にランキング上位に当たるわけだし、それをさらに時間短縮で倒すんだろ。技は一個しかないのに」

「決勝トーナメントに進めば、武装を追加できるから、サンダースチームが使えるよ。僕も追加オプションに使えなくはないけど、目立つからね」

「言えてる。仮面ライダーに似ているアバターを使っているだけで、変に注目されているんだ。バイクまで使ったらなあ」

「ま、敵にはマークされているからね。僕は裏技的なものにしておかないと、いざという時に打つ手がなくなるよ」

ヘンリーの言うとおりである。技を一つ追加すれば、自分の残る手はヘンリーだけだ。敵がいつ本腰を入れてくるかわからないし、自分を最後に守るのは、仮想世界ではヘンリーだけである。いけるところまでいくしかない、不破は覚悟した。

その後、メテオとして、ヘンリーの要求通り、15秒以内の勝利を辛くも納めることができたが、どちらも残り3秒を切る接戦になつてしまった。やはり、背帝された目標はきついものであったが、何とか決勝進出に王手をかけることができた。初出場で、圧倒的な強さを誇るメテオの注目度はうなぎ上りであった。

『滅茶苦茶強いじゃん』

『デザインも慣れて来るとカッコ良くなるのが、ヒーローらしいな』

『必殺技の発想が神』

『これ決めれば決勝進出、パネエな』

『こんなキャラデザインや設定作る奴って、どんだけ暇なんだ』

最後のコメントにカチンと来たメテオであったが、世間的に見れば定職につかない、いい歳した男だから反論はできない。もっともかなり危険な臨時職員ではあるのだが。

「まあ、俺でもこんなキャラがゲームに出てきたら、作った奴の顔を想像するよな。さて、さっさと決勝トーナメント進出を決めて、休ませてもらうか」

先にフィールドに転送されたメテオの前に後から転送されたキャラクターは、全身を赤と青のカラーで二分割した、強い印象のロボット系キャラクターだった。

「何だよ、ヒーローデザインは俺だけじゃねえじゃん。グラフィックもきれいだし。零部、頼むよ。素人にクオリティが負けてるぜ」

愚痴を言いながら、メテオは試合開始を待った。そして、ゴーサインが出た。メテオは一気に肉薄するが、相手も同時だった。ほぼ同じスペックらしく、さすがにメテオは焦った。さすがにランキングを上げてきているユーザーだ。技のスピード、コンボなどのレベルが違う。さらに、外からではなく内部から自分で戦うメテオにとっては、怪人を相手にするのと同じだけの緊張感を強いられる。

「くそ、メタル系でこのスピードは反則だぞ。ただでさえ防御力が

高いのによ」

相手のレベルに圧倒されかかるメテオだったが、ある事に気がついた。あくまで、仮想世界のキャラクターは、そこで設定される上限値を超える行動は取れないはず。メタル系の特性である防御力を下げず、且つスピードを上げる設定をするとどうなるか……。

メテオは、とっさに相手と距離をとると、いきなりアイスブレイカーを発動させた。相手は反応が遅れたものの必殺技を発動させ、腕を交差させてスパークを起こし、メテオに向かって突撃していく。互いの技がぶつかり合い閃光が起こるが、次第にメテオの方が押し始め、クリティカルヒットで相手を撃破した。

与えられた世界の法則と上限は超えられない。相手はスピードを上げた分だけ、攻撃力と反応速度を下げてしてしまった。仮面ライダーとしての能力を仮想世界に合わせながらも、バランスは普段と変わらない設定のメテオとの差だった。経過時間は、12・56。ノルマは達成した。

フィールドから転送された不破は、ふっと一息をついた。これで能力を一つ解放できる分、気楽になるが、まわりもそれは同じことだ。気が抜けない戦いが始まる。

「ヘンリー、これで決勝に進むことができた。決勝は何かルールが変わるのか」

「オプションを付加できること、能力の上限を上げられること、後はトーナメントの中に、主催者側からの強力キャラが入ってくることだね」

「主催者側からか。いよいよ刺客が出てきそうだな。滝さん達にバツクアップと監視を強化するように言っておいてくれ」

「了解、一度現実に戻るかい」

「いや、戻ると体の感覚が変わってしまう。このままの状態をキープしたい」

「わかった。僕も付き合うよ。僕は君の命綱だからね」

「サンキュー」

不破は、休息をとりながら決勝トーナメントに備えた。主催者側もそうだが、他の参加者もなかなかのつわものだろう。直接意識が仮想空間にいる不破にしてみれば、いつもの命懸けと変わらず、とてもゲームという実感が浮かばない。精神を集中させながら時間を潰し、いよいよ決勝トーナメントが始まった。

不破はいきなり第一試合に組み込まれた。その順番すら作為を感じる程の究極のアウエーでの対決である。意識が転送され、メテオとしてフィールドに立つ。そして、反対側に対戦相手が現われる。「絶対、俺を潰しに来てるだろ」

敵は、モンスター型だが、サイズがどう考えても規格外で、予選とははつきり違う。その体躯と長い鼻と牙からマンモス型と言つのがわかるが、ここまであからさまに潰しに来られると、どんな能力を持っているのか恐ろしくなる。

「露骨だねえ。みている人は面白おかしく見ているんだろうな。つたく、こっちの気も知らないで」

「そりゃ知るわけないよ。ほら、愚痴言ってるうちに試合始まったよ」

試合開始と共にマンモス型の怪物が突進をかけてきた。素早さも反則なほど俊敏だ。決勝トーナメント様に、メテオの能力の設定も

上限が上がっているが、向こうにデータが筒抜けである以上、どうしたって相手が有利になる。こうなると、メテオにとっては数値化できない能力、勘で相手と対峙するしかない。いくら、怪人用のサンプルとはいっても、これはプログラムだ。与えられた空間の上限値は超えられないし、意思も存在しない。ある程度の攻撃がヒットするのは仕方ないものの、機械的であるが故のパターンが攻撃に現われてきた。そのパターンの隙を突き、まず相手の長い鼻をアイスブレーカーで粉碎する。長いリーチを奪い取れば、そのでかい図体が仇になる。的がでかい分、あらゆる所への攻撃がダメージになる。実体がない分、オーバーロードの危険がないため、必殺技を連続発動できる。相手の腹の下にもぐりこみ、腹部に向かってサンダーストームを討ちこみ、愚痴をこぼした割にあっさりとトーナメント初戦を制することができた。

「案ずるが産むが安し、と言うことだな」

さらりと、今の心境をことわざで表すほどの余裕がある。とは言っても、勝ち上がるほど向こうは刺客を用意してくる。ただ、気にかかるのは、すぐに抹消せず、あくまでゲームに参加させ続ける点である。セカンドライフ内のこのコロシアムに参加した時点で、裏組織に仮面ライダーメテオが参加したことはわかったはずだ。だから、零部にすぐわかるようなサインとしての看板を出してきたはずだからだ。なのに、ここまで泳がせておく理由が何なのか。腹の探り合いが激しくなってきたのを不破は感じ始めた。

仮想世界の戦い？

メテオは勝ち進むほど、露骨な潰しが仕掛けられているのは明白だった。次の試合に当たる相手は、必ず主催者側の用意したキャラクターになる上、能力の設定も異様に高い。中には、仮面ライダーとしか思えないキャラが刺客として送り込まれてくる。

今戦っている相手も、仮面ライダー型のキャラクターである。白いボディーを持ち、トンファアを武器に飛行能力まで有している面倒な相手だった。

「あれは、確かサイガだったろ。露骨に再現しやがって。もう少しオリジナリティが欲しいね」

「著作権に引つ掛かるかもしれないけど、アレンジはしてあるし、あれでいいんじゃないの、メテオ」

「ヘンリー、ああいうのををパッチモンって言うんだよ。覚えとけ」

ヘンリーと軽口を叩きながら、メテオは相手と戦い続ける。飛行能力を有している上、手持ちの武器を持っていると言うのは厄介だ。高速で飛びまわりながら、メテオの死角に入り込み、強襲を繰り返す。しかし、メテオも視覚に入り込まれると地面に伏せ、相手の攻撃を紙一重でかわす。そのため、ダメージは殆ど負っていないが、このままだと時間切れでこちらの負けになる。何か、逆転の一手が必要になってくる。相手は、時間切れによる勝利は狙っておらず、メテオの抹消並びに抹殺を狙っているようで、フィニッシュを仕掛けてきたか、エネルギーをチャージし始めた手持ちのトンファアが輝き始める。

「やべえな。だが、相手が飛びまわっている以上、こっちの攻撃が当たらねえし……。何か飛び道具がいるんだが」

メテオには、射撃系の武器は装備されていない。ヘンリーに内蔵される剣を使えば、炎を相手にぶつけることはできるが、今はそれが使えない。しかし、空中からヒットアンドウエイを仕掛ける手に打撃を仕掛けてもかわされるのは目に見えている。思案を巡らせている内に相手が間合いに入り込んでくる。何かないか、メテオの脳は激しく答えを探し求める。そして、解答を弾きだした。「THUNDER」を起動し、両腕に電流を貯める。そして、いつものように打撃でそれを放電するのではなく、空中に放電を開始する。あらゆる方向に電流が流れ、相手にも高圧の電流が流れ、動きを止める事に成功する。動きさえ止めれば、能力は関係ない。「FREEZE」を起動し、アイスブレイカーで動けない相手を仕留めることができた。

「頭は使いようだね。冴えてるよ、今の俺は」

とうとう準決勝もクリアした不破は、ホツとする事が出来た。相手の強化も乗り越え、いよいよ決勝である。問題は、相手がどんな対応をしてくるか。優勝して、お金をもらってハイ、サヨナラとはならないはず。自分や零部に対する報復は必ずある。問題は、仮想空間でどんな措置を仕掛けてくるか想像がつかないところだ。

「ヘンリー、向こうの出方はお前ならどう予測する」

「メテオに対しては消去だろうね。吉村さんから話は聞いていると思うけど、この空間で抹消されれば、メテオの意識を抹消する事になる。つまり、それに応じて肉体の死が待っている。問題は、零部に対してだよね。メテオを消すだけで終わるとは思えないんだ」

「その根拠は」

「零部がまず秘密を保った組織であること。この秘密を切り崩され

ると、組織は一気に無力化する。もう一つは、以前零部が仮面ライダーファイズを創造することで、相手方に強力な牽制をして計画を潰した事がある。その報復に出る可能性は十分にある。メテオを登録から弾かずにこのゲームに参加させているのは、それが狙いだと思う」

「つまり、俺は零部の餌であると同時に、敵の餌でもあると言う事か。いやだね、人権意識の欠片もない考えだ」

「確かに、基本的人権に抵触しそうだね。機械の僕でも納得する意見だ」

「お前は気楽でいいよな……」

「まあまあ。冗談は抜きにして、決勝は何か仕掛けてくる可能性は高い。僕とのリンクは絶対に切らないで。何かあっても僕と繋がってさえいれば、メテオの意識を引き上げることは可能だから」

「そこんところは頼むぜ、相棒」

不破は意識を集中しながら、準決勝の試合を見つめている。一般ユーザーと主催者側の戦いだ。主催者が勝つて来るとやらせに思うのだが、ほどよく負けるのと、そのキャラクターがユーザーの目標となり、このゲーム全体のレベルをあげる役目を担っている。実によく出来たシステムだ。日本で失敗したと評価されるセカンドライフの世界で異様な盛り上がりを見せ、その試合だけでも見ようとする人間がいる人気を誇るだけのことはある。

案の定、勝ったのは主催者側のキャラクターだ。やらせだなとわかるのは不破だけである。これで、ルールにのっとり観衆の目の前で、自分を仮想空間で処刑し、零部に対する報復に出る事が出来る。

「ヘンリー、行って来るぞ。命綱の役目、頼む」

「了解」

覚悟を決めたところで意識がフィールドに転送される。相手はモンスター型。それほど際立って強いと思えないのが妙だった。これが刺客なのか……。不審に感じながらも、試合開始となり相手に向かって走り出した瞬間、まわりの風景が止まり、すぐに暗転した。足場がなくなり、暗闇の中にどこまでも体がいや、自分の意識が落ちていくのをメテオは実感した。

零部では、仮想世界でもメテオの戦いを見守っていた。決勝に進んだが、今のところ何の異常もない。相手が本格的に仕掛けてこない以上、調査のしようがない。空振りに終わりそうな状況に、斎藤は肩を落とした。

「調査は失敗ですね。今回はかなりいい手ごたえを得たと思ったのですが。でも悔しいわ、明らかに裏には何か潜んでいるのはわかってるのに。向こうも、私たちが潜入しているのをわかっていて、露骨なサインまで出している」

「いつも作戦が成功するわけではない。組織がまだ生きている、それがわかった事を収穫としよう」

プラス思考で結果を受け取るしかない滝であったが、彼の言う通り、作戦はいつも成功するわけではない。こういった空振りに終わることもあるが、そこかを得たり学習することも大切なのだ。溜息をついていた滝に、吉村が顔色を変えて叫んだ。

「部長、まずいです。メテオの信号を通して、ここに逆探がかかれています」

「何、どういうことだ」

「メテオの意識はあそこにある彼の体と繋がり、そして零部のコンピューターを通して、仮想世界に意識を飛ばしています。やつら、その信号を完全に把握し、そこを辿って零部の所在地やデータに侵入する気です」

「ブロックできないか」

「メテオがダイブしている限り無理です。命綱を手繰ってこちらに向かって真っすぐ辿るだけですから」

「仕方ない、メテオを引き上げさせる。強制的にだ」

「駄目です、部長」

その声はヘンリーの物だった。機械であるヘンリーは自在に仮想世界と現実世界で通信が可能だ。しかし、何故離脱に反対するのか、滝にはわからなかった。

「おい、ヘンリー。こっちはえらい事態なんだ。逆探を食らっている以上、メテオはそこから切り離す必要がある」

「違うんです、部長。今、試合に出ているのメテオじゃないんです。メテオのデータや信号を完全にコピーしたもので、オリジナルじゃないんです」

「どういうことだ、ヘンリー」

「あれは模造品。オリジナルのメテオの意識は、あのアバターから

切り離され別の場所に漂流しているんです。リンクを切ったら、その時点でメテオは死亡だよ」

「何だっつ」

何と言うことだ。これだけの設備と監視の許にありながら、メテオの意識を奪われ、模造品とすり替えられ、拳句の果てにこちらの在り処まで探られることになるうとは。事態は、一気にまずい事態に転がり始めていた。

「吉村、ここを探知されるのはどれくらいだ」

「トラップやファイアーウォールがありますが、10分が限界でしょう。それ以上は確証がありません」

「そうか。万が一ここを突破されたら、この所在地、構成員とその家族、装備品、政界との人脈、そして、あらゆる仮面ライダーや怪人のデータが流出する可能性がある。このデータをすべて破棄するか、メテオをあきらめるか、判断に迫られる……」

「部長、僕がいます。僕がメテオを引き上げるから。任せて下さい」
「行けるか、ヘンリー」

「僕はそんじゃそらのバイクとは違います。超高性能自律型マシンだよ。メテオにはちゃんとマーキングして、今もぎりぎりつながっています。絹糸ほどの命綱だけど、それだけあれば十分です」

滝は悩んだ。リスクの大きさに、いかにキャリアの長い滝と言えど決断力が鈍っていた。しかし、彼は犠牲を当然の物として動く、情けの欠片もない男ではなかった。可能性があるなら、そこに賭け

る勇気も持ち合わせている。

「ヘンリー、10分だ。それが限界だ。もし、あいつを引き上げられなかったら、お前をスクラップにする」

「そんなことはさせないよ。了解、必ず連れて帰るよ」

滝達はヘンリーにすべてを委ねるしかない。非常な決断をする前に彼らが戻る事を祈りながら、本部の情報を少しでも守る事に専念するしかできることはなかった。

ヘンリーの反応もロストし、メテオは何もない、上下左右も感じない不思議な空間に漂っていた。どうやら、敵の罠の中に入り込んだようだ。だが、敵が仕掛けてくるのは織り込み済みだ。むしろ、相手が手を出してきたのならそれはそれで好都合とも考えられる。メテオは気持ちを保ち、声をあげた。

「ようやく顔を見せ始めたな。いいぜ、シンプルに行こう。そっちの方が性に合ってるんでな。やるかやられるか、それでいいじゃないか」

相手側は何の反応を見せてこない。メテオとしては、相手を挑発し自分と同じ土俵に持ち込みたかった。どう考えても、自分が電子戦に持ち込まれると不利になるのはわかりきっている事だからだ。しかし、反応がないのを感じ、次第に状況がヤバイものになっていくのをひしひしと感じ始めた。

「我々に電子戦を挑まないのは正解だな。仮面ライダーメテオ」

どこからか聞こえる声がメテオの意識に入り込んでくる。声なのか、意思なのかはわからない。機械的で抑揚がなく、声色も中性的で、人の顔を感じさせない。まさに、姿なき敵を感じ、緊張感を走

らせながら、それを悟られないようにやり取りを始める。

「俺を仮面ライダーと最初から認識するとはな。只者じゃないな」

「お前如きと比べられても困る。メテオ、お前は我々の意思で誕生したと言ってもいいのだ」

「何っ、まさか、お前ら、ショッカーの残党……」

思いもかけないところで自分のルーツにぶつかり、メテオは驚きを隠せなかった。自分に付きまとう5年間の空白。そこで何があったのか、そしてどんな意思が働いたのか、それはいつも頭の中でしこりになっていた。その根源に関わる存在をただで逃がすわけにはいかない。必死に話に食らいつく。

「俺を改造したのはショッカーだ。てめえらの意思で俺がメテオになったのなら、それはショッカーといことになる」

「ショッカーだと。そんなあぶくのような存在にまで衰えた組織と一緒にするな。だが、彼らが所持する技術が必要だったのは確かだ。そこで、我々は資材を提供した。そして、見返りとして完成品であるお前の受領を望んだのだが、その前に強奪されてしまった」

「ふっ、保護者がお前らじゃなく滝さんでよかったぜ。じゃあ、この怪人の査定の場としてのコロシウムは、俺をおびき寄せる罠だったわけか」

「そういうわけではない。愚かな人間でも、ある特定分野に関心や能力を集中すると、驚くべき成果を発見する。平和な世の中に暮らしていながら、頭の中では凶暴で戦闘的、破壊的なものを考え出す。そのアイデアを頂戴しテストしていたのは事実だ。まあ、お前達の介入でここが潮時だがな」

「まさかネットゲームを利用するとはな。考えたもんだぜ」

「お前に褒められるほど落ちぶれた存在ではない。嗅ぎつけられた以上お前は消去、お前のバックに居る組織も洗いざらい調べる。だが、忌々しい事にお前のプロテクトは頑丈で、簡単に消去できない。そこで、特製のワクチンを用意した」

「ワクチンだと。人をウイルス扱いしやがって」

「この世界に居る以上、お前はウイルスの存在だ。我々が作り上げた世界に紛れ込んだ異物。それを抹消するのがこのワクチンだ。お前のやり方にも合っているだろう」

メテオの前に赤いグリッド線が現われ、それが次第に人型の形を作っていく。そして大きな複眼にプロテクターと言う細かいディテールが姿を現し始めた。その姿を見たメテオは、馬鹿にされた様な、徴発されたような気分になり、心の中で歯ぎしりした。

「てめえら、皮肉のつもりか」

「いいや、贈り物だよ。仮面ライダーを名乗るのなら、その名に誇りがあるのだろう。その誇りを尊重しようと言うのだよ。それが我々の用意した特別製のワクチン、『M・R・555』だ。仮面ライダーと戦って消えていくなら本望だろ」

「その考えが嫌らしいんだよ。お前らを虚構の存在に押しとどめるために作ったファイズを、貸そうと言う虚構の世界に入り込んだ俺に向けてくるのは、完全に皮肉だろうが」

「フッフ、虚構の世界に押しとどめるか。なかなか効果的な作戦だ。

おかげで我々は、現実世界で認識されない亡霊に甘んじている。では、その虚構の一つであるファイズを君達に差し向けよう。逆探知も進んでいる。もし、それがうまくいかなくとも、彼らが情報保持にはしえ、お前はリンクを断ち切られて死ぬ。互いに勝利も敗北もない」

「まあいい。殴り合いで白黒つける余地があるなら、俺にはその方が合っている」

「威勢だけは認めてやろう。死の間際の遊戯を楽しむがいい」

謎の声がやむと同時に、仮想世界で再現されたファイズが襲いかかってくる。違いは、現実世界の物を仮想世界に合わせて擬似的に再現したメテオと、元々虚構のファイズをそのまま仮想世界にトレスしたファイズとは、根本から違った。上下左右もない、不思議な空間で二人の戦いが始まる。

安全上のために擬似的に能力を再現されているメテオは、どうしても能力の上限に悩まされる。しかし、ファイズの能力は元々が作り物。再現するのに限界はなく、彼らが設定した世界なら、TV上と変わらない行動ができる。カウンター狙いの攻撃を仕掛け、最小の動きでメテオの動きを止めダメージを与えいく。

現実世界ならもつと速く動け、効果的な攻撃や防御ができるはずなのに、身体能力が反映されていない体は、ファイズの攻撃を受ける度に削除が始まり、死が近づいていく。

「攻撃を受けるほど、命がヤバくなる仕組みは変わらないとはな。これじゃ、出来レースだ。死ぬならせめて、全力で戦って死にてえな」

絶望的な状況で戦うメテオに、本来はヒーローであるはずのファイズは、体に走る真っ赤なグリッド線・フォトンブラッドを血の様

に全身に輝かせながら、無機質に迫ってくる。メテオにとって、今のファイズは死神でしかありえない。躊躇なく激しい攻撃を加え、クリティカルヒットを狙い、ファイズショットを装着する。

「EXCEED CHARGE」

メテオにとつては、死刑宣告とも言える音声の流れ、ファイズショットにエネルギーが充填し、重いパンチがメテオの胸元に突き刺さった。避けられると確信できる速度だったが、今のメテオのデータではそれが叶わない。まともにパンチを食らったメテオの体は、ファイズのワクチンとしての性質もあり、体が次第に欠けていく。次第に死んでいく感触を否応なく会わされるのは、気持ちが悪く、じわじわと恐怖を芽生えさせていくことになる。そんなメテオを、ファイズは無機質な仮面で見つめている。相手は、プログラム。感情などもちえない故に、攻撃には迷いも手加減もない。

機械的な動作でファイズは専用バイクのオートバジンを召還し、ファイズエッジを起動する。どこまでも、虚構の存在であるファイズを再現し、それによって報復措置を取ろうとする敵の陰湿さが感じられる。

「絶体絶命だな。こんなの、絶対に頭脳労働じゃねえ。命懸けのいつもの肉体労働と変わらん。これがほんとのゲームオーバーだな」

救援も期待できない状況で、とどめを刺されそうになっている。諦めて当然の状況に、メテオは為す術がなかった。やられるなら、せめて相手に立ち向かって死にたいと考え、必死で立ちあがりファイズに立ち向かおうとしたその瞬間、神の声が耳に飛び込んだ。

「メテオ、お待たせ。ごめん、探すのに手間取って」

「ヘンリーかつ」

地獄に仏とはこのことだった。絶望的な状況の中で、味方がやつ

てくるのがこれほどまで心強いとは思わなかった。今のヘンリーは、一騎当千の援軍に思えて仕方がない。

「さすがにやばかったぜ。速く離脱させてくれ」

「それは無理だよ。相手は完全にメテオを標的にしている。離脱すると、あいつは零部に侵入する。ここで片づけないと」

「無茶苦茶言うな。今の俺にどうやってあいつを倒せって言っんだ」

「任せておいて。今、メテオのデータに、本来のスペックのデータをインストールする。プロテクトは万全だから、短期決戦なら問題ない。この空間なら、能力を解放できる」

「もういい、あの野郎は倒すから、早くいつも通りにしてくれ」

「了解。もうすぐ僕も合流する」

通信が終わると、すぐにデータがインストールされてきた。外見は現実世界の物と同様になり、体いスイッチが入ったかのように力が流れ込んできた。これならいけると、メテオは確信した。

メテオの変化にファイズも対応し、さらに能力を解放し、ファイズエッジで切りつけてくる。しかし、今度はメテオも対処できる。紙一重の間合いで斬撃をかわし、相手にジャブを加えていく。これだけ動ければ、如何に仮面ライダーの再現とは言え、互角に戦える。なぜなら、自分も仮面ライダーだから。水面切りで相手の足を払って倒れ込ませると、追い討ちをかけて膝を落とす。ようやくダメージを与える事ができ、さらに攻撃を加えようとしたところ、人型に変形したオートバジンが銃撃を浴びてきた。メテオは、軽やかな身のこなしでこれをかわす。そのメテオを追って銃撃を繰り返すオートバジンだったが、予想外の方からの邪魔が入った。ヘンリー

もまたこの空間に突入してきたのだ。自身の能力を解放し、オートバジンを牽制する。

「さすが俺の相棒。いいタイミングだ」

「当たり前だよ。ほんとに、僕がいないと駄目だなあ」

「今日はその言葉を認めるよ。例のやつ、貸して」

メテオの注文通り、ヘンリーは剣を射出した。その剣を受け取り、ファイズエッジを持つファイズと剣を切り結ぶ。一進一退の攻撃が続くが、勘という数値化できない物を持つメテオが、相手の読めない行動をとったことで、武器をはたき落とす事が出来た。とどめに向かってさらに攻撃を加えようとしたが、ファイズは距離をとると腕の機器を操作し、体を変形させていく。

「COMPLETE」

メテオは焦った。ファイズのその状態を知っていたからだ。ファイズのリロード状態であるアクセルフォームの姿の意味をメテオは理解しれている。あれを起動されると、こちらが視認できないほどの拘束状態に入るため、相手を捉えることは不可能になる。高エネルギーの出力のため、あらゆる攻撃を連発できる。

「やばい、やばすぎる」

メテオは、「EXPLOSION」を起動し、アクセルフォーム起動の前に仕留めようとするが、一步遅かった。

「START UP」

ファイズが高速モードに入り、メテオの視界から消える。すぐさま、視覚と聴力の感度を最高レベルに上げるが、どうしても完全に捕捉できず、ファイズの攻撃を避ける事ができない。エネルギー出

力がMAXのため一撃が非常に重く、体のデータが切り崩される。嵐のような攻撃が浴びせられ、フラフラになると、視界にポイント表示がいくつも浮かび上がる。ファイズの必殺技であるクリムゾンスマッシュの合図だ。これだけの数を連発で食らうと、確実に即死だ。視界に広がるポイント見つめながら、メテオは必死で対処を考え続けた。一瞬の間に、様々な考えが頭に浮かび上がり、そして直感的に一つの答えを弾きだした。

コンマ1秒に満たない時間の中で動きだった。メテオは地面に仰向けに倒れ込んだ。ファイズもそのタイミングで動き始めたが、メテオが倒れ込んだことで命中個所にずれが生じる。プログラムであるがゆえに、この瞬間的なメテオの動きに対応する時間にロスが生まれた。そこを狙って、メテオのフレイムスプラッシュが発動する。ファイズは炎に呑みこまれ、動きが止まってしまう。アクセルフォームによる防御力の低下まで忠実に再現され過ぎたようだ。止まった相手なら後は簡単な話だ。炎を纏った剣で上段から切り裂くと、プログラムとしてのファイズとオートバジンが消滅した。そして、間髪いれずに空間の崩壊が始まる。

「メテオ、乗って。この空間ごとメテオを意識を仮想空間に残して、抹消する気だ」

「わかった。ヘンリー頼むぜ。最高速度で離脱だ」

メテオはヘンリーに跨り、この仮想世界からの脱出を始めた。ヘンリーは零部のコンピューターとつながっているのです、そのルートを高速道路の様に一直線で失踪する。しかし、相手もこの道を一直線に追走できるため、現実世界に一気に逃げ込まないと、自分が捕まるか、零部のコンピューターに侵入される恐れがある。

「ヘンリー、逃げ切れるか」

「大丈夫。絶対に現実世界に送り届けるから」

ヘンリーはいつになくシリアスな口調で応えてくる。自分の相棒の頼もしさが嬉しく思える。やがて、前方に光が見えてくる。現実世界へのゲートだが、入口がかなり狭くなっている。追跡をシャットダウンするためだろう。後ろから来る追跡用のバイク部隊も近づいてくるのが見える。

「ヘンリー、ブースター点火」

「わかつてるって」

彼らの息がぴたりと合い、ブースターで一気に加速し、ゲートを駆け抜けた。そして、それと同時にゲートは固く閉じられ、追跡部隊のバイクは激突すると同時に消滅した。

肉体の感覚が戻り、肉眼にまぶしい光が飛び込んできた。やはり、肉体に戻った感覚になれていない。不破は、軽い頭痛を覚えながら体を起こし、滝達に状況を尋ねた。

「追跡者はどうなった」

「何とかシャットダウンできた。今は完全に外部との接続を切り、痕跡を消している。次に接続するときは、以前とは違う顔が零部の物になるはずだ」

「何とか逃げ切れたか。けど、収穫はゼロか。命懸けの仕事した割には、大したことはわからなかった。ただ、俺が接触した奴らは、ショッカーの上位の位置に存在するらしい」

「やはり、かなりの強さを持つ組織が動いていたか。それとな、不破。お前が逃げ込んだ際に、一つ妙なファイルを紛れ込まされたよ

うだ」

「ウイルスとか」

「いや、奴らの宣戦布告だろうな。見ろ、これを」

不破は、プリントアウトされた添付ファイルを受け取った。そこに書かれていたのは、一枚の絵だった。一輪の真紅の薔薇の画がそこに描かれている。

「どういう意味だ」

「思い当たる節があるが、断定はできん。それまで口にしない方がいい代物だ」

滝は、眉間にしわを寄せ、いつになく険しく深刻な顔をしていた。その顔が不破に対して、容易ならざる敵が動きだした事を否応なく伝えていた。

邯鄲

仮想世界での活動が終わった後も、不破は自分の体がふわふわしているような感覚が抜けず、少し気分が悪かった。時差ボケならぬ仮想ボケかなと思ってているが、体は重いのに足が地面に設置していない嫌な感覚が抜けず、数日経ってもその状態が続いている。寝ていても症状は緩和されず、どうしたらいいものかと吉村の診断を仰いでも、

「こんな症状、あまり事例がないからね。強いて言えば、ピカチュウ事件みたいなもんかな」

と、お手上げの様な発言しか出てこない。

「まあ、現実世界の環境になる為に、部屋に黙って籠るよりは、外の日差しを浴びるといいかもしれない。今日は、ちょうど天気もいいことだし」

「それって、時差ボケの改善方法だろ。まあ、一理あるかもな。近くの公園まで歩いて行つて来るよ」

そう言い、不破は偽装ホテルの玄関から出ると、徒歩で公園に向かった。日射しが以上にまぶしく感じたが、やはり外の空気は密室の部屋に比べるといいものだった。いくら、排気ガスが漂っているとはいっても、家の中にこもるよりは、こうしてお天道様の下を歩く方が健康的ではある。次第に光になれてくると、足取りも段々軽くなり、歩く速度も上がって、思った以上に公園に早く着いた。平日の昼なので、社員がよく目立つが結構人は多い。世間的に無職の不破にとってはやや居心地が悪いのだが、俺は世界のために戦っているのだと胸を張り直し、空いていたベンチにどっかと座り、そこを独占した。

周りでは、昼休みを利用して外で昼食をとったり、体を動かしたり、芝生の上でごろ寝している姿見受けられる。不破があまり感じることない日常と言うものが、そこには広がっている。

「平和だなあ。この平和に俺も一役買っているとなると、ちよつとだけ気分がいいな。非日常の暮らしに対する、ささやかなご褒美みたいなものかな」

そう思うと、不快だった気分が次第に晴れ晴れとして生き、ベンチの上に思い切って横になって寝ころんでみた。公共の場で褒められた行為ではないが、ほんの少しだけの憩いの時間のつもりだ。

空はどこまでも青く澄み渡り、雲がゆったりと流れ、辺りを流れる風を全身に感じる。この空を飛べたらと言う発想も浮かんだが、今の自分の体だとそれが可能になってしまふ可能性があり、それが少しうすら寒いものに感じられ、あわててその考えを打ち消した。「改造人間じゃ何でもありだからな。事実スカイライダー、飛んでいるし」

ただでさえ人間からかけ離れた体に、これ以上能力をつけられるのも考えものである。そんな気持ちで少しうとうとしていると、何やらへんな感覚を覚えてきた。

体が次第にベンチから浮き上がり、重さを感じなくなっていく。まるで幽体離脱の話の様な現象に、不破は少し焦った。しかし、その焦りとは裏腹に、体はどんどん上昇し、ビルの高さも超えていく。そして、不破の体は雲を突き抜け、大空を浮遊していた。先程まで思い描いていた「空を飛べたら」と言う空想が現実のものとなっているのだ。体は、頭で思い描く方向に、そして理想の速度で飛行する。鳥だって、こんな自由に飛べはしない。不安はかき消え、その浮遊感を楽しみ始めたところで、急に場面は変わってしまった。

先程まで空を飛んでいたはずなのに、気づくと体はベンチの上に横たわり、姿勢も空を飛ぶ前と変わっていない。周りでは、変わら

ずに午後の陽だまりを楽しむ人がいる。

「夢、か。まさか、俺が夢を見るなんて……」

不破は改造人間である。脳の構造も常人とは違い、ほとんど休息つまり睡眠は必要としない。眠りに近い事はあっても、それは電子頭脳の一時停止みたいなもので、睡眠とは程遠い「休止」と言う機械的な作業である。だから、夢を見るなどはあるはずがない現象であつた。しかし、今感じたのはどう考えても夢を見た感触である。

自分の体には、仮想世界で負ったダメージがあり、それが夢の様な現象を起こしているのかと不安を感じていると、誰かが近づく気配があり、何者かが不破に声をかけてきた。

「どうだい、あたいが見せた夢の感想は。空を飛ぶ夢だつたんだね。ガキみたいな夢だけど、そう言うの好きだよ、不破龍雄」

自分の名前を知っている者など、ほとんどいないはずである。しかもフルネームで呼び捨てにするなど、零部の人間でもない。こんな不敵な事をする人間を警戒しながら、不破は目を動かし確認した。

口調通り、傍に立っている人物は女だったが、その格好が奇抜であつた。派手な柄の着物を着ているが、着こなしはあちこちをがはだけていて、首筋や胸元が大胆に開いている。着物の丈も適当で膝下くらいまでしかなく、太股が見え過ぎるほど露出している。髪は、かんざしを差し一応結び上げてはいるものの、所々がほつれ、乱れた髪があちこちに見える。粹と言うよりは悪趣味なほどのけばけばしい色の番傘をさしているその姿は、時代劇で見る花魁の様な姿には似ているのだが、あまりに異様な風体で花魁崩れと言った方がいい。女は顔に笑みを浮かべると、非常に大きく口が伸び、それもまた普通とは違う何かを醸し出している。

この女は異常だ、普通の人間じゃない。見かけだけではなく、その体から発散する気が人間の者とは思えなかった。

「てめえ、誰だ」

「無粋な男だねえ。花を一輪、受け取っただろ」

「花だと」

「そう。赤ーい花を一輪、あんたに送ったはずなんだけどね」

不破は記憶を辿った。しかし、自分に届けられた花などなかったはず。何故なら、自分はもう生きていないことに世の中ではなっている。ましてや、赤い花など……。その時、不破の脳裏に一つの記憶が鮮明に蘇った。

「まさか、仮想世界で俺に添付されていた赤いバラの画像の事か」

「そうそう、思い出してくれたかい。でも、電子画像なんて粋を感じないねえ。あたいの好みじゃないんだけどさ」

いよいよ来たか、不破は緊張感を走らせた。前回の任務で、不破と零部はどうやらとてつもなく大きな組織の影を踏んでしまった、そんな思いがあった。こちらの出方をわかっていながら懷に引き寄せ、名刺代わりの様に、謎の赤いバラ音が像を送りつけてくる大胆不敵さと余裕。その使者が、白昼堂々と都内の公園に姿を現したのだ。しかも、全く姿を隠す気などさらさらない異様な姿で。

不破は、相手に隙を与えないように体をゆっくり起こし、相手とじっと睨みあった。姿をさらす度胸がありながら、相手の佇まいには一切隙がなかった。

「俺に何の用だい。あいにく、あんたは俺の好みじゃないんだけどな」

「それは残念だねえ。でも、あたいが選ばれたんだから勘弁してお

くれ。言伝だよ」

「一体、どんなメッセージかな。恋文かい。それともヘッドハンテイグかな」

「面白い男だねえ。あたい、好きだよ、そういう男。でもねえ、言伝はそんな生易しいものじゃないんだ。一線を越えたあんたに対する死の宣告さ」

「そりゃ、怖いねえ」

「舐めた態度とると、どうなっても知らないよ。少し調子に乗りすぎたのさ、あんたも、あんたのお仲間も」

「つまり、俺には死という制裁しか道はないと」

「物分かりがいいねえ、お前さん。こんな事を伝えるなら、バラなんて送らず、もっといい花があるがあるのにさ」

「葬式用の菊の花か」

「違うよ。血のように赤い彼岸花。意味は、彼岸に送ってあげる。どうだい、粋な計らいだろ」

「粋なお姉さんだ。ぞくぞくするよ」

口では軽口を叩いている不破ではあるが、得体の知れない相手を前にして悪寒が止まらなかった。対して、相手は全く余裕の笑みを崩さず、終始余裕の表情で見下している。そして、女は番傘をまわす、ソには傘の骨に色とりどりの江戸切子のカップがぶら下がっ

ていた。そして、ガラスのストローを取り出し、一つのカップに入っている液体につけると、シャボン玉のような泡を勢いよく吹き飛ばした。小さな無数の泡は辺り一面に広がり、公園とその周辺はシャボン玉に包まれた幻想的な空間に変わってしまった。

「これはねえ、一つの幻覚剤だね。ここいらにいる生身の人間には、あたいらの姿は見えない。声も聞こえない。シャボン玉のおかげで、周りからここは見えない。これで気兼ねなくお前さんはあたいに手を出せるだろ」

「変身しろと言う事が」

「粹な計らいだろ。仮面をつけた武者と花魁の喧嘩なんて、綺麗で淫靡で、艶っぽくって浮世絵になりそうな画じゃないか」

狂っている。不破にはそうしか思えなかった。しかし、こんな会話をしている間にも前を通り過ぎる人々がいるが、全くこちらに気がついていない。どうやら、幻覚剤の事は本当である。そうなる、街中での変身は問題はないだろうが、果たしてそれをわざわざ促してくる相手の強さが気になるが、どちらにしても一筋縄にいかない難敵には変わりない。

「変身……」

不破は思い切ってメテオに変身した。やはり、誰も反応しない。これだけ広範囲に幻覚剤をバラ撒けるなんて、どう考えても並みじやない相手だ。

「お前は変身しないのか」

「必要ないね。別にお前さんを今すぐ殺せと言う話もないし、ちょっと遊びたいだけさ、いい男」

「舐めんなよ」

メテオはさつさと蹴りつけなければと言う焦り、いや、恐怖があった。そこ知れない相手の能力や戦闘力、そして存在そのものが、今までの相手と異質だったからだ。理屈ではない、観念的というか言いようのない存在が……。

足を蹴り出し、相手に肉薄した瞬間、女は別のカップから引き抜いたストローを向け、シャボン玉をメテオに吹き出した。その瞬間、メテオの視界が真っ白に変わった。

不破の視界が戻ると、周りの風景は変わっていた。風を感じず、どこかの空間内、屋内にいるように思えた。彼は、何故自分がこのような空間にいるのかわからず、周りを見回そうとしたが、体が何かにがっちり固定されて動かない。一体自分の身に何が起きているのか確かめようと手足を動かしてみても、どこか自分の物の様子に思えない。違和感を感じて自分の手を見みると、不破はあつと声をあげそうになった。何故なら、自分の手が縮んでいて、まるで子供の手の様になっていたからだ。

「何だよ、これは……」

不破は声をもらしそうになったが、声を出す事ができない。状況を確認しようとしたあたりを見回すと、どうやらここは車の中にいるらしい。さらに、自分の体を固定しているのは、信じられない事にチャイルドシートだった。つまり不破の体は、メテオとしてあの花魁女と戦っていたはずなのに、今は子供の姿になっているのだ。何がだか分からずに狼狽していると、運転席と助手席の方から、話声が聞こえてくる。誰の声か今いちはずきりしない。顔も見えない。だが、男と女なのはわかるし、不思議と怪しさを感じない。耳をすますと、何とか声が聞くことができた。

「龍雄、大人しくしているわね。今日一日ずっと起きてたから、もうじき眠りそうだわ」

「元気が一番だが、寝ているとホッとするよ。知らない内に随分と重くなったもんだ」

誰だろうか。記憶にないはずなのにホッとするこの声の持ち主は。体をよじって顔を見ようとするが、固定されているため見えない。気になって仕方がないが、二人は自分の名前を知っている。それも、名前および捨てにして子供の顔でも見るように話かけてくる。まさか……。

「父さん、母さん……」

不破には両親の記憶はない。記憶にも残らないほど小さい内に両親を亡くしたためだ。そのため、親はいないものだと考える事が普通だった。しかし、今、目の前に覚えていないはずの両親がいる。驚きと共に、胸に熱いものがこみ上げてきた。そして、もっと声を聞きたい、出来る事なら顔を見たいと強く願い、必死で体を動かす。体の角度が変わり、あと少しで二人の顔が見えそうだと思った瞬間、車に衝撃が走った。車内を衝撃が貫き、鉄が裂ける音、ガラスが碎ける音、そして全身に走る痛み……。車は、対向車と正面衝突していた。不破は、やっとの思い得体の自由を取り戻すが、その目の前にあったのは、血まみれになり、流血で顔立ちがはっきり分からない両親の姿だった。

ハッと意識が戻ると、不破はメテオの体の状態でシャボン玉が漂う公園の真ん中に立っていた。意識を失う前と寸分変わらない位置、メテオの体は全く移動しておらず、複眼に移る時間を見ても、全く

時間が経過していない。

「何だ、今の夢は。父さんや母さんは。一体どういう幻覚なんだ……」

メテオは自分に起こった事態を飲み込めずにいる。夢など見るはずのない自分が、白昼夢を見たというのだろうか。自問自問しているメテオに、いつの間に移動したのか、あの女が背後から声をかけた。

「どうだった、あたいの能力の体験は。いい夢だったろ、顔も覚えていない両親との記憶を掘り起こしてもつらんだから。感想を聞きたいねえ」

「やっぱりあれは現実だったのか……」

「夢を見たことは現実、夢の内容は幻さ。幻と言うより、頭の中にある思い出を引っ張り出すのが、今使ったシャボン玉さ。あたいのシャボン玉の成分は、お前さんの改造人間としての能力を持つてしても、解毒に時間がかかり、効力から逃げられないんだよ」

「つまり、俺の記憶の中から両親との最後の記憶を引っ張り出し、揺さぶりをかけてきたというわけか。プライバシーって言葉を知らないかな」

「あたいにかかれば、私事なんて隠すことはできない。夢も意思も思うがままさ。あたいは、現と幻の垣根を軽く超えていく。それに体を傷つけることもなく、心だけを骨抜きにしていくなんで、血を流す殺し合いよりずっと美しい死に方だろ。あたいはなんて粹な女なんだろうねえ」

「人の記憶で遊ぶんじゃないぞ、この野郎が」

自分の一番大事な記憶であり、触れられたくない部分である所に手をつけられ、メテオの怒りはさらに激しく燃え、女に向かってさらに素早い動きで接近していくが、女はまた別のカップにストローをさし、シャボン玉を大量に発生させ、メテオの体はシャボン玉に包まれ、再び意識が飛ばされていった……。

体が大地に叩きつけられる。今度は一体何だと思う間もなく、髪の毛を引っ張られ引きずり起こされる。振りほどきたいが、体がやはり自分のものとは思えず、かといって体に走る原因不明の痛みは自分の者として認識するのだからたまらない。ここはどこかと見回すと、周囲には上下に三本のロープが張られ、四角いフィールドの上にいる。そして目の前には、筋骨隆々とした男が肉体を露出してタ立ちはだかっている。

「まさか、プロレスの試合か……」

かつて、不破がまだ人間だった頃に夢見て、日々トレーニングに打ち込み、実現に向かってまい進していたプロレスのリング。その上に自分は立ち、そして試合を行っている。しかし、彼はデビュー前に致命的な負傷を追い、廃業してしまった身だ。試合経験も記憶もない。何故、こんな幻覚が……。

そんな当惑もお構いなしに、相手のレスラーは自分の体に思い攻撃を打ちこんでくる。相手には、見覚えがあつた。こわもてでヒールレスラーでありながら、後輩の面倒見がよく不破に特別目をかけてくれた先輩だ。憎々しい表情を観客にふりまきながら、不破が立ち上がるの待っている。新人をいたぶる姿を出観客を沸かせ、尚且つスタミナのない新人との試合を成立させる玄人好みの人だ。不破は、立ち上がろうとするが痛みや息苦しさで思い様に動けない。そこを顔面をかきむしられ、コーナーに振られ、いいように殴られ、

蹴飛ばされる。それでも立ち上がって反撃を試みようとするのだから、不破は根っからのプロレスラーとして合格だったのだろう。半ば意識も飛び、視界が朦朧とした中、先輩が不破めがけて走りく見筋肉の発達した太い身腕を喉元に叩き込まれ、不破の体は勢い余って一回転してマットに叩きつけられた。そして、先輩が体を押さえつけ、レフリーの3カウントを聞いた。立ち上がる際に、先輩が「よくやった」と客に聞こえないように労ってくれる……。

一体これは何だ。俺にはこんな記憶はない、不破は混乱した。これはもしかして、俺の願望、捨てられない過去、諦めきれない夢、そして人間としての生活への渴望なのか……。わけのわからないまま、景色を渦を巻きながら崩れていった。

意識が戻ると、再び公園の中にメテオは立っていた。相変わらずシャボン玉が周りに浮かび、幻想的な空間が広がっている。そして、聞いたびにだんだんイライラしてくるあの女の声が背後から突きつ去ってくる。

「どうだい、あたいが見せてあげた、あなたの願望の世界は。叶わなかった夢を体験させてあげたんだ、感謝して欲しいねえ」

「ふざけんな。夢は頭の中だけで自分だけが見るもんだ。お前にいじられてたまるか。……、もう我慢できねえ。こんなセリフはライダーらしくはねえのかもしれないが、てめえはだけは腹のが煮えくりかえるほど許せねえ存在だ。その髪、爪、皮膚一枚残さないぐらいに粉碎してやる……」

「怖い怖い。でも、その仮面の下にある怒り狂った、半獣半人の醜い顔を想像すると、ぞくぞくしてたまらないよ。ああ、体の芯から熱くなるよ……」

「それじゃあ、今すぐ冷やしてやるよ」

メテオは、バツクルをまわし、アイスブレーカーを発動する。人間の姿をした化け物めがけて、待った躊躇はない。しかし、女も妖艶な笑みを浮かべながら、大量のシャボン玉を浴びせかけてきた。

その数だけ、メテオは色々な幻想に引き込まれた。自分の誕生の間、施設での生活、組織に拉致された日の事、なりたかったプロレスのチャンピオン、憧れのヒーローの様に孤dもたちを心する自分の姿、自分が死に場面、そして何もない荒野に佇む仮面ライダーとしての自分。永遠とも思える夢の無間地獄を味わいながら、メテオはアイスブレーカーを相手に炸裂させた。

次の瞬間、不破は公園の真ん中に立っていた。シャボン玉は消え失せ、人々も普通に活動している。一体、今までの事は何だったんだ。俺の白昼夢なのか。すべて幻なのか。そしてここは、本当に現実の世界なのか。脳がすべてを認識し理解することもできない不破は、この場を一刻も去ろうと足を踏み出した瞬間、足に何かを踏んだ感触はあった。何故だか、急に胸のあたりがざわざわし、ふつと足元を見た瞬間、不破は頭から氷水をかけられた様な衝撃と悪寒を感じざるを得なかった。

そこにあっただのは、真っ赤なバラが一輪と、そこに添えるように血のような真っ赤な色の彼岸花が置かれていた。これは幻ではなかった、不破は嫌でも認めざるを得なかった。あの女の言葉が冷たく、頭の中で何度も繰り返し響いている。

「血のように赤い彼岸花。意味は、彼岸に送ってあげる」

ミッドナイト ノクターン

「ろくなことがねえ」

不破は、愚痴をこぼしながらデパートの中をうろろしていた。わけのわからないまま仮想空間にに放り込まれ、正体不明の組織に目をつけられる。白昼堂々、都内の公園で変な女に因縁をつけられ、記憶をいじられた拳句に殺人予告を受ける。そして、そんな事が続けざまに起こりながら、滝に説明を求めても、時期尚早の一点張りで情報開示されない。改造人間になった時点で、幸運も不幸もへつたくれもないのだが、ここ最近ろくな目に会っていないのは確かである。気が滅入りがちな不破に対し、隊長である原がこれでは作戦に支障でも出ると思ったのか、映画でも見てこいと言って座席を予約までしてくれた。ここまで気を使われるとさすがに申し訳ないのも、その好意に甘える事にしたのだが、やはり腹の虫はおさまらないのは変わらない。こうなったら、とことん楽しんでやろうと決心し、上映開始前にポップコーンとメロンソーダをＬサイズで購入した。量は明らかに多いのだが、彼が食べる分には量に関係ない。それにこのメニューは不破にとっては映画を見る上で欠かせないコンビで、これが揃わない映画館にはいかないと言う不文律がある。「これがないと、始まらないよねえ」

大好きな映画鑑賞ができると言う事と、お気に入りのメニューが手元に揃ったことで、幾分どころかほとんど機嫌が直っている不破は、チケットにある番号の座席を見つけると、そこに座り飲み物をセットして、にこにこ顔で座っている。それだけ、彼は映画鑑賞が好きだからだ。

高校に進学し、アルバイトができるようになってから、不破はそのバイト代の使い道はプロレス雑誌の購入と、映画館通いに費やし

ていた。洋画邦画を問わず、どんなジャンルも見続けたおかげで、好みに左右されず映画の出来だけで楽しむ事が出来るようになった。今日見る映画も、派手さはなくても人間の姿を自然な演出で映し出すフランス映画を見ると言う、見かけとは明らかに違うチョイスだった。ただ、頭脳に搭載されている高速翻訳機能のおかげで、字幕を見なくてもフランス語を理解できるため、自分の肉体で数少ないコンプレックスのない活用法が嬉しく感じる。

やがて、場内が暗くなり、近いうちに見に来たいと言う映画の予告が終わり、本編が始まる。日常が非日常な生活である事を忘れる映画の世界に浸っている内に、煩わしいことはすべて忘れていた。食べ物を口には来い、飲み物で喉をうるおしながら映画を見る。幸せっていいなあと、独り悦に浸っていた。

淡々とドラマが続く映画。しかし、フランス語をネイティブと同じレベルで認識できるので、全く疲れる事もなく楽しんでいられる。そんな調子で一時間半たったころ、飲み物を置く際にわずかに目線がそれた時に、自分の二席ほど向こうにいる客の姿が目に入った。上映が始まる前はいなかったので、直前に席がついたのだろう。女がらみでは、先日的事件でえらい目に遭っているので、うんざり気味の不破であったが、そこにいる女性はあの花魁女とは全く正反対で、落ち着きと清楚さがある、素直に美しいと思える女性だった。可愛いではなく、ストレートに美しいと思える女性に、不破は一瞬心を奪われそうになったが、世の中にはこういう人がいるのが普通で、自分がアブノーマルな世界に浸っているせいで、そう思うだけだろうと思いついた。それでも、やはり気になって仕方ないのは、本当に美しさを備えている女性だからなのだろう。そんな女性のそばの座席で映画が見られるなんて、少しだけ運がまわってきたかなと、不破の機嫌はまた一つ良くなった。

そんな上機嫌な気持ちで映画を見ている内に、段々となりの情勢が気になって仕方がなくなってくる。それでつい、優れた動体視力を使って目だけを動かして女性の様子を見始めてしまう。普段の不

破なら、あまり人間離れたことはあまりしたがらないのであるが、その禁を破るほどの魅力があるのだ。女性は肩ぐらいまでの長さの黒髪の毛を自然な形に流し、目鼻の形もすっきりとして柔らかない雰囲気だ。そして、不思議な事に不破は女性の手に目が行ってしまうのだった。

「綺麗な手だよなあ……」

手に目線を集める人間と言うのも珍しいが、白くしなやかな長い指を備えた手は、不思議な魅力を持っていた。この人は一体どういう人なのだろうと考えたが、不破はこれじゃあ変態じゃねえかと思いとどまり、再び映画の世界に浸る事にした。いい映画だったので隣の女性のことなどすっかり忘れていたのだ。

ポップコーンも食べ切り、ドリンクも飲み干し映画の終盤に差し掛かった頃、不破は自分の耳に違和感を感じた。どうも、音声と言うか、映画の中の台詞が二重になって聞こえるのだ。普通の人間なら全く傷か二のであろうが、不破の耳は聴覚も優れている上、翻訳機能を備えている。だから、小さな音でも耳が拾い、それが日本語以外なら翻訳にかけてしまう。だから、登場人物の声以外の人物が話しているように声が二重になるのだ。

「誰か、この劇場内で、映画のセリフを喋っている。しかも、寸分違わぬタイミングで」

映画鑑賞の邪魔をされた気分になった不破は、鼻息を荒くし、休みを台無しにした相手を見つけようと、聴覚を最大出力にした。当然、観客の呼吸や手足を動く際の関節の動き、ささやき声、そして映画の音声すべてが耳に大音量で入ってくる。その中から関係ない音声を排除していく。次第に、音源が絞られ、映画の音声以外でフランス語を喋っている人物を特定できた。

不破のそばにいる女性である。不破は驚いたが、それでも確証が欲しいと目でちらちら観察してみた。すると、口元がわずかに動き、

何かをささやいているように見える。そして、それは映画の女性のキャラクターの台詞と全く一緒の内容で、ほとんど変わらないタイミングで彼女は完璧なフランス語で喋っている。

「どういう女だよ……」

本当に寸分違わぬタイミングで、出演者の口の開き方とも変わらない。さらに、おかしいのはさっきから女性の目が気になって仕方がないのだ。何故なら、彼女は一度も瞬きをしていない事に気がついたからだ。この大画面のスクリーンで映像を見ていれば、目の疲れや乾きで瞬きなしで目を開けているなどありえない話である。

不破は、前の事件の続きかと思ったが、不思議とこの女性に怪しさを感じなかった。顔の表情、そして目の輝きは、心から映画の世界に浸り、感動していると断言して良かった。とても、怪しい雰囲気などはない。不破は、この女性への興味が再び強まってきた。

不破は、一先ず映画のエンドクレジットの最後まで粘り、女性と同じタイミング席を立った。そして、歩くペースを変えながら、一力所しかない劇場の出入り口で鉢合わせする様な形を作った。

「お先にどうぞ」

「あ、すみません」

不破は相手の声を聞くために、わざとこういう状況を作った。相手の肉声を間近に聞いた不破は、彼女があああの主だと確信した。そして、距離を保ちながら尾行を初めて見た。別にストーリーカーして家までついていくつもりはなかった。ただの熱心な映画ファンだと思いたいし、それが確認できれば帰るつもりだった。ただ、女にひどい目にあつた事件の後だけに、不安は取り除いておきたいのと、純粋に興味を持っているからだった。

「てめえが改造人間じゃなきゃあなあ。声を掛けなくなるぐらい、タイプなんだけど……」

不破は愚痴りながら尾行を始めた。デパートの中にある劇場などで、エスカレーターで降りていけば様々な店がある。女性は色々な所に寄りながら、ウインドウショッピングを楽しんでいるようだ。だが、何も買う様子も買いたいと言う素振りもなく、本当に見て楽しんでいるように見える。どこことなく、普通とずれた印象を不破は感じるのだ。

「普通だと思っただけだなあ。俺の目もそういう風に言ってるし。でも、何か雰囲気が違うんだよ」

不破はぶつぶつ呟きながら、相当距離をとって相手の様子を窺っている。しばらくして、女性が動き出した。反対側の出入り口に向かっているらしい。不破も彼女の後を追っていく。女性は出入口のそばにあるコインロッカーのある所に行った。そして、鍵を取り出し荷物を取り出している。

荷物は、黒い独特の形の鞆、バイオリンケースだった。デパートの映画館に行くのにバイオリンケースを普通は持ち歩かないだろうと、不破は驚いた。それほど大事な物かもしれないが、それならば、寧ろこのような場所には普通は持つてこない。

「やっぱ、あの女、周りはずれ過ぎだろ」

相手は外に出てしまった。デパートの外まで尾行を続けるつもりはなかったが、どうしても違和感は拭えず、むしろ強まってしまった。

「これは調査だ。うん、そうだ。断じてストーカーじゃない。暇つぶしの一環の捜査だ」

無理やり自分を納得させ、不破は尾行を続ける事にした。外に出た相手の姿を見失うまいと、自分も急いで外に出て、女性を探した。不破の視力なら見つけるのは簡単で、すぐに見つかった。道を挟ん

だ反対側にいるが、このままの方が見つかりづらいだろうと思い、道を挟んで並行しながら不破は尾行を続けた。歩いているのを見る分には普通の女性である。途中で、転んでしまった子供を起こしてあげるときにも、子供に対して優しい笑みを向けるなど、ますます普通、いやそれ以上の魅力まで感じるのだ。その様子を見る度、普通の人間だろうと思うのだ。ますます尾行を続けたくなるアブナイ心理に自分自身が陥っていくのに不破は認めざるを得なかった。「やめた。惜しいけど、これ以上やると、俺も犯罪者だ。改造人間でストーリーカーとなったら、ヤバすぎる。滝さんだったらぶん殴るだろうな」

不破は、尾行を切り上げ帰ろうとした瞬間、本当に妙なものを見つけた。女性の後を数人の人影がついてきているのだ。服装は、一般人と同じで溶け込んでいるが、不破の目はごまかせなかった。尾行のやり方は、原や緒方にレクチャーしてもらった経験のある不破だから、彼らが素人なのはすぐにわかる。だが、それ以上に不破の目には異常なものが映っていた。

「黒子が……。4人も揃って、美女を尾行とは穏やかじゃないな。ここは俺がカツコよく駆けつけるのが理想的だろうよ」

不破はやめかかった尾行を再開し、道を横断して女性への距離を詰めていった。黒子達は、やはり尾行に慣れていないらしく、こちらがつけている事に全く無頓着だ。素人相手だが、彼らは人間じゃない。都内の人通りの多い所であの手の連中を野放しにしておくわけにはいかないと言う大義名分を得た不破は、本気の尾行を始める。狙われているのが女性と言う事もあり、いつにも増して気合も入っている。

尾行者達はやはり素人らしく、自分達が尾行されていることに気が付いておらず、不破はかなり距離を詰めて後をつける事が出来る。そうしている内に、かなりの距離を歩く事になった。かなり時間が

過ぎた時、女性の足が突然止まった。何かと不破は前方を確認すると、同じような怪しい雰囲気を持つ数人が女性の前からこちらに向かって来る。どうも彼女は後をつけられる心当たりがあるらしい。後方からの尾行者にも気がつき、女性を辺りを見回すと、ビルの間隙の細い路地に入っていた。ああなると逃げ道は他になく仕方ない選択である。

不破の方は、この雑踏の中で喧嘩沙汰を起こす気はなく、怪しい尾行者を追いぬき、前方からの追跡者とすれ違い、相手に怪しまれないようにした。気配を探り、彼らが女性を追って路地裏に入っていくのを確認する。不破は、彼らを追いかけながら、デパートの駐車場に置いてきたヘンリーに無線を入れる。

「ヘンリー、俺の位置がわかるな」

「わかるけど、僕を置いてどこをほつつき歩いているの」

「後で説明する。イリユージョンミラージュで姿を消して、俺のいる場所まで自走してこい。急げ」

「了解」

バックアップを確保し、不破も路地裏に足を踏み入れる。狭い道で、喧騒からも完全に隔離されているし、どうやらこの先は行き止まりらしい。この分だと、女性は完全に追い込まれた事になる。不破は歩く速度をあげ、奥へ足を進めると話声が聞こえてきた。これは尾行者の者らしい。

「手荒なことはしたくありません。街中なので騒ぎになると面倒なので」

「あなた様に今の所危害を加えるつもりはありませんが、別に生捕が絶対ではありません。あまり抵抗されますと、命の保障は致しか

ねます」

どうやら、追跡者は相当性質の悪いチンピラ気質の性格の様だ。相手は八人。数は多いが黙っているわけにはいかないだろう。不破は物陰から颯爽と飛び出し、女性の危機に駆けつけるヒーロー気取りで声をかけた。

「ようよう、白昼堂々と女を誘拐、脅迫するとは穏やかじゃないな。悪いけど、その人は俺がもらう」

キザったらしい言葉であるが、美人を前にして不破の心は高ぶり、妙にかっこつけたくなるのだ。邪魔が入った事に驚いた尾行者の一人が、不破の顔面に拳を叩き込もうとしたが、不破はそれを片手で受け止める。やはり相手の正体は黒子らしく、パンチを受け止めた不破の手は痺れで震えている。

「やっぱりお前ら、人間じゃなかったんだな……」

不破は相手を引き離し、渾身の力で殴り飛ばした。互いにこの状態なら力は互角だ。残りの尾行者達と格闘になるが、戦闘慣れしている不破の方にまだ分があった。攻撃をかいくぐってようやく女性のそばまで辿りついた。

「大丈夫かい」

「あなた、逃げた方がいいわよ。殺されてしまう……」

「大丈夫だよ、こういうのは慣れている」

「そういう意味じゃないわ。ただの喧嘩とは違うんだから」

「わかってるよ」

不破は真剣な表情になり、後ろを振り返った。蹴散らした尾行者達はゆつくりと立ち上がると、その姿を人ならざる者へと変えていく。異形の姿の表面は、ステンドグラスのようなカラフルな色を持っており、醜悪でありながらゴシック調の美しさを持っていた。その面々を見た不破は口笛を吹きながら、後ろにいる女性に話しかける。

「あなた、きれいな人だけど、こういうのに場慣れしてるね。じゃあ聞くけど、あいつらは一体何だ」

「……。あれはファンガイア。人間の生命力を糧にする種族よ。場離れしているなら、あなたの方もそうね。ファンガイアを見ても平然としている。あなたこそ、一体何者なの」

「あまり言いたかないんだけど、場慣れしてるんならいいだろ。まあ、見ててくれ。ただの喧嘩好きのチンピラとは違うから」

不破は、目の前にいる這ったいのファンガイアと言う怪人を目の前にして構えをとり、自分の体を戦闘用に変えていく。

「変身」

その言葉と共に閃光が走り、不破の体は仮面ライダーへと変わる。さすがに驚いたかなと思い、メテオは女性の方を向くと、確かに目を見張り驚いてはいる。だが、口にしたのは妙な言葉だった。

「あなた、どうしてキバの鎧を……」

「はあ、なんだそりゃ。ま、後で詳しく聞くから。まずはこいつらを黙らせるから、待ってなよ」

そう言いながら、メテオはファンガイア達に向かっていく。相手は八体。だが、視界から得られるデータからいくと、彼らはそれほど

どの出力は持つておらず、尾行に使われる様な下っ端なのだろう。

亜kさ寝た経験と性能から行けば、メテオの敵ではない。一斉に襲いかかる敵を素早い動きで吹き飛ばしていく。顔面やみぞおち、脳天などの急所に拳や蹴り、手刀が打ち込まれていく。メテオの攻撃に肉体が耐えられないのか、倒れ込んだ者から体が結晶化して砕け散っていく。そして、物の五分もたたない内に八体のファンガイアをすべて片付けてしまった。

「さてと。尾行者からの連絡がなくなると、尾行を命令した奴が動くよな。零部に行くべきかな。どうする、俺の住んでいる所ならセキユリティは万全だけど、行くかい」

「いいえ。誰も私は巻き込みたくはない。もし、私を守ってくれると言っなら、人のいない所まで連れて行って」

「え、大丈夫かな。あまり勝手な事をする、後が面倒なんだよなあ」

「なら、これでお別れね。と、言いたいところだけど、あなたの鎧について聞きたい事がある。あなたは、私の事を守ってくれるんですよ。需要と供給のバランスがとれたと思うけど」

「敵わないな。見た目の若さの割に、冷静さが半端じゃない。段々、色々聞きたくなってきたしな。近くに俺のバイクも来ているはずだ。とりあえずここから離れよう」

合意を結んだ二人は裏路地から抜け出し、傍まで来ていたヘンリ―に乗り、一先ずは無関係の人間が巻き込まれない場所に向かう事にした。運転しながら不破は、相手の名前を聞いていない事を思い出し、後ろに乗っている女にな目を訪ねた。

「そっいや、まだ名前を聞いていなかった。なんていう名前だい」

「名前を聞く時は、自分から名乗るものでしょ」

「そりゃ失礼。俺は不破龍雄。で、あんたは」

「真夜よ」

「真夜さんね。それにしても、さっきは度胸が据わっていたよ。怪人を見ても全然動じない。ファンガイアという呼称も知っている。真夜さんはどういう人なんだ」

「命の恩人の質問に答えないわけにはいかないわね。私が動じず、彼らの種族を知っている理由。それは、私もファンガイアだったから」

「はあ、どういう意味、それ」

あまりに突拍子もない答えに、不破は思わず運転を誤りそうになった。相手が人間でないなら、不破の目はそれを見抜く事ができる。しかし、その反応は全くなかった。尾行者の正体を見破っていたにも力かあらず、真夜には全くその気配がなかったためだ。

「まさか、嘘でしょ。俺の目はそう言うの見抜けるんだよ。そして、俺の目は真夜さんを人間と判断した」

「だから、『だった』って言うてるでしょ。ちゃんと話を聞いて」

「意味がわからないんだけど」

「私に流れる血はファンガイアのもの。でも、色々あってその力を失って、残ったのは長い寿命と些細な力の欠片だけ。それじゃ、あ

なたの特製の目でも判断するのは無理もない。むしろ、人間と判断してくれたのは嬉しいくらい」

「何だか、複雑な事情を抱えているんだな」

「長く生きてるとね。ところで、あなたは何故キバの鎧を持っているのか、教えて欲しいんだけど」

「そのキバの鎧の意味がわからないな。大体あの姿は鎧でも何でも無い。イカレタ頭の連中に体じゅうをいじられ、その上に戦闘服を着せられているだけだ。鎧なんてそんな洒落たものじゃない」

「そうとは思えないわ。私達の一族に伝わる鎧の製法に似た部分をあなたから感じるから」

「興味深い話だ。ますます真夜さんに興味がわいてきた。とりあえず、落ち着いて話ができる所に行こう」

不破はバイクを駆り、人の気配のないところを探し回った。そして、住宅地からも少し離れた河川敷の高架下に身を隠した。ここなら、ひとまずは人目に付かないように潜んでいられる。不破もあたりを警戒することは怠らなかったが、少しだけほっとした。だが、真夜が自分の隣に座ると、また胸が高鳴るのを感じた。彼女の美しさは顔立ちにもはつきりと表れていることもあるが、それ以上に内面からわき立つ雰囲気がたまらなく魅力的だった。知性、気品、妖しさ、形にも言葉にも表現することが難しい、空気とともに漂う不思議な感覚の虜になっていた。そんな落ち着きのない不破の様子を真夜は茶化しにかかる。

「ずいぶん落ち着きがないみたいだけど、女性と話す機会がないの。それとも経験不足なのかしら」

「両方だね。普段周りにいるのは男臭い骨太な連中だし、そんな中で暮らしているとまともな女に会うこともない」

「ふーん。でも、女性と付き合ったことはあるんじゃないの。まさかその歳まで経験がないという様にも見えないけど」

「……、それはあるよ。体をいじられる前につきあってた女はいたけど、俺は拉致され、体をこんな風に改造され、五年も眠らされた。五年も行方不明の男なんて、死んだも同然さ。彼女を探すこともしてない」

「どうして」

「探したところでどうにもならない。ましてやこの体だ。普通の人間なら引くよ。彼女にそんな目で見られるのはつらい。ろくでもない連中も絡んでくるから、命がいくらあっても足りないしな。出来れば、もう吹っ切って、他の誰かを愛されていてくれた方が、俺としては嬉しいね。そう考える方が気楽だし。あなたがどうであって、もあなたに変わりはないなんて台詞があるが、俺にはリアリティはないね。俺みたいな存在を受け入れるなんて女は、こっち側のアブノーマルな世界に足を踏み入れたが、究極の博愛主義者だろうな」

不破はため息をつきながら、昔を思い出し、今を呪った。もう決して求める事の出来ない想い、しかもその記憶が残っているだけに始末が悪い。こんな記憶や感情もなくなっていけば楽なのかもしれないが、そんなのは化け物だ。人であろうとすればするほど、彼はこの思いに苦しみ続ける。しかし、真夜は笑いながら、不破の投げやりな言葉を否定する。

「そんなことはないわよ。例え、相手が人ではない存在だとしても、その心を愛してくれる人はいるものよ」

「まさか。そんな奇特な人間や、そういう人間に愛されるラッキーな人間がいるなら会ってみたい」

「あなたの隣に座っているわよ」

「えっ」

不破は驚きの声をあげた。確かに、真夜の美貌なら言いよつてい
る男には事欠かないだろう。しかし、彼女はファンガイアの一族。
降りかかるのは火の粉どころかマグマみたいなもの。そんなリスク
を冒して、彼女という存在を愛した男を不破はもつと知りたくなっ
た。

「話を聞きたいって顔をしているわね。……、いいわよ、話してあ
げる」

「いいのかい。まだ会って数時間しか経っていない男に、大事な思
い出を話しても」

「何だかあなたには警戒心を抱けない不思議な所があるわ。それに、
何も聞かなくとも、大事な思い出って言ってくれる心がある。そん
な事を言う男と話すのは久しぶりだから」

「ありがたいし、照れ臭いな。じゃあ、話を聞かせてくれ」

「私には長い寿命がある。何百年単位で生きる種族だから。だから、
普通に生きていると色々な好奇心が出てくる。特に、人間の生み出
す文化に興味を持つ者はたくさんいた。ファンガイアにも人間と変
わらない知性はある。でも、文化という実利に欠ける物を生むとい
う才能が欠けていた。生存や戦闘に関する知識ばかりで、無形の存

在である持つ文化を生み出す知恵に欠けていたのね」

「目に見える物しか信用できない物質文明と、芸術や宗教、思想を生み出し価値を見いだせる文明の違いってことかな」

「意外にインテリな事を言うのね」

「夜は寝ない体になって、色々な本を読み漁る様になったからだろうな。話を遮って悪かったよ。続きを話してくれ」

「私も長い寿命の中で、退屈していたのね。その退屈を紛らわすため、人類の文化に関心を持つようになった。文学から始まり、宗教、哲学、美術、そして音楽。音楽には心を奪われたわ。目に見えない触れることもできない音。なのに、音が体の中に入り込み、鼓動を早め、体を熱くする。それまでの私は、人間を生命力を得る糧として見ていなかった。驚いたでしょ、こんなセリフ」

「真夜さんの顔がそう言う言葉を発するとね。でも、今さら驚かないな。俺、アブノーマルな世界に浸りきっているから」

「インテリだけじゃなくて、ユーモアもあるのね。でも、私も人間の文化を生む才能に接して、そんなユーモアや知識を得るようになって、音楽がたまらなく好きになった。工房に出入りして製法を学び、音楽家の許に通って演奏技術や心を学んだ。音楽はいつの時代にもあったから、生きている事に退屈もしなくなった。でもね、芸術は理解しても人間を理解できなかった。私の域まで音楽への魂を共有できる存在がいなかった。だから、私はいつも一人で音楽を楽しむしかなかった。永久にソロだと思った。でも、やっと私にも共演者ができた」

「それが、真夜さんの心を愛してくれた人か」

「そうよ。彼も音楽を愛していた。その情熱故に、世間の中で生きていくのが困難なほど。それほどまでに強い愛情と情熱を音楽に注いでいた。そして、その魂で奏でられる音楽は、心に直接語りかける素晴らしいものだった。あなたに聞かせてあげたかったわ」

「真夜さんがそう言うなら聞きたいね。でも、その言い回しじゃ、彼はもう……」

「勘がいいわね。そうよ、彼はもうこの世にはいない。ファンガイアは強大な力を持ち、それを誇っている。でも、自分達に生み出せない文化を生み出す人間を恐れていた。だから人の生命力を食らって追い詰める。本当はそれに頼らなくても生きられるのに。心の底で恐れる人間とファンガイアが結ばれるなどあつてはならない事だった。それは、ファンガイアという種族が人間の血に侵されていくことと考える程、私達は人間に恐れを抱いていた。そして私は女王、風紀を取り締まり、種の交わりを防ぐ事が役割だった。その私自身が禁を破った……」

「当然、真夜さんは追われる。そこで、その男が現われると。生身の人間の彼が戦ってくれたのかい」

不破は、少しだけ嫉妬する気持ちを抱いた。真夜対しては、種族を超えて愛してくれる男がいたと言うこと。真夜を愛した男に対しては、命を賭けてでも勝てるはずのない戦いに挑むだけの存在がいたということ。今の不破にとっては、自分を愛する対象はいないし、現われると言う予感もない。そして誰かのために戦おうと願っても、自分の背後にいるのは不特定多数の顔の見えない人々。それが嫌というわけではない。でも、誰にも知られることなく死ぬよりも、特

定の誰かのために戦って死ぬ人生も諦めきれない思いがる。だから、羨ましいのだ。

「羨ましいし妬けるよ。その男にさ」

「男の嫉妬はみつともないわよ。掟を破った私は、ファンガイアの力を失った無力な存在。だから、彼は戦ってくれた。私を守るために、人が着てはならないキバの鎧までつけてね。それが原因で、彼は間もなく亡くなった。残されたのは二人で作ったこのバイオリンと私達の子供」

「そんな大事なバイオリンなら、コインロッカーに預けるのはまずいだろ。危険分散という意味では有効でありだけどさ。しかし、子持ちなんだ……」

「どうしたの、そんながっかりした顔をして。私が二人の子持ちじゃないけない」

「いえ、別に。あんまりきれいだからさ、子供がいるように見えなくて。でも、子供たちは大丈夫かい、あれだけやばい追手がかかっているのに」

「信頼している人に預けているし、それは大丈夫。後は、彼らが成人する頃にキバの鎧を渡すだけ。今、私の手元には四つの鎧がある。闇、黄金、白銀、そしてクリスタル」

「四つもあるわけ、そんなすごい鎧が」

「一応、王政のような体制だから、その地位にある物に鎧が継承されるの。私は、女王だから白銀の鎧を持っている。二つは二人の子に。もう一つは……」

真夜の言葉を不破は遮った。その顔は鋭い視線を辺りに向け、体に緊張をみなぎらせている。

「俺に気付かれずに、ここまで接近するとは、なかなかやるね」

「ふふっ、女との話に鼻の下を伸ばしているから、そうなるんだ」

「ご指摘、ありがとう」

不破は、会話に夢中になっているわけではなかった。片耳は常に辺りを警戒し、ヘンリーも辺りを索敵していたにも関わらず、ここまで近寄って来た敵の業に、少し焦りを感じていた。

「真夜さんが狙いか」

「個人としてはそうだ。だが、目的はさらに高い所にある」

「ほう、よかったら聞かせてもらえるかい」

「お前は話の半分を聞いたようだから、隠しても仕方ない。我々の目的は、キバの鎧の破壊。そして、王政の打倒だ」

「革命、か」

「その女は、先王を人間の男と共に謀殺した。それだけならまだしも、人間の捕食を禁じる法を作った。我らの餌は人間、人間は我らの捕食されるためにある。にも関わらず、人間と交わった女王の法で、その原則を破壊してしまった。これ以上の屈辱は耐えられん。だから、王政は打倒する。錆つき、汚れた王家など害毒にしかならん。王家の血をひくものは、純血であろうと傍流であろうと根絶やしにする」

不破は、少しほっとした。相手の強さはわかってはいるが、その思考が人間そのものだからだ。人間を餌などと言っておきながら、やっていることは人間の歴史の模倣に過ぎない。しかも100年単位で遅れた歴史の。

「はいはい、わかりました。御講釈ありがとうございます。でもさ、ファンガイアって別に人間以外食っても問題はないんだろ。だったら、仲良くやろうぜ。真夜さんを見てみなよ、できることだぜ」

「貴様、我らを愚弄する気が。貴様ら人間と一緒にするな」

「一緒さ。俺達人類、君達ファンガイア。似たような知的な種族だろ、しかも、同じ星に生まれたさ。食い物がバツティングしたら、別の食い物を食って共倒れを回避するのは、虫だってしているぜ。何百年、いや、それ以上俺達と一緒に生き延びてきたんなら、共存は可能だろ。もう少し、柔らかい頭で考えて欲しいね。これだから古今の革命家は好みに合わないんだよな」

「貴様……」

「もう一つ言わせて。お前らは人間を食いたいから、敵視するんじゃない。逆だ、恐れているんだ。自分達と同じ知性を持つ異なる種族に対する不安、そして自分達より弱い種族でありながら、文化という自分達が作りだせないものを作る人類が怖いから、食い物だと決めつけるんだ。だが、俺達は決して共存できない種族じゃない。それは、ここにいる真夜さんが証明している」

「そこまで、我らの革命を愚弄するか」

「愚弄してるつもりはない。学歴のない俺でも指摘できる脆さがお

前の論理にあるんだよ。大体さ、お前らがやってる思想って、人類がとつくの昔に通ってきた歴史なの。要は、お前らの思想と俺達のは思想は変わらない。むしろ、文化の面で無意識に模倣しているのを、お前の演説は丁寧に証明しているんだ。それに気がつかず、人類を蔑むバカ、ツラ出しな」

不破の挑発に姿を隠していらなくなったのか、黒づくめの男と、そのそばに寄り添うコートの女が現われ、その周囲にはその部下と思わしき影が6体ほどいる。計8体、その内の前にいる男女以外は昼間蹴散らした相手と同レベルだろうと不破は判断した。

「貴様、人でもなく怪物でもない。ましてやファンガイアでもない者が、何故我々の邪魔をする」

「何でだろうな。無抵抗な女一人を集団で襲うなんて、外道の仕業だと思ったから手を出しただけだ。そして今も数にものを言わせて、力づくとはね」

「お前は一体何なんだ」

「仮面ライダーさ。ま、今は女王陛下のシークレットサービスというところかな」

「ふざけるな」

黒服の男の姿、その怒りに応じて変化を始める。ステンドグラスの様な体表組織が露わになり、次第に何かの生き物をモデルとした姿を取り始める。次第に色は黒ずんでいき、顎は前方に突き出て、頭部に耳の様な者が出現した。

「ジャッカル、か」

「アヌビスと言って欲しいものだ」

「冥界の神を気取るのか。それじゃあ、俺も準備をしようか、変身」
「させるか」

ジャッカルファンガイアは変身する間も与えまいと、高速移動をして肉薄すると、鋭い爪で引き裂きにかかった。そこにいた誰もが捉えた、或は捉えられたと思った瞬間、ジャッカル顔面に目視できないほどの速度で拳が叩きこまれ、ジャッカルは吹き飛ばされた。変身を完了したメテオが、わずかな時間の隙について、拳を突き出したのだが、その速度は尋常ではなかった。本人は全く気にはしていないが、周りにいたすべての者があっけに取られていた。

それは、真夜も同じだった。力は失ったとはいえ、五感はまだ研ぎ澄まされて人よりはるかに鋭いはずだが、彼女の眼でも、メテオの拳は捉えられなかった。

「速い……。そのバイク、ジョン・ヘンリーと言ったわね」

「はい、そうです」

「あなたと彼はリンクしているんでしょ。彼はあんな力を持っているの」

「それが……。僕にインプットされているメテオの能力の上限値を超えています。今までこんなことはなかったのに」

「成長、或は進化していると言っの……」

真夜の驚きを余所に、自分の変化につ気がついていないメテオは、大胆不敵の敵の集団に近づいていく。敵は、予想以上のメテオのス

ピードに、明らかにたじろいでいたが、黒いコートの女が前位に進み出て、メテオの前に立ちふさがった。

「予想以上の強さだ。キバの鎧ではなくとも、仮面と甲冑を身につけた戦士達の系統に位置する者だけはある」

「仮面ライダーを知っているのか」

「彼らもまた私達の前に立ち塞がる者。それは排除せねばならない」

そう言いながら、女も体を変化させていった。背中に四枚の羽を持ち、顔に巨大な複眼を備えた姿は、巨大で獰猛さを備えたトンボの姿である。

「トンボの能力を持っているのか。さしずめ、ドラゴンフライファングガイアかな」

「それでいい。名などどうでもいい。互いに墓も残らないのだから」

「言ってくれるぜ」

二人は、猛スピードで辺りを移動しながら戦いを始める。上限値を超えたスピードを発揮するメテオと、四枚の羽で体を浮遊しながらそのスピードについていく二人の戦いは全くの互角だ。

しかし、敵はまだ7体いる。ジャッカルとその手下たちは、メテオが引き離されている間に真夜に迫ってくる。しかし、彼女の前にヘンリーが進み出て、搭載されている小機関銃を発砲し牽制する。

「ヘンリー、あなた……」

「僕の自己判断と、メテオの命令が一致しただけです。さ、僕から離れず、ここを離れましょう。メテオを信じてここを離れましょう」

ヘンリーは自らが盾となり、真夜をここから逃がそうとする。搭載されている小機関銃は、その弾丸が零部特製のもので、装甲を貫通するだけでなく、敵の神経組織をスタスタにする薬剤が混入されている。そのため、並みの怪人ならば、ヘンリー一機でも倒す事が出来る。しかし、弾数には制限があるため、一撃必殺を狙って、ヘンリーはイリユージョンミラーージュで姿を消し至近距離から相手の装甲の弱い部分を割り出して攻撃していく。そして、少しずつ真夜を後方へ逃がす戦術を展開する。

それを脇で見ながら、メテオは相手との戦いに集中する。ドラゴンフライのスピードはメテオとほぼ互角。そのため、一瞬足りも気を抜く事ができない。しかし、それは相手も一緒に、メテオの追跡は全く余裕はない。二人の姿はほぼ残像のみで、空気を切り裂く音と時折ぶつかり合う鈍い音が聞こえるのみだ。

「やるね、あんた。ドラゴンフライの名の如く、俺の目と拳でも捉えられない。無音で飛ばれるんじゃ、耳で方向やスピードを測れないからな」

「あんたもね。私のスピードについてきたのは初めてだ。敵じゃなければ心を奪われるかもしれないけど、今はそんな気はさらさらない」

「なら、後腐れがなくていい。思い切りぶん殴れる」

ほぼ互角の状況の中、ただ高速移動していても埒が明かないため、二人は接近して拳をぶつけ合った。ほぼ同等のパワーとスピードの激突のため、二人の体は弾きあう。しかし、メテオの方が悪い状況に陥る。川を背後に立っていたため、後方に弾かれたことで体の半分まで水につかってしまう。これでは、いくら出力の多い体とは言っても、水の中につかれば抵抗を受けスピードが鈍る。メテオはまずいと感じ、ドラゴンフライは好機ととらえた。スピードの鈍った

メテオを決して体から出さないように牽制しながら攻撃を加えていく。圧倒的に不利な状況となったメテオは、もう周りの事は構っていられなくなった。スピードを失ったメテオに、ドラゴンフライはその機動力を最大限に生かし、そこにくぎ付けにする。

メテオが引き離されていく状況になることは、真夜の身が危険にさらされることを意味する。そのため、ヘンリーの働きが重要性を帯びてくるが、予想以上の働きに手下のファンガイアはヘンリー機であらかた倒してしまった。手下は後は二体、想像以上の働きである。だが、ジャッカルにしてみれば、バイク一台に倒される手下に愛想が尽きたのか、辛抱しきれず自分から手を下し、ヘンリーを吹き飛ばして戦線から弾きだす。真夜は、ヘンリーの許に駆け寄り、その安否を確認した。やはり自分の身を守ってくれた者に対しては、相手がマシンであろうと放ってはおけないらしい。

「ヘンリー、あなた大丈夫なの」

「どこも壊れていないですけど、残弾がもうありません。今の衝撃で迷彩機能も壊れてし待って……」

「もういいわ、よく戦ってくれたから。今度は私が守ってあげるわ」

「真夜さん、戦えるの」

「能力のほとんどを失っているから全力では無理。でも、時間稼ぎはできるから、あなたは彼の許に言って援護して。それと、このバイオリンお願いね。大事なものだから壊さないでね、絶対に」

「うっ、役に立てずにごめんなさい。このバイオリンは命に変えてもお守りします」

「お願いね、ヘンリーちゃん」

真夜はヘンリーに微笑むと、ジャツカルの前に立ちはだかる。その顔は真剣な表情で、その佇まいには隙が一切ない。ジャツカルは、真夜自ら進み出た事に驚いたような表情を見せる。

「ほう、女王自らお出ましとは。だが、ファンガイアの能力を失った身で、どれだけ戦えるやら」

「確かにそうね。でも、私には力はまだ残されている」

真夜はそう言い放つと、高らかに口笛を吹いた。すると、小さな白い物体が飛来し、ジャツカル達を蹴散らしながら真夜の手に止まった。

「真夜様、お待たせしました」

「久しぶりね、キバーラ」

キバーラと呼ばれたコウモリ型の生物は、真夜に使役するキバツト族の一体である。ファンガイアの王家は、このキバツト族と契約を結び、その種の保存に力を貸し、またキバの鎧の管理と起動の権限を与えている。

「キバーラ、白銀のキバの鎧、使うわよ」

「わかりました。ですが、今の真夜様には負担が大きい事をお忘れずに」

「構わないわ。命知らずの男とバイクにまで命を助けられた以上、私だけ逃げるわけにはいかない。戦える限りは戦う。それがあの人が教えてくれた事だから」

「わかりました。では、参ります」

キバーラは真夜の指に牙を立てた。その咬み傷から鎧に含まれる魔皇力が体に注ぎ込まれ、それに反応するように真夜の体がステンドグラスのような模様に染まっていく。そして、キバーラが腰の位置に装着される形で固定されると、そこから白銀のオーラが輝き、真夜の姿は白銀のキバの鎧に包まれた。

「それは、女王に与えられる白銀のキバの力、キバーラ。その力もまた、破壊すべき対象」

「これは力で相手を制圧する鎧じゃない。守るべきものを守らねばならない時に装着する物。あのメテオという男、決して死なせてはいけないだけの価値がある。だから、この白銀の鎧を持ちだしただけよ」

「どこまで戦えるやら。やれ」

ジャツカルの手下が、真夜「キバーラに押しかかるが、彼らの目の前から真夜は消える。姿を消したのではない。メテオ達に匹敵する速度で移動しているのだ。さらに、その白銀の輝きが敵を幻惑し、実体を捉えさせない。そして白銀の輝きが虚像を作り出し、いくつもの影を作りながら敵を包囲していく。虚像に囲まれ動きを止めた二体の相手に、腰から抜いたサーベルで斬りかかり、まさに一刀兩断の切れ味で切り裂き、手下達を圧倒した。

しかし、状況は決して良くなつた訳ではない。能力の欠片があるためキバの鎧を装着できるとはいえ、体力自体が人間である真夜には、この戦いは負担が大きすぎる。息を切らし、膝を震わせながら崩れ落ちた。援護に行かせたはずのヘンリーもどこか破損したのか、起き上がれずにいる。

「女王、パールシエルファンガイアの力を失い、今はただの女。殺す価値があるのかは疑問だが、王家を根絶やしにするためには、こ

の世にいてもらつては困る。冥府に行くがいい」

「……、処刑する前はあまりベラベラ喋らないことね」

膝をつきぐったりしていたはずの真夜は、手にしたサーベルをキバーラに噛ませながらスライドさせる。すると、強烈な音波が発生してジャッカルをたじろがせる。そしてその隙に舞い上がるとその背に銀翼が生まれ、光輝きながら上昇していく。そして、サーベルをかざし光の尾を引きながらジャッカルに切りかかつていく。その姿はまさに流星、メテオと言える。

不意を突かれ、視界まで奪われたジャッカルであつたが、暗黒のオーラを両腕に纏い、白銀の流星を受け止める。衝撃が起こり、大気の壁が膨れ上がる。そこに立っていたのはジャッカルの方だった。やはり、消耗し戦いの負担に耐えきれない真夜には、ジャッカルの手相手は厳しすぎるのだ。

「やはり、その体では無理ですなあ。女王であるあなたを倒せば、残るは、幼い王子のみ。チェックメイト」

ジャッカルは、体の周りに黒いオーラを張り巡らし、それを爪の先に集中させて、頭上に振りかざす。このまま、鎧と共に真夜を切り裂くつもりだ。

その様子を視界にとらえたメテオの心中は穏やかではない。真夜の安全を頼んだはずのヘンリーはどうしたのか。

「おい、ヘンリー。いつまで寝てる気だ、ヤバいぞ」

「ごめんさい。ジャイロ装置が破損して起立できませんっ」

「馬鹿野郎、それを早く言えよ」

ヘンリーがあてにならないとなると、真夜の状況は非常にまずい。

状況がまずくなつた自分達のために鎧を装着して危ない橋を渡っているのだ。だが、まずい状況にあるのは自分も変わらない。どうすべきか、メテオの頭脳は激しく回転し、いくつものパターンを予測した。そして、一つの答えを探し求める。

「……、よし、これでいくしかない」

メテオは、一つの方法に賭けた。「FREEZE」を起動し、足元に超低温を発生させる。それに反応して川の水が一気に凍りつく。固化化してしまえば、体にかかる抵抗はなくなる。メテオは一気に跳躍して川から上がると、ドラゴンフライの脇をすり抜け、真夜の許へ疾走するがドラゴンフライもメテオを高速で追いかける。

「逃がさないよ」

「しつこい女は嫌いだね。ヘンリー、あれをよこせ」

メテオの命令に応えヘンリーは車体から剣を射出する。そしてそれを受け取りながらメテオは「EXPLOSION」を発動させ、剣に炎を纏わせる。真夜に対するジャツカルの攻撃を止めるつもりのようなのだ。そして、ドラゴンフライもメテオの思惑を察知し、さらに加速するが二人の速度は互角のため、距離がつかまらない。そしてメテオは剣を振りかざし真夜に襲いかかろうとするジャツカルに踊りかかる、かに見えた。

メテオは空中で突然反転すると、剣を自分を追跡してきたドラゴンフライに振り下ろし、炎の渦に巻き込み圧殺した。

「お前、最初からこれを狙って……」

「この方法じゃないと、俺も助からないし、真夜さんを助けられないんでな」

断末魔と共にドラゴンフライは炎に呑みこまれた。そして、爆風

に乗りながら、ジャツカルと真夜の間にメテオが割って入った。ドラゴンフライの最期を見て、焦りが生まれたかわずかな狙いのずれにメテオはつけ入り、真夜をかばいながらその爪を体で受け止めた。邪魔が入り、好機を逃したジャツカルは忸怩たる思いで声を絞り出し、メテオに呪いの言葉をかける。

「貴様、なぜそこまで邪魔をする。それほどの力を持ちながら、何故この女に肩入れをする。こいつは人間じゃないんだぞ」

「知るかよ。俺だって人間じゃねえ。けどな、いい女のために体や命を張れるなんて、男と生まれたからには、一度は味わいたいシチュエーションだろうが」

「馬鹿か……」

ジャツカルは口ではあざ笑いながらも、メテオの考えを理解できない事に恐れを感じている。少なくともメテオにはそう感じた。理解できない者への恐れ、そしてその恐れを振り払うために理解ではなく、排除と抹殺をとる。決して許せる相手ではない。しかし、恐れる程の敵ではない、どれほど能力差があろうとも。そう確信し、傷口からだらだら血を流しながらメテオは立ち上がる。そんなメテオに、真夜は何か立ち上がりながら、そのそばに駆け寄る。

「あなた、まだ戦う気なの」

「ああ。真夜さんを守るにはこいつを倒さないといけなからなあ」

「正気なの。あなたバカでしょ」

「馬鹿かもねえ。けど、真夜さんみたいないい女のために戦っていると思うと、不思議と戦えるんだよな。改造人間に変えられ、死刑宣告まで受けるようないない俺の人生だけど、真夜さんを守

つて戦うこの夜は、まぎれもないラッキーな時間だ。さ、下がって
いてくれ。まだ、戦いは終わっていない」

メテオは真夜を押し分け、ジャッカルに向かっていく。一方のジ
ヤッカルは後退こそしないが、動けずにいる。理解できない存在、
心を持つ者に対する恐怖に縛られ、体を動かせないのだ。負傷のた
めに能力差は存在するかもしれないが、精神面ではメテオが圧倒し
ている。

メテオの姿を見守っていた真夜は、何かを決意したかの様に水晶
球を取り出し、メテオの前に立ちはだかる。

「何だよ、どいてくれよ。まだ、仕上げが残っている」

「本当に馬鹿な男。でも、どこかで見た様な気がする……。そうい
う男、嫌いじゃないわ。あなたみたいな人にはまだ死んで欲しくな
い。この世界を、私の子供が生きていけるそんな世界を守って欲し
いから」

真夜は、メテオの宝石のような輝きを持つバツクルに水晶球を接
触させた。水晶球は砂の様に崩壊すると、そのままメテオのバツク
ルと同化していく。バツクルはこれまで異なる色の輝きを放ち始め、
それに応じてメテオの体に変化が生じる。

筋肉が隆起し、強化服にラインが入りそこにエネルギーが流れ込
む。さらに背中に装備されたレーダー用のマフラーに、ファンガイ
アの物に酷似したステンドグラスの模様が浮かび上がり巨大化して
いく。その姿はまるで巨大な翼の様であり、天使の様にも巨大な揚
羽蝶にも見える。その姿にメテオ自身も驚くが、ジャッカルはさら
に驚愕している。

「それはまさか、クリスタルのキバの鎧。人でも機械でもない存在
にその鎧を託したと言うのか」

「鎧は力じゃない。それを身に纏う者の心と一つになって意味をなす。彼なら、仮面ライダーメテオなら、人とファンガイアが共存する世界の可能性を守れるはず。だから、鎧を託した」

真夜の言葉に、メテオは小さくうなずきながら、己に託された思いと使命を受け入れた。すでに様々な過酷な運命や哀しみを見つめそして背負ってきた彼にこれ以上の重荷は背負えないはずであった。しかし、このような希望を託されては、受け止めないわけにはいかなかった。いや、むしろこのような希望に満ちた思いこそずっと求めていたのかも知れない。そんな不思議な思いを抱きながら、メテオはジャッカルに向かっていく。ジャッカルは完全に圧倒されていたが、革命を信じる者の意地でメテオに向かって行く。

ジャッカルは再び黒いオーラを全身に纏い、肉体を強化して疾走する。メテオは、輝く巨大な翼を背負いながら向かっていく。二人の拳の応酬が始まる。ジャッカルのおーラは一帯を暗闇で染める勢いで広がり、それに応じてパンチの速度も威力も上がっていく。しかし、メテオの翼が放つ光はその闇を呑みこんでいく。光と闇の応酬が拳の応酬と重なっていく。輝く翼が次第に全体を覆い始め、完全にジャッカルのおーラは消し去られた。そして、ついにメテオの拳がジャッカル顔を捉えた。ジャッカルはその勢いで後ろに飛ばされ、ここを勝機と見たメテオは「THUNDER」を起動する。両腕に稲妻が走り、電気を帯びた拳をラッシュを相手に叩き込んだ。ステンドグラスの体が砕け散り爆発が起けると、そこにはジャッカルの人間体が倒れていた。彼は、自分の体を確かめながら、まだ生きている事に驚いている様子だった。

「貴様、あこれはどういう意味だ」

「俺は、別にお前の革命思想を否定するつもりがない。だが、食い物の好き嫌いを革命に理由にするなって言ってるんだ。そんなのはただの詭弁だ。ファンガイア全体の事を考えての革命なら、お前

に儀があつたかもしれないからな」

「憐みはいらん。俺達が正しいか、お前達が正しいか。それを今決着をつけようとした俺の過ちに過ぎない。審判は時代が決める。さらばだ……」

ジャッカルはそう言い残し、自ら体を崩壊させた。自分のためではなく、人と時代が求めるもののために決起していれば、時代は彼の方を選んだかもしれない、メテオは本気でそう思った。だが、この勝利は時代はまだメテオを必要としている事を意味している。悪を討つ仮面ライダーを必要としている。

不破は真夜を東京駅まで送る事にした。一先ずは脅威となる存在を倒したとはいえ、未だ身の危険のある自分が息子達のそばにいるわけにはいかないという判断だった。

「真夜さん、いいの。今会わなかったら、またしばらくは会えなくなるよ」

「会いたいけど、私の感情を優先すれば、あの子たちを危険にさらす事になる。あの子達が色々な事を学び心に刻みつけ、キバの鎧を身につけるにふさわしい者になった時、私が会いに行けばいい。それがお互いの幸せなんだから」

「そう言うもんかねえ……」

「そう言う事もあるのよ。……、ねえ、一緒に食事してあげてもいいわよ」

「え、いいの。もちろんOKだけど、どという風の吹き回し」

「私が付き合っただけで言うんだから、感謝しなさい」

「ありがとうございます……」

不破としても、美しく人間的にもウマが妙に合ってしまう真夜と食事できるのなら、それは望む所である。駅の近くで店を探し、イタリア料理店に入る事になった。パスタやらピザやら、ミラノ風力ツレツやら、二人で食べる量はなかなか多く、その分会話も長くなる。

「そう言えばあなた、最近死刑宣告を受けたとか、そんな物騒な事を言っていたけど、何があったの」

「ああ、あれね。薔薇の画像を送り付けられたり、訳のわからないイカレタ女にバラの花と、彼岸に贈ると言う意味の彼岸花を送られたりと、そんな事があってな。みんな、バラの花って言葉に過敏になっているけど、何も教えようとしない」

「バラの花……。なるほどね、最近戦いの中に身を投じたあなたには、手に負いきれない存在だものね」

「真夜さん、知ってるの。なら教えて欲しいな。誰につけ狙われているのかわからないと言うのは、気味が悪い」

不破の言い分はもつともであるが、真夜は教えるべきかどうか迷っている。しばらくワインを飲みながら考え込むと、意を決して不破にその答えを教える事にした。

「いいわ。その代わり、あなたはもう引き返せない世界にいる事を直に思い知る事になるわ」

「改造人間になった時点で、もう引き返せない人生だよ」

「いいわ。あなたに名刺代わりのバラを贈ったのは、ローゼンクロイツァー。薔薇十字団と言われる存在よ。歴史にも秘密結社として語られているけど、その本体はもつと闇の中に存在する。キバの鎧にも彼らから技術提供を受けた部分はある。それぐらいなら接触可能だけど、その内部に触れようとしたものは抹殺される。あなた、彼らにちよっかい出したの」

「いつの間にか……」

「あなた、本当に運が悪いわね。彼らは、他の様々な秘密結社や人であらざる者にもパイプを持っているけど、それが何の目的なのかはわからない。何しろ、知ろうとした者は消されるんだもの。覚悟して、生き残ることね」

「本当についてないね、俺は。人生はままならないわ」

「人生はままならない、か。いいわね、その達観は。うまくいくと思うから、挫折に傷つく。最初から障害があることが前提なら、落ち込むことなく前向きに生きていける。私のこれからの人生訓にしてみるわ」

それから二人は、食事を楽しむ事にした。映画の話題は不破も負けていないほどん蓄はあるし、音楽に対する真夜の深い知識は不破にとっても楽しいものだった。そんな時間を過ごしながら、二人は終電間際になって駅に向かった。真夜はチケットを購入してきたが、不破は行き先を聞かなかった。真夜のこれからを考えると、その方がいいと思ったからだ。彼女が東へ行くのか西へ行くのかは誰も知らない。

「さあ、これでお別れね。考えてみたら数時間しか一緒にいなかったのに、すごく楽しかったわ。不必要なスリルもあったけど」

「まあ、あれは余計だった。でも、あのクリスタルの鎧の力は、俺が受け取っていい物なのか、正直今も疑問なんだけどな」

「あなたには、私も息子たちもファンガイアも、色々な人たちが共存できる世界を守って行けると信じたから託したのよ。その日が来るまで、その鎧があなたを守るわ。何があってもね。そうそう、私たちファンガイアを扱った仮面ライダーの物語も観たのよ。色々言いたい所もあるけれど、あれはあれで面白かったわ。あんな風に人とファンガイアが共存できる世界が来るといいけど」

「来るさ。その日まで、俺はその可能性を守るよ。やってみせるさ。それだけのものを託されたんだから。あ、そうだ、ちょっとここで待ってて」

そう言う和不破はどこかへ走り去り、しばらくすると何かを手にして戻ってきた。そして、手にした封筒を真夜に渡した。中には、決して少なくはない一万円札の束が入っていた。

「これ、使ってくれ。色々必要になるはずだから。もしかしたら、外国にも足を運ぶかもしれないだろ」

「あなた、ここまでしなくてもいいのに。これ、あなたのお金ですよ。しかもこんなにたくさん」

「いいのいいの。俺、居候の身だし、任務の旅にお金を支給されるけど、使い道もないしなくても困らない立場だから。お金を寝かせておくより、使う方がいい。なら、真夜さんに渡すのも有効な使い方だろ」

「本当に馬鹿な人ね。じゃあ、お礼をしてあげるから、手を出して」

「え。こうかい」

真夜は不破の差し出した手を握ると、そこにキスをした。わずかな時間ではあるが、真夜とじかに体を触れあつた事に、不破は体に電気が走った様に痺れを感じ、体に熱がこもるのを感じた。

「これで、お礼にさせてもらうわ。十分すぎるくらいでしょ。……、もしもあなたがこの世界を守って、私の子供が生きていける世界を作ってくれたら、その時はあなたが私の手に口づけをするか、私があなたの頬にキスをしてあげる。だから、それまでに私を振り向かせるほどこい男になっていなさい。楽しみにしていてあげるからお互い、人生はすごく長いんだから時間は十分にあるわ」

「楽しみにしていて『あげる』か。敵わないな。こんな真夜さんが惚れた男の話も聞いてみたいね。妬けてくるよ」

「それは再会した時にあなたがいい男になっていたら。じゃあ、また会いましょうね、不破龍雄。そして仮面ライダーメテオ。……。あ、ヘンリーちゃんにも元気でねって伝えておいて」

「また会いましょう、真夜さん。男を磨いて待ってるよ」

第一章 完結編 スターシード前編

不破はなぜか落ち着かなかった。独りで部屋にいるのに誰かに見られている、そんな気配がするのだ。窓は閉まっている。零部が持つ偽装ホテルだけに盗聴や盗撮の心配はない。それでも、浴室にいても、テレビを見ていても、読書をしていても、一向に誰かの気配が消えることはない。気味が悪いと言えばそうだし、ストレスがたまると言えば確かにここ最近はいライラする。自分の五感を駆使しても感知できない何かが気になって仕方ない。

気を紛らわすためにゲームをやることにした。何かに熱中しないと落ち着かないからだ。買ったばかりのソフトの封を切り、ディスクをセットしてゲームを始める。初めてやる物だけに、新鮮な気持ちでのめり込み始め、嫌な気分はすっかり忘れてしまった。夜食を食べながら二時間ほど夢中になってプレーしていた時、その空気を破って耳に入ってくる不思議な声が聞こえてきた。

「た・す・け・て」

不破はびくつとして、後ろを振り返ったが、誰かがいるはずもない。元々霊感強い方ではないし、怖い話などは面白おかしく聞くたちなのだが、さすがに自分自身がこんな怪奇体験をすると、ここまで怖いものかと肝を冷やした。空耳だと思いたいが、忌々しい事に自分の脳にはしっかりその声が記録されており、御丁寧に再生もできる。

何度か再生してみると、女の声にも聞こえるのだが、どうも全体的に曇った様な感じがする声だった。まるで、どこか狭いところで話している様な。だが、もっと問題なのは、何故この声が聞こえるのかと言う事だった。また、知らない内に面倒な事に巻き込まれているのだろうか。

「また、厄介事に巻き込まれたのかな。しかも、また女がらみかよ」

普通の女に縁があるのは嬉しいものだが、事に仮面ライダーとして関わる女だと、必ず厄介事が付きまとう。花魁女是最悪のパターナだし、真夜の場合は本人は格別な存在だったがやはり事件に巻き込まれた。そして今度は、幽霊みたいな者に声をかけられている。女難としか言いようがない。すっかりゲームへの興味も失せ、ベッドに体を投げ出し不貞腐れていると、またあの声が聞こえてきた。

「は・や・く・き・て」

不破は頭に枕を当て、その声を無視しようと試みるが、声は耳より脳に直接入り込んでくるような声なので、嫌でもその声を聞く羽目になる。そして、次第にその声に対し怖さよりストレスの方が強く感じられるようになる。

「うるせえ！助けに来てって言われてもどこの誰だか、どこにいるのかわからない奴に助けに行きようがないだろうが」

不破は部屋の中で絶叫するが、そのかすれるような湿っぽい感じのする女のを、夜明けまで聞かされることになった。最悪の夜である。

「吉村さん、いるかつ」

不破は朝食を済ませると、真っ先に科学技術班の責任者である吉村を探して、ラボに怒鳴り込んでいった。改造された肉体を意識したくないため、身体検査すら嫌がってラボに近づかない不破がいきなり怒鳴り込んだできた事に、白衣を着ようとしていた吉村は不意をつかれて、せき込んでしまった。

「ど、どうした不破君。君が朝っぱらからラボに怒鳴り込んでくるなんて。何か気に入らないことでもしかな……。頼む、殴らなくて」

れ」

完全にびくついている吉村に向かって、不破はさすがと近寄ると、凄みを利かせた顔とドスの利いた声のセットで詰め寄った。

「吉村さん、妙な事があったから、俺の脳を調べてくれ。さあ、早くやってくれっ」

不破はそう言うと、作業台に乗っていたプラグを自分の頭に自ら突き刺し、椅子にどつかと座りこんだ。有無を言わせぬその態度に、準備があるなど言い訳ができない事を悟った吉村は無言で電子頭脳のスキヤンの用意を始めた。作業を始める素振りを見せたことで、不破は少し落ち着いた様子を取り戻し、今は聞く耳ぐらいは持つていそうだった。何を調べるかによって作業の順番も違ってくるので、吉村は当たり障りのない様に質問を試みることにした。

「直ぐに準備はできるが、何を調べたらいいんだい」

「声だよ。昨夜一晚、女の声がし続けて参っている」

「女ね……。聴覚の感度が上がり過ぎて、上のホテル内の女の声が入ったとかではないのかい」

「それも考えたんだが、聴覚は問題ない。むしろ、脳に直接記録が書き込まれた、そんな感じなんだ。幽霊としか思えない」

「幽霊、か。なるほどね」

科学者である吉村が、あっさりと幽霊と言っ言葉を受け入れた事に不破は意外な表情をした。真っ先に否定されと思っていたからだ。

「へえ、吉村さんって幽霊は否定しないんだ」

「科学で何もかも解明できないからね。幽霊だって、まだ論理的に証明されていないだけで、完全否定されたわけじゃない。それに、存在すると思われるけどそれを証明できないでいる状態を幽霊と言う事もできる。私はそう考えているがね。君の聞いた声も、聞こえたけれどその正体がわからない。その状態はまさしく幽霊だ」

「何だか、論理的に解説されると、少し安心するよ。幽霊の声が一晚中聞こえるもんだから、イライラしてさ」

「そりゃそうだ。正体不明の物がまとわりついたら、誰だって落ちてはいられないよ。さ、準備はできたからそこに横になりなさい。何なら少し眠るかい。睡眠状態の方がデータの解析がしやすいからね」

「じゃあ、そうさせてもらうよ。毛布も借りるよ」

「それじゃあ、目が覚めたときには、二、三の仮説を用意しておくよ」

不破はベッドに体を横たえ、目を閉じながら深い眠りに入っていた。まともな睡眠は二週間ぶりだった。

そして、いきなり暗闇を破って目に光が飛び込んできた。眠った後に覚醒する時、いきなりスイッチが入った様に視界が開けるので蛍光灯の光すら眩しくて仕方がない。不破は目を瞬かせながら体を起こすと、そこには吉村の他に滝も同席していた。報告を受けて、データの解析に立ち会ったのだろう。

「何だって。お前、心霊体験をしたそうだな」

「面白半分に聞かないで欲しいね。一晩中、幽霊の声を聞くのがど

んな気持ちか、体験させたいね」

「丁寧に断りする。しかし、解析の結果はあまり愉快な事態ではなさそうだ。吉村、話してやれ」

吉村は、検査結果をまとめたレポート用紙を手にしながら、椅子に座りながら不破に対して説明を始めた。

「まず、結論から言うと、君の聞いた声は幽霊じゃない」

「へえ。それは安心と言いたところだけど、正体がわからないんじゃない、まだ幽霊だろ」

「まあ、急がんでくれ。正体はおおよその察しはついているんだが……」

「もったいぶらず言つてよ。気持ち悪いぜ」

「声の正体は、君の同族だ。つまり、同タイプの改造人間。同タイプどころじゃない。分身と言つていい」

「俺の分身……」

にわかには信じがたい結果であつた。確かに色々な改造人間には出会ってきたし、彼らは同類と言える存在だった。同タイプなら、仮面ライダーと言う同じような存在にも会つたが、今度の様なことはなかった。では、分身とは一体どういう意味なのか。

「不破君、メテオに完全なシンクロをできる存在は世界でヘンリーただ一機だ。通信だけなら我々もできるが、それは君の特殊な周波数に『合わせた』結果だ。最初から完全に一致した周波数でシンクロできるのは、君の主要戦力であるジョン・ヘンリーと言うマシン

のみ。そのはずなのに、君が昨夜聞いた声は、完全に君の電子頭脳の持つ波形と一致している。これは、君と全く同じ存在でなければ、ありえないことだ」

「でも、そんなのはありえないだろ。俺をショッカー基地から連れ出した時、色々な資料は持ち出したわけだから、同タイプがいるなら、そんな大事ことは絶対に書かれているはずだし。でも、分身がいると考えないと、幽霊の正体は掴めずじまいだ」

「不破君、部長とも話し合ったんだが、君の設計はそもそもショッカーの技術で作られたものなんだろうか」

「どういう事」

「君はローゼンクロイツァーと言う組織を知ったんだよね。もしもだ、彼らが大まかな設計プランやコンセプトだけを伝えて、ショッカーに君を作らせたとする。だが、もし私がローゼンクロイツァーの技術者だとしたら、それで終わりと言う事にはしない。その設計モデルの可能性はとことんまで追求し、試作モデルを何個も重ねた上で、実用機、つまり完全体を完成させたいからだ」

「なるほど。色々な設計者に構想だけ伝えて、色々な発想や技術を比べる。色々な業界でやってる事だから、納得できるね」

「恐らく君は、ショッカーと言う組織が提示した一つのモデル。だが、ここ一つに発注すると、技術のブラックボックスに当たる部分に気がつかれる可能性がある。そうなると考えられるのは、複数の組織に発注している可能性が高い事になる。幽霊の正体は、君の設計コンセプトに近いモデルがいて、その脳波と共鳴しているのではないかと言う仮説を組み立てられる」

不破は、うーんと唸り、腕組みをして考え込んでしまった。自分と同類がいるなら、普通は歓迎すべきことで嬉しいものだ。だが、自分の体の事を考えると、同類と言うのは想像するのは気が進まない。むしろ、ぞっとすると言うか、怖い感情の方が強い。だが、あの女の声は助けを求めていた。その声に嘘はない、不破はそんな気がするのだ。同族故の根拠のない願望と言うより、自分の意思で信じられる、そう思えるのだ。

「そうになると、助けを求めている女を放っておくわけにいかないでしょ、仮面ライダーとしては。発信源も見当はついているでしょ」

「そりゃまあ、ついているがね……」

吉村は口を濁して、はつきりと答えない。もどかしい不破は、もう一度問いただそうとしたが、滝が間に入り、深刻な顔を見せて語りかけてきた。

「不破、お前にローゼンクロイツァーが目をつけ始めた。お前のルーツもそこにあることは濃厚だ。つまり、お前の同族も奴らが絡む存在だ。その存在が本当に助けを求めているのかもしれないし、畏れと言う可能性もある。ここまでは理解できるな」

「ああ……」

「どちらにしても、ローゼンクロイツァーが絡む確率が高い。となると、我々としてもいつも以上の準備をしなければいけない。危険は高いぞ、その覚悟はあるか」

「覚悟はあるさ。誰も巻き込むつもりはない。俺の片割れを助けに行くんだ。俺の問題だ」

滝は、世話の焼ける奴だと言う表情を浮かべながら、電話の受話器を取り、誰かに向かってラボまで来るように命じている。そして、不破に向き直ると目をまっすぐに見据え、真剣な顔で口を開いた。

「不破、俺は45年前に初めて仮面ライダーに出会った。滅茶苦茶にされた体の中に、どうしようもなく人間らしい心を宿し、苦しみや悲しみを浮かべた顔を仮面に下に隠して戦う奴にな。そうして、同じような奴をずっとみてきた」

「知ってるよ。今さら聞かせられなくてもわかってる」

「とうのお前が仮面ライダーだからな。お前をはじめとする仮面ライダー達は、今時変わってるよ。絶大な力を持ちながら、人間の心を保ったり、それを弱い人間に振るう暴力に帰る奴らは一握りしか現れなかった。だがな、悲しい事にその一握りの存在が人類の大半なんだ。そして、お前たちライダーみたいな心を持った奴が少数派だ。それが現実の世界なんだよ。だから、誰も理解者のいない孤独なお前達を助ける組織が必要だと痛感した。こっちの世界に足を踏み入れた奴の中に、俺と同じ賛同者は少なからずいた。彼らは、戦うための名目を利用して、仮面ライダー達を支援していった。孤独に耐え、自分に眠る凶暴な力と向き合って、誰にも称えられるこのない戦いを続ける者達を支えている。俺が零部を作ったのも、仮面ライダーの思いを支え、心の火を消したくないからだ。だから、お前の心の火も消すわけにはいかん」

「滝さん……」

「お前が同類を助けたいと言う気持ちは人間らしい心だ。だが、それを感情のままに暴走させるのを放っておけば、果てしない妨害にあったお前はいやがうえにも兵器化していく。そんなことをさせないために、この零部は存在する。ここにいる連中は、仮面ライダー

の崇高な意思を守るために命をかけられる奇特な連中だ。マイノリティ同士、気が合うだろ。今回のお前の行動にも追従する」

滝の言葉が終わるのに合わせてラボのドアが開き、原隊長と斎藤情報分析官が部屋に入ってきた。彼らの姿を確認した滝は、毅然とした口調で命令を伝えた。

「これより、ローゼンクロイツァーが関わると思われる検体Xの回収、並びに救出に向かう。原は14人体制のメンバーを組め。重武装でいくぞ。今回は俺が現場で指揮をとる。留守の間は、斎藤が部長代理を務める。吉村もここで本部を守ってくれ。ヘンリーは車両に搭載して現場に運ぶ。不破、文句は言わせん」

「敵わねえな、滝さんには。感動して、思わず涙が出そうだわ」

「涙を流す気持ちは忘れるなよ。吉村、声の発信源を聞いていなかったな。場所はどこだ」

「四国です。詳細はさらに絞り込む必要がありますが、そちらはお任せ下さい」

その日の午後には、零部の諸湯は三大編成で四国へ向かった。高速道路経由の長時間移動だが、タイムリミットがある様でいて、はつきりしない道中である。

「高速バスだと、新宿からどれぐらいなの」

「約10時間だ」

「着くのは深夜かよ、原さん」

「お前、夜は寝ないんだろ。深夜もクソもないだろ」

「そりやまあ……」

原の単刀直入な物言いに、不破も反論できない。だが、それくらいの時間がないと、声の発信源の特定ができないのも事実だ。こうなると、長い旅を続けるしかない。不破は原と同じ車両に乗る事になったので、必然的に二人で話す時間が長くなった。

「不破、一つ訊いていいか」

「何だい、原さん」

「まあ、その、何だ。改造人間のお前がだ、なんと言つか、同類、いや、仲間と言える存在をこれから見つけたとしたら、どんな気分だ」

「幽霊の事かい。まあ、仮面ライダーの諸先輩方にはあってきたけど、どこか他人事みたいな気がしてさ。どこか見上げる様な、一線を引かれているみたいだ。けど、もし幽霊がお仲間だとしたら、これまでとは違う感じだろうな」

「どう違うんだ」

「目覚めた時の事、俺はまた誕生した、そんな風に思うようになった。だから、幽霊が同じように目覚めたら、そいつは女らしから妹の様な気がするんだ。改造人間なんて価値観を共有できる奴なんてそうそういない。でもさ、俺と同じプロセスで目覚めたとしたら、こっち側の世界では兄妹と言えるかなって。都合良すぎるけどな」

「まあ、向こうの同意が必要だろうからな。なるほど、価値観を共

有できる奴か」

いつになく原は、物憂げな表情を浮かべた。いつもの勇ましく、冷静沈着でいて、どこ下方けつのような所もある彼とはどこか違うなと、不破は思った。その事に、不破は興味を持ち、思い切つて原の気持ちを少し見てみたいと思った。

「どうしたの、原さん。随分しんみりした顔してさ」

「ああ、お前の話を聞いている内に、俺も同じことを考えていた時期があつた事を思い出した。お前には、俺が零部に入りたいきさは話していなかったな」

「そう言えば聞いていなかったな。原さんみたいな腕利きはどんなキャリアがあるんだい」

「腕利き、か。ま、普通の人間、普通の職業じゃないな。俺は、元々SAT隊員だ」

「へええ」

不破は驚きと同時に、当然だろうなと思った。原の指揮能力や戦闘に関する知識を間近で見れば、どう見たって実戦経験豊富としか思えない。そして、平和憲法を歌うこの国でそう言ったスキルを身につけられる馬と言うと、必然と限られてくる。警視庁の特殊部隊に籍を置いていたと言うのは、ある意味予想できる範囲内と言える。驚いては見たものの、原さんの仕事を見てれば納得だね」

「まあ、世間にこんな荒っぽい仕事をこなせる奴なんてそうはいない。だが、俺の場合は、戦闘スキルだけじゃない。この世界に来ざるを得ない事件に遭遇したんだ」

「それって怪人、黒子がらみじゃ……」

「察しがいいな。どこの世界にも闇に葬られることはあるし、それは異存はない。知りたい奴がいれば自分と調べればいいんだ。何でも公表して、それつきり責任を取ろうとしないジャーナリスト気取りは反吐がでる。それは特ダネ狙いの飛ばし屋だ。そんなのと一緒にしたら、本当のジャーナリストに申し訳ない。話がずれたな。一応、警視庁のS A Tの出動事件は公表されているものはある。だが、数年に一回の出動のチームに潤沢な予算が下りる程、公務員の世界はおいしくない。使っているからこそ、予算が出るんだ。意味がわからないか。要するにだ、公開されている出動記録の合間にも、人知れずS A Tが片付けた事件もあるんだ」

「裏の世界って言うのは、どこにでもあるんだなあ」

「表があれば裏があるさ。俺のS A Tとして最後の仕事は、廃ビルに立てこもっていた凶悪犯、いや、テロリストの類いの殲滅だった。逮捕じゃない。射殺を前提とした任務なんて、日本じゃないと思っているだろうが、知られていないだけさ。そういうのは、暗い闇の中に葬られるからな。俺は、そういう事件に投入される班にいた。いつものように俺達は5人単位で突入した。だが、暗いビルの中に潜んでいたのは、テロリストなんかじゃなかった。黒子さ。上は一杯かまされて、黒子のいる現場に誘い込まれてしまったんだ。いや、一杯かまされたんじゃない、出来レースだったのかもしれない」

「出来レースって、まさか切り捨てられたってことか」

「関係者は全員死んだ。存在しないはずの射殺グループを消しておくにはうってつけの手段だしな。指揮官も黒子から逃れることはで

きなかった。突入班も俺を残して全員死亡。俺は必死に逃げた。銃の弾もつき、必死に逃げたが、逃げ切れるはずがない。もう駄目だと思った時、助けてくれたのが部長と、どのタイプか知らないが仮面ライダーだった」

「それからの付き合いなのか」

「まあな。だが、俺の存在は消されたんだ。失踪事件として扱われ、いつしか戸籍も抹消された。怪人を差し向けられたら、家族は必ず消される。この国の政府には、秘密結社と関わっている奴が少なからずいる。政治家も官僚も役人も含めてな。そんな中で、俺が生きていける世界はない。名無しの権兵衛として、戸籍もなく、帰る家も、語るべき友もない。それを拾ってくれたのが滝さんだ。今の名を与えられて、新しい人生を得た俺は、仲間を殺しすべてを奪ったクソつたれと戦争をする事にした。黒子はもちろんだが、てめえの手を汚さずにも何も知らずに暮らしている人を簡単に消す連中の力を奪ってやる、そんな戦争だ。だがな、俺はしょせん人間、超人にはなれない。限界はあるんだ。ただ、俺と同じことを考えている奴らがいる事を知った」

「滝さんと、仮面ライダーか」

「ああ。部長とは意気投合し、目標も一緒だった。部長が頭脳、俺が手足だ。だが、仮面ライダーと一緒に組むことはなかった。組んで一緒に戦いたかった。世間から切り離され、人知れず命懸けの行為を続ける連中と一緒に戦い、語ってみたかった。俺は、彼らに自分と同じ匂い、仲間を感じた。そして、お前と会ったんだ」

「なんか照れるね、そう言われると」

「嘘は言っていない。お前がその幽霊を仲間とりたい気持ちがよくわかる。同じ価値観を共有しえる存在かもしれないんだからな」

「俺も、原さんが随分近い存在に思えるよ。何だか、一緒に飲みたい気分だね」

「まっただ。うまい酒が飲めるかもな」

二人は、今までで一番親しく話し合う子ができ、自然と笑い声が出る。本当にこの中なら、うまい酒が飲み目そうな雰囲気であるが、彼らは作戦途中であるため、それはできない。これから立ち向かう任務の事を考えると緊張の色は隠せないが、それをバカバカしい話で気を紛らわせながら、時間を過ごしている。

「四国行ったら、何うまいものあるかな」

「やはり、うどんだろうな」

「いいねえ。ぶっかけうどん、好きなんだよなあ」

「着くのは深夜だ。ちゃんとした店は日中しかやっていない。諦める」

「なんか、うまいもの食わせてくれよ……」

半ばボヤキながら、零部の車は夜になり、瀬戸大橋にまで到達した。長時間、車に閉じ込められるのは誰でも苦痛だ。ましてや、細かい地点は特定されていない。そろそろ断定してもらわないと、立ち往生する羽目になる。

そこに、本部からの連絡が入った。恐らく、やっと吉村が声の発信源を特定したのだろう。原が、車両の無線機をとり、吉村と話し

始める。

「こちら、一号車。本部どうぞ」

「吉村です。電波の発信地は特定されました。高知県の足摺岬ですね。近くまでいけば、メテオの電子頭脳と再び共鳴現象が起きるかもしれません」

「了解。では、これより高知へ向かいます」

その会話を聞いていた不破はうんざりしていた。自分達は今は徳島にいるのだ。足摺岬はその対角線上に位置するため、今度は四国を半周する羽目になるのだ。

「冗談じゃねえよ。まだ、だいぶかかるじゃねえか」

「四国にも高速道路はある。お前が想像する程時間はかからん」

「俺の頭には全世界の地図と路線図が入ってるんだ。高知の高速は途中で切れてるぐらい知ってる。機動力ねえな、この部隊は」

「それは俺も同感だ。大型ヘリでも配備してもらいたいが、なかなか予算が下りないようだ」

「なんて旅だよ。ああ、うどんでも食いてえな……」

不破の愚痴は、絶好調であった。その愚痴を無視するかのように、車はひたすら走り続ける。途中で弁当などを調達しながら長い道のりを走り続け、ようやく高知県の足摺岬に入ってしまった。

足摺岬は、高知県の南西にある半島の先端で、八十八ヶ所三十八番札所の金剛福寺のある場所と知られている。最も、最近ではネットの広まりと共に、心霊スポットと言うありがたくないマイナスイ

メージまで与えられてしまっている。不破達はいったん外に出て、太平洋を見渡せるがけの上で腰を伸ばし、潮風を体に一杯に浴びていた。

「いやあ、絶景だねえ。仕事じゃなければ最高なんだけどね」

「それを言うな。もう作戦は始まっている」

「わかってるよ、滝さん。で、俺は何をすればいい」

「まあ、ダウジングだな」

「まさか、この足摺岬を」

「下手すりゃ、足摺『半島』だ」

まさか、滝はこれから広大な広さの足摺岬で、当てのない宝探しみたいなやり方で、声の発信源を探ろうと言うのだろうか。焦った不破は、顔色を変えて滝の前に回り込んだ。

「冗談はやめてくれ。長旅が終わったら、今度はダウジングでこの辺りを歩きまわるって言うのか」

「落ち着け、不破。お前は歩く必要はない。座っているだけでいい。お前の脳波をヘンリーを使って増幅し、この一帯に発信する。奴さんはお前と同じ周波数の脳波を持っているなら共鳴して、また何かメッセージを伝えてくるはずだ」

「あ、そういうことね。ならいいよ」

「じゃあ、さっさと座れ。おい、緒方。患者から了承が得られた。ヘンリーを連れて早く始めてくれ」

滝のユーモアあふれる指示に従い、緒方がヘンリーを数本のコードと機材を持って近寄ってきた。不破は簡易の椅子に座らされ、頭にプラグを差し込まれる。そのコードは何かの機材につながれ、そこから伸びるコードがヘンリーに差し込まれていく。

「不破さん、痛くないですからね。リラックスしてください」

「胃カメラ飲むんじゃないぞ、緒方」

「歯医者のもりだったんですけど」

零部で最も不破と歳の近い緒方は、冗談たっぷりで作業を手際よく進めていく。やがて、電子頭脳が外部おハードと繋がるのを不破は感じた。

「俺はこれからどうすればいいんだ」

「その女の幽霊に頭の中で話しかけて下さいよ」

「何をさ」

「『お名前は』とか、『お歳は』とか、『今。どこにいますか』とか、色々あるでしょ」

「女に歳はまずいだろうな。ま、どこにいるか訊いてみるよ」

「じゃあ、始めます。こっちで増幅して、ヘンリーが発信します」

不破は前を閉じ、念じ始めた。どこにいるのかも、顔も知らない相手に向かって呼びかけ続けた。その念が電子頭脳によって信号に変換され、機材によってより鮮明になり増幅され、ヘンリーが一帯

に向けて発信し続けた。

一時間近く、その作業は続いた。あれだけ長いドライブを嫌がっていた不破が、沈黙を保ったまま呼びかけを続けるのは、もしかしたら自分の同族であり理解者たりえる存在を助けたい、その一念があるからかもしれない。そして、その念が遂に通じた。

「た・す・け・て」

ヘンリーを通じて、零部の面々は初めてその女の声聞いた。しかし、途切れ途切れで抑揚も感情もなく、相手の姿が思い浮かべる事は難しい。

「不破、このままでは場所がまだ絞り込めん。もっと呼びかけろ」

「今やってるよ、滝さん」

不破は、黙って作業を続けた。相手に話しかけ、自分の言葉を飛ばす。

助けに来た。だから教えてくれ。どこにいるんだ

不破の粘り強い必死の呼び掛けに、女は再び応えてくる。反応が早く、積極性が出始める。

「は・や・く・き・て。わ・た・し・は・こ・こ」

女は言葉と共に、GPS情報を送ってきた。やはり、仮面ライダータイプの改造をされているのか、いやに早くヘンリーにアクセスできるなど滝は訝しかった。ヘンリーは情報を解析し、位置を割り出す。

「これは……、白皇山です。足摺スカイラインを北上した所に、発信源があります」

「よし、よくやった、不破、ヘンリー。移動を開始するぞ」

滝は、零部に指示を出し、移動準備を始めさせた。だが、不破はまだ座り込み、まだ、女にアクセスしようとしている。

「どうした、不破。まだ、何か言ってくるのか」

「ああ。もうすぐヘンリーが音声に変換する」

「変換完了。……、は・や・く……、だ・れ・か・が・ぬ・す・み・ぎ・き・し・た」

「何だっ」

滝の顔は青ざめた。女を回収しようとしているのは自分達だけではない。どう考えても、真っ当な存在ではないだろう。さらに、メテオとシンクロできるタイプとなると、吉村の仮説では、シヨツカ―にメテオの開発を発注した存在と同じ可能性がある。そして、不破にマークを始めたローゼンクロイツァー。盗聴したのは、メテオを死を宣告した彼らの可能性が非常に高い。

ローゼンクロイツァーの存在は、滝も知ったのはここ最近である。そのあまりにも掴みどころがなく、そこ知れない実態なき組織でありながら、彼らの意思はあらゆる組織、そして社会の至る所にちりばめられていることが明るみになるにつれ、自分達がとんでもない組織に喧嘩を売っていきことに気がつき、滝は零部の活動に一層の慎重を期すことになった。そして、今、その組織と接触しようとしている。滝は極度の緊張を感じ、不破にもこの作戦の危険性を伝える。

「不破、わかっているとは思いますが、盗聴したのは、ローゼンクロイツァーだ、恐らくな」

「いや、滝さん。恐らくじゃない、絶対だ。奴らは、俺に直接コンタクトをとって、死刑宣告をした。いつでもどこであいつらに遭遇して

もおかしくない状況で、この盗み聞きだ。100%奴らだ」

「あいつらをなめるなよ。組織の怖さはある程度把握しているが、単体の人間の戦闘力はわからん。お前の戦闘力を発注し、実験するような奴だら。相当進んだ改良とスペックを持っているだろう」

「死の臭いがしてきたな」

「馬鹿な事を言っとな、と言いたいところだが、否定できんな。死を意識して望む必要がある。だが、死を覚悟するな。何とか生き残れ、それをお前の覚悟にしろ。そして俺の命令だ」

「わかったよ……。俺だって無様な死に方はしたくないし、まだ生きていたいのが本音だ。……、行こうぜ、滝さん。死ぬのと生きる、いつだって五分五分だろ」

「フツ、わかっていないじゃないか。だが、俺はいつも生きる方に賭けるぞ、有り金を全部な」

「俺も、さ」

不破は頭からコードを引き抜き、ヘンリーに跨って零部と共に移動を開始した。彼を含め、零部全員の顔から表情が消え、ただ口を真一文字に結び、目にはギラギラとした光が宿っている。

第一章 完結編 スターシード 後編

ヘンリーが割り出した声の発信源と思われる白皇山。その登山道の入り口に零部は到着した。登山道の周りには木々が伸び、日光がさし込むのを幾分和らげ、少し空気はひんやりしている。そこに漂う雰囲気は、どこか霊的なものはを感じてしまうのは、四国という土地柄だろうか。何しろ、入り口がとり位なのだ。

「何だか、いかにもって言う入口だなあ」

「お遍路とか心靈スポットに事欠かない土地だ、余計にそう思ってしまうな」

「原さん、やつぱ霊とか実在するのかなって言う気がするよ。改造された半分メカの俺でも、霊気を感じるもの」

「そりゃ、相当だな」

原は苦笑いを浮かべながら、部隊に指示を出し、二手に展開しながら搜索にあたらせた。不破はヘンリーと共に参道を歩きながら、引き続き声の発信源の絞り込みを行う。この探索を行っているのが自分達だけならゆっくり探せるのだが、敵も同時に探している以上のんびりはしてられない。

不破お呼び掛けは続くが、相手の声はだんだん小さくなってきたが、現在位置を示す電波のようなものが代わりに発信される様になった。

「どうして声じゃないんだ、ヘンリー」

「多分、声だと僕達の電波に変化が生じて、敵に探知される恐れがあるからじゃないかなあ。この電波なら、ただのビーコンみたいな

ものだから、会話内容がわからないし、ここ一帯に発信される分、かく乱できる。でも、個別識別信号を持つ僕らには、向こうの事を把握しやすい、ってことかな。女性の思惑がわからないことには断言できないけど、相手もそれなりに考えているんじゃないかな」

「もしそうなら、救助を待っている奴は、俺より相当上手だな。俺にはそんな戦略は考えつかない」

「もっと学びが必要だね」

「一言余計だ」

「ハハハ、嘘は言っていないよ。お、電波の強さが微妙にこっちが強いな……」

ヘンリーはうつそうと草木が生い茂る林の方に向き直った。探しづらそうな気がするが、目的地に近づいている分樂にはなるはずなのだが。不破は、原を呼び、方角を伝えた。原はそれを聞くと、部隊を一旦集めて、今度は横一杯に展開して搜索を再開させる。

「何とか夕暮れ前に基地を発見したいな」

「こんなところで夜を迎えるなんて、さすがに嫌だな」

二人はそういいながら、施設の入口を探す。そう簡単に明る入り口ではないのは予想できるので、地面の下に空洞がないか、氣に入口が偽装されていないか、とにかくしらみつぶしに探しまわる。

「不破、俺は四国に着いてから、考えている事がある」

「何だい、原さん」

「俺達が探している施設だが、何故、建設地をこの四国を選んだのかということだ」

「立地条件が良かったんじゃない」

「まあ、そうだろ。その事を考えてみたんだが、この土地は日本でも最も宗教色の濃い所だろ。それが関係している様な気がしてな」

「宗教色と言うと、お遍路の事か」

「ああ。元々四国は都から離れた辺境だった。そのため、俗世間から離れた修行の地となって、修験者が修行する場になっていったんだ。要は、一般人より、そういう人々が集まる所になった。もしもだ、秘密組織がその時代から居るとしたら、隠れるには格好の地じゃないか」

原の発想は突拍子もないものだった。だが、それは鼻で笑って済ませることができない、不思議な響きを持つ説だった。不破は、その話をもっと聞きたくなってきた。

「まあ、そんなに昔からあったと言うものではないのかもしれない。だが、お遍路という習慣、システムも奴らにとっては利用しがいのあるものだった。今でこそ観光化しているが、昔は神聖な修行であり、宗教行為だ。中には事情があつて故郷を追われ、帰れない人もいたのだから、今とはあり方がまるで違うんだ。つまり、一般社会とは少し違う世界のものということになる」

「一般社会とは違う、か」

「黒子や秘密結社が好む環境だろう。これはあくまで仮説だ。もしもだ。敵が俺達の予想を遥かに超えて昔から存在したとしよう。こ

の四国に根城を築いたのは、活動するのに格好の場所なんだ。霊験あらたかな場所だ、こういう聖地って言うのは、ただでさえ精霊や山の神がいると言われている。人がめったやたら踏み込む場所じゃないから、隠れる場所には事欠かない。構成員の往来にしたって、お遍路に紛れ込めば、白装束の下は検められることもないし、どんなに大人数がいてもばれやしない。逆打ちをすれば、すれ違う回数が多くなり、情報の伝達も簡単にできる。俺達の敵は、近代社会の産物じゃなく、もっと昔から存在するものじゃないかと俺は思うんだ」

「歴史をバツクに持つ所は強さが続くからね。中国にしたって、何度も王朝や体制が変わっても、世界でのポジションはしっかりと確保している。日本だって、文字文献がないだけで、実際の所は結構長い国だからな」

「そうになると、ローゼンクロイツアーも名前は中世から現われているが、実体はもっと昔からあるのかもな」

「敵は強大かつ深い、か。気が滅入るね。女を助けて仲間になってくれれば、心強いんだが」

「まっただ」

口の様なことを言い合いながら、不破と原は必死に施設への入口を探す。地形から考えても、施設は地下にあるのは間違いない。確実に階段やエレベーターの様なものが設置された入口があるはずである。場所は絞れてきたとはいえ、入口はどのように偽装されているのかわからない。時間と体力がどんどん消費されていく。

だが、不破はある事に気がついた。別に視覚で負う必要はない。施設は地下にある。なら、地面を叩いて反響があるかどうかを自分

の耳で確認すれば、探索は容易になる。

さつそく、腹ばいになって耳を地面に密着させる。そして、手で地経を軽く叩きながらあちこちを這いまわる。

皆、不破の機構に目を丸くしていたが、その意図をすぐに理解した。不破が、地下の反響を聞きやすくするため、滝は全員の作業を止めさせ、そこから一步も動かないよう指示を出した。沈黙の中を、不破は警察犬のように地面に密着して探索を続ける。一時間以上もその作業を根気よく続けるうち、次第にある一点に不破の体が近づいていった。

不破の体は確実に巨大な岩に近づいている。この白皇山には巨石信仰があるため、巨大な岩があちこちに点在している。ごつごつした岩ではなく、研磨されたであろう整然とした形そ配置があるので、長い時をかけて育まれた信仰なのだろう。その信仰の対象である岩の場所に不破は近づき、一心不乱に耳を地面に近づけてそこに集中していた彼の頭がごつりと岩にぶつかった。

「滝さん、多分この岩が入口だぜ」

「この、信仰の対象を捜査しろって言うのか」

「ただの人工物だと思うよ。この下はかなりの空洞だ。この岩はエレベーターかなんかの入口だね」

「そこまで言うなら信じてやる。祟りはごめんだぞ」

「じゃあ、手えつけるよ」

不破はそう言うと、岩をあちこち叩いたり、押したり始めた。巨石に入口があると睨んでいるためだ。思考錯誤している内に、不破は何かを決心したように表情を固め、岩を一気に押し始めた。巨大な岩がこすれ合う音を立てながらスライドし、下から金属の人工物

が現われた。

「ビンゴ、か」

原はそう呟きながら、不破の隣に駆け寄り、その構造物を眺めている。入口を見つけ、次に何をすべきかを考えあぐね、不破は原に侵入する手段の意見を求めた。

「原さん、これ、どう思う」

「地下に施設がある以上、エレベーターの入口なんだろうが、これだけ入口をいじっても反応しない。……、動力が止まっているのかもしれないな」

「そうになると、穴でも開けて中に入るしかないか」

「中に入れば、動力の問題も解決できるかもしれないからな。突入口は部下達に任せろ。おい、この入口に侵入口を作るぞ」

原の命令にすぐさま隊員達は作業に取り掛かる。バーナーやグラインダーなどで鉄を削り、火花を散らしながら人が入れるだけの穴が数個、鉄板に開けられ侵入口ができた。作業が終えた時、完全に日没になり、辺りは暗闇に包まれている。いよいよ、作戦の本丸である内部の調査と、幽霊の正体の回収作業に入ることになり、滝が原達以下の零部の部員に命令を下す。

「これより、地下施設に侵入。救助を求める物の詳細の割り出しと回収、施設内の調査、場合によってはこの施設を廃棄する。他の組織もここを狙っている可能性が高い。出入り口の防衛に半数を地上に残す。ヘンリーは通信の要になるため、地上に待機。残りの者が内部に侵入する。以上だ」

命令を受け、すぐさま隊員達が配置につく。地上に残る隊員達は、

辺りへの警戒と出入口の確保のため、辺りにレーダーを配置して警戒態勢に入る。侵入部隊は、穴からロープを投げ入れ、端を固定して、それを伝って次々と下方に下りていく。不破も先頭を切ってロープを伝っていく。そばには、太いワイヤーロープが張られていることから、ここはどうやらエレベーターシャフトだというのが推察される。どれだけ深い穴かわからないが、今の所、穴の終点は見えてこない。慎重に、ロープを辿って下に降りていくと、やがて、不破の視界に何かの構造物が見えてきた。

「原さん、エレベーターが見えてきた。とりあえず、ここが終点の様だ」

「そうか。出来れば、何階でもいいからフロアの入口に接してればいいんだがな。中途半端な位置に止まっていると、また入口を探すのが面倒になる」

「なあに、そうだったら、俺が壁を砕いてやるよ」

「頼もしい言葉だ」

そんなやり取りを繰り返しながら、彼らは、エレベーターの上に降り立つ事が出来た。作業用のエレベーターなのか、かなり大型の構造だ。天井を破り、そこから内部に入ると、不破はエレベーターのドアを左右に広げた。すると目の前に、フロア側のドアが現われた。どうやら、途中で止まっているという面倒な状況は避けられたようだ。さらにそのドアをこじ開けると、広大なフロアが姿を現した。

内部は、非常に広大で、太いパイプが何本も走り、辺り一面に圧迫感を与えている。どれだけ長い期間密閉されていたのかわからないが、空気があまり清潔とは言えず、やや息苦しく思えた。

「結構本格的な施設だな」

「お前を助けだしたショッカーの基地も、こんな構造だった。さあ、急ごう。あまり、長居はしたくはない場所だな」

「俺も同感」

彼らは辺りを警戒しながら、慎重に進んでいく。だが、彼らは次第に、電灯で照らしたされるこの空間に漂う、妙な空気に気がついた。

「不破、この施設、壁から配管に至るまで一面が黒だ」

「ああ。どうなってるんだ。まさか、火事でもあったのか」

不破は壁に触れて、手をこすつてみた。すると、壁からは白い壁面が現われ、逆に手は真っ黒に染まった。壁にすがついていた証拠だ。

「やっぱり火事があったわけだ。それにしちゃ、焼けただれた印象がないのが不思議だな」

「一瞬の内に高温にさらされた、そんな感じだな。ただ、焦げ方が均一なのが妙だ。火元に近づくほど、焦げ方がひどくなるもんだが出火元はどこだろうな」

彼らはさらに奥に進み、廊下に入った。暗いため、恐怖感と圧迫感が倍增される。途中のドアを慎重に開いていくが、特に異状がなかった。だが、怪談の向かいにあるドアを開き、中を照らした時、彼らはぎょっとした。そこに焼死体があったからである。

焼死体といっても、もう骨格しか残っていない。その骨には、不自然な輝きがあったことから、金属骨格を持った改造人間、或はその系譜にある人ではないものであることが分かった。

「おいおい、派手に火葬されてるな。しかし、きれいな骨しか残らないほど焼かれるとは……。不破、お前ならどう思う」

「気の毒だっと思うね。まあ、冗談はさておき、骨しか残らないなんて、自分の体に例えてみても、異様だね。火災は、一瞬で炎が襲い、そのまま消えた。改造人間の体を焼失させるとなると、並みの火じゃないな。俺が扱っている様な奴じゃないと……」

「お前の『EXPLOSION』か。可能だろうな。幽霊は、お前と同タイプの可能性があると言ったな。まさか、そいつがやったんじゃないか」

「まさか。助けを求める奴がこんな事を出来るなら、自分で助かるだろう。となると罠か。だけど、そうだとすれば、とつくに俺達は黒こげだ。わからねえな、本人に会うまでは」

「ここで問答しても仕方ない。班を二つに分けるぞ。一つはこのフロアを引き続き捜査。もう一つは俺と不破と一緒にしたのフロアに向かう。非常用の電源を見つけたら、動力を確保しろ」

二手にわかれた班は、それぞれに調査を続行する。下のフロアは、やや廊下も広くドアが少ない。一つずつドアを開けていくが、やはり重要なものはなく、所々に改造人間の焼死体が転がっている。次第にその光景に皆が辟易としてきた。そんな気分が漂い始めた頃、廊下の先に、少し変わったドアが見えてきた。他のドアと違い、左右に開く自動ドアのようで、その姿は病院の手術室のようだ。

「原さん、どうやらあれのようだな」

「恐らくな。全員、前進だ」

不破達はそのドアの許に駆け寄った。電力もないため、黒焦げたドアは全く動く気配がない。埒が明かないため、不破が力任せにドアをこじ開けた。すると中から、異様な臭いが立ち込め、辺りに黒焦げの骨格が散らばり、燃え尽きかけた様々な機械が散乱していた。そして、部屋の中央には、なぜか動力を維持し低い機械音を唸らせながら稼働する、カプセル状のものが鎮座している。

そのカプセルを見つけた瞬間、不破の頭に、あの声が入り込んできた。今までよりかなり鮮明で、より人らしい声で脳内に響き渡る。ここから出して。私はここにいます。

不破はカプセルに駆け寄った。中を確認しようとするが、窓の様なものがなく覗き様がない。思い切ってカプセルを開けようと鍵になる部分を探し回るが、それを原が制した。

「よせ、不破。ここでこのカプセルを開けるな」

「何でだよ」

「よく見る。この施設が沈黙しているのに、このカプセルだけは、別電源が確保されている。もし、この電源がなければ、この中にいる奴は生きていなかった可能性がある。だから、別電源なんだ。つまり、生命活動をこの機器に依存しているかもしれないんだ。お前の起動だって、途中で勝手にお前が目覚めたわけだが、実際は慎重を期してやったんだ。あの時はカプセルから出しても大丈夫だと判断できたが、今回はそれを確認する余裕がない。電力供給がこれほどしっかりとっていると、蓋を開けて切り離れた瞬間お陀仏って言う事も考えられる」

「くそ、この状態で運び出せってことか」

「そういう事になる。第一、この状態で中にいる奴が覚醒している

なら、すぐに自力で出るだろ。お前に助けを求めてきたってことは、お前の助力がないと不可能だと判断したからだ。つまり、このカプセルから出ることができない、そう推論できるな」

「さすが冷静だな、原さんは。でもどうやってこいつを運び出す」

「非常用電力を確保していたんだ。こいつはそれだけ価値が高い代物と言う事になる。そうなると、避難用に予備電源を接続して外に持ち出せるはずだ」

原がそういった瞬間、施設内に電源が戻った。原因不明の火災のため、電灯があちこちで破損しているが、行動するには十分な明るさだ。

「よし、必ずどこかに予備電源としてバッテリーの様なものがあるはずだ。上の奴らと一緒にそいつを探せ。急げよ。時間の保証はないからな」

隊員達は散開して、カプセルを持ちだすための非常用電源を探しに行った。残った不破と原は、何か中身についての資料がないか辺りを探し回るが、機材から何まで黒焦げになっており、資料的価値のあるものがほとんどない。せいぜいあるものと言えば、散乱しているコンピューターくらいのものだ。

「原さん、これだけ高温にさらされたんじゃ、ろくなものが残ってないだろうな」

「まあ、仕方ないな。だが、中の奴の事を考えると、何も資料がないって言うのもな。仕方ない、破損しているとは思うが、パソコンのハードディスクを抜き出すか。部下にも、資料性のあるものはすべて回収する様に言っている」

「頼むね、原さん。しかしなあ、この中にいる奴ってどんな奴なんだろう」

不破は、中が見えなカプセルの中を覗き込むように、じっと見つめている。原は、カプセルの周囲を歩き、資料になりそうなものを調べながら、

「さしずめ、眠りの森の美女、ってところか」

と軽口をたたく。

「美女ね。その所はどうでもいいわ。価値観を共有できる相手なら、それで構わないさ」

不破の目は、じっとカプセルに注がれ、仲間を待ち望む穏やかな光を携えていた。原は、その顔を見ている内に、もう茶化すような表現はやめようと決意した。不破が、本気で仲間を欲し、心待ちにしているのがわかったからだ。

三十分ほど経ち、非常用電源と、かき集めた資料を集めた隊員達が帰ってきた。ハードディスクなどの記憶媒体は厳重に梱包し、ディスクや書類関係も防水処理をしたバッグに納め行く。その作業とは別に、持って来た避難用電源のバッテリーを、技術畑の緒方が接続していく。パネルを開けると、カプセルの下部に、バッテリーを納め接続する場所が露わになる。そこにあるケーブルとバッテリーを次々に接続し、合計十個のバッテリーが収まった。そして、電源の切り替えを行い、通常電源から非常用電源に切り替えることで、カプセルにつながるコード類を切り離すことに成功する。一通りの作業を追え、緒方がカプセルの状態について簡潔に原と不破に説明を始めた。

「これで、非常用電源を確保し、このカプセルを外に持ち出せます。ただ、これだけ多数のバッテリー使っわけですから、相当このカプセルは電気を食いますよ、隊長」

「電源はどれだけ持つ」

「消費電力が書いていないので断言できませんが、余裕を持って10時間ですね」

「10時間が……。到底、東京の本部まではもたないな。大阪辺りで電源を切りかえるしかない。本部に残っている連中との連携だろうが、向こうは移動手段が豊富だ。余裕を持ってバケツリレーを成功させられるだろう」

原は、地上にいる俺に詳細を伝え、電源のバックアップを要請した。そして、自分達はいよいよカプセルの運搬に入る。

人数も確保でき、不破がいるため重さに対する問題はない。ゆっくりと、カプセルを廊下に押し出し、エレベーターの扉のある所までゆっくりと移動させる。その光景は、まるで棺を運ぶ葬送の行列の様だ。

「何だか、葬式の出棺みたいだな」

「不破、縁起でもない事を言うな。増してや、この中にいる奴は生きてるんだぞ」

「そうなんだけどさ、なんかいやな予感がして仕方ないんだよ……」

不破が抱く嫌な予感と言うのが気になる原であったが、ここでおじけついては話にならない。慎重に、しかしできるだけ早くこの施設を脱出しようと、焦る心を落ちつけながら、冷静かつ迅速に事を進める。

長い廊下を抜け、目の前に広い倉庫のような空間が広がり、その奥にエレベーターが見えてきた。あそこまでいけば、地上まで一直

線となる。ほつと安堵の溜息が零部隊員から漏れたが、不破だけが眉間にしわを寄せ、後ろを睨めつけながら、吐き捨てるように呟いた。

「やべえ、追いつかれた……」

不破の言葉に、全員がギクツとなる。そして、それと同時に、通ってきた廊下の壁が吹き飛び、開いたその穴から、そろそろと白装束の集団が湧きでてきた。彼らの出で立ちは、まさにお遍路に赴く者たちの白装束であつたが、傘を目深に被り、顔を見せずに肩も動かさずに歩いてくる様は異様である。そして、穴から最後に出てきたのは、不破にとって一番会いたくない存在、幻覚作用をもたらすシャボン玉を使うあの花魁女が、場違いな蛇の目傘を被り、手に煙管を携えながら姿を現した。そして、不破を見つけると、さも嬉しそうな笑みをわざとらしく浮かべ、気味の悪い妖艶な声を投げかけてくる。

「おや、先を越されたみたいだね。メテオ、久しぶり。奇遇だねえ」

「奇遇じゃねえよ。わかつてたる……」

不破は吐き捨てるように呟いた。女の強さがよくわからない上、従者の白装束達は、明らかに怪人だとわかる。そして、自分のバツクは、武装しているとはいえ、生身の人間である原と、何としても回収したいカプセルがある。守る物がある者は強いと不破は信じているが、自分の器以上のものを抱えてしまうと、何一つ守れなくなる事もわきまえている。しかも、ここは地下の密室空間、派手に動けば全員生き埋めの可能性がある。最悪の状況だ。

嫌らしいほど美しい顔を微笑ませ、艶やかな口紅を差した真っ赤な口から、寒気が走る様なあの声が発せられる。

「気前良く、持ちだしの準備も整えてくれたんだね。そのカプセル、こっちに渡しておくれ」

この言葉からも、カプセルの中身の改造人気の発注元が、彼らであることが濃厚になった。戦いが避けられないことを悟った不破は、何とか時間を稼いで状況を打破するきっかけを作ろうとする。それに、どうしても知っておきたいことがある。

「やっぱり、このカプセルの中身の発注元は、お前達か。ローゼンクロイツァーだろ」

「おや、もう知ったのかい。なら、隠す事もないね。その中身は、あたい達が発注したものだ。何と言ったかねえ、そう、最終的にはデストロンを名乗っていたよ。発注した際は違う名前、『蠍^{さそり}』だったよ、確か。その他、この四国を重視していてねえ。お遍路やら修験道やら、そう言った宗教的なものに身を隠すなんて洒落た事をしていたよ」

「そこまで知っていて、お前らがこの基地の場所を感知できなかったのか」

「そこは、あいつらがうまくやったと思うよ。でも、そのカプセルの中身が、お前さんに助けを求めたのをあたい達も探知した。それで、ここまで出向いたわけさ。ご丁寧に、正確な位置まで教えてくれてさ」

危惧していたことだが、ローゼンクロイツァーはやはり黒幕だった。そして、目的の物も不破達と一緒にとなると、もはや戦いは避けられない。だが、生身の人間では、絶対に歯が立たないのを不破は察している。自分の目に飛び込んでくる白装束達の出力が、相当高いものだとわかるからだ。装備云々の問題ではない。戦う世界がもう違うのだ。

「原さん、何とか食い止めるから、カプセルを地上まで運んでくれ」

不破の言葉に、原は彼の魂胆を察した。しかし、不破一人でどうにかなるような状況ではない事は、原にもわかる。メテオ一人で押さえられるかもわからず、これでは勝算があまりにも低すぎる。

「馬鹿野郎、それはわかつているが、お前が食い止められる保証があるのか」

「俺一人だけで戦いに集中できれば、足止めぐらいはできる。でも、原さん達がいれば、そっちの守りにも気を取られる。言いたくないが、正直足手まといだ。だが、俺は足止め、原さん達は運搬と自分達の身を守るために集中してくれば、何とかなるぜ」

「言ってくれるよ。核心を突き過ぎて、ぶん殴る気も起らん。……、わかった。それしか方法はないな。あてにするからな」

「こつちも信用するよ」

原達は、この場を不破に任せ、銃を構えてけん制しながら、重いカプセルをエレベーターに押していく。白装束の怪人たちは、じりじりと迫ってつくるが、その目の前に不破は立ち、変身の構えをとる。その様子を馬鹿にする様な高笑いをあげながら、花魁は不破を見下す。

「おやおや、仲間を助けるために自分が犠牲になろうっていうのかい。おかしくて、涙が出てくるよ」

不破達の決死の覚悟を笑いの種にして、女は笑い続ける。馬鹿馬鹿しくて仕方がないという様に。だが、不破の顔には怒りも憤りもない。ただ、淡々とした表情と口調を保ち、決して相手に自分を乱されることはない。

「笑いたきゃ笑えよ。どうせ、お前と俺は価値観が違う男と女なん

だ。自分を殺してまで相手に合わせる器量は俺にはない」

「けつの穴の小さい男だよ。じゃあ、どうするんだい」

「お前の一番嫌がることをしてやる。仲間を逃がし、俺がお前らをすべて倒す。一人残らずな」

「こりゃ傑作だ。あんたがどれだけ悪あがきするか、見物させてもらうよ。あんた達、やっちまいな」

まるで任侠映画の様な啖呵を切った女に従い、白装束達が動き出した。編み笠を跳ね飛ばし、露わになった顔からはヤモリの様な顔がのぞき、その能力を体現するかのように壁や天井に貼り着いて、俊敏な動きで接近してくる。

「変身」

メテオに変身し、応戦に入るが、あっという間に蹴りつき、近づいてきた怪人三体をメテオは瞬殺した。その光景は、原達の目には全く捉えられない。ヤモリ怪人が勝手に爆発した、そうとしか見えず、言葉を失っている。

だが、それ以上に驚いているのが、花魁だった。自分に与えられた情報、そして体感したメテオの能力を遥かに超えているため、目の前の出来事を受け入れられず、驚愕している。

「あんた、そこまで速く動けるのかい……」

思わず彼女の口から洩れた驚きの言葉に、メテオはめんどくさそうに答えた。

「ああ、何だって。別に普通に動いただけだぜ。俺のことはよく知っているだろ。なら、驚く事じゃねえだろ」

メテオとしては、自分の能力が、肉体改造された時点で設定された上限値を、知らない内に超えている事に気がついていないし、自覚もしていない。だが、100%機械ではなく、生身の部分があるため、sの部位が経験を積むことで強化され、肉体を制御するシステムも仮想世界に入り込んだり、クリスタルの鎧を上書きされたことで、一層成長しているのだ。

女は、その事実を理解し、舌打ちを鳴らした。もう、余裕を保ってられない。本気でかからなければ、カプセルは奪えないし、メテオと言う存在はとてつもなく大きな脅威、そして障害となることを認識したからだ。こうなると、なりふり構っていらなくなる。「腹の立つ男だよ。あたい自ら手を汚す羽目になるとはね。味噌つかす共には手が負えない。しょうがない、本気でいくよ」

女は、さつと硝子のストローを取り出し、その小さな穴から無数のシャボン玉を拭きだした。あの、幻覚作用のあるシャボン玉だ。だが、強化されているメテオに幻覚をもたらすのなら、生身の体である原達、零部の隊員にどんな作用をもたらすかわからない。下手をすれば、脳に重大な障害を及ぼす恐れもある。

メテオは原達を守るため、体を瞬間帝に回転させ、突風を巻き起こす。風に煽られ、シャボン玉は逆流し、壁や天井にぶつかり、弾けた水滴も風でかき消された。先日の遭遇で、痛い目にあわされていた分、とつさに思い浮かんだ攻略法である。そのメテオの機転に、花魁は腹立たしそうに顔を歪める。

「洒落た事をしてくれるじゃないか……。さすがは、仮面ライダーを自称しただけのことはあるよ。なら、あたいも仮面ライダーと戦うのにふさわしい姿になろうじゃないか」

女はそう言うのと全身をこわばらせていく。それに伴い、髪の毛は真っ赤に染まり、針の様な高度を持つていく。腕は緑色に染まり、刃の様に薄く鋭利な指に変わっていった。そして足は、皮膚がガサ

ガサになり、岩のような質感に変わっていく。かつて女がメテオに渡した彼岸花、「地獄に送ってあげる」と言う死刑宣告を体現した姿になったのは、これが最後通告であると同時に、メテオをここで消しておかなければという恐れの証でもある。

あの死刑宣告を思い出したメテオは、相手が本気を出してきた事にぞっとした。あの宣告を現実化させる覚悟の表れでもあり、それを実行できるだけの力量を認めたからだ。

「ちっ、ぞっとするぜ。血のように赤い彼岸花。それを肉体に具現化するなんてな」

「花は好きだけど、この姿は今いち好きになれなくてね。あんたが、こんな姿に変えたんだよ。いけ好かない男だね。名前も、一応リコリスの名を与えられているけど、あたい個人は『地獄花』を名乗っているよ」

「悪趣味だけど、お似合いだぜ、姐さん」

悪態をつきながら、心の内の動揺は悟られないようにする、心理戦は既に始まっているのだ。だが、地獄花の他に、ヤモリ型怪人はあと八体と数だけが多い。そして、未知の戦闘力の地獄花。あまりにも不利な状況だ。こうなると、無事に帰ることは諦め、最低条件をクリアするしかない。メテオはもちろん、腹も指揮官としてそれを覚悟した。

「不破、お前はあの花の化け物をやれ。カプセルは俺達が輸送するから、お前の戦いに専念しろ」

「俺も同じことを考えていたよ。ここにきて、ますます息が合ってきた。言っとくけど、あのヤモリは殆ど倒す余裕はないよ。残りの奴らは任せる」

「覚悟してるさ。無傷で変えるのは諦める。だが、無事に帰ってやるさ。……。お前ら、弾倉を装甲貫通弾に変えろ。緒方、篠塚。カプセルを運び込む奴らの援護をするぞ」

原達は、弾丸を切り替え、アサルトライフルの安全装置を外した。もう、選べる道はない。戦って生還の道を勝ち取るしかない。「行くぜ」

メテオは床を蹴り、前に踏み出した。目にも止まらぬ速さでヤモリ怪人の間を通り抜け、すれ違いざまに拳を顔面に叩き込まれた怪人が撃破された。やはり速い。一気に地獄花に肉薄していくメテオ。地獄花は顔に、真っ白の能面の様な仮面を装着する。それは、無表情な花魁のようにも思えるし、仮面ライダーに対峙する者としてふさわしい姿とも言える。

「どうして、仮面をつけたんだ」

「この姿での顔が好きになれなくてね。あたいの美貌が台無しさ。だから、隠しておきたいんだよ。あんたも同じだろ。醜顔を隠すために仮面をつけている」

「うるせえよ。この仮面はそんなじゃねえ。俺以前に戦ってきた者達の生き方の象徴だ。そして、俺が選らんだ未来への覚悟だ」

「その覚悟、傷つけたくなってくる……」

地獄花は、鞭のように腕を動かし、メテオの仮面を切り払おうとした。それをとっさに避ける事が出来たのは、メテオが顔に手を当てると、その指に仮面についた傷の感触が走った。

避けきった自信はあった。だが、それでも相手のスピードについていききれず、強化服の装甲で最も堅牢な仮面に、わずかにかすっ

ただけで傷をつけてくる相手の能力は、計り知れないものであると認めざるを得ない。

「なるほどね。硬い葉を持つ彼岸花を、怪人レベルに再現すると、よくしなる刃になるってわけだ……。めんどくせえ奴だ」

「面倒くさい再現は、この腕だけじゃないよ」

地獄花は、左足をふるい、メテオのどうを蹴り飛ばそうとするが、メテオは右足をあげ、それを食い止めた。その瞬間、恐ろしい程の痺れが右足に走り、膝をついてしまう。そこに、逆足からの蹴りが胸に入り、メテオの体は10メートルほど後方に飛ばされた。痺れは、足だけではなく、胸にも広がり、呼吸が苦しくなる。

「何だ、このしびれや、息苦しさは……」

「彼岸花の根には、アルカロイドを含むだろ。神経をやるにはいい武器だ。もっとも、あんたの体だと、すぐに分解される代物だけだね」

「「」明察」

倒れこんでいたメテオは、すぐ解毒を終えると、猛スピードで地獄花の懷に猛烈なパンチのラッシュを撃ちこむ。パワーとスピードなら決して引けを取ることはない。地獄花は、反対側の壁に吹き飛ばされ、コンクリートにめり込みながら瓦礫の中に体が埋まってしまった。さらなる追撃のために、そばに走り込むメテオに向かい、地獄花が瓦礫に埋まった状態で何かを打ちこんできた。

メテオはそれを視認したが、体まで動かすには遅すぎた。何かが見えた、そう思った時には、赤い槍が何本も体を刺し貫き、足元には槍と同じく真っ赤な血がぼたぼたと滴り落ちていく。

「クソったれ……。彼岸花の花弁か」

そう言つてメテオが膝をつくのと同時に、地獄花が立ちあがつた。砕けた破片を肩から払い落しながら、近寄ってくるその姿は、体が花の化け物と化しているのに、艶やかな着物を相変わらず羽織っているため、ひと際奇妙で奇怪な雰囲気を放っている。

「この髪は、伊達についているんじゃないよ。十分に武器になる。あんたの装甲を貫くほどのね」

うずくまるメテオを横目に、地獄花は彼の後ろで繰り広げて、カプセルの争奪戦を眺めている。

原達は、特殊弾を装填したライフルで応戦しているが、ヤモリ怪人をなかなか仕留めることができないでいる。着弾することに相手を弾き飛ばすことは可能なのだが、その皮膚を装甲貫通弾でも貫くことができないのだ。一帯倒すのに、十数発は必要とする。それも着弾したと仮定すればの話だ。そのため、隙あらば怪人たちは原達に飛びかかり、傷を負わせていく。そこは、訓練を受けている彼らだけに、致命傷を負う事はないが、超人に飛びつかれるわけだからたまったものではない。おまけにグランドピアノ並みに重いカプセルを運ぶ作業を並行して行うのである。次第に彼らは追い詰められていく。距離を詰めていく白装束の怪人の姿は、幽霊のように不気味だ。

苦戦する原達の方を見やり、地獄花はその仮面の下から、冷たい笑い声をあげる。

「どうやら、無事にここから脱出する、その目標は駄目みたいだね。あたしも、あまり気が長い方じゃない。すぐに終わらせるよ」

地獄花は、原達に花卉を撃ちこもうとした。それを見たメテオは、体中に突き刺さった花卉を力任せに抜き取り、地獄花に飛びかかって、ヘッドロック要領で頭を抱え込み、そのまま床に組み伏せた。

「させねえよ。お前はここで、俺と戦うんだ」

「ここで、二人でジタバタしようって言うのかい。いやらしい男。でも、あたいにも仕事ってものがあってね」

地獄花は、無理やり花弁を一枚むしり取り、それを配管に向かつて投げつけた。金属の配管は火花を散らしながら穴を開けられ、その瞬間炎が噴き出し、あちこちの配管が爆発を起こし始め、瞬く間に施設全体が火で包まれてしまった。メテオも、近くでガス爆発が起こったため、体に引火した状態で吹き飛び、床の上をごろごろと転がっていく。

「てめえ、何のつもりだ」

「こういうつもりさ。あたいの仕事は、一にカプセルの回収、二にメテオの抹殺、三にこの施設の破壊なんだよ。面倒だから、まず一つ片付けた。次は、カプセルさ……」

「何っ」

倒れたままでメテオは原達の方を見ると、想像以上にまずい事になっている。負傷箇所はさらに増え、エレベーターまでの距離さつきからは殆ど縮まっていけない。出血もひどいらしく、彼らの目の色に疲労の色が濃くなっている。このままでは……。

「二兎を追うものは一兎をも得ず。昔の人はいいこと言うねえ。黙って、カプセルだけ渡していれば、あいつらの命は助かったものを。人間、欲張るとロクな事がないんだよ。さあ、とっととやっちまいな」

ヤモリ怪人たちは、来ている白装束に火がついているのも構わず、原達に殺到する。銃を撃つが、もう狙いが定まっていけない。

メテオは意を決し、立ち上がると地獄花に背を向けて走り出した。

危険な行為ではあるが、仲間がやられるのを黙って見てはいられない。必死に走り、怪人達が原達に襲いかかる寸前で体を掴み取ると、炎をあげているガス配管に向かって叩きつけた。衝撃と炎であつという間に二体が撃破される。残り三体は、壁や天井などに張り付いて狙いを分散させるが、今のメテオのスペックと彼らでは、圧倒的ながある。彼らの動きを視界で把握し、仮面と連動した脳がそれを分析し、必要な情報を割り出す。メテオは、相手の次の動きを感じて情報で完璧に読み、彼らの次の移動先に向かい、確実に顔面に拳を打ちこんだ。当然、原達には不可視のスピードだ。

何とか、原達を危機から救い、ホツとして床に足をつけた瞬間、背中からいくつもの衝撃と痛みが体を突き抜けた。メテオは自分の体を見て、絶望と言うより、原の底から湧きあがる怒りを覚えた。

メテオの体は、後ろから地獄花の花びらで刺し貫かれ、背面から腹部がにかけて槍が突き抜けている。さらに、追い打ちをかけて、地獄花が背中に張り付き、花弁をえぐるように動かし、傷を無理やり広げにかかる。激痛と体内から破壊をされたことで、仮面のクラッシュ部分から対が霧のように噴き出した。

「不破ーっ」

原は絶叫するが、メテオは返事の代わりにゴボゴボと嫌な音を立てながら、クラッシュ部分から血をたらすだけだった。その血を見て、興奮したのか、地獄花の頭部はさらに真っ赤に染まり、高笑いをあげる。

「フッフ、だから言っただろ。二兎は得られない。一兎だつて得られない。ここであんたが死ぬ。次に仲間が死ぬ。そして、あんたが執着しているそのカプセルは私が頂く。芝居の筋書きは変わらないよ。あんたの次の場面は、死ぬ場面さ」

地獄花は、楽しくて仕方ないと言った狂気の笑い終えをあげながら、メテオの背中に捕まりながら、刺さっている花弁を突き刺しえ

ぐり、メテオの体を、命を破壊しようとする。原達は、地獄花を引き離そうと銃弾を発砲するが、地獄花の体は全く銃弾を受けつけず、逆に弾かれた弾が兆弾となって彼らを襲い、負傷を増やす結果となった。

「急がなくても、殺してあげるよ。死は、生きとし生けるもの、みんな平等にあるんだ。ただ、私がその時を決める。今すぐにねえっ」

地獄花はメテオの体を切り裂くため、渾身の力を込めて花弁を動かそうとした。だが、花弁は全く動かない。うろたえる地獄花に、メテオが地獄からはい出る亡者のような声で話しかける。

「死ぬ時期は、てめえに決めさせてたまるか……。言ったら、この仮面は俺の未来への覚悟だって。ここで俺が惨めに死んだら、守られてきた戦士達の繋がりが、仮面達の環が切れちまう。……。お見舞いしてやるぜ」

メテオは、バックルを動かし、「THUNDER」を起動した。

メテオは電流を全身から放射し、体に密着していた地獄花を電撃と共に吹き飛ばした。すぐさま、体に突き刺さった花弁の槍を引っっこ抜き、

「全員カプセルの上に乗れっ」

と、叫んだ。その声に、原達とはつさに反応し、カプセルにしがみついた。メテオは、原達がしがみついたままのカプセルをエレベータに向かって押しこんでいく。彼の力であれば、造作もないことである。エレベータの前まで到着し、篠塚がエレベーターのボタンを押すが、何度押しても反応がない。

「隊長、電源が落ちています。恐らく、さっきの爆発で……」

「クソったれが。ここまでか」

肩を落とす彼らに、地獄花は容赦なく攻撃を仕掛けてくる。花弁を投げつけ、串刺しにしようとするが、メテオがそれを何とか叩き落とす。だが、手負いのためすべてを弾ききれず、落とし損ねた花びらが緒方の腹を貫いた。

その場に倒れ込んだ緒方に、メテオと原が駆け寄る。激痛でうめき声をあげている緒方だが、意識ははっきりしている。

「原さん、急所は外れている。診立ては確かだ」

メテオは手短に診断を下すと、槍を一気に引き抜き、地獄花に投げつけた。そのスピードと思いがけない反撃に、槍は二度の許を貫き、地獄花はその場に倒れ込んだ。これでしばらくは時間が稼げる。「緒方、ここを思いっきり抑える。内臓もほとんど傷ついていないはずだ。命に別条はない」

「本当すか、不破さん。医者でもないのに、言いきって大丈夫ですか……」

「俺は戦闘マシンだ。体の構造はすぐにこの仮面が分析する。その結果を言っているんだ。お前は仮面ライダーメテオの名付け親だぜ、そう簡単に死なせるかよ。原さん、こいつの背中を押さえてやってくれ」

「ああ、わかった。だが、電源が落ちてるんじゃない」

「手はあるぜ。力技だがな。ドアをこじ開けてくれ」

手の空いている隊員がエレベーターのドアをこじ開ける。そして、メテオがシャフト内に身を乗り出し、ワイヤーロープを引き、すぐ近くまで来ているエレベーターの引き下ろして行く。そして、近くまで引き寄せると、直接手で押さえつけながら、今いるフロアに到

着させ、そこにカプセルを乗せた。

「さあ、早く乗ってくれ」

「おい、電源がないんだぞ。こんな所に箱詰めになってどうする気だ」

「電源なら、心配……、あぶねえつ、早く乗るんだ」

腹ははつとしてメテオの後ろに目をやった。いつの間にか、肉体を回復した地獄花が跳躍し、こちらに飛びかかってくる。気がつくのが遅すぎた、原がそう覚悟した時、目の前に光のカーテンが展開された。

そばに目をやると、メテオの背中から、美しいステンドグラスのような輝きを持つ翼の様な発光体が展開されている。その、発光体に体が触れた地獄花は、物質に遮られたかのように吹き飛ばされる。口惜しそうな叫び声をあげながら何度もぶつかってくるが、光の壁を突破することはできない。

「不破、これは一体……」

「俺にもよくわからねえが、クリスタルのキバの鎧とか言う代物のからしい。絶対死ぬなって言う約束でもらったんだけどな。そんなことはどうでもいい。電源は俺の体から供給するから、早く乗るんだ」

「まさか、お前、ここに残る気じゃないだろうな」

「当たり前だろ。俺が乗り込んだ所で、あいつは追いかけてきてみんな殺す。だが、俺がここに残って、戦って、あいつを仕留めれば、万事うまくいく」

「死ぬ気か」

「……、まさか。ただ、命を賭ける大勝負に來ていると思つてな」

メテオは仮面の下で声にならない笑いを洩らすと、ベルトのバックルに拳を叩きつけた。バックルに小さな亀裂が入り、掌には数個の欠片がこぼれ落ちた。メテオはそれらを、原の胸ポケットのねじ込んだ。

「これは一体どういう意味だ」

「保険さ。万が一の時には、このカプセルに眠っている奴が俺の意思を、仮面の環を継いでいく。押しつける気はないが、そう確信している。その時に、雀の涙ほどだが、俺の遺志を継ぐ何かがあればいいが、こういうものでしか、俺の心は今伝える術がない。確実に渡してくれ」

「……、万に一つがあつてたまるか。預かつてはやる。だが、お前が渡して、仮面の環を繋げる。いいな」

「わかつてる、死ぬ気がないからな。それに、原さん、あんたとはうまい酒を一杯やりたいんだ」

「ああ、いいだろう。いい店を知っている」

「楽しみにしてるぜ。奢つてくれよ。……、あと、伝言がもう一つ。そのカプセルの中に眠っている女の名前は、ミーティアだ。俺と同じ名を持ちながら、全く違う個の存在……。生き残ろうぜ」

メテオは原をエレベーター内に押し込むと、自ら扉を閉め、コントロールパネル近くの壁に腕を打ちこんだ。そして、「THUN

DER」を起動する。その瞬間、メテオの体をから膨大な電流が地下施設内に流れ出し、エレベーターを起動させた。炎に包まれ、崩壊は始まった施設内にこれだけの電流は過負荷であり、あちこちで火花が散り、爆発が起こる。どこかに貯蔵してあった燃料に火がついたのか、施設内の多層部下ら、全体を揺さぶる揺れが起こり、爆音と爆風が吹き荒れ、メテオと地獄花を包み込んでいく。

必死に電流を送り続けるメテオだが、次第にエネルギーの流れに勢いがなくなっていく。そして、光の羽を突き破り、地獄花がその手をメテオの首に巻きつけ、その切れ味で首を斬り落とそうとする。さすがに、命を取られては何も果たせない。一旦抵抗をやめ、力に身を委ねて放り投げられるままにする。体中ンはボロボロで、傷がない所などほとんどないが、不思議と心だけはどんどん強くなる。痛みに耐えるどころか無視し、再び地獄花と向き合う。静かな心のメテオに対し、地獄花は思う様にならない状況に、怒りが表面化し始めている。

「てめえら、どこまで邪魔すりや気が済むんだい。大人しく殺されれば、それで済む話だろうが」

「おうおう、感情的になってきたな。そっちの方が好きだぜ、姐さん。けどな、生きている限り、希望を捨てられないのが人間で奴だな。大人しく死ぬなんてごめんだよ。最後まであぐのが、人間ってもんよ。もつとも、お前は人間だった事も、人の価値観も忘れているだろうからな」

「忘れたね、そんな湿っぽい感情は。……、ああ、もういい。お前を殺すことに専念するよ。上の奴らは、いつだって殺せる。手下はこの辺りに配置しているんだ」

「そう簡単に淹さん達が死ぬかよ。俺がおまえを倒さなきゃ、話が始まらねえし、終わらねえんだ。さあ、命懸けの戦い、始めようぜ。」

付き合ってくれるよな、姐さん」

「フン、少しは粹ってもんがわかってきたようだね。付き合つよ、殺し合いにね」

炎に包まれた地下の施設で、二人の体は接近し、互いの肉体を殴り傷つけあう。骨がきしみ、肉が張り裂ける痛みが走るが、彼らは生きるためにその苦しみを味わい、与え、乗り越えなければならぬ。二人のぶつかり合いに共鳴するかのように、あちこちが爆発し、炎が激しく上がり、次第に建物が崩壊を始めていく。

一方、地上にいる滝達は、ヘンリーは中継する通信を耳にして、やきもきしてた。カプセルの回収、ローゼンクロイツァーの介入、そして潜入開始。事が進まず、悪化していく状況は、ストレスのたまるものでしかない。滝は、いてもたってもいられず、あちこちを歩き回っている。

「部長、落ち着いて下さい。僕達がイライラしても、状況は好転しません」

「お前に言われなくてもわかってる。ヘンリー、人間つてもんは悟りを開いた聖人以外は、感情に左右されるもんなんだ。インプットしておけ」

「了解。……、ん、何だろう、これ。部長、まずいです。高エネルギー源が地中から上昇中です。しかも、多数です」

「何っ」

滝は、自ら銃をとり、辺りを警戒する。まだ、敵は現われていないが、移動する多数のエネルギー源となると、黒子、つまり怪人と

考えるしかない。

息を潜め、顔に一筋の汗が流れていく。その時、沈黙を破って、地中から泥まみれの白装束を着た怪人達が現われた。地下基地に現われたのと同じタイプのため、量産型なのだろう。彼らは、頭から傘をむしり取り、爬虫類の顔をむき出しにして、滝達に迫っていく。皆、銃を撃って牽制をするが、恐怖のために、どうしても命中率が上がらない。だが、この世界が長い滝は、銃器の扱いも長けていて、確実に怪人の頭部に命中させていき、その動きや腕前は、六十過ぎとは到底思えない。滝一人で怪人を片付けていくが、倒すペースより怪人の数と前進速度の方が速いため、状況を逆転できない。滝の隣では、自動操縦でヘンリーが小機関銃を発砲するが、数の多さと敵の性能に四苦八苦している。

「ヘンリー、下の状況はどうだ」

「腹隊員にか、エレベーター内にいます。緒方隊員が負傷。施設内の電源が落ちたため、エレベーターが途中で停止中。メテオは、かなり状況がつかみづらくなっていますが、戦闘中の模様」

「一気に状況がまずかかったな。まあ、死ぬ気も起きないんだが」

「豪胆ですね……。部長、危ないっ」

ヘンリーの言葉が発せられたのと同時に、滝は上空を見上げた。二体の怪人が跳躍し、かなり高い位置から滝とヘンリーに向かって跳び下りてきた。一帯は、ヘンリーを押し倒して上に乗り、起き上がれなくする。もう一体は滝に馬乗りになり、両手で頭蓋ごと包む様な形をとり、骨ごと顔も頭も砕こうとする。声はおろか、息もできない滝を救える余裕のある者はいない。この状況になり、さすがに死を覚悟した滝だが、またしても、彼の許を死神は素通りしていた。

急に、滝の頭を押さえこんでいた手から力が抜けていき、視界が戻ってきた。そしてその視界に飛び込んだのは、頭部が吹き飛ばされた怪人の姿である。一体、何が起こったのか、滝には理解できなかったが、怪人の体が崩れ落ちて、視界が開けた時に見たその人影に、滝はあつと声をあげた。

「お前、どうしてここに……」

「久しぶり、滝さん。ま、偶然ってとこかな」

エレベーター内では、カプセルと共に原達が缶詰めになっていたメテオからの電気供給がなくなり、中途半端な位置で停止してしまつたのだ。このままではどうする事も出来ず、打つ手なしの状況である。

密室空間、自分達が置かれた状況のまずさを考えると、パニックになりそうだったが、原は隊員達に声をかけることで、周囲の気を紛らわせ、同時に自分の気持ちを鎮めることに留意している。だが、いつになれば、この状況を打破できるのか、見当がつかなかった。

「篠塚、バッテリーの状況はどうだ」

「……、大丈夫です。急激な電気の消費はありません」

「そうか……」

何を話していいのかわからず、原の心臓は再び鼓動を早め、それが気持ちを急かしていく。たまらなく嫌な気持ちになった所に、追い打ちをかける様に面倒な事が起こる。

嫌なことは重なるものだ。地中を進んできたヤモリ怪人が、エレベーターシャフト内に侵入してきたのだ。天井に彼らが飛び降りる音が聞こえ、建材をはがして中に入ろうとする爪の擦れる不愉快な

音が聞こえ始める。

「クソ、撃てっ」

腹の命令をうけて、隊員達が天井に向かって銃を発砲する。狭い空間に銃声が鳴り響き、煙が立ち込め、上から天井の破片と怪人達の血が落ちてくる。だが、どんなに球を撃ちこんでも、怪人の勢いがやむことはない。もはや、これまでかと皆が覚悟した瞬間、音がぴたりとやんだ。

まさに、スピーカーのスイッチを切ったかのように突然静寂が訪れ、原達は不可思議な顔で見合わせる。すると、再び天井をはがす音が聞こえ始め、銃を構え直すが、先程までの殺気だった様子が無い。一体何者がいるのかを訝しがっていると、完全に天井が剥がされ、そこにいた人物の姿が露わになった。皆、驚きのあまりに声が出ず、しばらく茫然としていたが、原がようやく皆を代弁するように口を開いた。そこに立つ、赤い仮面に緑の複眼と強化服、白くたなびく二本のマフラーの持ち主の名を。

「仮面ライダー……。3号、仮面ライダーV3……」

V3は軽くうなずくと、頭をエレベーター内に入れ、原達に話しかけてくる。

「絵空事じゃない、『現実』世界のV3だ。驚くのも無理はないな。だが、ボーっとしている暇はない。すぐに脱出するぞ。とにかく上に上がってこい」

V3は、原達に脱出を流す。しばしの間、我を忘れていた彼らであつたがすぐに状況を理解し、V3の言った言葉の意味を察した。一人ずつエレベーターの天井裏に上がっていくと、そこには侵入時使ったロープが垂れ下がっている。これを使って、脱出しようと言うのだらう。

「早くそれに掴まれ。ヤモリ怪人は大方は片付けた。後は、俺が上

から引き揚げる、一編にな。怪我人とカプセルは、俺が上まで運ぶ。なあに、その程度は朝飯前だ」

V3は、怪我をしている緒方以外をロープにつかまらせると、カプセルに緒方を乗せて一気に肩に担ぐ格好になる。メテオ同様、改造人間の身体能力は凄まじい。原達が数人がかりでようやく押せる重さのものを、軽々と持ちあげるのだ。

「原さん、このけが人の事は任せておいてくれ。上についたら、すぐにあんた達を引き上げる」

「お願いする、V3」

「ああ。所でメテオはどこにいる」

「あいつは、……、下に残って、敵と戦っている。俺達を守るために」

「そうか。なら、メテオの意思を無駄にするわけにはいかない。あんた達は必ず助けよう」

静かにV3が告げた瞬間、上部から壁が崩落する音が聞こえた。一体のヤモリ怪人が、飛び込んできたのだ。すぐに反応し、原達は銃を構えたが、V3の反応はさらに速い。瞬時に飛び上がると、左足で崩れ落ちたコンクリートの壁を蹴り碎き、右足でヤモリ怪人の胸に、矢の様な蹴りを放った。

「V3、キック」

怪人とはいえ、死にゆく相手に対する念仏の様な言葉を呟きながら、そのままV3は穴の出口に上昇していった。キックをもらったヤモリ怪人は、出てきた穴に蹴り戻され、その穴で爆発した。圧倒

的なV3の強さに唖然としていると、上から合図が送られた。原達
はしっかりとロープを体に固定してしっかりとまると、準備がで
きたという合図を送った。そして、彼らの体はまとまって引き上げ
られていき、V3による救出作業は見事に成功した。

それを見ていた滝は、V3の許に駆け寄り、部下達を助けてもら
った事への礼を述べる。

「V3。いや、風見、礼を言うぞ。お前がいなければ、どうなって
いたかと思うと、ぞっとする」

「偶然日本に来てよかった。野暮用があつて来てみたら、この事態
運が良かった。それよりも、メテオって言う新型が気がかりだ。あ
いつも助けに行く」

「すまんが頼む。嫌な予感がして、仕方がない」

「予感どころか、ここまでヤバイ状況は、最近はお目にかかってい
ない。急ぐよ」

V3は、そう言つて、エレベーターシャフト内に飛び込んでいっ
た。と、同時に地下から、ひと際大きい爆発が起こり、火柱が立つ
て、炎と共にV3が穴から吐き出される。

「クソ、今の爆発で、シャフトが崩落して、完全に埋まった。地下
施設が崩壊し始めている……」

V3の言葉を聞き、滝と原は青ざめた顔になった。このままだと
メテオの脱出は不可能となり、地下施設と共に永遠に地上から消え
てしまう。二人は、炎が噴き出す穴に向かって、メテオの、不破の
名前を絶叫した。それしか、術がなかった。

メテオと地獄花の戦いは壮絶を極める。メテオは、相手の目で追

えない拳と足のスピードで攻撃を繰り出し、打撃で相手の体にダメージを与える。地獄花は、彼岸花の能力をトレースした肉体的特徴で、腕で強化服の装甲を切り刻み、脚部の毒で体の自由を阻害し、頭部の花びらで射かけていく。互いに余力はない。持てる力を出し切り、相手の体を破壊しようとする、文字通りの死闘である。

周りの状況も、二人に決して容赦をしない。燃料やガスが尽きない限り、炎も爆発も収まることを知らず、上から配管や排気ダクトがひっきりなしに落ちてくる。爆発の衝撃は、耐震強度を超え、床が所々で崩落し始めている。まるで、死神が、二人の内のどちらかをあの世に連行したくて、急かしているようだ。

二人とも、負傷によって体の動きが鈍り始め、もはや意地と、生存への執念で体を動かしている状況だ。メテオは、強化服がスタズタにされ、内部の服や出血、変異したごつごつした異形の体が覗いている。足元は、毒のために痺れがまわり、体重を支えようとがくがくしている。地獄花の方も、メテオの攻撃で体中の骨に亀裂が入り、筋肉が裂け、激痛が体のキレを失わせるだけでなく、毒や刃の腕の能力も削り取られている。完全に残っているのは、精神面だけであり、それが二人に残った最後の武器だ。

「本当にしぶとい男だよ。この体をここまで傷つけるとはね。でも、不思議と寒気が走る程、心が恍惚とするよ」

「俺に、そんな趣味はないな。さつさと片付けたいほど、お前の事が嫌いだ」

「お互い似た者同士、状況や時代が違えば、いい仲になれたかもしれないのにねえ。……、じゃあ、終わりをくれてやるよ」

地獄花は、頭部の花びらをすべて発射してきた。まさか、すべて撃つてくるとは予想していなかった上、体が言う事を聞かなくなっていたメテオはすべての花びらを弾き返すことも避けることもでき

ず、手足も胴体もすべて花卉で貫かれてしまった。かろうじて守った、心臓と頭部を除いて。

体中から出血し、意識を失いそうになるが、痛みがそれを妨げ、倒れこみそうになるのを花卉の槍が邪魔して、それすらもできない。強制的に立ち往生を余儀なくされる。動く事も、その気持ちすら失いかけ、気持ちの衰えはそのまま命の火を消し去ろうとする。

地獄花は、動かないメテオに近づき、じっと仮面の顔で見つめる。だが、その下にある、残虐な笑みを、メテオははっきりと見ることができる。地獄花は、足を振り上げると、渾身の力を込めて、メテオの頭部に踵を落とした。この技に、全身の力を込めたと言っている。衝撃がメテオの脳に、全身に響き、残り少ない血液を外に押し出す。そして、足から流し込まれる毒が、ダイレクトに脳に送られる。メテオの視界にノイズが走り、危険を知らせる文字がひっきりなしに走っていく。どうにかしようにも、体は動かないし、まともな思考が毒のせいではない。地獄花に悪態やボヤキともつかない言葉を投げつけてやりたいが、口も動かないし、喉ももう機能しない。次第に、死が近づいていき、無が訪れようとする。

無に次第にやってくるにつれ、様々な記憶が現われ、そして走馬灯に消えていく。顔も覚えていない両親。醒めた人生観と夢を持つことができた施設での生活。夢を兼ね破れたプロレスの世界。かつて愛し、愛することができなくなった昔の女。長い眠りから覚め、仮面ライダーとしての人生を歩み出した日。幾多もの仮面ライダーとの出会い。仲間との生活。古い順番から現われ、そして消えていった。

単純化され、断片となっていく記憶。そして、最後に現われる言葉の数々。滝が言った、「仮面ライダーは実在する。現実のこの世界に、今もどこかで存在している」。原と約束した、「うまい酒を一杯やりたい」という言葉。そして、誰だっけ……。誰と約束したんだ……。

「色々な人たちが共存できる世界を守って行けると信じたから託し

たのよ。その日が来るまで、その鎧があなたを守るわ。何があってもね」

その言葉をメテオは、薄れゆく意識の中で反芻した。そして、その度にメテオの体に力が、目に光が戻っていく。

死の淵から駆け戻ったメテオは、地獄花の足を取ると、そのまま体を振り回し、遠心力を加えて投げ飛ばした。滝より言葉だけで聞いていた技、「きりもみシユート」をぶっつけ本番で敢行したのだ。相手を沈黙させると、体中に刺さったやりを筋肉の隆起で折り、噴き出す。

炎の中からはい出た地獄花はメテオの復活に驚きを隠せない。

「お前の設計では、あれ以上の攻撃に耐性を持ってないはずだよ。再改造でもしない限り、無理だ」

「馬鹿野郎。それを現実にするのが仮面ライダーだ。壁にぶち当たって成長する。お前らも俺も、何故人間ベースに拘った改造人間が多いのか。それは、人間の可能性を考慮に入れているからじゃないのか。その可能性を俺はよくわかっていないんだが、人との出会いも、自分が持つ可能性を覚醒させ、広げていく。それは確かだ」

「出会いが、可能性を広げる、だと」

「ああ。俺はついこの間、守護神に出会った。いい女だったよ。その出会いが俺に、仮面ライダーメテオに新たな可能性を与えてくれた。見せてやるよ。クリスタルの鎧を受け継いだ、俺の力を」

メテオの言葉に感応するかのように、背中に展開するレーダーマフラーがたなびき始め、発光を強めながら、七色の輝きを放つ翼を再び姿を現す。ステンドグラスの輝きは、炎に包まれた修羅場を幻想的に包み込む。

「これが、人との出会いがもたらした、メテオの新たな可能性だ」

「こんな新機能を受け入れる余裕などないはずだよ。まさか……」

「所詮、俺は試作品。だからこそ、伸びしろがある。これがその証だ」

メテオは欠けたバツクルを回転させる。「EXPLOSION」の割れた電子音が鳴り響くと、光が周りの炎を引き寄せ始める。次第に、メテオの背中に炎が集まり、まるで火の鳥の様な炎の翼をまとた姿になる。そして、その翼が力強くなびくと、凝縮された炎が解き放たれ、怒涛のように地獄花に押し寄せた。

衝撃波で体が吹き飛び、さらに炎が体を焦がし、火だるまになった地獄花は戦闘不能になった。そして、能面の様な真つ白な仮面が割れ、中ら、醜悪な形相に変異している女の顔が姿を露わす。顔には、憤怒の表情が浮かび、まるで般若のような顔つきになり、その口から、呪いの言葉が溢れ出る。

「ここまでやってくれるとはね。ぞくぞくするほどいい男で、いやな男。でも、いいさ。ここであんたは死ぬ。それで目的の二つは達成する。……、あたい達、ローゼンクロイツァーは敵を見定めた。お前、そして零部と言う集団。世界に散った仮面ライダー共々、本気になって潰しに行くだろうさ。束の間の夢、だったね」

「どうか。俺は流星、メテオ。いずれ燃え尽きるだろうさ。だが、流星は落ちて終わりじゃない。時に、宇宙からの生命の欠片、種子をもたらすって聞いた。……、俺はこの暗闇の中から、一つの種を地上に送り届けた。流星の役目としてな。次なる仮面の戦士はもうすぐ生まれる。メテオと同じ存在でありながら、別なる存在。それが、『ミューティア』だ。さあ、流星は派手に燃え上がらないとな。最後の技だ」

バックルに手をやると、「FREEZ」の電子音が流れ、メテオの足に冷気が集中していく。炎に包まれ、高温の空間の中でもお構いなしに冷気はメテオに集中し、絶対零度の近づいていく。この強化も、背中に背負うクリスタルの鎧の力によるものだ。

「これで終わりだ。アイス、ブレイカー！」

滝に名づけられたライダーキックの技を叫びながら、メテオは跳躍し地獄花に突撃していく。メテオの足が触れてすぐに瞬間凍結され、すぐさま伝わるトン単位の衝撃が地獄花の体を、結晶の大きさまで粉碎し、おぞましき妖艶を振りまく女はこの世から、完全に消え去った。

それを見届けたメテオの背中から、翼は消え去り、同時にメテオの体からすべての力が抜け、その場に崩れ落ちた。傷口からは再び出血が始まり、手を動かして這おうとするが、それすら叶わない。力なく指が、床をなでるだけである。

「畜生、逃げる力を残す余裕がなかった……。死ぬ気はねえのによ。死神、近寄るんじゃない。俺は生きるんだ。約束があるんだよ、飲み会のな……。いい女とも約束したんだ。誰もが共存できる世界を守っていくつて。再会して、キスしてもらえるかもしれねえんだぜ……」

メテオは、必死に上体を起こし、自分の体を眺めた。再生が追い付かないほど傷ついた体の至る所から血が流れているが、大部分が失われたためなのか、出血の勢いが薄れてきている。強化服はボロボロで、視界はぼやけ始めている。落ち武者が逃げるときは、こんな心境だったのだろうか。

戦いの中に身を置き、死を乗り越えてきた。だが、勇気は無限ではなく、使い減りするものだ。だから、人間を磨いて、戦いの旅に成長してきた。出会いと言う宝も得た。だからこそ、もっとそんな

生き方をしたい、どうしようもなくメテオは願った。死を覚悟していたとはいえ、こんな未練を残すとは思っていなかった。今はまだ早過ぎる。生の欲求が強すぎる。

「……、死にたくねえ、死にたくねえよ。俺は、仮面ライダーだ。不死身のライダーだ。死ぬ訳がねえよな……。畜生、死にたくねえ……」

メテオは最後の力を振り絞り、絶叫した。その叫びが呼び水となつたかのように、ひととき大きな爆発が地の底から起こり、一面が炎に包まれ、床が崩れ落ち、一気に施設は崩壊してしまった。もう、メテオの姿はそこにはなく、探すことも出来ず、その存在はかき消されてしまった。

地上でも、大爆発の影響が現れ、至る所で陥没が起こり、エレベーターシャフトから火柱が、次から次へと上がり、危険と判断したV3は、巨石でシャフトに蓋をした。地下からの出口を封じたことになったわけだが、誰も異論を唱えるものはいない。それが賢明な判断であるし、とてもあの爆発で、改造人間でも生き残れるはずがないと思つたからだ。絵空事の世界ではない、現実世界にいる存在には、限界が存在する。

目の前で起こつたことに、滝も原も呆然と見守るしかない。これまで部下の死は見てきたが、今度の衝撃は大きかった。何故なら、不破は仮面ライダーだったからだ。仮面ライダーが死ぬ。そのシーンを、滝は長いライダー達との交流でも見たことがなかった故に、絵空事存在と混同していたのかもしれない。だが、機械であり、メテオとリンクしている優位つ存在のヘンリーが、言葉少なに、現実を伝える。

「メテオの反応、消滅……。ロストしました……」

原にとっては、初めて本格的に組んだ仮面ライダーがメテオだった。彼にとっては、仮面ライダーは虚構のイメージが強く、そんな存在と一緒に行動するのに、不思議な感覚を持っていた。

そんな、特別な存在である仮面ライダーが、目の前で死ぬなど、彼らにとってはあり得ないことであり、あつてはならないことだった。だが、これは現実である。現実を認めなければ、人は生きてはいけない。人の死という現実を。

「バカな奴だと思っていたが、ここまでやらかすとは……。仮面ライダーが死ぬなんて、ふざけるにもほどがあるぞ、不破……」

「奢ってやる、約束だろう。洒落た、隠れ家的ないい店なんだぞ。……、お前のせいで、酒がまずくなるじゃねえか。おい、面出せよぶん殴ってやる。何がメテオだ。本当に火にまかれて、燃え尽きちまうなんてよ。……、この馬鹿やろうおお」

二人の叫びは、誰にも届くことなく、暗闇に散っていった。周りには、風に煽られた焦げ臭いにおいと、全く光の射さない暗い森と夜だけが存在している。何も物言わず、返事することもなく。そう、炎に消えた流星と同じように。

現実を受け入れがたく、カプセル回収という作戦を成功させたにも関わらず、誰もが打ちひしがれていた。カムフラージュのものから、再び、巨石信仰の対象に戻った岩に、皆が叶うはずのない願いを託さずにいられない。

そのため、誰一人として側で起こった、小さな異変に気がつけなかった。超人であるV3でさえも。

外に出ることができたカプセルは、不思議なことに、小刻みに

震え、関知できない不思議な波長を発していた。まるで声のようではあるが、物理的な声ではない。物理的なものなら、V3が察知するからだ。声は、耳では聞こえない、心や脳に届く声。そう、メテオにだけに届いた、女の幽霊の声。

「メテオ。……、私があなたの仮面、意志を継ぐ……、仮面の環は決して途切れない。私は、ミーティア」

誰も知らないところでは、新たな存在が、連綿と続く仮面の環を繋ぐ者が誕生していた。

眠り姫

大きな収穫と引き換えに、代えがたい損失を被った零部は、失意と共に本部に戻り、立て直すための日々を送っていた。行方不明となった不破の搜索も行われたが、安否を確認できる物証はなく、希望よりも絶望の意味で行方不明と言言葉を使わざるを得ない状況に、滝は頭を抱え込んでいる。

原もまた、眉間にしわを寄せた日々が続いていた。本部に戻って一週間。得た物より失ったものの大きさを考えると、他の仕事に取り掛かる気力もなく、こうして滝のオフィスで二人向き合い、煙草を吸ったり、コーヒーを飲みながら時間を過ごす日が多かった。かといって、大の大人が一日の大半を顔を突き合わせてだんまりを決め込んでいても、事態が好転するわけでもない。

「原、お前は何日ここに居座る気だ」

「別に、籠城する気はないんですけどね。イライラするわ、今まで口うるさく言っていた対象がいなくなるわで、静かな日が落ち着かないんですよ」

「静かだったことは平和だったという証拠だ。いい事じゃねえか。うるさい奴がいなくなっただって、そいつが来る前に戻っただけだ。気にすることはない」

「部長みたいにドライになれませんか」

「俺は歳だからな。まあ、俺だって平気じゃないが、悪党は俺達が弱った時に襲いかかって来るんだ。それも社会にな。不破が死んだ事は確定してない。奴は仮面ライダーだ。行方不明になって、平気な顔してツラを出した馬鹿野郎もいる。普通とは違うんだ。だから、俺達は目の前にある事を片付けるんだよ」

「つまり、あれの事ですか」

「ああ。あいつが命懸けで俺達に託した眠り姫、ミーティアだ」

二人が話しているのは、先日の作戦行動で奪取した、改造人間保

存カプセルに入っている被験者、コードネームをミーティアと命名された個体の事である。不破の証言や、採集したデータから女性だと言う事は判明しているのだが、一切の個人情報が残されていないため、自分達でつけたコードネーム以外は外見も含めて、何もわかっていないのだ。その上、カプセルを起動させ、彼女を覚醒させる方法もわかっていないため、本部に戻って以来、一つも物事が進展しないため、原は気が滅入る一方になっている。

「ミーティア、か。METEOR、つまり同じ名を持ちながら、違うアイデンティティを所有する存在を意匠に持つ名。不破の奴も、よくあの状況でこの名前を考えたものだ。こんなセンスがある奴だとはな」

「まったくだ。とにかく、彼女を起動させない事には、あいつの思いを成就させられない。だが、肝心の鍵がない。今、鍵職人と呼んでいる所なんだがな」

「由紀さんですか。まあ、あの人があれば百人力でしょうね」

「たった百人なの、原隊長」

原が驚いて後ろを見ると、常島由紀がいつの間にかドアの隙間から顔をのぞかせ、二人を見て笑っていた。沈んだ気持ちで話をしていた二人は、完全に不意を突かれた形だ。

「滝さん、呼び出しに応じて、南半球から来てあげたわよ。それにしても、やあね。いい歳した男が部屋の片隅でイジイジと。雰囲気悪いわよ」

「うるさい。だが、お前の言う通りだな。それじゃあ、お前の仕事でも見せてもらって、気分転換でもするか」

「いいわよ。転送してもらったデータから、ある程度の準備を整えてきたから、がっかりはさせないわよ」

「それは楽しみだ。それじゃあ、ラボに行こうか。吉村も、お手上げで、段々顔色が悪くなってきた。助けてやってくれ」

「言っておくけど、これは貸しね。後で、何か要求するから」

「わかった、わかった」

暗い気持ちを振り払い、三人はミーティアが眠るカプセルのあるラボへ向かった。中では、技術班担当の吉村が頭をかきむしりながらメモを書いては、破り捨て、また書いては破り捨てと、軌道に必要なアイデアをひねり出そうとしているが、一向にうまくいっていないのは、青ざめた顔色が浮かび、無精ひげが生えた顔を見ればよくわかる。憔悴しきり、全く余裕がない彼は、三人が入ってきた事にも気がついていない。後ろまで近付いた滝は、仕方なく声をかけた。

「おい、吉村。だいぶ苦戦しているようだが、救いの女神が到着したぞ」

「ああ、部長……。由紀さん、来てくれましたか。まさに救いの手を望んでいた所です」

由紀の姿を見た吉村の顔に血の気が戻り、嬉しさのあまり彼は由紀の手を握り、何度も振り続けている。よほど苦戦して、猫の手も借りたいところだっただろうが、来たのは神の手であった。これで問題が解決されると希望を抱いた彼は、突然饒舌になり、いつもの調子で滝達に状況説明を始める。

「現状をお話ししますと、大変情けない事に、このカプセルが到着して以降、解決できたのは電力の供給、これだけです。カプセルの開閉から、ミーティアの覚醒に至るプロセスが全く分からず、このカプセルの機構も不明のままです。まったくもって面目ない」

「仕方ないわ、吉村さん。このカプセルも、中の素体も、普通とは違うタイプみたいだから。開閉については、中身が覚醒しない限り、開かないようにプロテクトされているはずよ。じゃないと、危険だから」

由紀は、危険と言う二文字を強調していった。蓋を開けるだけでそれがどんな危険に陥るのか、滝達には全く見当もつかず、黙って由紀の説明の先を訊くよりほかはない。

「報告書にあった、地下施設の焼け跡。確か、推察では高温の炎で一瞬で焼かれたと言う話だけど、それは当たっているわ」

「だが、火元はなかった。それは確かだ」

「火元なんてないわ。無から発生したんだから。結論から言うと、素体はパイロキネシスを使える、もしくは使えるように強化された可能性が高い」

「念動発火能力。中身は、エスパーか」

「まあ、漫画でやる様なものの屁でなものじゃないはずだけど、強化された肉体が能力を強化し、施設とそこにいる組織の連中を一瞬で焼き尽くしたんでしょね。物騒な分、精神面に依存する部分が大きくて、完全に覚醒しないままの覚醒は、能力の暴走や消失、命そのものに危険があるから、カプセルの蓋に何重もの鍵がかかっているだから、まずは中身の女性を起こさないと」

「その方法がわからないんだ」

「それなんだけど、彼女は、不破君やヘンリーの回線に侵入したんでしょ」

「そうだ。記録も残っている」

「彼女って、意識が浮遊しているんじゃないかしら。不安定な脳波のシンクロと、パイロキネシスの暴走に近い発動。私の推論だと、彼女は肉体と精神が完全にくっついていなくて、幽体離脱状態じゃないかと思う。所有者は、昔のタイプのを今まで保存してきた旧タイプのまま実戦投入することはあり得ないから、フィジカルでの改造はもちろんだけど、メンタル面でも改良を加えないといけない。でも、体を解放すると、伝統と言うか、お家芸になりつつある、仮面ライダーの脱走がある。だから、精神だけ抜きとってトレーニングするとなると、方法はおのずから限られる」

「……。なるほど、仮想空間か」

滝は、仮想空間でトレーニングさせると言う由紀の推論に、納得のいく思いだった。先日もその仮想空間内での妙動きに捜査を行った所、ひどい報復を受け、結果としてローゼンクロイツァーと言う大物に予定外の接触することになってしまう事件があったばかりだが、他の組織も仮想空間内で様々な実験を行っている可能性は十

分にあり、そこで改造人間のメンタルな部分での実験を行っている
と言う推論は、あながち的外れと言えない。

「由紀、つまりこういうことか。肉体は再改造や調整、データの吸
い上げのために起動できないから、仮想空間に精神を送り込み、現
実世界と同じような経験を積ませ、21世紀の社会に適応できるよ
うにしたり、戦闘訓練をイメージで行い、それを後から肉体にフィ
ードバックさせていると言う事か」

「多分ね。だけど、その途中で不用意に肉体と精神が繋がったこ
とで、脱出を図ろうとした彼女は、施設にいた人間をパイロキネシ
スで吹き飛ばした。脱出を図ろうとしたってうのは、脳波で救援を
申し込んできたってことでもはつきりしている」

「覚醒できるか」

「もちろん。そのために来たわけだし、自身はある。時間は必要だ
けどね。吉村さん、採集したデータを全部見せて。自信はあるけど、
地図もなしに出発するほど、無謀なことはできないからね」

由紀は吉村にデータを用意させ、そばにある椅子に座ると、持つ
てきたノートパソコンを数台取り出した。恐らく、彼女が改造した
上で所有しているものだから、世界でも有数の高機能のパソコンな
のだろう。カプセルに接続できそうな端子を見つけてコードを接続
し、さっそく作業に取り掛かる。こうなると、もう滝達に出番はな
い。

「さてと、もう俺達に出る幕はない。原、オフィスに戻るか」

「そうですね。これ以上先は、自分の頭では理解できない」

「同感だ。由紀、コーヒーぐらいは差し入れてやる。頼んだぞ」

由紀は、指でOKサインを出しながら、仕事に没頭し始めた。二
人が廊下に出ると、エレベーターから出てきたV3・風見と鉢合わ
せになる。外出していたようだが、滝は行き先を聞いていなかった。
「帰ったか、風見。どこに行ってた」

「ちよつと野暮用さ。と言っても、隠す必要もないな。家族と戦友
の墓参りだよ。なかなか日本に帰る事のない身だからな」

「確かに、ろくに故郷に帰れる事はないだろう。しかし、よく何十年も戦い続けられるな。特にお前達、第一世代と言える連中は」

「つらい気持ちがマヒしたか、人間に戻れない事に達観しているか、或は滝さんみたいな人が助けしてくれるおかげか。その所は自分でもよくわからない」

「考えない事が一番の理由かもな。来い、コーヒーでも入れてやる」「ありがたいね。滝さんのコーヒーは、懐かしい味がするからな」

「まあ、おやつさんが入れてくれたコーヒーの真似をしてきたんだが、ようやく自信を持てるようになった。部屋に入れ」

三人は滝のオフィスに入ると、滝はコーヒーをいれ、原と風見はソファに座りながらそれを受け取った。風見は、香りを十分に楽しみながら、コーヒーを口に入れ、一言「うまい」と呟いた。本当にうまそうな表情を浮かべており、滝も気分がいい。

「どうだ、おやつさんの味を再現できているだろ」

「ああ。何だか昔が懐かしくなる」

「俺も、昔が懐かしくて、この味を目指して試行錯誤してきたが、ようやく再現できた。これのおかげで、この歳まで仕事ができているようなもんだ。お前、おやつさんの墓にも寄ってきたのか」

「当然さ。日本に帰ったら、墓参りは必ずやっている」

「俺は、最近行っていないな。墓参りどころか、俺が墓に入る日が段々近づいてきた」

「縁起でもない。だが、それもそうだろうな。どうせ、この世界に足を踏み入れたら、明日が命日になるかもしれないんだ」

「ま、そういうことだな」

あまり愉快ではない話をしながら、三人はしみじみとした様子でコーヒーを呑んでいる。彼らにとっては、こんな時間しか、平和を感じられる時は存在しない。

「風見さん、不破の事なんだが……」

「俺も、あの後、高知に残って搜索したよ、原さん。だが、一切手がかりなし」

「手がかりなしか……」

「その一切ないのが引つ掛かる。指紋を探しているんじゃない。死体、おっと失礼、肉体そのものを探しているのに、その痕跡がないんだ。改造人間の体だ。そうそうの事がない限り、跡かたもなく消えることはあり得ない」

「まさか、あいつは生きているとでも」

「死亡は確定できない上、行方不明だ。行方不明なんて、俺達の世界ではざらにある。だが、回復に時間がかかれば、ひょっこり姿を現す奴もいるし、死を偽装して活動する奴もいる。要は、行方不明でいる限り、死んだ事にはならない。気持を平静に保って、いい知らせが来るのを待つ方が健全だってことさ」

「待つ身はつらいな」

「焦ったって、どうにもならない。ところで、眠り姫の事を聞きたいな。あいつが、命懸けで守った女だ、興味がある」

風見の要望に滝が応え、手短にミーティアの起動に向けた作業を説明する。そして、由紀もその協力を駆けつけた事を伝え、風見の顔がややほころんだ。

「へえ、あいつも来てるのか。久しぶりだな、会つのは。相変わらずの美貌かい」

「相変わらずだ。あいつとは縁の深いお前だ。色々話したいだろう」

「俺はしたくても、向こうは過去を振り返りたくないだろう。そういや、あいつ、ここで右腕をまた換装したって。戦闘はもういいのにな」

「それができない性分なんだろう。だが、来てくれて助かった。ミーティアの起動にめどが立ったからな」

「あいつがいれば大丈夫だろう。時間がかかるのか」

「おそらく。少しばかり、こっちは暇になりそうだ」

手持無沙汰になり、ソファーに背もたれにもたれかかり、体を伸ばしていた滝が、

「ここで黙っているのも退屈だ。原、風見、麻雀でもやるか」と提案したが、二人とも呆れた顔で、滝を見ている。

「部長、さすがに麻雀はまずくないですか」

「責任者の俺が言っているんだ。別に、今は作戦中でもない。構わんぞ」

「しかし、三人しかいませんが」

「情報部に行つて、女史を呼んで来い。あいつも、高知の事件の後始末が終わつて、息抜きをしたがつていたからな。それに、あいつは強いぞ」

「はあ……」

「わかつたら、呼んで来い。それと、ピザでも注文しろ。俺のポケットマネーを出すから安心していい」

「わかりましたよ」

原は呆れながら席を立ち、情報部の女史と呼ばれている斎藤雅子を呼びに廊下へ出た。滝の目から離れると、原は苦笑いしながら、「部長、だいぶ不破の影響を受けているな。まあ、無事な可能性も出てきて、嬉しいんだろう」

と呟きながら、使い走りに素直に従っている。

偽装ホテルのフロントにデリバリーピザを頼むと、再び地下に戻り、情報部のオフィスにいる斎藤に声をかけた。

「斎藤さん、今大丈夫」

「あら、原さん。どうかしましたか」

「いやね、部長が、ミーティアの起動まで時間を持て余すのもなんだから、麻雀でもどうかつて」

「へえ。部長がそんな事を。珍しいわね。でも、面白そう」

清楚で、堅物に見える斎藤が、麻雀の誘いに応じるのが以外で、原は内心驚いているが、滝が斎藤は麻雀が強いという言葉を思い出し、なるほど心の中で斎藤の反応に納得する事が出来た。

「今、手が空いていれば、一緒にどうです」

「いいわね。手加減しないわよ。食べ物とか、注文しましょうか」

「いや、それはもう手配済みです」

「用意周到ね。それじゃあ行きましょう」

機嫌がいい斎藤は、すぐ立ち上がると原と共に滝のオフィスに向かった。オフィスでは、滝が以前不破が通販で購入した、高級品の雀卓をセッティングし、風見もまた仮面ライダーには見えないぐらい、張り切って準備をしている。やがて注文したピザが届くと、四人は雀卓を囲んでマージャンに興じ始める。

最初の内は、麻雀は久しぶりだと謙遜していた風見がリードする。記憶力がいいのと、頭脳の計算力がずば抜けているため、相手の牌を読み、的確に点数を稼いでいく。そのからくりに気がついた滝と原が、不満を上げる。

「おい、風見。お前の記憶力と演算能力は、少しずるくないか」

「言われてみればそうだ。風見さん、少しハンデをよこしてもいいんじゃないか」

二人の追及を、風見は涼しい顔で切り抜けて、けむに巻く。

「俺は別に道具は使っていないよ。自分の体の一部を使っているんだ。いかさまじゃない以上、ハンデなんてやれない」

「そうよ。頭脳を使ったゲームが麻雀ですよ」

風見の意見に、斉藤が手元の牌を見つめながら助け船を出す。彼女の指摘に、上司である滝も、それが事実であるために反論ができない。

「女史、それはそうだな」

「うじうじ言つと、みつともないですよ、部長。さあ、次の局です」

もはや、斎藤には、麻雀を続ける限りは滝を上司と思う気配はないようだ。滝と原は、ピザをかじりながら同意し、勝ち目のないゲームを続ける羽目になる。奇妙な取り合わせで行われるゲームは次第に流れが変わり、記憶や計算力より、状況判断が速い斉藤に有利な流れになっていく。得点の高い役を連発し、風見をついに追いつく得点を上げる。

「ロン。国土無双です」

斉藤の強さに、三人とも呆れかえってしまい、何も言う事ができないが、それでも次の局に入ってしまう負のスパイラルに陥っている。その時、オフィスのドアがノックされる音が聞こえ、ドアが開くと由紀が顔をのぞかせてきた。

「部長、我ながら素晴らしいスピードで、メドが……、あんたたち、何やってんの……」

由紀は、敬意火でデリバリーピザを頼み、自分が必死で作業している間にマージャンに興じる四人の姿に声を失っている。さすがに気まずい空気を感じた滝が、場を取り繕い、この場を去ろうと動き出す。

「そ、そうか。いや、これはだな。最近、部下の士気が下がっているから、気合を入れるための景気付けだ。そうかそうか、ミーティアのめどが立ったか。原、行くぞ。風見、お前の新しい後輩が目覚めた。女史、お前も見たいだろう」

滝は、下手な嘘でごまかしながら、由紀の冷たし視線の前を通り過ぎ、三人をラボに連れ出す。ラボの中では、カプセルから音が鳴り響き、先程までの沈黙の状態から、雰囲気さがらりと変わっている。時間がかかると言いながら、短時間でここまで仕上げてしまった由紀の腕前に、滝は舌を巻くより他なかった。

「すごいな。うんともすんとも言わなかったカプセルが、洗濯機並みの音を出している。由紀、改めて見直したぞ」

「まあ、嬉しい。南半球からわざわざ呼び出して、自分は別室で麻雀に講じる男の言葉なんて、涙が出るくらいだわ。それに、洗濯機はないでしょ。このカプセル、五十年前くらいにできたものとは思えないわ。多分、何度も世代交代してきたんでしょうね」

「よほど、中身を重要視しているんだろう」

「多分ね。試作と言うより、実験機の位置づけだから、色々後から付加しているかもしれないわ。ま、お目覚めになったら、全部わかると思うけど」

「時間がかかるか」

「意識はもう脳に戻っているはずだから、後は肉体面の覚醒を待つだけ。かなり低温の状態から覚醒に向かっているから、一時間くらいかな」

「礼を言うぞ、由紀」

「麻雀やっている人に言われたくはないわ。出来れば、この眠り姫にお礼を言つて欲しいわね」

由紀の強烈な皮肉に、滝は苦笑いしながら頭を掻いている。だが、もうすぐ不破から託された女性を覚醒させる事ができると、ホッとした思いが心に湧いてきていた。だが、顔をほころばせている滝の横で、風見が険しい表情を浮かべながら、天井を見上げている。敵はそれに気がつき、投げ年の経験から嫌な予感を抱いた。

「どうした、風見。問題でもあるのか」

「ああ。滝さん、このビルはヘリが着陸するスペースなんてないよな」

「ない。敵か」

「おそらく。かすかにしか感じないが、上空のヘリが、このビルの間上でびったり静止している」

「まさか、こここの所在地がばれたか……」

滝は苦虫をかみつぶしたような表情を浮かべた。この零部の本部は新宿のビル街の中にあるホテルに偽装されている。長年の間、秘密組織からその所在地を隠し通してこられたのだが、先日 of 仮想空間での事件で、逆探を受けかかった事があった。滝は、逃げ切ったと思っていたのだが、もしかしたら既にここは敵の手の内にあつたのかもしれない。それを悟られないようにただ流されていたのだとしたら、今の状況は非常に危険な状態である。

「原、ここにいる隊員を集める。最悪、戦闘になる」

「宿泊客はどうします」

「そのエリアは封鎖しろ。幸い、夜だ。出歩く客はいない」
「了解」

原は、落ち込んでいたさっきまでの様子が消えうせ、突入部隊の

隊長としての顔に切り替わり、すぐに部屋を出て戦闘態勢に入る準備に取り掛かる。その様子を見ていた風見は、何も言わずに部屋のドアに向かう。それを目にした滝は、振り返らずに彼に声をかけた。
「風見、頼んだ」

「上は任せておいてくれ。敵の狙いは、恐らく二つ」

「……、この破壊と、ミーティアの奪還、だな」

「間違いない。相当、この姫様は大事ならしいな」

「守ってやってくれ」

風見はにやりと笑みを口元に浮かべると、さっと部屋から飛び出していく。それを見た由紀も、白衣を脱いでバッグを取ると、風見の後を追ってドアノブに手をかけた。

「私も行くわ。かなりヤバい事態だから、黙っているわけにいいい」

「頼むぞ。ミーティアを動かせない以上、ここで敵を倒すしかない」

「わかった。宿泊客も守るけど、一般人を偽装に巻き込むのは、もうやめた方がいいわよ。リスクが大きい」

「もつともだ」

由紀の意見に同意しながら、滝は部員に指示を出し、宿泊客がいるエリアに隊員の配置を指示していく。まだ、敵の姿は監視カメラには移らないが、風見の五感にははっきりと敵の気配がとられ、その事を滝に知らせる。

「屋上だが、滝さん。戦闘は避けられそうにない。余り見た事のないタイプの怪人だが、由紀と二人なら何とかなるだろう」

「頼むぞ。内部の方は、隊員を展開させている」

「わかった。しかし、東京のど真ん中のビルの屋上で戦闘とはな。いつになれば、こんな事がなくなるやら……。行くぞ。変身、V3」

風見は仮面ライダーV3へと変身し、臨戦態勢に入る。由紀もまた、ライダーマンへの装備などの用意を整えているだろう。まだ動きがないように思えたが、通信機から冷静なV3の声が流れてくる。

「来たぞ……。こつちからの連絡は一旦切る。状況は、監視カメラで観戦してくれ」

その声を最後に、通信は終わった。滝は隊員に指示し、監視カメラの角度を変えさせ、上空に向けさせた。確かに、上空にヘリがホバリングするのが言えるが、相当の高さだ。じつとその様子を凝視していると、ヘリから数個の点が飛び散り、その点がい次第に大きくなってビルの屋上に落ちてくる。その物体を追いながらカメラの角度を替えていく、水平の角度になった時、その点は人型の形態に変わっている。その姿を見た滝は、

「余り、見ないタイプだな。新型か……」

と、呟いた。形状は完全に人型だが、頭部はシルバーメタリックな輝きを持っており、機械的ではあるのだが、目や口元は生物的な生々しさを持っている。生物と機械の合成と言うより、融合に近いなと、滝は分析した。

「新型の黒子まで使ってきたやがるとはな。敵は、確実にミーティア狙いだ。籠城するしか手がないこつちは、不利だな」

雪崩を打つように状況が悪化するため、滝の口調はいつになく荒っぽくなっている。だが、滝は仮面ライダーのためであれば、命をかけて支援する事を厭わない男である。未だ目覚めないミーティアもまた、仮面ライダーに違いないという確信があった。だから、彼女も必ず守って見せると言う強い意志が働いている。

「原、ホテル内の配置についたか」

「ぬかりなく。本部のあるこのエリアも鉄壁の防御です」

「屋上は戦闘に突入した。黒子も新型のようだな」

「最悪のシチュエーションですね。最近はそんなのばかりですが」
原の核心を突くような言葉に苦笑いを浮かべながら、滝はオフィスにある数台のモニターで状況を確認する。屋上では、怪人と戦う二人の仮面ライダー。そして、ホテルのフロアに展開する零部のメンバー。出来うる防御は敷いた。後は、敵がどう出てくるか、滝は様々な状況を想像しながら、事態を見つめている。

モニターは、戦闘エリアだけでなく、ホテルの至るフロアに設置されたカメラから送られてくる映像を移す。一般人の安全や、そこに紛れ込む不審者を見つけるためだ。滝の集中力は常に戦闘エリアに注がれているが、長年の間、不可思議な事件に立ち会ってきた感が為せる業か、一つの映像に強い違和感を持ち、その映像を拡大した。

その映像は、ホテルの正面玄関入り口から送られてくるものだったが、被写体の人物に違和感があった。その人物は外国人の男性だったが、着ている物や歩き方から見ても、観光客には見えない。だが、零部の偽装ホテルは、基本的にビジネスホテルに毛が生えたリンクのため、このような人物が来ること自体、非常に奇妙な事であった。手荷物もなく、連れもないこの男の立ち振る舞いに、滝は胸騒ぎを覚えずにはいらなかった。

「誰だ、こいつは。こんな客は、うちのホテルに来ることはまずない。しかも、戦闘中のこの状況で……」

滝はカメラを切り替え、ホテルの中に入った男の姿を追いながら、電話の受話器をとり、フロントにいる部員に指示を出す。

「俺だ。今来た外国人だが、どうも怪しい。足止めして中に入れるな」

滝の連絡を受けたフロント係は、拳銃の用意をして警戒態勢となり、男を待ちうけるが、男はフロントを無視して素通りし、ロビーからは見えない廊下へ迷うことなく足を進めた。その先には、零部の最深部に続くエレベーターがある。フロントにいた男女一組の隊員は、すぐさま拳銃の安全装置を外して、後を追いかける。

「お客様。申し訳ありませんが、そちらは関係者死がい、立ち入り禁止となっております」

男性隊員の声に、外国人の男は足を止め、ゆっくりと振り向いた。その瞬間、その口にニツとした笑みを浮かべ、

「そうか。だが、私もここに小用があるから、関係者と言う事にしてもらえないか」

と言い放つと、二人の隊員に踊りかかった。二人は安全装置付きの銃を発砲するが、相手の動きに銃口を合わせる事ができない。男性隊員は首に手刀を落とされ、女性隊員は壁に叩きつけられ、意識を失われた。警備の二人を黙らせた外国人は、すぐにエレベーターに乗り込み、最深部に侵入していく。

滝は、その様子をモニターで監視し続けていた。敵がエレベーターに乗り込むのを確認すると、すぐさま、エレベーターを停止させようとするが、システムが作動しない。停止させようとしても、エレベーターは無機質に下へ下へと降りてくる。

「クソ、ここのシステムに干渉しているな。篠塚、廊下をしっかりと固めろ。敵がここまで来るぞ」

隊は、最深部の防御を指揮する篠塚に指示を出すと、自分も防弾チョッキを着込み、自動小銃を携行して廊下で敵を待ちつける。

緊張感で周りの空気が張り詰め、静けさが空間を支配する中、エレベーターの扉が開く音が、滝達の耳に入ってきた。皆、緊張で口の中が渴き、呼吸する音だけが響く。そこに、敵の足音が静かに響きながら近寄ってくる。銃口を廊下の曲がり角に向け、引き金に指をかけて待ちつける彼らの目に映ったのは、床をごろごろと転がりながら手元に転がってくる水晶玉だった。敵の姿を予想していた彼らにとって、目の前にある水晶玉は、緊張の糸を断ち切るものとなる。その心の隙について、水晶玉から鋭い金属音が鳴り響き、彼らの耳を突き抜け、気持ちを怯ませた。さらに、音と同時に水晶玉から三体の影、怪人が姿を表した。篠塚以下の来院はその現象に驚いたが、滝は冷静にその事態を理解し、適切な対処を取る。

「水晶玉を使って、ミラーモンスターを侵入させやがったな」

滝は、銃の狙いをつけ、水晶玉を銃で撃ち抜く。これで、ミラーモンスターの増加は食い止められる。だが、至近距離から三体の怪人を繰り出されては、生身の人間には、非常な危険な状態だ。一斉に発砲が始まるが、ミラーモンスターは、床どころか壁や天井、縦横無尽に動き回り、彼らを翻弄する。

「隊長、最深部が攻撃を受けています。援護を、援護をお願いします」

「篠塚、落ち着け。俺達もすぐに向かうが、エレベーターが使えない。外からの非常用出入り口から向かうらか、それまで持ちこたえろ」

原もこちらに向かっているようだが、どうやら通常ルートを封じられているらしい。援軍が間に合うか微妙だなと、滝は判断した。

「篠塚、上には仮面ライダーもいる。とにかく、奴らをくぎ付けにすりんだ」

「了解」

滝の冷静な口調による指示に、篠塚も落ち着きを取り戻して攻撃を続けるが、実際の所は気が気ではない。ミラーモンスターは少しずつこちらに接近してくる上、負傷している様子が見当たらないためだ。さらに、その後ろには謎の外国人も控えている。全く余裕がない滝達に、冷静でいる事自体のメリットはほとんどない。

「風見達から連絡がない所を見ると、屋上もてこずっているな。助けは期待できないか……。人生はままならんな」

不破の様な愚痴をこぼしながら、滝も銃を打ち続ける。

その時が、壁からものすごい音が聞こえ、全体に亀裂が入る。音は連続し、その度に亀裂は広がり、ぼろぼろと破片が崩れ落ち始める。戸惑う零部隊員とミラーモンスターの目の前で、やがて壁はガラガラと音をたてて崩れ落ちた。濛々とほこりが舞い上がる中、崩れた壁を踏み越えて、ラボの中から一つの影が姿を現す。

白銀の強化服には、手足の部分にのぎり状の赤いブーツやグロブのカラーが走り、腰のベルトには黄金の輝きを持つバックルが装備されている。頭部には細く切れ上がった赤い複眼と、細く締まったクラッシャーが特徴的な純白なマスクが備わる。肩口からは、オーロラ状に色が変化しているマフラーに似た部位があり、背後のシルエツトで最も目を引く。新たな異形存在を目にした滝は、驚きよりも喜びに近い感情が心の中でわき上がってきた。

「目覚めたか、ミーティア……」

静かに、茫然と廊下の真ん中で佇んでいたミーティアは、滝の聲が耳に入ったのか、ふっと彼の姿を見つめた。そして、しばらく滝の姿を眺めた後、若く落ち着いた女性の声を、初めて肉声で彼の耳に聞かせる。

ミーティアは、己の名を確かな口調で告げると、ミラーモンスター達に体を向け、曲がれるような所作をとりながら近づいていく。余りに大胆な接近に、モンスターは面食らった様子だったが、隙だらけのミーティアに向かい、獣性をむき出しにして飛びかかり、鋭い爪を突きだした、はずだった。しかし、二体の攻撃は、わずかな差で体には当たらない。いや、まるで自ら手の起動を変えてしまったとは思えないような現象に、離れていた滝からは見えたのだ。

「あいつ、一体何をやった……」

啞然とする滝の呟きをよそに、目標を失った二体のモンスターの背骨に肘を当て、腹部にけりを打ちこんで廊下のは時まで吹き飛ばす。溜めも溜めもなく、一挙一動が水が流れるようになめらかに動くのがミーティアの動きだ。ミーティアは、得体の知れない相手の動きに戸惑うミラーモンスターに、自信に満ちた声で宣告する。

「神代より私に受け継がれてきた、この古の武術。あなた方には決して破ることはおろか、見抜く事もできない」

その言葉を否定するが如く、三体のモンスターはミーティアに一斉に襲いかかるが、スピードを上げた以外に帰ることはなく、流れる動作でモンスターの動きを交わし、受け流していき、体力を奪い去っていく。様々な仮面ライダーを見てきた滝だが、このような戦い方をするライダーは見た事がなかった。

「神代からの武術……。空想じみているが、あの見た事のない戦い方を見ていると、信用せざるを得ない。それにしても、あんなライダーは見た事がない」

「そう、私はミーティア。仮面の環を繋ぐ戦士の一人。仮面ライダーミーティア」

静かに名乗りを上げたミーティアは、怪人達の方に向き直ると、見た事のない動きを取り始める。止める事もためる事もない、流れる水のような動きでモンスターとの距離を詰めていく。あつけにとあられる怪人と滝達だったのが、驚くべき事が起こった。彼らの目からミーティアの姿が消えたのだ。まさに一瞬の出来事であつたが、それだけに何が起こったのかを理解する事も推察する事も出来ない。そんなうろたえの中、怪人達の体が弾かれた様に浮き上がり、壁に叩きつけられたのだ。そして、いつの間にかミーティアの姿が滝達の視界に戻っている。

「何だ、今は。加速装置の類いか何かか……」

滝は、今の現象を、高速で動きまわることで、肉眼からは捕らえられなくする加速装置の一種ではないかと推理したが、その考えをミーティア自身が否定した。

「そんな機械頼りの動きではありません。私が駆使するのは、神代より受け継がれた古の武術。誰も知らない、この世で私だけの戦術です。私にとって、相手の死角に入ることなど、造作もない事」

「死角に入ると……」

啞然とする滝だが、現にミーティアの姿は何度も滝の、そして怪人の視界から消え、その度に目に見えないところから攻撃を繰り返していく。見た事もない戦術に声を失っている滝の後ろから、地下に入り込んだ原の声が聞こえた。

「部長、お待たせしま……、なんですか、あれは。まさか、ミーティアが……」

「ああ、そうだ。いきなり、覚醒しやがった」

「しかし、妙な動きをしますね。ですが、決め手がない様に見えますけどね」

「何、どういう意味だ」

「あれだけ相手を弱らせているのに、決定打を与えられていないんですよ」

滝ははっとして、ミーティアの戦いを見つめ直した。確かに攻撃

を受け流し、流れる動きで相手の死角に入り込んでいるが、とどめの一撃を繰り出せていない。一体、何故なのかを考えた滝は、ある事に気がついた。

「あいつ、暴走を引き起こすような危険を持った奴だったから、プロテクトがかかっているんじゃないのか」

滝の危惧は当たっていた。ミーティアの体は、もともと旧式のために、改造人間としての出力が小さい。その上、暴走する危険があり実際に引き起こしているため、その能力にリミッターやプロ手黒が仕掛けられているのだ。そのため、実際の戦いは優位に進めているが、出力や装甲が上のミラーモンスターに、とどめをさす事ができない。その差は、隊員達が援護してどうなるかはわからないが、滝は援護射撃の指示を出す。

「余り、意味はないが、援護ぐらいはしないと、その内にヤバくなってくる」

「まずいですね、何とかあいつのプロテクトを解除しないと……。あつ、まさか、この事を予期して」

「どうした、原」

「不破からの預かりものですよ。あいつのベルトの結晶体の欠片。感応したり、ミーティアとあいつが同系列だとしたら……」

「普段はこんな根拠のない事は信用しないが、もしかしたら、もしかするぞ。おい、ミーティア」

滝は戦闘中のミーティアを呼ぶ。彼女は、滝の方を振り向く余裕はさすがにないが、彼の言わんとする事を見抜いているかのように、右手を後ろに差し出す。

「何でもお見通しか。まあいい、物分かりのいい戦士など、レベルが高そうだ。お前のプロテクト、解除してやる。こいつを受け取れ」
「私に仮面の環を繋いだ人の意思。確かに受け取ります」

滝が投げた石の欠片をミーティアは振り向かず後ろ手に受け取ると、それを自分のベルトの結晶体に近づけた。すると不思議な現象が起こった。

結晶体が太陽のような輝きを放ち、石の欠片を照らし出す。その輝きに呼応するように、ステンドグラスの彩りを備えた何色もの光に包まれ、かがて形を失って風化し、ミーティアのベルトに注ぎ込まれていった。その現象と共にミーティアに変化が訪れる。

両腕に火が渦巻き、両足にブリザードが吹き荒れる。片からのびるオーロラが走るマフラーに七色の光と稲妻がほとばしる。ミーティアは仮面の環と能力を完全に受け継いだのだ。

「不破龍雄、あなたの意思と力、ここで確かに引き継いだ。あなたも死なないで欲しい。……、さあ、時間がか方っけど、これで終わりにしましょう」

ミーティアの口調は強気を帯びる。流れる様な動きは、激流に動きを変え、普通に彼女の動きを追うのも困難になる。モンスターたちも必死にミーティアの動きについていくが、彼らは次第にある一点に集められている事に気がついていない。そして、ミーティアは彼らの死角に侵入し、低位置から右足を逆袈裟に振り上げる瞬間、「ライダー、キック。氷砕……」

と、静かに呟いた。次の瞬間、絶対零度の中でトン単位の衝撃を加えられた怪人三体は、氷砕アイスブレイカーの名の如く、粉碎されている。起こした事態とは裏腹に、冷静なミーティアは、廊下の奥に向かって、変わらぬ冷静な声を発する。

「そこでいつまで隠れているのですか。姿を見せなさい。こそこそ隠れるほどの技量ではないでしょう。さあ、顔を見せなさい。ローゼンクロイツアー」

毅然とした口調と態度のミーティアの誘いに乗ったのか、廊下の曲がり角の奥から男の高笑いが聞こえてきた。足音が近づき、声が大きくなるに従い滝達の緊張が高鳴る。

曲がり角から姿を現したのは、背が高く金髪で、青い瞳の目の彫りが深く鷲鼻の顔が特徴的なイタリア系と思われる外国人男性だった。ミーティアの声が本当に面白いのか、目に涙を浮かべる程大笑

いを浮かべていた彼は、銃口を向ける隊員達の前でも全く警戒することなく自然体を崩すことはない。ひとしきり笑った彼は、ようやく息を整えながら冷静に戻るが、どこことなく軽薄さと言うか、根が陽気な気質は隠し様がなかった。

「いやいや、覚醒していきなり仮面ライダーを名乗るとは。やはり君は資質が他とは違うようだ、ミーティア」

流暢な日本語を操る男は、陽気にミーティアに話しかける。真面目な様子はなく、どこまでも人を食ったような、ナンパな態度ではあるが、ミーティアは全く動じることはない。

「命をかけて、仮面の環を繋ぐ事を望んだ男、そして、私自身の存在にかけて、私は仮面ライダーを名乗り、その存在を受け継ぐだけです」

「ほう。君の様な人間が存在する場がこの世界にあるのかね」

「あります。あなた達のような存在がある限り、戦う事が私の存在意義であり、宿命。それが私が選び、生まれながらの私と言う者の意味です」

「まったく、厄介な人材を逃したものだ」

二人の丁々発止のやりとりを聞いていた滝達には、二人の会話の意味のすべて、背景は理解しきれない。だが、ミーティアは既に仮面ライダーであり、人のために戦う事を宣言している。それだけはkkりわかる。彼らはミーティアを援護するため、銃口を降ろすことなく、男に狙いをつけている。多勢に分税の状況をわきまえている男は、これ以上の介入をする意思はないようだ。

「少々、派手に行き過ぎたようだ。今日はこれで退却する事にしよう。滝和也君、あの水晶玉を真っ先に破壊した君の判断力、置いてまだ音得る事を知らずと見た。この組織は、世界各地の組織と比べても侮りがたい。気をつけよう。ミーティア、君はいい仲間を持ったな」

「私は彼らを託された。だから、守るべき存在です」

「いい心がけだ。それに免じて、このホテルの一般客を巻き込むこ

とはしないでおう。屋上の部隊ももう引き揚げさせる、と言うより、V3とライダーマンによって撃破されたがね。仮面ライダーとは、虫の様にしぶといものだ」

「虫ではありません。仮面の下に自分の表情を隠しながら戦い続ける戦士です」

「失礼した。そう言えば、失礼ついでに名を告げていなかった。エリオ・カリオストロと言う。覚えておいてくれたまえ」

「カリオストロ……。イカサマ師の名を名乗るのは、洒落のつもりでしょうか。ローゼンクロイツアーにお伝えください。仮面ライダーミーツアは、あなた達に宣戦布告します。そして、おのれの使命にかけて崩壊させると」

「よろしい。だが、あなたの戦術であれば、無事に返すつもりはないでしょう」

「その通り」

ミーツアは、両腕を後ろに伸ばし、お菊振りかぶりながら前方に突き出した。その手からは、穂のうが巻き起こり、まるで蛇の様な動きでカリオストロに向かっていく。地下施設を一瞬で焼き尽くしたパイロキネシスが解放されたのだ。高熱の帆のうがうねりながら向かっていくが、カリオストロは右手を前にかざすと、まるでそこに見えない壁ができたかのように、炎が行く手を遮られた。どれだけ、炎を送り込んでも見えない壁をとばできない事を悟ったミーツアは、観念して攻撃をやめてしまう。

「さすが、使者として赴くだけの実力はありますね」

「そちらこそさすがだ。勝つために、生き残るために手段は選ばず。これまでの戦士とは、考えが違う」

「もうこの場を去りなさい。作戦を失敗させられて、これ以上、あなたも恥をかきたくはないでしょう」

「もつともだ。では、今日はこれで失礼しよう。では、ごきげんよう」

カリオストロはわざとらしく仰々しい態度をとりながら姿を消し、

エレベーターで上のフロアへ去っていった。激しい戦闘の後に訪れた静寂に、一同は身動きがとれないでいたが、ミーティアが地震で話を切り出すことで、その場の空気を和らげる。

「戦闘は終わりました。突然の介入で勝手な事をしまして申し訳ありません」

余りに礼儀ただいい態度に、先程の手段を選ばぬ戦術との差に戸惑っている滝達であつたが、話をしてみない事には何も彼女を理解できないため、滝が代表して、コミュニケーションをとる。

「俺はこの責任者の滝和也だ。謝罪は無用だ。いきなりの覚醒で、戸惑いはしたがな」

「精神が肉体と完全に接続できたため、覚醒に成功する事が出来ました。改めてお礼を申します。ありがとうございます」

「礼には及ばん。ところで、お前は不破とは相当のコンタクトを取った様だな」

「いえ、あの方の意思が一気に私の石に流れ込んできたのです。ですから、技もそのまま書きされている様な状況です。あ、すみません、この姿ですつと話していて。すぐに解除します」

ミーティアは、強化服の装着を解除していく。ふわりと黒髪がなびき、小顔で少し大きな黒眼が特徴的な顔立ちであつた。

「私、白鳥咲夜と申します」

「おう、よろしく、……おい、お前」

「はい……きゃっ」

咲夜は、悲鳴を上げて自分が飛び出してきたラボへの壁穴に飛び込んでいった。彼女は、カプセル内で変身を行ったため、強化服の下は、一系まとわぬ裸体だったのだ。いくら冷静な戦士と言えども、男であつてもあわてる状況である。

「俺は、何も見てないぞお」

滝は、大声で叫んだ。そうでもしなければ、彼も恥ずかしくてやつていられない。原も含め、傍にいた隊員達は、滝と同じ言葉を口々に叫んだ。

ミーティアのクリスマス

「部長、これで最後の輸送トラックが出発します」

「ん、そうか。ご苦労、女史。うまく事が進んだのも、お前のおかげだ」

「いいえ。これも部長の采配のおかげです」

「ま、急いで行動するのに越したことはないな」

滝は、にんまりとした笑みを浮かべながら、斉藤を見やった。斉藤も、満面の笑みを浮かべながら、ホテルを出た「最後の輸送トラック」の後ろ姿をモニターで見守っている。

「部長、行き先の準備は大丈夫なんですか」

「当たり前だ。からの段ボールを置く倉庫なんて、探せばいくらでもある」

「でも、ばれたらすぐに見つかりますよ。空箱を物々しくトラックで運んで、さも、ここの基地を移転させたように見せかけるなんて少し、安易じゃありませんか」

「女史、それがいいんだ。直接攻撃を受けた基地をそのまま使うなんて、普通の奴なら考えない。馬鹿な真似だからな。それを移転するのは普通の流れだ。だが、移転先までフェイクだとしたら、あいつらはどう思考すると思う。お前なら、次はどう推理する」

「フェイクで釣って、零部はさらに行方をくらます。そう考えますね。ここに居座るという思考は、まず浮かばない。浮かんだとしても、ずっと先でしょう」

「それだよ、目の付けどころは。気がつかれるまでこの施設を修繕し、セキュリティを強化する。収入を失うが、上のホテルに客を泊めるのはやめにしなきゃならん。今回の事で、もうこりこりだ。他のサイドビジネスを考えないとな」

「計上されない予算で成り立つ秘密組織ですから、税金を払ってくれる国民の心情を考えれば、少しでもお金を稼いだ方がいいですよ

ね。せめて自分達の食い扶持ぐらいは」

「ここを放棄できないのも、実際の所は、予算をまわしてもらえないのが一番大きな理由だ。予算が、我々の泣き所であり、最大の敵だ」

滝は、浮かない表情で、マグカップに入ったブラックコーヒーをすすった。誰か相手が欲しいところだが、斉藤はあまりコーヒーが好きじゃないらしく、風見も由紀も、余り日本でのんびりしてられないらしく、二人揃って今日の便で日本を発つらしい。原も、施設の修繕の指揮をしているので、じっくりコーヒーを呑んで語り合う人間がいないのだ。一人寂しくもう一口コーヒーをすすった滝は、斉藤に、

「咲夜はどうした」

と尋ねた。突然覚醒しただけでなく、自身の能力を完璧に使いこなして、三体の怪人を撃破した仮面ライダーミーティアこと、白鳥咲夜は、見事な勝利を飾ったのはいいが、名を名乗るために変身を解いた際、自分が裸であったことを失念していたため、滝や原達に自分のそんな姿を見られた事に恥ずかしさと、意味不明の怒りを持ち、ホテルの部屋に閉じこもってしまったのだ。滝にも気持ちはわかり、彼としても気まずさはわかるのだが、だが咲夜の身元の敬意も全くつかめていないので、どうしてお話し合う必要があった。それで、少し落ち着いて話し合ってみようと思い、彼女の様子を斉藤に訊ねてみたのだ。だが、斎藤から発せられた言葉は、意外なものだった。

「咲夜さんなら、外出しましたよ。買い物に行きたいらしくて」

「何、買い物だと。随分と余裕だな」

「自分の服も買いたいそうです。私の服を借り続けるのも気が引けるんでしょう。他にも行きたい所があるらしくて」

「図太いのか、繊細なのか、よくわからん奴だな。……、ちょっと待て、あいつに金なんてないだろう。まさか……」

「必要経費で、十万円ほど渡しておきました。部長の財布からは抜

いていませんよ。カードも使っていません」

「さすがに焦ったぞ。不破にクレジットカードが使われた経験があるからな」

「仮面ライダーって、金銭感覚がずれているんですかね」

斉藤は、いたずらっぽく笑みを浮かべると、滝のオフィスを後にした。彼女の言葉を頭の中で反芻しながら、滝はその言葉どおりかもしれないと思い、苦笑を浮かべるより仕方がない様だ。

確かに、生身の俺やおやっさん相手に特訓を頼んだり、連絡もよこさず外国を飛び回り、いきなり予告なしに帰ってくる。普通の人間とずれているから、まともな頭で今も戦えるんだろう

そんな風に、昔の事を思い出しながら、書類などに目を通していると、ドアをノックする音が聞こえた。

「構わん、入っていいぞ」

滝はドアを見ずに叫んだ。ドアが開くと、咲夜が大荷物を両腕に抱えて部屋に入ってきた。滝は、一体何事かと思うと同時に、その買い物の量に、この女はかなり浪費癖があるのではないかと思わず疑ってしまうほどだ。テーブルの上に買い物袋を置き、中のものを次々と取り出していく彼女に、滝は、

「お前、それは自分の服だけじゃないだろう。何を買ってきたんだ」と、尋ねずにはいられなかった。それに対し、咲夜は天真爛漫な表情で、

「今日はクリスマスですから。ギリギリ間に合ったので、ツリーやケーキの材料なども買ってきました。当日の昼になっちゃいますと、これらは割引になるって言う情報が頭にあっただんですけど、本当なんです」

と、あくまで自然に答えてくる。滝は、そんな彼女を見て、今いち理解しきれないなと思うと同時に、今までの中でも一番癖のある奴かもしれないなと、ため息をついた。だが、それと同時に、彼女の情報は一切知らないのも事実だ。何しろ、咲夜の個人情報は一切抹消されており、零部の譲歩網を駆使しても全く手掛かりのつかめな

い、一種の幽霊のような状態なのだ。クリスマスツリーの組み立てを始めている咲夜を見て、滝はいい機会だし、世間話がてらに少し身の上を訊いてみようと考えた。

「咲夜、俺も手伝うぞ。目に入って集中できんし、長い間、クリスマスツリーの飾りつけなんてやっていないから、少し懐かしくなった」

「いいですよ。それに、私の事も聞きたいのではありませんか」

「わかるか」

「相手がリラックスしている時に、情報を引き出す。大事な戦術です」

「今いち、よくわからない奴だな、お前は」

「……。誰にもわかりません。私の生き方は……」

咲夜は、手を止めて、ふと淋しげな表情を浮かべたが、すぐに気持ちを取り直すように笑みを浮かべて飾り付けを再開する。そして、静かに自分の過去を語り出した。

「神代から伝わる古武術を使う。そう言ったのは覚えていますよね。私が使う武術は、この国の黎明期、今の漢字が日本の文字になるずっと以前から伝わるもので、文献は最小限のものしかありません。それは、この世で私しか読めない誰も知らないものでしょう。その技は、見聞によってのみ伝えられる、ほぼ一子相伝の術なのです」

「一子相伝なんて、俺には絵空事のような存在だ」

「実在しますよ、滝部長。私の神代古武術は、昔から同じ型ではありません。この武術の神髄は、己が生き残る事にあります。ですから、素手の格闘に拘りません。剣や弓などの武器も使いますし、馬術はもちろん、毒物を使う事も厭いません。時代が変われば、火薬を使う事も習得しました。近代になれば、機械類も扱い、バイクから飛行機まで組み入れ、そのすべてを複合された技が私に継承されています」

「普通なら信じられないが、仮面ライダーを見てきた俺には、それほど強い驚きは感じないな」

「部長が理解のある方で幸いです。部長、私が何歳に見えますか」

「どう見ても二十代だが、実年齢はわからないな」

「私が生まれたのは昭和十五年。もう七十代です。滝さんより、一回りほど上でしょうね」

かなり昔から改造されていたろうと言う情報は入っていたが、まさか、目の前にいる二十代に入ったばかりに思える女性が、現実には七十代とは、不思議な事に慣れている滝にもにわかには信じられない事実である。なかなか信じられない滝は、思わず咲夜の顔をまじまじと眺めてしまう。その滝の顔がおかしいのか、咲夜は悪戯ぽく笑みをこぼす。

「部長、そう言うのを当世では、セクハラと言うのではないですか」
「お、おう。そうだったな、すまん。しかし、コールドスリープ状態だったとしても、実年齢を聞くと、にわかには信じられん」

「そうでしょうね。私が拉致されて改造手術を受けたのが、昭和三十五年です。その頃から、ああいう秘密結社は活動していました」
「それは驚かん。それ以前にも、類似する組織の影が歴史に散見する。しかし、何故、実用段階に至らなかった」

「単純に技術不足だったのです。素体となる私の肉体は改造されましたが、出力とのバランスが取れない事、付属する強化服の完成が当時の技術では実現不可能だったためです。普通なら、そこで廃棄処分なのでしょうが、かかったコストと私と言う素体が惜しくて、コールドスリープ状態にして改造を重ね、時代を経ると、意識だけを切り離して、仮想世界で現代に対応できるように色々な教育、或は訓練プログラムを頭脳に刻まれ、外の世界の情報も記憶されました。おかげで、久々の外の世界にも、馴染む事が出来ています」

「なるほど。相当大事にされていたわけだが、なぜ、施設を焼き払い、不破に助けを求めたんだ」

「それはですね……」

咲夜は、飾り付けをする手を動かしながら、考えている。言いつらいと言うより、複雑ないきさつから、言葉を選んでいるのだろう。

何しろ、救助を求めた相手が、行方不明になっているのだから。

「施設を焼き払ったのは、危険を感じたからです。その頃になると私は施設のコンピューターに侵入する事もできるようになっていました。自分の身の回りの状況を知るためにです。そこで、私が廃棄、もしくは移譲されると言う情報を手に入れたのです。私は、生き残る術を先祖代々伝えられてきました。その教えを基に、私は瞬時にこの施設を破壊して、すべての機能を停止させる事を選びました。そうすれば、一先ずは自分の居所は誰にも知られませんし、命の保障ができます。ですが、困ったことに無理なパイロキネシスを使った事により、カプセルのシステムに一部異常が生じ、私の意識が戻れなくなつたのです」

「無茶をするからだろう。だが、お前のパイロキネシスは天性のものなのか」

「半分はそうでしょうね。武道をやる人は、気と言うものを感じるはずです。それを増幅し、火炎の軌道を操るのに使うのがミィーティアのパイロキネシスです」

「なるほど。それを施設全体を焼くようなパワーで発動したせいで、お前の体にエラーが生じたわけか。では、不破へのSOSの件はどうなんだ？」

「私も、最初は意味がわかりませんでした。何故か、あの人には簡単に意識を伝える事が出来たので、不思議でした。ですが、恐らくあの人と私は、改造の機構に共通点があるからでしょう。実は、ミィーティアが実験体としての役目を果たしたという判断が下されたのは、宇宙鉱石と神経回路の融合を成功させたため、仮面ライダーの起動と言うリスクを冒したくない以上、廃棄した方がいいと判断されたためです」

「宇宙鉱石だと。もし、それが原因でシンクロしたとしたら、お前の鉱石は……」

「片割れでしょう。だから、容易にコンタクトが取れた。ローゼンクロイツァーの探知より、早く私の事に気がつき、辿り着くことが

可能になった。こう考えるのが妥当でしょう。あの人が残してくれたミーティアと言う名は、素晴らしいと思います。私達は、同じ宇宙からもたらされたものをルーツに二つに分かれた。同じものであり名が異なる存在、「METEOR」。そして、私はミーティア。あの人が私と言うスターシードを世に残した事には、大きな意味があります。だから、私は仮面ライダーを名乗ります。仮面の環を断ち切る様なことはしません」

「わかった。俺が認可するものでもないんだがな。他にも聞きたい事がある。お前の先祖代々の目的。そして、どうしてローゼンクロイツァーとお前は、互いに認識し合っているんだ」

「それは、……、後日話します」

「どうして今は駄目なんだ」

「次はケーキを焼きます。仮想世界ではよく料理はしましたし、昔の生の記憶もあるんですが、久しぶりの現実の料理ですから」

「何で、ケーキまで」

「今日はクリスマスですから。ケーキの他に、ローストチキンにも挑戦しますよ。零部のホテルの台所をかります。みなさんを、呼んで下さいね」

「あ、ああ……」

咲夜は、嬉々とした様子で材料を台所に運んでいく。滝は、いつの間にか完成したクリスマスツリーを見つめながら、深いため息をついた。

「長年付き合ってきたが、仮面ライダーと言う連中がまたわからなくなつた。特に、あいつが……」

自分が誰かに似て、愚痴っぽくなっているのを、滝自身は気がついていない。

夕方になると、咲夜が出来上がった料理を運んできた。つい最近まで眠っていたとは思えない腕前で、滝も見事言っしかないなと思

うほどだ。だが、運び込まれるケーキや、ローストチキンや、サラダや、シャンパン、そしてそれらに使った器具を思うにつけ、こいつはいくら使ったんだという不安が頭をよぎる。咲夜は現実感が乏しいために、金を使う事にも現実感がなく、滝は、浪費癖に繋がっているのだらうと思い、財政面で少しだけ負担になるなと思い始めた。

彼の呼び掛けにより、原以下の数名の隊員、吉村、斉藤、出発便まで時間がある風見と由紀が、咲夜が開くクリスマスパーティーに招待され、滝のオフィスに隣にある広い部屋で会食を楽しみ始める。普段は、このように楽しく会話や食事を皆で一緒にする事がないため、最初は戸惑っていたが、咲夜の手料理が思いの他美味く、その雰囲気にも身を委ねる様になった。咲夜は、仮面ライダーとして先輩になる風見や由紀の許で、グラスにシャンパンを注ぎながら、会話をしている。

「咲夜、あなた、手料理が久しぶりだなんて、到底思えない味よ。けれど、呼び捨てでいいの。一応、あなたの方が年上よ」

「構いません。仮面ライダーとしては、みなさんが先輩に当たりますし、ずっと眠っている間、私の人生はストップしています。歳を取ったのは、戸籍上だけの問題です」

「まあ、理屈上はそうよね。あなたがいいって言うなら、このままでいく事にするわ」

女同士、二人で談笑し終わると、咲夜は風見のグラスにシャンパンを注ぎ、少しばかり話しあう事にする。

「救助の際はお世話になりました」

「いや、俺は最後の仕上げしか手を出していないから、礼には及ばん。だが、妙なのは、お前の態度だ。改造された肉体や、今後の人生に悲観したりはしないのか」

「まったくございません。むしろ、この体に感謝しています」

「感謝だと……」

風見もまた、複雑な経緯で改造人間となり、仮面ライダーとなっ

た人間の一人である。生身の人間としての感覚や人生を失い、仮面ライダーとして戦いといつ終えるのかわからない人生に、疑問や戸惑い、時には悲壮な思いを覚え、乗り越えてきた過去があつたため、今の現状に全く後悔もなければ、感謝と言ふ不思議な感情を持つ咲夜の考え方が、今一つ理解できないのだ。顔にしわを寄せながら不可思議な表情を浮かべる風見の顔を見て、咲夜は自分の言葉の意味を語り始めた。

「滝さんから窺っていると思いますが、私が神代古武術を継承したのは、単なる武術の伝承ではありません。ある目的を持ち、それを達成するためには、どんな事をしてでも生き延びる必要があるからです」

「一体何だ、その目的は」

「本当の歴史の姿を守るためです。歴史は、勝者によつて作られてきました。ですが、打ち捨てられた敗者の中に、過去に繋がる本当の歴史にこそ、この国が未来に向かうべき道の鍵があります。その鍵を持つ敗者、弱者を守るために、私の神代古武術が存在します。そして、新たな時代を築く道筋を守る事もまた、役目の一つでしょう」

「なるほど。仮面ライダーの目的を一緒だな」

「はい。だからこそ、私はそんな戦士が身につける仮面を継承します。仮面の環の中に入り、一人の仮面ライダーとして生きていく事を受け入れます。いえ、望んでいると言つていいでしょう」

風見は目を見張つた。これほどまでに、改造人間、仮面ライダーとなつた事を進んで受け入れ、悩むことなく、自分だけの意思で己の道と思い定めた人間を見た事がなかった。ましてや、ほとんどいない女性の戦士として仮面ライダーを継承することを望み、誇りにするものなど見た事がなかった風見は、この白鳥咲夜と言ふ人間に、何か今までのものとは違うものを感じずにはいられない。

「わかった。お前なら、仮面らいイダーたりえるだろう。俺は、初期の人間と言ふ事になっているが、お前のようなタイプは見た事が

ない」

「私は、やっぱり変わっているようですね」

「それがいいんだ。あまり歓迎できる世界じゃないかもしれないが、仮面の環へようこそ、仮面ライダーミーティア」

「認証していただき、ありがとうございます。仮面ライダーV3」

二人は、同じ世界に生きる者同士にだけ通じる笑みを向けあい、これからの戦いをお互いに励まし合った。価値観を共有できる者同士だからこそ、通じる微笑みである。

「風見さん、ちょっと席を外させていただきます」

「どこに行くんだ。このパーティーの主催者だろう」

「屋上に行って、外に出てみたいんです」

「結構雪が降っているぞ」

「だからいいんです。私、由紀の風景を見た経験がありませんし、都会ではなかなか見られませんかから」

「ああ、そういうことか。なら行って来るといい。奥のエレベーターで行ける。主催者なんだから早めに帰れよ」

咲夜は頷くと、部屋を後にし、言われたとおりに廊下の奥のエレベーターに乗り込み、屋上に向かった。ゆつくりとエレベーターが上昇する間、咲夜は、雪の降る様子を想像し、歳甲斐もなく胸が高まっている。そして、ドアが空くと、冷たい空気と共に、白い雪が彼女の顔に当たった。

咲夜は、空から舞い降りる雪と、白く化粧された風景に粹を呑み、笑顔を浮かべながら、屋上で一人小躍りする様にステップを踏んでいる。落ち着いた口調からは想像もできないほど、はしゃぎまわる。そして、両手を広げ、冷たい雪と風を感じながら目をつむり、長年味わう事の出来なかった感覚を自身の体で確かに感じ取り、感慨深げな表情を浮かべた。

「私は確かに生きている。この現実の世界で……ありがとうございます」

咲夜は、自分をこの世界に引き戻してくれた一人の男に感謝の言葉を口にし、心の中で彼の無事を祈りながら、同時に再び巡り合う

事を空に願った。

やがて、いつもの落ち着きを取り戻した彼女は、掌を顔に向けながら腕を交差させ、ゆっくりと開きながら、「変身」と呟き、ミーティアに変身した。白銀の強化服、のこぎり状にラインを持つ赤い手足、細く切れ上がった赤い複眼、そしてオーロラのように蠢く輝きを持つマフラーは、まるで天女の羽衣のように見える。

ミーティアは、ゆっくり屋上の端に歩み寄り、ステップを上がつて、立っていられる足場ギリギリの場所に立った。静かにその場に佇んでいたミーティアは、ゆっくりと腕を滑らかに動かし、気を貯めながら右腕を天に向かって突き出す。それと同時に、衝撃が腕から放たれ、上空の雲に彼女一人分の穴がぽっかりと開いた。雲の間からは、美しい星空が広がっている。自分の手を見つめ、己の力を確認したミーティアは、その手を見つめ、次に屋上から都会のイルミネーションを、そして、眼下を歩く人々を見つめている。

「私は永い眠りから目覚めた。その意味は、この世界を守る戦いに再び身を投じ、命をかけて守ること。私は、ミーティア。この世界に撒かれたスターシード。今、その芽は出た。この美しい街を、そして人々を守る。……、みなさん、この大切な平和のひと時を、皆さんの命を、未来を私が護ります。だから……、もう難しい言葉はやめましょうね。今夜は、メリークリスマス」

咲夜が、零部に正式配属され、仮面ライダーミーティアとして活動ができるようにするまで、滝や斎藤が尽力し、その状況が整いつつあった。誘拐以前に、そもそも彼女は存在しないものとされていたらしく、名前だけの存在と言う事もあって、モデルとなる人材がいなかったため、一から戸籍などを作り直す必要があったためだ。隠密組織と言う事もあって、戸籍はなくてもいいのだが、社会で生きる以上は、建前上は必要なための処置である。

「白鳥咲夜、二十四歳。まあ、四つもサバを読みますか、失礼な」
「実際は七十過ぎだろ。五十もサバ読んでいるのに、がたがた言うな」

「それもそうですな。昭和63年生まれですか。昭和も昔になりにけり。こういう所でも歳を感じます」

「年寄り臭い事を言うな、二十四歳。一応、お前にはこのホテルに住んでもらう。ここも、仮面ライダーなしには機能しなくなるほど、ヤバイ奴らに目をつけられてきた。他国の諜報機関並みだ」

「昔の日本には、東機関と言う諜報機関がありましたけど、今の日本はどうなっているのでしょね。信頼しても信用するな。個人ではない、国家間の付き合い方の基本です」

「その所は、お前の専門分野だろうな」

咲夜は、神代古武術を駆使しながら、歴史の敗者、つまり世界の裏側にいる人間を守護してきた者達の末裔である。一般社会が知らない裏社会を知り尽くしているために、あの戦争の暗部も詳しく知っているのだらうと、滝は推察するが、それを彼個人が知ったところでどうにかなる事ではない。必要なのは、今をどう生き、未来につなげるかだ。そのためにも、秘密組織や怪人、つまり黒子との戦いには絶対負けるわけにはいかない。だからこそ、ミーティアの常駐体制を正式な物としたのだ。

「咲夜、早速だがお前に出勤してもらいたい」

「私は部下ですし、助けていただいた恩があります。はじめとして部下として命令して下さい」

「いいだろう。お前には、長野にいつてもらい、ある男に会ってもら」

「どのような方ですか」

「裏の俺達に來た任務だ。それは、俺以外に知る必要のないことだ。会う場所は向こうが指定する」

「わかりました。黒子関連の事件で間違いありませんね」

「ああ。向こうから、そういう依頼だ。だが、事件そのものはまだ発生していない。よく話を吟味して、事態に当たれ。原と篠塚をつける。新幹線のチケットはとってある」

咲夜は、滝から渡されたチケットを受け取ると、にっこりと笑った。滝は、何がそんなに嬉しいのかわからず怪訝な表情を浮かべ、

「お前、何がそんなに嬉しいんだ」

と、咲夜に訊いてみた。それほど、彼女の表情が嬉しそうなので、それが不思議でならないのだ。だが、咲夜は、当然と言う口調で疑問に答えた。

「私、東海道新幹線が開通する前に誘拐されているので、新幹線乗車は初めてなんです。仮想空間では体験しましたが、本物の夢の超特急に乗れるなんて、楽しみです」

「ああ、なるほど……。夢の超特急なんて言葉、久々に聞いたよ」

滝は、これもまた、ジェネレーションギャップと言う奴かと思い、苦笑いを浮かべた。長生きしていると、こんな面白こともあるものかと思っていると、

「部長、長生きはするものですな。無駄に時を消費することなんてありませんよ」

と咲夜が、あまり深く考えずに口にしたため、無駄に時を消費するという言葉にざっくりと傷ついた。咲夜は無神経に毒舌なため、これからこういう心の傷をつけられていくんだらうと、溜息をつくし

かない滝である。

準備を整えた咲夜は、原と篠塚と共に東京駅に向かい、昼前の長野新幹線に乗り込んだ。滝の手配で指定席の予約は取られており、咲夜の隣には原が座る。原は、いつもの落ち着いた様子とは違い、初めて乗る新幹線に終始浮ついたような表情で楽しそうにしている。咲夜の姿が、まるで別人のように思えて仕方がない。

「咲夜さん、少し落ち着いてくれないか。今時、新幹線に乗ってここまで浮ついている初なんて、子供くらいのもんだ」

他の乗客の目を気にして、ひそひそ声で話しかける原だが、咲夜の方は余り気には留めていないようだ。

「そんなに私のはしゃいでいるでしょうか。でも、目立つのはよく割りませんね。失礼しました。ですが、原隊長は、どうして私似た人形にするんですか。さん付は必要ないと思いますが」

「プロフィールを聞くと、さすがに目上からの態度は接しにくい」

「一応、肉体的には二十代のままですし、作られた戸籍では二十四歳です。気を使わなくても結構ですよ。それに、組織ではこういう事ははじめをつけておかないと、いざという時に、軌道的に動けなくなります。原さんは隊長、私は部下。それでいいではありませんか。それに、原さんは老けて見えますから、親子や、不倫旅行に見えますから、不自然には見えませんよ」

「あんた、言う事が結構きついな……。まあ、事実だから言い返せないんだが、はじめをつけることには賛成する。それじゃあ、今後の行動について説明しよう。まずは、この書類に目を通してくれ。これから会う人物の大雑把なプロフィールだ。公的機関の人間だから、接触には慎重を要する」

原から一通の封筒を渡された咲夜は、中の紙を取り出すと、それを座席に備えつけてあるパンフレットの中に挟みこんで、目を通し始める。周りから覗き見られたり、窓ガラスに反射することを警戒しての行動なのだが、あまりに自然にこういう動作をおこなう彼女の姿に、原は相当の技量を見出すとともに、二十歳になるまでの間

に、この女性が一体どのような教育を受け、生き方をしてきたのかと疑問や興味と共に、薄気味悪さすら感じた。

「長野県警警備部公安課。なるほど、この役職なら、零部に連絡が取れるし、情報の入手も隠ぺいも融通が利きますね。何とも、都合のいい役職なこと。お名前は三条。偽名でしょうね」

走行音で他人には聞こえない声でぶつぶつとつぶやく咲夜の声をかろうじて聞きとった原は、概要を説明する。傍からは、取引先に向かう会社員の話にしか聞こえないだろう。

「クライアントとうちの部長は、十年ほど前にコネを持ってな。その時に、ちよいとばかり部長が手を貸したわけだ。俺も、その仕事には絡んでいる」

「この三条さんは、どんな依頼をなさったんですか」

「うちに依頼することとなったら、仕事は決まっているだろう……。まあ、手こずってな。仕事も事後処理も。ノウハウの蓄積には役だったんだが、黒子の案件が新しいタイプだったからな」

「その方が今になって、どうして部長にコンタクトを取ったんでしょう」

「それは、これから三条氏に会わないとわからないな。ただ部長が妙な事を言っていた。『とうとうその時期が来たか』ってな」

「……、予定された依頼と再会、と言う所ですか。でも、不思議なのは、そこまで事情を知っている部長が、どうして私達に詳細を伝えないのか。三条さんに会わなければ、どうしても依頼内容を果たせないと言う事なんでしょうか」

「まあ、そういうことだろう。レポートの後半は、以前の依頼の詳細だ。頭に叩き込んでおいてくれ。俺は寝る」

「おやすみなさい。労働前に体力を養うのも、仕事を成功させる条件です」

「そういうことだ。レポートは読んだらどうするか、あんなならわかってるだろう」

「ほんの初歩です」

原の言った言葉の意味は、情報漏えいを防ぐために、完全に処分しろと言う事である。それに対する咲夜の返事は、裏の世界で秘密の活動を叩き込まれてきた咲夜にとっては、太陽が東から昇るのと同じくらい、当たり前前の事からくるものであった。

咲夜は書類に目を通すと、人目につかないようにびりびりに破る力が強い彼女の腕で、こまか気[↑]議られ孝美は、トイレに運ばれて流された上で完全に処分される。それを薄目を開けながら見守っていた原は、「さすがだな」と思い、感心すると思うと同時に、安心して眠りについた。

次に原が目を覚ましたのは、終点の長野駅に後わずかの時だった。目をこすりながら、隣の咲夜に目をやると、せつかくの快眠の気持ちよさが吹っ飛び、うんざりした気分になった。

「咲夜さん、あんた、いくら使ったんだ」

「それほどじゃありませんよ。駅弁も、進歩したものです。昔はおにぎりとお茶ぐらいが相場でしたし、あの頃のお茶の渋い事。今は、どこでもそれなりに美味しいお茶が飲めるんですね」

「で、何を買ったんだ」

「峠の釜めし、笹すし、幕の内ふるさと弁当、だるま弁当ですね。車内販売ではこれだけで、ホームのお店に行こうとしたら、篠塚さんから出発に間に合わなかったらまずいですと言う事で、車内販売だけにとどめました」

「篠塚、止めるよ……」

原が、廊下を挟んだ席に座っている篠塚を睨むと、彼もまた二つほど駅弁を開けている有様だった。呆れて、手で顔を覆っている原を見た咲夜が、

「原さんにも必要でしたか。それに、これくらいは出張経費していただかないと。細かい事を言っていたら、小さな成果しか期待できません」

と、あっけらかんとした口調で物を言う。原は、もう何も言う気がしなくなり、うんざりしてしまった。

「いつからこの部署は、軽いノリになったんだ。不破がいた頃よりひどいぞ。特にこの浪費家はどうなってる……」

「そんなに使ってますか、私」

「通貨の価値が全然違ってらるんだから、わかるだろうがッ」

何が何でも成果を上げなければ、この部署は潰される、原はそう確信した。だが、その成果の行方は、この浪費癖のある咲夜にかかっていると思うと、彼の心は沈痛な気分になる一方である。

彼らに乗せた新幹線が終点の長野駅に着くと、彼らは指定された場所に向かうべく、駅前からタクシーに乗り込んだ。運転手がいるので任務の事は話せないため、観光客などを装いながら、タクシーで移動を続ける。

「咲夜さんは、長野は初めてなんですか」

「そうですねえ、来たとは思いますが、もうだいぶ景色が変わりましたからね。篠塚さんは、何度かあるんですか」

「スキーをやりによく来てましたよ」

「そうですね。それにしても、あの頃に比べたら、随分変わりましたねえ。まさか、オリンピックをここでやるなんて。私の生まれた年なんて、札幌と東京オリンピックが中止に……」

原を篠塚があわてて、咲夜の口を塞いだ。東京五輪は昭和三十九年に開催されているが、実は昭和十五年に札幌と東京で開催される予定になっていたが、戦争による影響で差し替えになった事実がある。その事実を、「私の生まれた年」と言われたら、何を寝ぼけた事を言っているんだと耳を疑われて仕方がない。長い眠りによる時差ボケのせいなのか、咲夜には、どうもとぼけたところがあり、本当に闇の世界で隠密の生き方をしてきたのか疑いたくなる一面がある。その発言後、原と篠塚は、咲夜に一言もしゃべらせはしなかった。

三人は、依頼人から指定された善光寺でタクシーを降りた。観光地になっているここは、観光客も多く、三人の姿は其中に埋没し、思いの他目立っていない。

「『遠くとも一度は詣れ善光寺』。一度ここへは来ていたのを思い出しました」

「長野五輪で有名になったからな。なかなかの人出だ」

「いい所に待ち合わせ場所を選んでくれますね。原隊長、私達の姿が観光客に紛れるだけでなく、あそこで私達を待ちつけ、見張っている車も目立ちません」

「何」

原は、話手手辺りを見渡すと、一台の乗用車が三人の近くに近寄ってくるのが見え、車は三人の前に停車した。落ち着いた面持ちの咲夜を除き、余りにも手際のいい手配に原も篠塚も、これが県警レベルの対応かと舌を巻かざるを得ない。運転席のドアが開き、三代半ばほどの男性が姿を現し、

「滝部長からこちらに向かう様に命を受けた方々ですね。どうぞ、ご乗車を。目を引かれるうちに、場所を移りたいので」

と、すぐに後部ドアを開けて、三人の乗車を促す。咲夜は、全く疑う様子もなく、荷物をトランクに入れてもらう様に話しているため、もう身を任せるしかない。三人を乗せ、車は発車した。

狭い後部座席に並んで座った三人は、どこに向かうのかはまだ知らされていない。その所だけでもはつきりさせたい原は、

「我々は、会談場所すら知らされていない。そちらからの担当者は来るのでしょうか」

と、念を押した。運転手は、バックミラーで後ろの三人を見ながら、「ご心配なく。三条氏はこちらに向かっていますので、ご安心を」と、依頼主である三条の名を口にした。彼の名をあえて出さずに、相手に喋らせたことで、一応の安心は得た原ではあるが、まだ油断はできないと緊張は解いていない。そんな彼の様子を、三人の中心に座っている咲夜は見逃してはいなかった。

「相当、警戒されていますね」

「当たり前だ。手の内を知らされていない上、情報がないんだ」

「原隊長、その点は大丈夫ですよ。それに、三条さん、もう話をし

てもいい頃じゃありませんか。ここまで慎重に慎重を重ねてきたあなたが、迎えに第三者を送るなんて迂闊な事をするとは思えません。あなたは、公安部。信用のおける部下しか使わないはず。ましてや、これは黒子がらみ。黒子を知るのは限られた人間ですから、非常に希少です。このような状況であれば、三条さん、まあ偽名でしょうが、今の状況はあなたが迎えに直接来ざるを得ない。車の中なら、盗聴の心配もない清潔な場所にできますから。さあ、物事は慎重かつ速やかに行きましょう」

咲夜の言葉にぎよっとする、原と篠塚であつたが、運転席の男は、口元で笑いをこらえながら、バックミラー越しに後部座席を覗き込み、咲夜の姿を確認する。

「あなたが滝部長の推薦した方ですね。さすがです、私が三条ですが、偽名を使う事を許していただきたい」

「あなたの名前が偽物であっても、私には一向に差し支えありません。何をすべきか、何者と戦うのか、それが重要です」

「経歴通り、隙がない。では、本題に入りますが、他のお二人は、それでよろしいでしょうか。時間は長くは設定できませんので、返事はすぐにしていただきたい」

「もちろんです。観光に来たわけではありません。下手をすれば、命のやりとりになりますし。そんな神経の擦り減る状況に長時間いればいるだけ、失敗の確率が高くなりますから」

原と篠塚が口をはさむ隙もなく、咲夜は話を進めていく。流れるように、理路整然と無駄なく事を運ぶ彼女の姿に、原は、やはりただものではない女だと心の中で埋まるより仕方がない。三条氏もやはり公安という社会の裏側で活動するものという、原達と同類の人間のため、余計なことは言わずに、詳細な点だけを伝える。

「原隊長はご存じのはずです。あの約十年前の出来事。そちらでいう黒子という暗喩で呼ばれる者たちが、長野県に現われ、零部と機動隊がこれに対処した」

「はい。その当時、新しく導入された神経断裂弾という化学薬品を

使った弾丸が初めて投入され、そのせいかで考えられないほど、素早い鎮圧が可能になった事件でした」

「その通り。ですが、それは表の面。裏では、想像を絶する事態が進行していて、この事をもみ消すのに、滝部長には骨を折っていたきました」

「私が知らないこととなると、武力行使以外の面での活動ですね」

当時から、実力行使部隊の隊長を務めていた原が知らない事案となると、情報操作レベルとなり、彼が知らなくてもおかしくはないしかし、いくら迅速に鎮圧できたとは言っても、担当者である原が知らないとなると、相当に秘密度の高いものとなってくる。咲夜も、会話の内容を聞いて、その点に気がついたようだ。

「事件担当者である原隊長が知らない事実。かなり、深刻、或は重要な事件の核心に当たる部分ではありませんか、三条さん」

「その通りです。核心に当たる部分は現在も現在進行形です。まず、順序立てて話をする必要があります。これは、ぜひ頭に置いていただきたい。当時、出現した黒子の遺体は、零部の指導のもとで解剖されました。私も初めての経験でしたが、想像を絶する事態に滝部長の命令に従うほかありませんでした」

「仕方ありません。常識を根本から覆す事態、誰も救いはしないし求めないものを野に放てば、野次馬根性を持つ者以外には、余りいい結果はもたらされませんからね。そこで、何があったのです」

「黒子は人間なんです。身体を外部から改造されたのではない。元々、違う種族だったのでもない。間違いなく彼らの体は人間だったのです。強いて言うならば、体に装着された石が、一時的に人体を強化し動物などの能力を付与したにすぎない、そんな解剖結果がもたらされたのです」

「そうですね。でも、今の私なら驚きはしません。お仲間みたいな者ですから」

黒子と呼ばれる怪人達と、自分自身が同じ立場である、お仲間という言葉が平然と口にする咲夜の姿に、後部座席で彼女の両隣似合

う座る原と篠塚は、一瞬寒気が走り、耳を疑った。カプセルの中から覚醒して数日しかたっていない。眠っている間、体を改造され、実験までされた身でありながら、自分を怪人と同じ存在とあっさり受け入れ、お仲間など度言う軽い言葉で表現してしまう彼女の神経を、二人は理解することもできなければ、戦慄すら感じてしまうのだ。眉間にしわを寄せながら自分を見つめる二人を意に介せず、咲夜は淡々と情報の確認を続ける。その冷静さもまた、不気味であった。

「意思によつて、強化された普通の存在、それがここで発生した黒子。この点は理解しました。では次のお話を」

「原隊長を当時の私が対処したのは、一部でした。我々が感知しない所で、黒子は活動をしていましたが、奇跡的に被害は皆無でした」
「まさに奇跡ですね。一体何があったのですか」

「黒子達は、当時発掘された古代遺跡から出現したのです。縄文以前とも言われるかなり古い時代の遺跡だったそうです。そこから黒子は発生した。彼らは、その時代に活動し、ずっと眠っていた、そう推測されています」

「縄文以前の遺跡ですか。個人的に、面白い話題です。ですが、推測の話が多すぎませんか」

「申し訳ない。その遺跡は封印され、資料は失われ、事件と共に存在自体が隠蔽されたんです。隠蔽は簡単でした。発掘作業員は、すべて殺害されてしまったのですから……。いや、ただ一人を除いて」
「たった一人の証人というのは、誰なんですか」

「それは、言えないのです。彼の身の上を考えると、言うわけにはいきません。ですが、あなた達に情報は与えなければいけないので、可能な点だけを抜粋します。彼は当時、知人のつてを頼つて、遺跡発掘の手伝いをしていたんです。そこで、彼は事件に巻き込まれた

……」

「でも、死亡はしていない。何故ですか」

「発掘の様子を撮影したカメラが奇跡的に現場に残っていました」

そこには、土中の棺から出現する黒子が、次々と人々を惨殺していく、見るに堪えない光景が映っていました。そして、彼にも危険が迫った。恐怖でとっさのことだったのでしょう。彼は出土品を手にして、手当たり次第に投げつけました。その時、一つの出土品が突然光りだし、彼の体と同化したんです」

「同化、ですか」

「映像を見て、瞬時にその言葉が浮かびました。まさにその通りだったからです。そして、彼の体は、変化をはじめ、完全に『変身』したんです……」

黒子と同じような変異を遂げながら、あえて『変異』や『変態』という言葉を使わずに「変身」という言葉を引用したその意味は、咲夜はもちろん、原も篠塚もはっと気がついた。

「その人物が、仮面ライダーと同様の変化を遂げたと言う事ですか」篠塚さんでした。その通りです。詳しい事はいまだにわかりませんが、私が幼い頃にテレビで見た、あの仮面ライダーの姿と酷似していました。零部の活動により、仮面ライダーの存在は虚構の中にされている事実を知らなかった当時は、非常に驚きましたよ。そして、仮面ライダーとなった男は、黒子達と戦闘を開始した。その戦闘を終えるまで三日三晩も彼は戦い続け、黒子を鎮圧したのです」

「そうになると、なぜ我々がこうやって呼び出しを受けることになるんですか」

「問題は、その仮面ライダーにあるからです」

信号が赤になり、三条は車を一時停止させる。車が止まっているので、前方への注意を薄めた彼はうつむきながらため息をついた。ミラー越しに見える彼の顔には、深いしわがぎざまれ、その内面に何か重い物が隠されているのは、誰の目にも明白だった。信号が青に変わり、車を発進させた彼は、思い口調で三人に、この任務の核心を語り始める。

「仮面ライダーに変身した彼は、黒子との戦闘を開始した当初は、我々も零部も気がついていませんでした。最初に発見された個体群

で事件は収束したものだと思っていたのですが、違う一群が発見された問う報告を受けて、私は現場に急行し、そこで変身した彼を目撃したのです」

「どうやら、あなたと、その『彼』は、親しい間柄の様ですね。その人物の話をする時のあなたの表情は、実に豊かな動きをする。よほど親しい人物なのでしょう」

「咲夜さんには隠し事は無理ですね。その通り、彼とは親しい間柄ですが、それ以上は言えません。関係のない事ですし、この後の事に仕様が出来ます。最初のうち、彼は自我を保ち、私とも会話が成立しました。ですが、戦闘が続くうちに、穏やかだった彼の人格に乱れが生じ、私の事を認識することも難しくなっていました。彼は、バーサーカー、狂戦士の状態に陥っていったのです」

「自我を失った仮面ライダー。危険この上ない存在と言えますね」

「台風が意思を持って荒れ狂う様なものです。黒子ですら、あつさりと倒していく、いえ、血祭りに上げていくのです。もはや、人間ではないと確信しました。そして、黒子の最上位と思われる個体と激しい戦闘になり、共に仮死状態になったのです」

「仮死状態となったその二体は、今どこに」

「ライダーとなった者と一緒に、黒子の遺体共々、発掘された遺跡に戻されました。零部での検査により、そうするより他はないと判断されたからです」

後ろに座る三人は、怪訝な顔を見合わせた。遺体を検査する所までは話しわかるが、埋葬場所が遺跡というのはおかしすぎる。何故、事件現場に遺体を安置する必要があるのか、何故、遺跡の存在が抹消され、存在しなかった事にされたのか、まだ納得のいかない説明が為されてない事が、彼らが気になる点である。その理由を三条は、淡々と語っていく。

「黒子の体には、ある鉱石が埋め込まれていました。これが人体を一時的に変にさせるものと推定されたのですが、サンプルがあまりに少なく、詳細はわからずじまい。しかも、人体から切り離す意

思に変質してしまつて分析不可能でした。もう一つわかつた事は、仮面ライダーに変える石は、黒子の石と相殺する関係にある事です。つまり、二つの石が同じ場所にある限り、黒子もライダーも、安静を保つ限りは起動しない。しかし、発掘作業等いう外部からの刺激が、彼らを復活させたと言うのが、一番信憑性のある仮説です」

「つまり、ライダーを遺跡に安置したのは、まだ発見されていない黒子の覚醒を防ぐためと、バーサーカーと化した仮面ライダーを封印する二つの目的がある。そうですね」

「その通り。ですが、先の地震の影響で、沈黙が破られつつある。監視のために設置した計測機器も、遺跡内の温度の上昇など、変化を見せています。そこで、滝部長に相談したところ、零部には現在仮面ライダーが常駐していると……」

「つまり、私に残る黒子の処分、そして、遺跡内の仮面ライダーを抹殺しろ、そういう事です」

三条は、沈黙のまま頷いた。近くには、長野県警の建物が見えてきている。彼は、そこで三人と別れるつもりなのだろう。しかし、咲夜の口から「抹殺」という言葉が発せられた事に、原も篠塚も戸惑い、いや、違和感を隠せないでいる。

「咲夜さん、言葉を慎みましょうよ。さすがに抹殺は穏やかじゃないです」

「その通りだ。あんたや我々が使つていい言葉じゃない。前任者は、死んでもそんな言葉は言わなかった」

だが、咲夜は一切表情を変えず、能面のように冷たい無表情を保ちながら、二人の意見を受けつけず、淡々と自分の石を口にする。「前任者は前任者、私は私です。バーサーカーとなった者を外に放てば、黒子以上の脅威です。それは、同じ立場である私が誰よりも知っています。第一、零部と黒子の関係は、治安のためという名目はあつても、実体は抹殺でしょう。結局、建前で武装したのが、私達の世界の実像です。それに、三条さんは、冷酷に抹殺を依頼しているわけではありません。仮面ライダーに変貌した人間は、本当に

三条さんにとって、親友と言える人だと言うのは、顔を見ればわかります。狂った彼を止めて欲しい、悪夢から解き放って欲しい、そう願っているからこそ、私に抹殺を依頼した。そうですね」

車は県警前にとまった。三条との対面はここで終わる。無言のまま、車を降りようとした彼は、半ば外に体を出しながら、咲夜の方を振り返らずに、

「お会いしたのが、あなたの様な人でよかった。白鳥咲夜、仮面ライダーミーティア。彼の魂、私の思い、あなたに託します。……、車は、自由に使って下さい。山に入る準備も後ろに積んでありますから」

と、言い残し、建物に向かっていった。誰にも打ち明けられない秘密を、彼は組織の中でずっと胸に閉じ込めてきた、そんな事を彼の背中には語っている。

原と篠塚は、無言で前方座席に移った。助手席には、地図が置かれており、遺跡の場所が記されている。車は、その場所へ向かって走り出す。前の二人は、未だ複雑な思いを抱いているため、口が重い。咲夜は、窓から流れる景色を眺めながら、

「あなた達の想い、苦しみ、涙、私が受け止めます。哀しみの時間は、もうすぐ終わるでしょう……」

と、誰にも聞こえない小さな声で呟いた。その顔は、相変わらず表情がないが、目は何かで光っている。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5724v/>

仮面の環 ring of masked rider

2012年1月13日21時00分発行